額見町遺跡Ⅴ

（Ｈ地区及びＦ地区一部区域の調査）

―串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書５―

額見町遺跡遠景（北東方より）

2010年　3月31日

石川県小松市教育委員会

額見町遺跡Ⅴ

（Ｈ地区及びＦ地区一部区域の調査）

― 串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書５ ―

2010年　3月31日

石川県小松市教育委員会

例　　言

1．本書は小松市が施工する串・額見地区産業団地造成事業に伴って、平成６年から平成12年度までに小松市教育委員会が調査主体となって実施した額見町遺跡（ぬかみまちいせき）の発掘調査報告書である。本報告は平成17年度から平成22年度までに６分冊で、刊行を予定しており、本書はその第５分冊目、Ｈ地区とＦ地区南東端区域の報告書にあたる。

2．発掘調査及び出土品整理は、小松市の単独事業として行なったものであるが、発掘調査費は小松市土地開発公社からの受託という形態をとった。

3．発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、調査担当者は次のとおりである。

《調査地》　石川県小松市額見町な１番地外

《報告対象面積》（Ｆ・Ｈ地区にわたる区域の一部）約3,700㎡

《調査期間》　（Ｆ地区）平成10年10月12日～平成12年　3月14日

（Ｈ地区）平成12年　4月10日～平成12年11月30日

《調査担当者》（Ｆ地区）大橋由美子

（Ｈ地区）望月精司、大橋由美子

4．遺構の測量図作成については、向出泰央・坂利彦・稲石純子・松本敦子（以上臨時職員）・谷口佳代・中村悦子・宮川明美・本村美那子・山岸陽平・西島一代・久乗仁美・塩原咲織・南　健一・森本雄介ら測量補助員の協力を得て、調査担当者である望月と大橋が実施した。また、遺構全体測量及び基準点測量に関しては、アジア航測株式会社に委託した。

5．出土品整理は、平成９年度から平成21年度までの中で、遺跡全体として行ったものであり、当該地区の整理は、その中で随時、出土品整理作業員を雇用し、望月精司が主に担当した。なお詳細な整理経過は第１分冊報告書『額見町遺跡Ⅰ』第１章第３節の記載に基づく。

6．遺物実測、製図、観察表作成、遺物構成把握、遺構図修正、原稿執筆については、出土品整理作業員、江波圭、奥出桂子、柿田康子、上口広子、国本久美子、立原真里、谷口佳代、山崎千春の協力を得て、望月と大橋が実施した。

7．本書の編集は望月が担当し、執筆分担は目次に記載した。

8．写真撮影は遺構を望月・大橋が、遺物を望月が担当し、空中写真についてはアジア航空株式会社に委託した。

9．本調査において出土した遺物を始め、遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。

10．本書に掲載の写真等については、無断で複写、転載することを禁じています。転載利用の場合は小松市教育委員会へ使用許可を申し入れてください。

11．発掘調査と報告書の作成にあたっては、次の方々、機関、団体からご協力、ご指導を賜った。ご芳名を記し、感謝の意を表したい（所属及び敬称略、五十音字順）。

赤澤徳明、穴澤義功、宇野隆夫、大澤正己、春日真実、亀田修一、木立雅朗、北野博司、
小嶋芳孝、小林正史、権　五栄、坂井秀弥、笹澤正史、杉井　健、田嶋明人、出越茂和、
戸淵幹夫、橋本澄夫、菱田哲郎、藤原　学、朴　天秀、宮田進一、森内秀造、山中敏史、
吉岡康暢、渡辺　一、(財)石川県埋蔵文化財センター、額見町町内会

目　　次

例　　言 …… i
目　　次 …… ii
凡　　例 …… iii
報告書抄録 …… iv

第Ⅰ章　額見町遺跡の概要と今回報告の調査区 …… 1
　第1節　額見町遺跡と発掘調査概要 ……（望月　精司）… 1
　第2節　今回報告の調査区（H地区及びF地区の一部）概要 ……（大橋由美子）… 6

第Ⅱ章　今回報告区域検出の遺構 ……（大橋由美子）… 15
　第1節　建物遺構 …… 15
　第2節　土坑・井戸 …… 37
　第3節　手工業生産関連遺構 …… 49
　第4節　その他の遺構と包含層 …… 56

第Ⅲ章　今回報告区域出土の遺物 ……（望月　精司）… 79
　第1節　出土遺物概要 …… 79
　第2節　古代の遺構出土遺物解説 …… 81
　第3節　中世の遺構出土遺物解説 …… 123
　付表1　額見町遺跡V報告区域出土古代遺物観察表 …… 141
　付表2　額見町遺跡V報告区域出土中世遺物観察表 …… 150

第Ⅳ章　総　括
　— 三湖台地集落遺跡群の古代後半期土器様相 —……（望月　精司）… 158

第Ⅴ章　自然科学分析報告
　— 額見町遺跡の自然科学分析 —……（パリノ・サーヴェイ株式会社）… 175

写真図版 …… 183
～ 190

凡　例

《遺構について》

1．本書で示す方位は、座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅷ系に準拠した。また、水平基準は東京湾平均海水面水準（T.P.）である。

2．遺構名称は竪穴建物跡をSI、掘立柱建物跡をSB、土坑をSK（土師器焼成坑・一部の製炭土坑もSK）、道路状遺構と溝状遺構をSD、炉状遺構をSJ（鍛冶炉・製炭土坑もSJ）、井戸跡をSE、集石遺構をSX、ピットをPとする。土器溜まり遺構で特に遺物が集中するものは番号を付し、特殊祭祀遺構は土器集中を名称づけする。

3．遺構番号はいずれもA地区からの通し番号を付しているが、ピットは調査区毎である。遺構名・番号の変更について、土器溜まり5－Ⅱを SK437とし、土器溜まり5を土器溜まり遺構とし、続いて付されたローマ数字を、Ⅰ→集中1へ、Ⅲ→集中2へ、Ⅳ→集中3へ、Ⅴ→集中4へ、Ⅵ→集中5へと遺構名を改めた。

4．遺構図の基本的な図掲載縮尺は、竪穴建物跡に関して平面図・断面図を1／60とし、造り付けカマド平面・断面図は1／30とする。掘立柱建物跡は平面・断面図を1／100。土坑、炉状遺構は平面・断面図を1／40。生産遺構の平面図・断面図を1／20、一部1／10の場合がある。道路状遺構、井戸跡、土器溜まり遺構は平面図・断面図を1／60とする。溝状遺構は、平面図1／100、断面図1／30。集石遺構・土器集中遺構は平面図を1／20とする。

5．遺構図で示す平面図の＋はグリッド杭の位置を、断面図－は水平レベルラインである。これに付記するH＝とした数値は標高値を水平基準から求めた海抜高で示す。

6．竪穴建物平面図に記載する薄いドット網掛け範囲は被熱焼土化範囲を示し、特に被熱焼結する範囲を濃いドット網掛けで示す。掘立柱建物跡の柱穴内に示したドット網掛けは柱圧痕位置を示す。炉状遺構での薄いドット網掛け範囲は被熱焼土化を示し、濃いドット網掛けは特に焼結する範囲を示す。遺物出土状況図に示す土器を結ぶラインは接合関係を示し、付記する図No.は遺物図No.に対応する。

7．遺構図の土層断面図に示す数字は覆土土層を示す。アルファベットや○付き数字は覆土と区別するために付した。断面図の太線は機能面を示す。また、土層註に示す色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』に基づく。

《遺物について》

1．本書または観察表で示す遺物の種別や土器の器種名については、本文80・81ページに示したとおり、基本的に前回報告の『額見町遺跡Ⅱ』の出土遺物分類に基づく。また、観察表や本文に示す遺物帰属時期については、田嶋明人氏の北陸古代土器編年軸（田嶋明人 1988『古代土器編年軸の設定』『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）』及び田嶋明人 1997「加賀地域での10・11世紀土器編年と暦年代」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』）に基づく編年標記であり、その編年の筆者暦年代観については観察表の巻末にまとめて掲載する。

2．遺物図版の縮尺は須恵器大甕を1／5に、それ以外を1／3に統一した。

3．遺物図版で示す実測図断面に示される網掛けは、黒塗りが須恵器または須恵質製品、白抜きが土師器または土師質製品、ドット網掛けが陶磁器類、ストライプ網掛けが石器、鉄製品とした。また、土器の内外面に示される網掛けについては、細かいドットが赤彩、粗いドットが黒色焼成、砂目が煤痕跡または強煙痕跡、漆付着痕跡を示す。

4．須恵器や土師器、陶磁器類の実測図右断面に示す「←→」はヘラケズリ調整の範囲を、外面や内面に記される「→」はケズリに伴う砂粒移動の方向を示す。また、砥石に示す「←→」は磨耗痕跡範囲を示す。

5．須恵器、土師器の実測図においてロクロ（回転台等回転使用も含む）による成形や調整を行うものについては、口縁部ラインや底部ライン、内外面調整ラインを非ロクロ製品と意識的に分けるため、定規で線を引き、非ロクロ製品はフリーハンドで示した。ただ、中世土師器はロクロ使用でも回転情方の弱いものはフリーハンドとしている。

6．遺物説明、観察表で示す法量計測について、口径（受け部径・返り径）は口縁上端部（受け上端・返り上端）での直径を、底径は底部切り離し外端部での直径を、高台径は台の外端部径を、頸部径（基部径）は頸部（基部）屈曲部の最小径を、胴部径（つまみ径）は胴部（つまみ部）最大径を、脚部径は脚下端部での直径を示す。なお、器高等の高さ計測については、器形の安定している部分での平均的な数値とし、立高や返り高は受け部下端から口縁端部、返り端部までの垂直高とした。

7．遺物説明、観察表で示す胎土については、観察表巻末に凡例をまとめて掲載する。

8．遺物説明、観察表の土器成形痕跡の中で、叩き出し成形に伴う叩き痕跡については、内堀信雄分類案に基づき（内堀信雄 1988「須恵器甕類に見られる叩き目文について」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』）、H類を平行線文、D類を同心円文とし、Ｈａ類は平行線影り込みに直交して本目のあるもの、Ｈｂ類は右上がり斜交の木目のあるもの、Ｈｃ類は左上がり斜交木目のあるもの、Ｈｅ類は本目の見えないものとし、Ｄａ類は木目の見えないもの、Ｄｂ類は同心円影り込みに沿って同心円木目の見える芯材使用のもの、Ｄｃ類は柾目状木目のもの、SD類は木製無文当て具の年輪痕跡のものとした。また、別のものは記号以外の表記にした。

報告書抄録

ふりがな	ぬかみまちいせき（Nukamimachi Sites）
書名	額見町遺跡
副書名	串・額見地区産業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書５
巻次	V
編・著者名	望月精司・大橋由美子
編集機関	小松市教育委員会
所在地	〒923－8650　石川県小松市小馬出町91番地　（電話）0761-22-4111
発行年月日	西暦2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
額見町	石川県小松市額見町な１番地外	160	03089	36度 21分 16秒	136度 24分 30秒	F地区 1998.10.12～2000.03.14 H地区 2000.04.10～2000.11.30	F・H地区の一部 約3,700㎡	小松市が施工する串・額見地区産業団地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
額見町遺跡	集落跡	飛鳥・奈良・平安時代 今回報告区域は８世紀～９世紀と11世紀後半～12世紀前半に集落経営の主体がある。	竪穴建物１軒、掘立柱建物31棟、土坑63基、井戸１基、道路状遺構１本、溝状遺構15条、炉状遺構８基、土器溜まり４箇所、製炭土坑１基、鍛冶炉３基	須恵器（特に獣脚付鉢、獣脚付羽釜）・土師器（特に羽釜）・竈形土製品・円筒埴輪・円面硯・土製馬形・土錘・専用桃台・緑釉陶器・白磁・砥石・鉄鏃・刀子・馬具	古代では大規模な土器焼業遺構と掘立柱建物、鍛冶炉４基と関連製鉄遺物を検出。古代末では土師器大量破棄と大型総柱建物４棟を検出。

要約

６世紀代に墓域化した台地に、古墳群消滅とともに突如出現する古代集落遺跡。７世紀初頭の集落成立時にＬ字型カマド付竪穴建物を高い確率で選択している点から、朝鮮系移民を主とした集落と判断される。７世紀後半に当集落内で生産される朝鮮系軟質土器や同時期に始まる鍛冶生産、須恵器窯製品を選別した際に生じる窯道具片の出土など、当集落が手工業生産に携わったことを示す。当集落の近隣にある南加賀丘陵製鉄・製陶遺跡群が７世紀に変革期を迎えることと関連性が強く、広義での台地上集落群は丘陵部工業生産地帯の母材としての性格を持つ。７世紀後半は集落増加期であり、８世紀前半までに全盛期を迎えるが、７世紀後半の新たな建物様式の導入や近江系炊具、丹波系煮炊具の導入など、朝鮮系移民のみならず、西日本各地または西を経由しての移民流入によって集落の拡大が図られたことを示す。律令政府主導の下で計画的に設置・経営された集落と言え、それは地方支配政策、評制施行前段施策としての性格をもつ。当台地集落の成立は近隣地に置かれただろう江沼評や工業生産地と一体的なものであり、湯涌を媒体に屯倉的な領域支配がなされた地域と性格づけられよう。

SAMARY

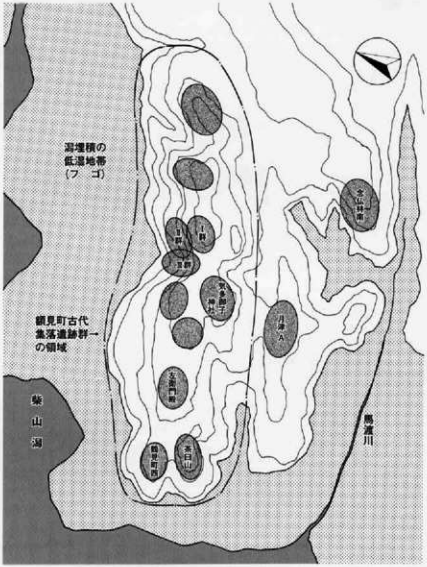
The NUKAMIMACHI SITES are an ancient village ruins in the fee that appear suddenly on the plateau that was the grave region with the disappearance of the old tomb group in the sixth century. In view of the point to have selected the Ana building where L character type kitchen range is set up when the village is approved century seventh by short odds, this village ruins are judged to be ruins mainly composed of a Korean immigrant. The excavation of the kiln tool splinter caused when the blacksmith production and the Earthen kiln product that starts from existence of Earthenware group that introduces a Korean in be produced in the latter half of the seventh century technology and a simultaneous period are selected etc. show that this village was involved in the manual industry production. The vicinity Minamikaga hill steel manufacture and the pottery manufacture ruins group's in this village coming the revolution period in this in the seventh century has and the relation has the location village group on the plateau strongly said by the wide sense with the character as the mother's body village in the hill part industrial production zone. The latter half of the seventh century is a period of an increase of the village, and it is shown that not only Korean immigrants of the introduction of a new building style in the latter half of the seventh century and the Receptacle of cooking of the Ohmi system and the Receptacle of cooking of the Tanba system , etc. but also the expansion of the village was attempted by the immigrant inflow via West Japan various places or the wests though the glory period will come by the eighth first half of the century. It can be said the village that was set up and managed in premeditation under the Ritsuryo government initiation, and has the character as the steps measure by it before enforcing the criticism system of the local rule policy. The approval of this plateau village is an Enuma criticism, is industrial production ground that might have been put on the vicinity ground, is united, and it is thought the region where the seashore lake is assumed to be the medium and it was performed by area rule ton warehouse.

第Ⅰ章　額見町遺跡の概要と今回報告の調査区

第１節　額見町遺跡と発掘調査概要

第１項　額見町遺跡と額見町古代集落遺跡群

額見町遺跡は、長軸 800 m、短軸 550 m の北東方に長い遺跡分布を示す 440,000 ㎡の広大な集落遺跡である。幾つかの集落単位が集合した結果、広大な面積の集落域となったものであり、大きくは額見町古代集落遺跡群と称したエリアが広義の額見町遺跡であると評価する。当地は昭和 20 年代の耕地整理によって起伏に富んだ台地地形が階段状に削り取られ、その際に台地南西端の茶臼山周辺が削平を受けた。茶臼山古墳や茶臼山祭祀遺跡、茶臼山遺跡はその時に発見された遺跡である。昭和 30 年以降、加賀三湖干拓工事に伴い、額見町遺跡から北東へ伸びる台地は土砂採取により大きく削平を受けたが、その際、埋蔵文化財調査を行った形跡はなく、存在したであろう額見町遺跡の北側部は消失することとなった。その後、大規模な開発等が行われなかったこともあり、当地は遺跡の発見が遅れ、昭和 56 年の石川県立埋蔵文化財センターが行った詳細分布調査まで、遺跡所在すら確認されずにあった。石川県立埋蔵文化財センターが平成８・９年度に発掘調査を行った額見町西遺跡にしても、平成７年に小松市教育委員会埋蔵文化財調査室が地主の依頼によって行った試掘調査において新発見した遺跡であり、当台地上にはほぼ同一時期の集落遺跡が点在していたのだろう。明治 42 年及び昭和 37 年に行われた地形測量図をもとに、これまで近隣で調査してきた成果、遺存する地形等から額見町古代集落遺跡群の台地地形を復元したものが右図に示したものである。当台地領域は柴山潟に面して北東方に細長く伸びる台地で、馬渡川の開析谷に面する台地よりも若干小高い独立台地状を呈す、長軸 2400 m、短軸 750 m、約 150ha にも及ぶ広大な台地である。図に示した集落分布予想図は、旧地形をもとに想定したものだが、今回の調査所見で得たように、台地には複雑に小支谷や鞍部が入り込むため、さらに集落単位は分断されていた可能性が高い。今後の詳細な地形把握と分布調査により、遺跡分布の検討はなされなければならないが、既に削平を受けた地域は多く、これから検証することは困難を極めるだろう。



第１図　額見町古代集落遺跡群の復元地形と集落分布予想（１／ 20,000）

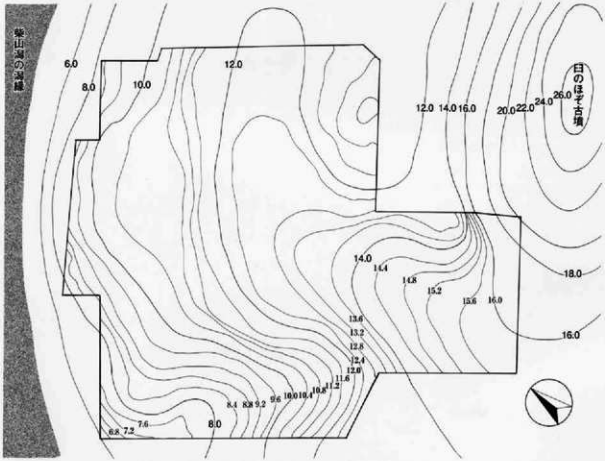
第２項　平成７年度～12年度発掘調査概要

今回報告する額見町遺跡は、平成７年度から 12 年度までの６年間にわたる発掘調査報告で、石川県立埋蔵文化財センター調査分も含め、38,500 ㎡の面積を発掘調査した。当調査で

検出した遺構は、竪穴建物119軒、掘立柱建物330棟、土坑424基（うち土師器焼成土坑10基、製炭土坑7基、墓坑15基以上）、炉状遺構（うち鍛冶炉跡12基）、井戸3基、溝状遺構53条（うち道路状遺構5本）、集石遺構2基で、他に土器溜まり遺構を20箇所以上確認している。後述するように調査面積の多くが削平されていたため、相当数の遺構が既に消失した状態であり、遺跡が完存していれば、どれだけの建物数が存在していたのか、悔やまれるところである。14世紀頃の集石遺構2基と縄文時代に遡るであろう落とし穴土坑1基以外は全て、7世紀前半から12世紀に位置づけられる古代遺構であり、多くの遺構が密集、重複する状況であった。

当地の旧地形を調査所見に基づいて作成したのが以下の図だが、調査区の東側に存在する標高26mの尾根頂上部（臼のほぞ古墳立地）から南西側に張り出すようにして尾根筋が延び、そこから北側へと緩く標高を減じる形で、馬の背状に尾根筋が延びていく。東側尾根頂上部から北側へ延びる尾根筋の間には谷部が入り込み、尾根頂部との比高差は15mにも及ぶ。谷部から見て、臼のほぞ古墳の立地する尾根頂上は、見上げるような高さにあり、集落立地に際して古墳を意識したような選地を行っていたことは間違いない。また、北側へ細く延びた尾根筋から北西方へは緩く張り出してテラス状の部分（テラス状部分の中央は鞍部が入ったように若干下がり気味となる）を形成しており、そこから柴山湯の湯縁へは比高差7m以上の急傾斜となる。この張り出し部の南西側では、柴山湯から南東側へ延びてくる支谷に続く小さな谷が入り込み、楕円形状を呈する緩い傾斜地を形成している。比高差6m程度を測る傾斜面で、南西側へ谷は広がっている。

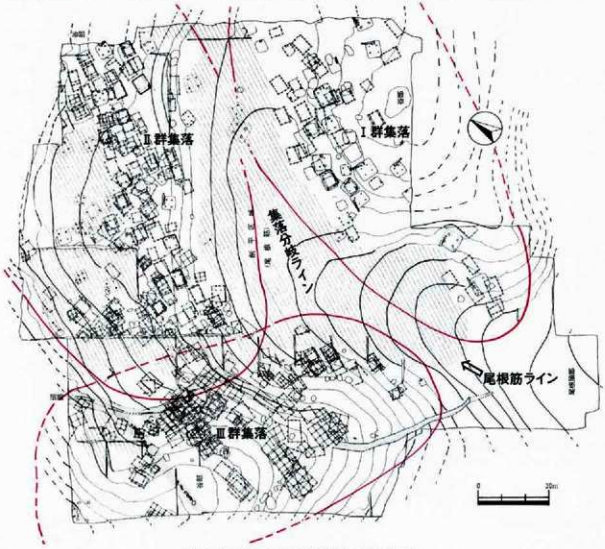
極めて起伏に富んだ複雑な地形を呈していることが復元地形コンタから見て取れると思うが、耕地整理においては尾根筋部分を削り取り、鞍部や谷部へ土砂を埋めるという造成を行っている。この結果、約14,000㎡、調査面積の36%が削平による破壊を受けてしまっていた。一部深い遺構に関しては、遺構基底部が遺存していたが、大半は遺構痕跡も残さない状態であり、特に尾根筋部分は遺構がどのような分布をしていたのか、把握できる状況にない。ただ、尾根筋でも削平を受けていない部分もあり、その箇所での遺構分布が確認できないことや鞍部から尾根部へと徐々にではあるが、遺構密度が希薄となる傾向などから考えて、尾根筋上での遺構分布はもとも



第2図　額見町遺跡発掘調査区域内の復元地形（1／2,000）

第3図　額見町遺跡主要遺構配置図（1／1,000）

と低かった可能性がある。尾根筋が集落の分岐線であった可能性があろう。当地は柴山潟から吹き込む風が強く、風当たりの強い尾根部を避けて選地していた可能性があり、建物立地は緩傾斜地を形成する谷部や鞍部を中心になされていたと予想される。鞍部や谷部は黒色土堆積が厚く、粘土質の黄褐色土地山が露出する尾根筋部分よりも比較的水捌けがよいという点も、建物選地の一つの要因であったろう。削平地が多く不確定要素は多いが、以上の集落分布傾向から想定すると、以下の集落群構成になるとみる。Ⅰ群集落はＡＤ地区に展開する鞍部緩斜面上の建物群、Ⅱ群集落はＢ地区からＣ地区そしてＦ地区北端へ南北に延びる鞍部緩斜面上の建物群、Ⅲ群集落はＦ・Ｇ・Ｈ地区に分布する柴山潟へ緩く傾斜していく広い緩斜面上の建物群である。Ⅰ群集落は７世紀前半の竪穴建物の検出例が多く、７世紀代から８世紀前葉に主体を置く集落群と言える。Ⅱ群集落は７世紀前半から８世紀代までの長期集落と言えるが、主体は７世紀中頃から８世紀中頃で、最も建物検出例の多い集住区域と言える。Ⅲ群集落は７世紀前半の建物も確認されるが、それはⅡ群集落からの延長で捉えられるもので、総じて８世紀以降に主体を置く集落と言える。古代祭祀に伴う大規模な土器廃棄遺構や仏教関連施設、または井戸や道路状遺構など、Ⅰ・Ⅱ群集落では見られなかった特殊な遺構も検出され、集落様相を異にする。Ⅲ群集落は11世紀後半～12世紀の建物群が広く展開することも特徴である。古代から一時衰退時期を挟むが、大きくは同じ集落経営の流れで存在する建物群であり、Ⅲ群集落の流れで考えて妥当である。以上３つの集落群のまとまりを重視し、報告書刊行順を調査年度に捕らわれず、Ⅰ群集落であるＡ・Ｄ地区を報告書Ⅰとし、Ⅱ群集落であるＢ・Ｃ地区を報告書Ⅱ・Ⅲとした。Ⅲ群集落はその北西側に当たるＧ地区を主とした報告書Ⅳ、南東側にあたるＨ地区を主とした報告書Ⅴとして刊行し、平成22年度には鉄関連遺物報告を報告書Ⅵとして刊行し、完結させる予定である。



第４図　額見町遺跡の集落のまとまり概念図

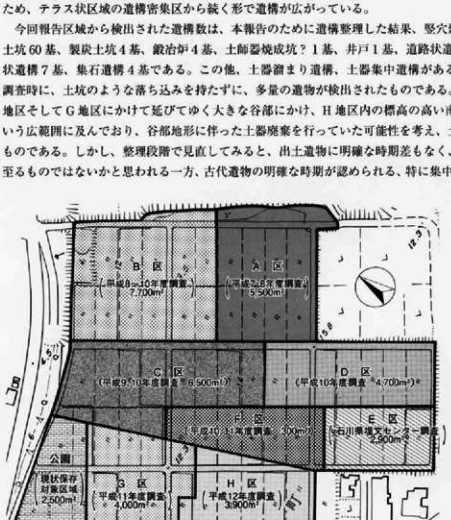
第２節　今回報告の調査区（Ｈ地区及びＦ地区の一部）概要

第１項　遺構の概要と分布

今回の報告区域は、本調査区全域の西南地にあたり、Ｈ地区と東に隣接するＦ地区を含む区域である。Ｈ地区報告分3,485㎡、Ｆ地区報告分375㎡、総計面積は3,860㎡となる。前回までの報告で、本遺跡には、昭和初期の農地開発により段状に切り盛りが行われていたために、完全削平され遺構の検出されない区域や上層削平により遺構基部のみ検出される区域が認められている。Ａ地区からＦ地区においては、このような削平区域の面積が1/2以下を占める状況となっていた。前回報告区域の中心であるＧ地区では、削平面積が比較的少なくなっており、今回報告区域の主体となるＨ地区でも完全削平された区域はなく、南側のみ削平が認められるものの建物の掘方が残る状況となっている。この削平は、標高の高さによるものであり、最も標高の高い尾根筋ラインが最も削平を受け、標高が低くなるにつれ削平割合が減ってゆくためである。

本遺跡の南北に走る尾根筋ラインから西側に着目すると、南西では、Ｈ地区からＧ地区にかけて楕円状の谷部を形成している。北西側では、Ｂ・Ｃ地区を中心にＦ地区西側からＧ地区の一部にかけ、テラス状となる緩やかな平坦区域を形成しており、ここに遺構が極めて密集する。今回報告区域は、テラス状区域の南側に位置し、尾根筋ラインから谷部へ下る途中にあたるが、その中でも比較的緩やかな傾斜地を形成する区域と言える。そのため、テラス状区域の遺構密集区から続く形で遺構が広がっている。

今回報告区域から検出された遺構数は、本報告のために遺構整理した結果、竪穴建物１軒、掘立柱建物31棟、土坑60基、製炭土坑４基、鍛冶炉４基、土師器焼成坑？１基、井戸１基、道路状遺構１本、溝状遺構16条、炉状遺構７基、集石遺構４基である。この他、土器溜まり遺構、土器集中遺構がある。土器溜まり遺構は、現地調査時に、土坑のような落ち込みを持たずに、多量の遺物が検出されたものである。Ｆ地区側である東側からＨ地区そしてＧ地区にかけて延びてゆく大きな谷部にかけ、Ｈ地区内の標高の高い南側部分以外のほぼ全区域という広範囲に及んでおり、谷部地形に伴った土器廃棄を行っていた可能性を考え、土器溜まり遺構と名称付けたものである。しかし、整理段階で見直してみると、出土遺物に明確な時期差もなく、殆どが包含層的なレベルに至るものではないかと思われる一方、古代遺物の明確な時期が認められる、特に集中する箇所も確認できており、これを土器溜まり遺構“集中”とした。土器集中遺構は、皿が重なって廃棄された箇所であり、何か意味を持つ廃棄場であった考えから、遺構として取り扱うこととしたものである。



第５図　額見町遺跡発掘調査地区割図（Ｓ＝１／2,500）

前回までの報告でも述べてきているように、本遺跡は、黒色土系地山を地山上層レベルにもち、Ｇ・Ｈ地区の西側谷部には、質の異なる黒色堆積土が認められている。そのため、黒色土系地山での遺構検出のしづらさに加え、前述した土器溜まり遺構や、流れ込みとも捉えられる多量の包含層遺物出土により、遺構検出は一層困難を極めるものであった。こういった状況での調査であったため、今回

報告遺構でも、本当に遺構であるのか疑問を抱かせるものが確認できる。しかし、前回までと同様に、図面上の判断は現地判断に及ばないと言う考えから、現地調査を重視し、そのまま報告してゆくことを基本とする。ただ、土器溜まり遺構は、遺構はなく遺物のみに限られるため、変更も可能とした。

今回報告区域での遺構は、前回のような遺構密集区域はなく、比較的空間に余裕があるといった分布となっている。調査区南端にて検出された唯一の竪穴建物は、最も標高が高い位置で近代削平を受けている状況である。掘立柱建物や土坑などの遺構が検出される区域に対し、この１軒のみが離れ形をとり、前回報告のSI105と似たような役割をもっていた可能性が窺える。竪穴建物１棟以外の建物は、全て掘立柱建物である。掘立柱建物は、基部のみが検出されている状況で、古代建物桁行・梁行が直行しないような建物や簡易な建物が多く見受けられる。中世建物でも小規模建物に、このような現象が認められる。中世建物とは、古代末から中世の構造主体となる低い床をもち、柱が碁盤目状に並ぶ、柱穴規模の小さな総柱建物を示しており、時期は本遺跡の終焉期でもある11世紀～12世紀にあたる。これら建物の遺構時期の推移については、1軒のみの竪穴建物は８世紀後半であり、掘立柱建物では、７世紀末～８世紀初頭が１棟、８世紀中頃が１棟、８世紀後半が１棟、８世紀末～９世紀初頭が３棟、９世紀前半が４棟、この他、出土遺物はないが古代の建物と考えられるものが７棟、本遺跡の古代以外で終焉期までにあたる11世紀～12世紀の中世建物が16棟である。古代掘立柱建物の時期は、８世紀末以降の９世紀前半代が主体であり、中世掘立柱建物の半数を占めることになり、前回までに比べかなり増加する。これは、今回報告区域が、本遺跡の変遷で最も新しい時期にあたるためと考えられる。

今回報告区域で報告する井戸跡は、段状の土坑を伴ったもので、前回報告したSE02の外周土坑をより簡素にした印象のものである。この他、生産遺構、特に鍛冶炉や製炭土坑は多く、製炭土坑は比較的まとまった区域に、２カ所に分かれて集中する。同様にまとまった区域に集中するのは集石遺構であり、４基のみの検出であるものの、東西軸一列に並んで検出されている。

第２項　基本層序

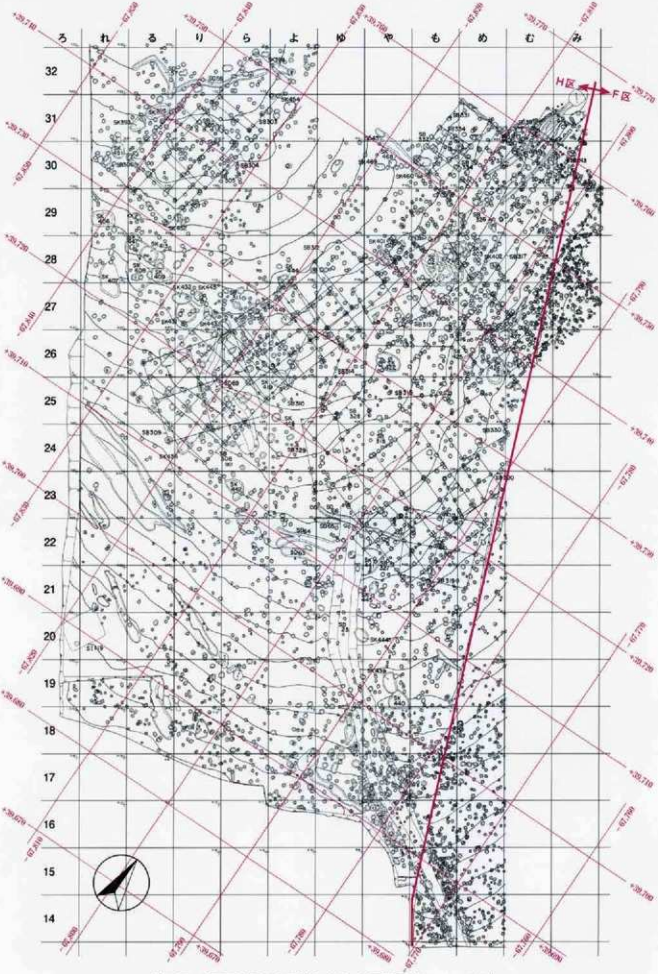
本遺跡では、遺跡全体の包含層を含めた基本層を一貫して記録してきており、これは本遺跡調査全域に打設されたGr杭のライン軸で設定して土層観察を行ったものである。完全削平を受け、包含層の残っていない区域では、耕作土や表土を取り除いた時点で、黒色地山土よりもさらに最下層となる褐色地山土や黄褐色地山土が露出するといった現象がみられ、このような区域では極一部を除き土層断面図は作成していない。

今回報告区域で、地形傾斜を捉えられるものは、Gr「や」「ゐ」ラインと、「18」「22」「26」「30」ラインである。「18」「22」「26」「30」ラインでは、ライン中央が最も低くなって谷を示す。この浅い谷は西へ行くに従って次第に深まり、G地区への谷部へと繋がってゆくのである。このような地形を示すためには４本も提示は必要ないかもしれないが、上層で検出されている土器溜まり遺構の土は、標高の高いものと、谷部へ近づくものとで、土に違いが認められるため記載することとする。

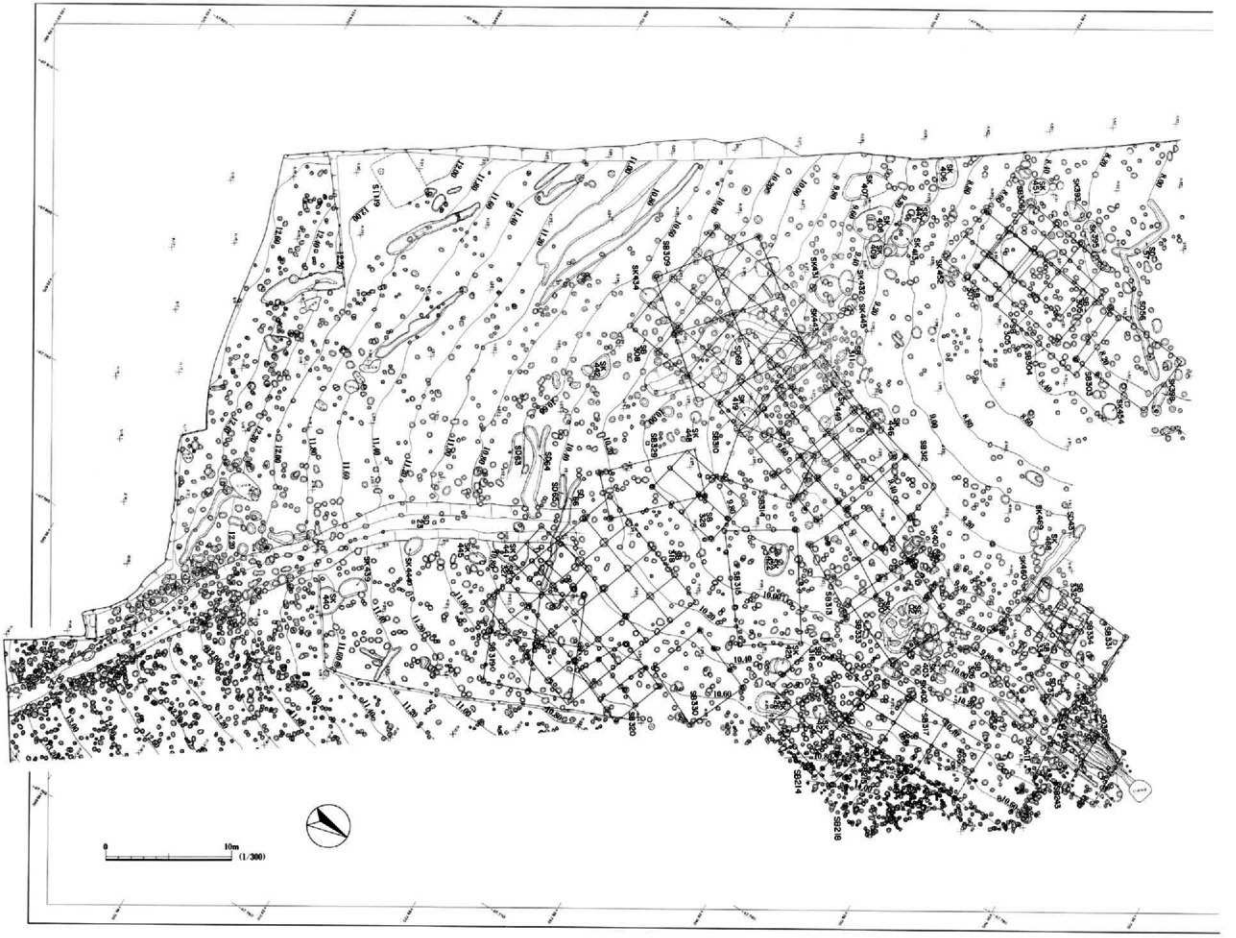
基本土層として土層註に記載はないのだが、本遺跡では、最も下層に黄褐色系地山が存在し、この上の層に褐色系地山、さらに上の層に暗褐色系地山、この上の層に黒色系地山土との間の漸移層である黒褐色土地山、この上層に黒色系地山が確認されている。黄褐色系の粘土地山と黒色系地山を中心に、この両層の間に土色差によって分層されるといったものである。質的には、壌土や埴壌土を基本としており、下底にゆくに従い粘質性が増す傾向にある。そして、前回報告では、谷部での堆積層には地山が酸化する現象が認められた。

谷部を中心に検出されている古代末や中世の上層土器溜まり層も確認されるが、意図的な遺物廃棄としての土器溜まりは、部分的に留まっている。今回報告区域では、H地区とF地区境から中央の小谷にかけての範囲一体に、土器溜まり遺構を捉えている。但し、整理段階にて、遺物時期のまとまりがみられないことから、包含層的な要素が強いものある考えは前述のとおりである。しかし中には、極一部に限り小皿が集中して廃棄されるなどの遺物のまとまりがみられ、大規模なものを土器溜まり遺構としている。

さて、今回報告区域では、H地区中央の小谷から南側にかけてと、小谷から東側にかけての基本層に違いが生じている。これは、どのラインでも同じ様な現象が見られるものである。小谷から東側にかけては、提示する土層断面図中には殆ど地山層は図示されていないが、下底に近い所で、黒褐色系地山である Ⅷ層、この上位にⅡ層、この上位にⅣ層、さらに上位にはⅣ'層が認められる。これに対し、小谷から南側にかけてでは、同じく提示す



第６図　今回調査区の座標軸とグリッド配置図（Ｓ＝１／400）



第７図　今回報告の調査区（Ｈ地区・Ｆ地区の一部）（Ｓ＝１／３００）

る土層断面図中で殆ど図示されていないものの、下底に近い所で黒褐色系地山である Ⅷ 層があり、この上位に Ⅸ 層、この上位に Ⅹ Ⅳ 層、さらに上位に Ⅳ 層や Ⅳ′ 層が認められる。Ⅸ 層は、黒色系地山の可能性をもち、両者では、地山の色調に違いが認められる。谷部堆積であるがゆえの影響と考えてよかろうか。

このような層が基本となり、遺構はあらゆる層位で掘り込まれている。前回までの報告と同様に、Ⅳ 層や Ⅳ′ 層で掘り込まれるものは多いが、Ⅹ Ⅳ 層や Ⅸ 層、Ⅳ 層で土坑等の遺構の掘り込みが認められる他、土器溜まり的な層であり包含層として認識してもよいと思われる⑫層・⑬層、確実に土器溜まり遺構土層である①層・④′ 層・⑥層・⑦層・⑦′ 層においても掘り込みは認められる。土器溜まり遺構土層の④′ 層・⑥層、また包含層レベルとも考えられる土器溜まり遺構土⑪層・⑫層・⑬層の上層には、Ⅳ′ 層が確認でき、土器溜まり堆積後に、Ⅳ′ 層が堆積していることがわかる。⑪層・⑫層・⑬層を切る様に掘り込まれるのが、土器溜まり遺構であり、土器溜まり遺構を切る形で存在するのが SD23 である。なお、Ⅳ 層面で掘り込まれる SK426 や SK425 は田嶋編年Ⅳ１期を示し、Ⅳ 層・Ⅸ 層面で掘り込まれる SK425 は田嶋編年Ⅳ２～Ⅴ２期を示しており、これは、本遺跡C 地区以降、今回の調査区でも認められる傾向である。そして、中世１－Ⅰ期である SK419 の上層に Ⅳ′ 層堆積が確認できることも、前回報告区域である G 地区と同じ傾向をもち、Ⅳ′ 層は中世以降に堆積していったものと判断できる。

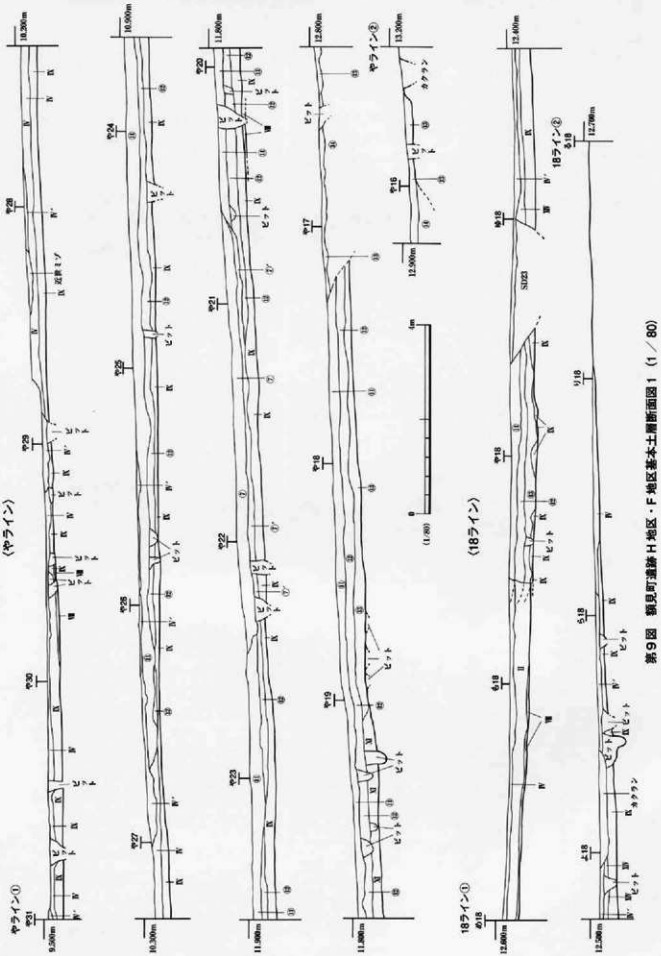
額見町遺跡基本土層表

Ⅰ層　黒褐色土（10YR2/2）：表土小塊・黄褐色土粒少量含有。
Ⅱ層　黒色土（10YR1.7/1）：黄褐色土粒少量。表土小塊・炭化粒微量含有。
Ⅲ層　黒色土（10YR1.7/1）：黄褐色土粒多量。表土小塊・炭化粒多量含有。
Ⅳ層　黒褐色土（10YR2/2）：表土粒・土器片を少量含有する。地山に類する。
Ⅳ′層　黒褐色土（10YR2/2）：表土小塊・黄褐色土粒・炭化粒少量含有。
Ⅴ′層　黒褐色土（10YR3/2）：表土粒・炭化粒少量。炭土粒多量含有。
Ⅴ層　黒褐色土（10YR2/2）：黄褐色土粒・表土小塊・炭化粒・土器片を多量に含有する。堅び遺物の層と上層の合。
Ⅵ層　黒色土（10YR2/1）：黄褐色土粒・炭化粒・表土小塊微量含有。
Ⅶ層　暗褐色土（7.5YR3/4）：褐褐色土（7.5YR2/2）を含含有。砂質。
Ⅷ層　黒褐色土（10YR2/2～2/1）：黄褐色土粒多量。炭化粒少量含有。
Ⅸ層　黒色土（10YR1.7/1）：上層の混在もなく、地山土の可能性大きい。
Ⅸ′層　Ⅸ層の微化土層。地山土の一つ。（※前回報告では土層となっており、Ⅱ層から Ⅸ層～Ⅱ′層。）
Ⅹ層　黒褐色土（7.5YR1.7/1）：粗粒の微化土層。褐褐色土（7.5YR2/2）と混在。
Ⅹ Ⅰ層　黒褐色土（7.5YR2/2）：炭化物少量。土器片やや少く混入。
Ⅹ Ⅱ層　黒褐色土（10YR2/2～2/3）：地山風混入少量。土器混入多い。縞まりあり。
Ⅹ Ⅲ層　黒褐色土（10YR3/2～2/3）：炭化小塊含有。Ⅹ Ⅱ層に比べ縞まり少い。
Ⅹ Ⅳ層　黒褐色土（7.5YR3/2）：黄褐色土中～大塊少量含有。
Ⅹ Ⅴ層　黒褐色土（7.5YR3/1）：にぶい黄褐色粒小塊少量含有。炭化小塊微量含有。土器片少ない土層。
Ⅹ Ⅵ層　黒褐色土（10YR2/2）：地褐色土（10YR3/3～3/4）４個混在。黄褐色土大塊・炭土塊・炭化塊多量含有。

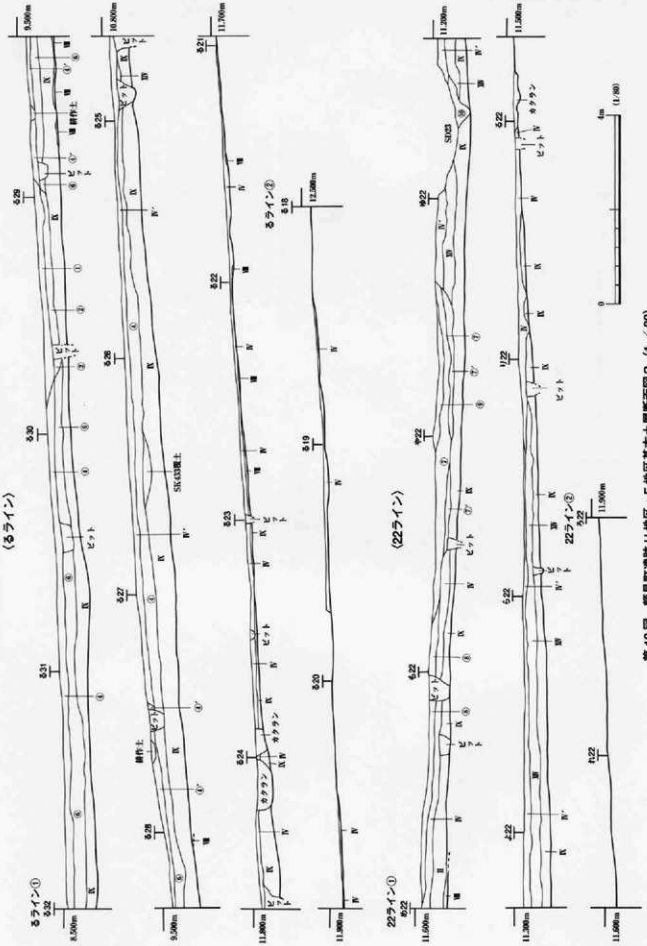
包含層ライン遺構層土土層表

①層　黒褐色土（10YR2/2）：黄褐色土（10YR3/2）混在。若干砂質帯びる。土器溜まり多量含有。炭土小塊・炭化小塊多量含有。小代系の土器混在。上層土器溜まり層。
②層　黒褐色土（10YR2/2）：用ヤ砂質土が混じる。炭土小塊・炭化小塊多量含有。①層より黒く、土器の混在少ない。土器溜まり多い。古代と古代系混在。上層土器溜まり層。
③層　黒褐色土（10YR2/2）：炭土小塊多め。土器溜まり多量含有。（前回報告 SK387 上層）
④層　黒褐色土（10YR2/2）：炭土小塊多め。土器溜まり多量含有。（前回報告 SK387 上層）
④′層　黒褐色土（10YR3/2～2/2）：炭化小塊含有。砂質土がシミ状に入り、土器含有する層。Ⅳ層とⅣ′層の中間層。
⑤層　黒褐色土（10YR2/2～2/2）：上層土器溜まり層よりも土器の混入少くく、土器溜まりに欠かなかった層。土器溜まり多量含有。炭化小塊多め含有。黄褐色小塊・炭土小塊少量含有。
⑥層　黒褐色土（10YR2/2）：土器混在少なく土器溜まり多量含有層。炭化小塊・黄褐色小塊少量含有。
⑦層　黒褐色土（7.5YR2/2）：やや砂質帯びる。炭土塊・炭化小塊多量含有。B 地区以切から の遺物を遺物集中層。
⑦′層　黒褐色土（7.5YR2/2）：黒色土（7.5YR2/1）塊４個混在。炭土・炭化・褐色地土の小塊が⑦層より少なく、土器も少なめ。
⑧層　基本は⑦層と同じだが、比較的遺物少ない。
⑨層　黒褐色土（10YR2/2～2/2）：砂質帯びる。炭化小塊少量。黄褐色土小塊少量含有。土器溜まり層炭土層の砂質帯びる上。
⑩層　黒褐色土（10YR2/2）：炭土小塊多目。黄褐色土塊多目含有。
⑪層　黒褐色土（10YR2/2）：若干砂質帯び褐色混入り。炭土・炭化小塊多め。黄褐色土粒を多量含有。
⑫層　黒褐色土（10YR2/2）：黄褐色土小塊多目。炭化・炭土小塊少量含有。土器含有する。
⑬層　黒褐色土（10YR2/2）：黄褐色土小塊・中塊多量。炭化小塊少量含有。やや硬まりあり。
⑭層　黒褐色砂質土（10YR3/2）：黒褐色土（10YR2/2～3/2）４割が混在。炭化小塊が少量含有。土器片なし。硬質土。SK23の上層土。SK23・1層に対応。
⑮層　黒（10YR2/2～3/1）：黄褐色土・炭化小塊少量含有 SK23・2層に対応。

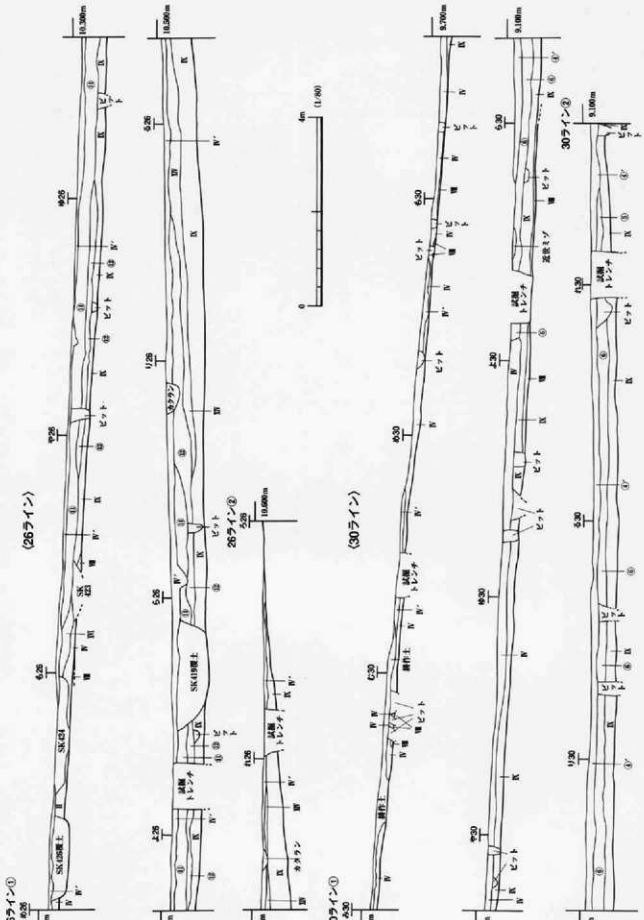
第８図　額見町遺跡基本土層断面位置図



第９図　鎮見町遺跡Ｈ地区・Ｆ地区基本土層断面図１（１／80）



第 10 図　頴見町遺跡 H 地区・F 地区基本土層断面図２（1／80）



第11図　横見町遺跡H地区・Ｆ地区基本土層断面図３（1／80）

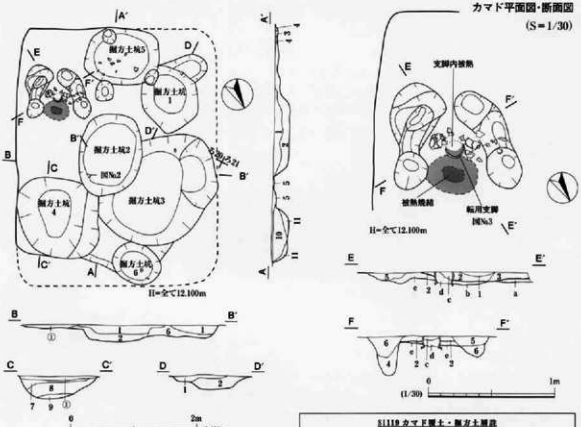
第Ⅱ章　今回報告区域検出遺構

第１節　建物遺構

第１項　竪穴建物

今回区域で報告する竪穴建物は１軒である。H地区南端に位置するものであり、本遺跡A地区からの遺構番号の連番でSI119にあたる。前回までの報告と同様に、規模については、縦長×横長cmで記載し、建物主軸は、カマドを奥に向けた位置を中心として北・南からの角度を表示した。面積においては、竪穴外も建物空間として使用した可能性をもつものがあるが、竪穴の部分のみの面積を示している。面積による建物類型は、特大が55㎡以上、大型が55～39㎡、中型36～25㎡、小型が25㎡以下としてこれまでの報告にしており、これに準ずるものとする。掘方土坑の位置づけも前回までの報告に準じた。竪穴建物の出土遺物については出土量を破片数換算で数量とし、時期については田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。

〈SI119〉



SI119 掘方土・掘方土層説

①層　黒褐色土（10YR2/2）：黄褐色土の中粒多の含有。炭化小粒少量含有。層上。
1層　黒褐色土（10YR2/2）：黒色土中粒多。黄褐色土中粒多量。焼土中粒多の含有。黄褐色層化粒土塊が上部に散在。結束土。部分的に硬化度大。
2層　黒褐色土（10YR3/2）に近い黄褐色土（10YR4/3）と5割率で混在。黒色土中粒。焼土中粒少量含有。黄褐色中粒多の含有。
3層　黒褐色土（10YR2/2）：褐色（7.5YR4/6）硬化粒土の中粒多量含有。結束うあり。
4層　褐色（7.5YR4/6）：硬化粒土中に。に近い黄褐色土（10YR4/3）が混在。結束うあり。硬化。
5層　黒褐色土（10YR2/2）：黄褐色土粒多量含有。やや密着ぼう。黄褐色土が密集あり。炭化小粒。焼土小粒多の含有。
6層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）：黄褐色土中粒多量（4割）含有。炭化中粒・黒色土中粒少量含有。
7層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）：黄褐色土（10YR5/6）下層土の混在土。炭化・黒色土中粒少量含有。
8層　黒褐色土（10YR2/2）に近い黄褐色土（10YR4/3）4割。黒色土中粒又粒。黄褐色土中粒1割土の混在土。やや結束うあり。
9層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）：黄褐色土（10YR5/6）3割。黒色土2割の混在土。
10層　黒褐色土（10YR2/2）：黄褐色土小粒・中粒多の含有。焼土中粒・炭化小粒少量含有。結束。
11層　黒褐色土（10YR2/2）：黄褐色小粒多量含有。焼土中粒・炭化中粒少量含有。

SI119 カマド層土・掘方土層説

カマド層土 土層説
1層　明褐色土（10YR3/2）：砂質褐色土（7.5YR4/3）小粒多量（3割）含有。焼土小粒多量含有。カマドの層土。焼土が強くカマドがつぶれか？
2層　黒褐色土（7.5YR2/3）：焼土小粒多量含有。褐色土（7.5YR4/3）小粒多量含有。炭化小粒少量含有。カマドの層土。焼土が強くるカマドがつぶ？
3層　黒褐色土（10YR2/2）：黄褐色土の中粒多の含有。炭化中粒少量含有。褐色層土（2層）と同層。
4層　にぶい褐色土（10YR4/3）：黄褐色土の粒多の含有。結束うあり。ニンデ山は多及ちの山ぶ。
5層　黒褐色土（10YR2/2）：黄褐色土小粒多の含有。焼土小粒少量含有。結束うややあり。
6層　にぶい褐色土（10YR4/3）：黄褐色土が小粒多量（2割）含有。焼土中粒多量含有。結束うあり。ニンデ山ぶ多つ穴に混ぜかた。

カマド層内土 土層説
a層　褐色土（7.5YR4/6）：硬化粒土がブロック層。結束う強く硬化強。にぶい黄褐色土が混在する。焼熱土（焼土硬化層）。
b層　赤褐色焼熱（5YR4/8）：1層が焼熱して焼した。カマド焼熱床面。
c層　赤褐色粒色（5YR4/8）：カマド支脚に使った小部分に近かられた黄褐色土が焼熱して焼土化。焼熱面側のみ焼土化している。4層との焼土化したもの。焼けは2層より強い？
d層　褐色土（7.5YR4/6）：カマド支脚部に近かられた土。焼土に近い土。
e層　にぶい褐色土（10YR4/3）：黄褐色中粒・小粒多量含有。焼土中粒。炭化中粒少量含有。結熱しているカマド層状土。

第12図　竪穴建物遺構図〈SI119〉

1．SI119

〈立地・規模・形態〉　H地区南端、れ・ろ20Gr、当遺跡の最南端に位置する建物で、孤立して立地する。上層削平されている区域にあたり、覆土は極一部で検出されているものの、削平は著しく、床面までも削平を受けている。カマド周辺に残る床面のラインと、掘方土坑の端を建物規模として想定すれば、410（残存380）㎝×320㎝、推定面積15.58㎡の小型建物で、プランは方形状になるものと思われる。内外に柱穴はなく、南端にカマドが造り付けられており、カマド底部が低かったために辛うじて残存する状態である。建物主軸はN-152°-W。

〈カマド〉　カマドは、ソデ端に設置されていたと思われるカマド石の抜き取り穴と、ソデ土も基底部から除去したと考えられる穴状の痕跡と床面が検出されている。焚口被熱や抜き取り痕跡の位置から、当カマドは、南端寄りの壁と直行して焚口が位置するもので、壁から離れていたものと思われる。カマド規模は、推定縦80～90㎝、推定幅90㎝になるものと考えられ、焚口幅は内寸50㎝、ソデ厚は推定で20㎝以下と思われる。支脚には径15㎝程の小型鉢を逆位置に据え転用しており、焚口床被熱は顕著で、支脚にも被熱が及んでいる。支脚内部に埋め込まれた土も、手前側のみ被熱している。床面は、焚口から支脚までは床傾斜2°とほぼ平坦であり、支脚より奥の床は傾斜角10～13°となる。床面の構築土は、建物床構築土と同様のものである。なお、カマドは建物床レベルよりも5～6㎝下がる。建物床自身が削平されているため、本来はかなり下がった位置に焚口が設けられたと考えられる。

〈掘方と出土遺物〉　貼床は、上面削平された状態で部分的に残存し、黒褐色土に黄褐色粘土塊を多量に混在させた土を貼ったと考えられる。部分的に掘方土坑土も床として使用した可能性が高く、掘方土坑は、やや規模の大きな掘方土坑3に接して合計6基が連なって位置している。カマド支脚に転用された小型鉢はⅣ1～Ⅳ2古期、掘方土坑内から出土する坏蓋や盤BもⅣ1～Ⅳ2期を示すことから、当建物の時期も同様と思われる。なお、出土遺物は総数で、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具97点である。

第2項　掘立柱建物

掘立柱建物は殆どの建物が H地区から検出され、遺構番号は、本遺跡全体で通し番号を付しており、今回対象となる掘立柱建物は、SI214～215・218・243・303～320・326～334の総数31棟である。前回までの報告では、本遺跡の遺構は、近代削平により、標高の高い部分が削平を受け遺構が消失する状況が多かったが、今回報告区域の掘立柱建物は、11.000ｍの標高ライン内に収まる形をとり、思いの他削平を免れていたと思われる。

今回報告区域から検出された掘立柱建物の基部構造をみると、側柱建物、古代末頃から登場して中世へと繋がってゆく大型の総柱建物、あるいは床束建物と言ってもいいのかもしれないが、低床構造である総柱建物が検出されている。また、2間×2間のしっかりとした柱穴と規模をもつ棟持柱建物が検出されており、構造的にも特異な事例と考えられ、前回報告では「社的建物」として位置付け（望月精司2009「額見町遺跡の古代「村寺」に関する考察」『額見町遺跡Ⅳ』石川県小松市教育委員会）しているものである。

これら建物の検出数は、古代側柱建物が14棟、棟持柱建物1棟、中世建物である低床の総柱建物が16棟である。前回区域に比べ、側柱建物が減り、古代の高床総柱建物は見られなくなった。さらに低床タイプの総柱建物が格段に増加していると言える。ここで、触れておくべきことがある。低床構造の建物の特徴として、柱が細いこと、柱穴規模の小さいものが多いが、柱間規模が大きなことが挙げられる。このような構造のものに中世遺物が出土する例が多く、似た構造であるのに古代遺物しか出土しないものも見られる。もちろん、出土遺物も重要な判断基準と言えるが、このような建物に対しては、古代の建物とするのではなく、中世建物として判断した。

文中表記では、長軸側を桁、短軸側を梁として、桁行×梁行として表示する。建物主軸については、桁行を主軸と設定して、北からの角度を表示した。但し横向きに配置するものに関しては考えられる主軸を提示した。掘立柱建物の各名称は、奈良文化財研究所 2003『古代の官衙遺跡 Ⅰ遺構編』を参考にした。出土遺物については出土量を破片数換算で数量とし、古代遺物の時期については田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。中世遺物としたものは、本遺跡の古代以外の終焉時期までのものを示しており、これは中世1－Ⅰ期～中世1－Ⅱ2期（11世紀2／4期前後から1110～1150年頃）にあたるもので、詳細は遺物観察表凡例『南加賀地域古代土器編年軸と歴年代観』に掲載されている。なお、出土遺物破片数について、中世遺物の破片数が突出した数値を示すものについて記述しておく。今回報告区は、上層中世遺物がまとまっている区域でもあり多量混入があったもの

と考えており、また、中世遺物は古代遺物に比べ極細片が殆どであることから、突出した数値を示したと考えている。

1．SB214

む26Grで、標高の高い側の柱穴7本のみが検出された建物である。柱穴規模も小さく浅いため、本当に建物であったのか疑問も残るが、側柱建物として報告する。残存2間×残存3間、桁行・梁行とも残存で2.4 mを測る。主軸はN-15°-E、柱穴は円形・不整円形プランを呈し、断面形状は柱部分のみが下がって段掘りとなるものが多い。柱穴規模は、径24～44 cm、深さは16～28 cm、基本的に旧地表に添った深さをもつものの、深さ自体は一定ではない。柱間寸法は、桁間104～132 cm、梁間72～88 cmを測り、寸法は極めて小規模、柱筋の通りは概ね良い。建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物はないが、構造的に古代建物と判断される。

2．SB215

む・め－26・27Grに位置し、桁行・梁行が直行しない、南側が出っ張る形状のひしゃげた側柱建物である。建物規模は、桁行6.2～6.8 m、梁行4.12～4.88 mの3間×2（3）間で、面積は29.25 ㎡を測る。柱間寸法は、桁間132～260 cm、梁間108～268 cm、寸法を同じにもつ柱間はない。柱穴プランは、円形、不整楕円形、楕円形と様々で、径は30 cmを主体に24～64 cm、深さは20～36 cmで、基本的に旧地表に添うものの、一定値ではない。掘方断面形状は、柱位置を深くする段掘りが多い。柱筋の通りは悪く、廃絶時に柱は抜き取られているが、方向はランダムである。径10 cm程の柱圧痕が残存、全体の形状や規模から簡易な様相が否めない。建物主軸はN-25°-E。出土遺物はないものの、形状から古代のものと判断される。

3．SB218

む37Grで、桁行と思われる1本のみの柱の並びが検出されたものである。残存3間分で4.12 mを測り、柱間寸法は120～160 cm、主軸はN-39°-W。プランは円を呈し、径は28～36 cm、深さ20～32 cmを測る。柱筋は良く、廃絶時に柱は抜き取られ、抜き取り方向は東側である。出土遺物はないが、古代建物の形状を示している。

4．SB243

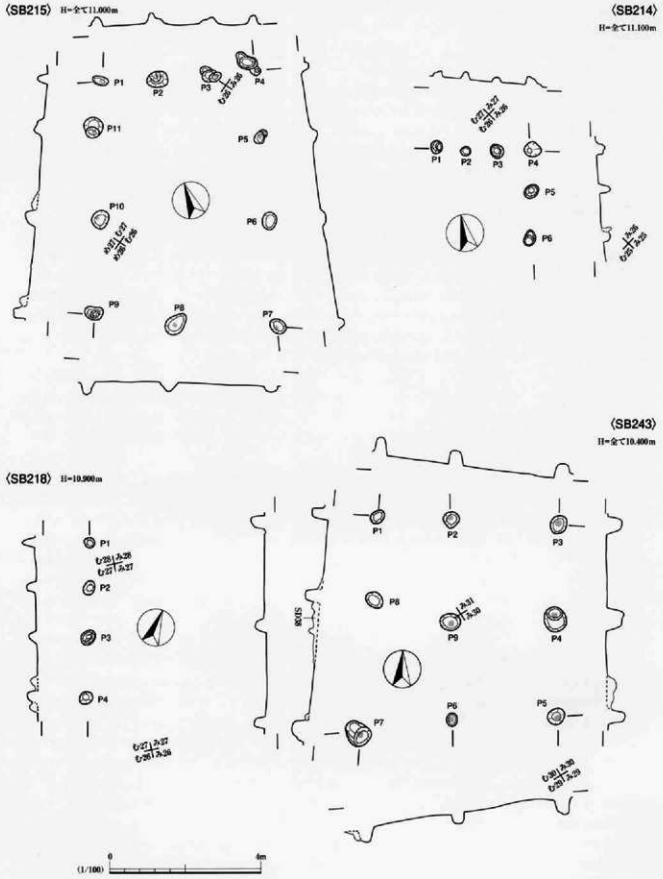
み・む－30・31Grに位置する、低床の総柱建物である。規模は、桁行5.2～5.8 m、梁行4.8～5.2 m、2間×2間、建物面積27.5 ㎡を測る。西側の柱穴配置、特にP7が大きく飛び出す形で配置されることにより、歪な形状をなしている。建物主軸はN-1°-W。柱間寸法は、桁間224～352 cm、梁間196～272 cmを測る。柱穴掘方プランは、円形、長方形を呈し、柱穴規模は径45 cmを主体に28～64 cmを測り、深さは44 cmで旧地表に良好に添い、四隅が深めとなる。柱圧痕が検出されており、径は7～16 cm、11・12 cmが主体である。柱筋の通りは悪く、掘方にはP1やP7のように斜め配置をとるものが確認できる。建物廃絶時に柱は抜き取られており、方向は外側である。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具5点、土師器煮炊具5点と古代のものしか出土していないのだが、構造的には中世建物と判断される。

5．SB303

よ・ら－31・32Grに位置する。規模が桁行6.92～7.08 m、梁行4.8～4.96 m、3間×2間、建物面積34.16 ㎡を測る側柱建物である。P4が飛び出して配置するため、若干歪な建物プランとなる。建物主軸はN-6°-E。柱間寸法は、桁間208～248 cm、梁間224～256 cmを測る。柱穴掘方プランは円形、断面形状は段掘りを呈し、柱穴規模は径52 cmを主体に40～88 cmを測り、深さは40～60 cm、P5が最も浅く22 cmを測る。深さは基本的に旧地表に添い、隅柱を深めにもつ。柱圧痕が残存しており、この径が10～15 cmであった。また、覆土では“柱のあたり”がP8のみ認められ、この径は20 cm。柱筋の通りは、建物がひしゃげているものの良好で、廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物総破片数は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具7点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具2点、中世土師器食膳27点、灰釉陶器1点であり、時期はⅣ2新～Ⅴ期と判断される。

6．SB304

ら・り－30・31Grに位置、建物規模が桁行8.08～8.52 m、梁行5.4～5.6 mの4間×2間、建物面積45.65 ㎡を測り、主軸はN-10°-E、P1がずれて配置されていることから全体的にひしゃげた形状の側柱建物である。桁行・梁行が直行するのはP7位置のみである。柱間寸法は、桁間132～264 cm、梁間248～292 cmを測り、掘方柱穴プランは円形、柱位置のみ底面が若干深くなるものも見られる。柱穴規模は、径36～48 cm、最小で28 cmであ



第13図　掘立柱建物遺構図1〈SB214・SB215・SB218・SB243〉

り、深さは 24 ～ 40 ㎝で、基本的に旧地表に添いながら、中柱の深いもの浅いものが認められる。柱圧痕が残存しており、径は 10 ～ 15 ㎝。なお建物廃絶時に柱は抜き取られ埋め戻されたとみられる。柱筋の通りは、東桁行・北梁行が良く、西桁行・南梁行が悪い。SJ69、SJ71 が当建物内に収まる形で位置するものの、掘立柱建物検出レベルよりも 30 ㎝以上高位であり、関連性がないものと判断される。出土遺物は、須恵器食膳具 1 点、須恵器貯蔵具 6 点、土師器煮炊具 4 点、中世土師器食膳具 42 点、石製品 1 点である。時期は中世とされるところだが、極細片で信憑性に欠けるとともに建物形状は古代であり、この古代遺物の時期はⅤ期前後である。

7．SB305

ら・り・る－30・31Gr に位置する側柱建物である。P7 にて桁行・梁行が直行しないために、やや台形状の建物プランとなる。規模は、桁行 8.68 ～ 9.2 m、梁行 5.6 m の 4 間×2 間で、面積 50.06 ㎡、建物主軸は N-13°　-E をとる。柱間寸法は、桁間 180 ～ 272 ㎝、梁間 232 ～ 328 ㎝、柱穴掘方プランは円形・方形状を呈し、断面形状は柱部分が一段下がる状態で段掘りを呈する。柱穴規模は径 40 ～ 52 ㎝主体に最小 30 ㎝、深さは 32 ～ 40 ㎝を主体に、浅いもので 24 ㎝を測る。深さは、基本的に旧地表に添っている。柱圧痕が検出されているが、径が 8 ㎝前後であるため、部分的に残存したものだろうと判断する。柱筋の通りは良く、掘方配置に関しては P11 や P7 の方形状プランが斜め配置されている。建物廃絶時に柱は抜き取られており、SB305 内に収まるように位置する SJ69 は検出レベルが 30 ㎝以上も上位であり、当建物には伴わないものと思われる。出土遺物は総破片数で、須恵器食膳具 4 点、須恵器貯蔵具 2 点、土師器煮炊具 5 点である。中世土師器食膳具の極細片 70 点が出土するものの混入品である。時期はⅣ～Ⅴ期になるものと判断される。

8．SB306

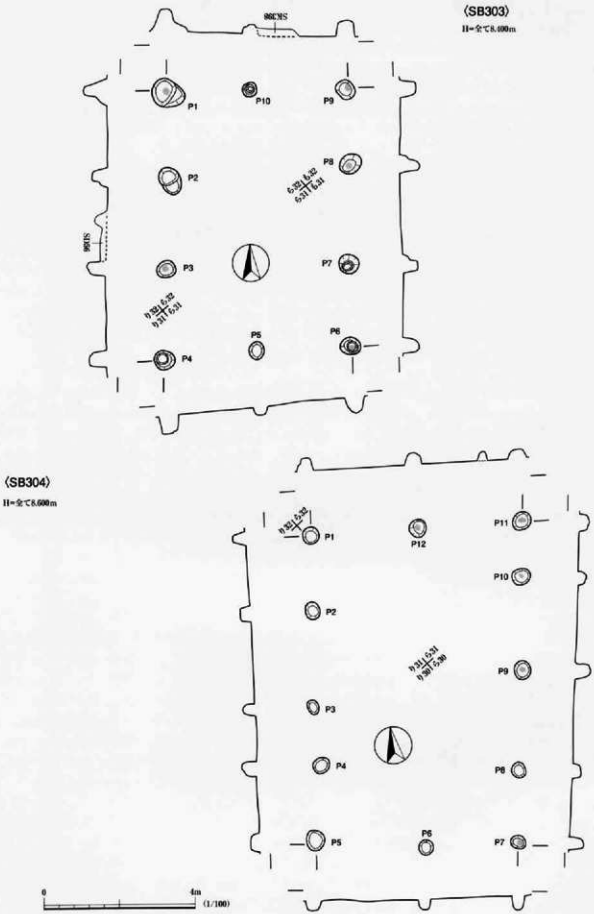
り・る－30・31Gr に位置する、3 間×2 間、低床の総柱建物である。柱穴規模は、古代の様相を伴って大きくしっかりしているものの、柱間寸法が大きく、中央に位置する柱が認められることもあり古代末以降の低床総柱建物とした。建物規模は、桁行 7.64 m、梁行 5.4 m、建物面積 42.78 ㎡。主軸は N-10°　-E、柱間寸法は、桁間 240 ～ 272 ㎝、梁間 280 ㎝である。柱穴掘方プランは、円形・方形状を呈し、掘方断面形状は柱部分が下がる段掘りを呈する。柱穴規模は、径 52 ～ 88 ㎝、深さ 40 ～ 44 ㎝が主体となり、28 ～ 50 ㎝を測る。深さは基本として旧地表に添うが、P10 のみ浅い。なお、P11 の深さは 27 ㎝、P12 の深さは 24 ㎝を測る。柱圧痕が残存しており、径は 10 ～ 20 ㎝である。柱筋の通りは、桁行・梁行とも良く、掘方の配置では P1 が北側へ出る形状、P6 は南側へ出る形状で不整楕円形を呈する。柱は廃絶時に抜き取られているが、抜き取り方向はランダムであった。また、重複する SJ72 鍛冶炉は、検出レベルが 40 ㎝以上も上位となるため、関連性はないものと思われる。出土遺物総数は、須恵器食膳具 3 点、須恵器貯蔵具 4 点、土師器食膳具 1 点、土師器煮炊具 27 点で、中世土師器食膳具 122 点、白磁片 1 点、石製品 3 点が出土する。時期は中世Ⅰ－Ⅰ期と判断される。

9．SB307

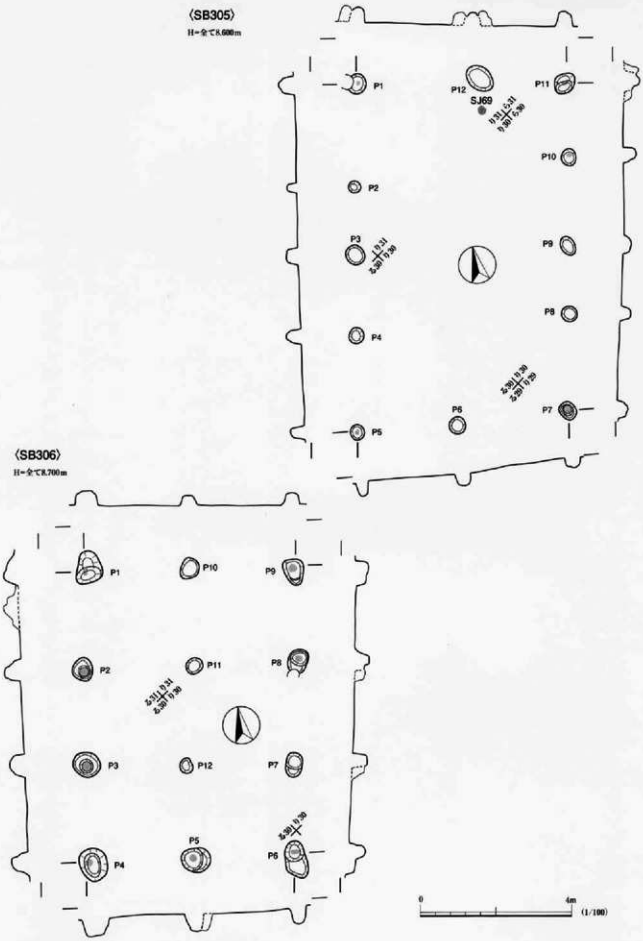
り・る－29・30Gr に位置する、規模が桁行 5.0 m 梁行 4.8 m、2 間×2 間の低床総柱建物である。面積 24.0 ㎡、建物主軸は N-12°　-E。柱間寸法は、桁間 240・260 ㎝、梁間 240 ㎝、掘方プランは円形・方形・楕円形を呈し、掘方断面形状は柱部分が下がる段掘りとなる。柱穴規模は、径 60 ～ 72 ㎝主体で、最小 36 ㎝と P1 ～ P3 の径は小さいのだが削平影響によるものだろう。深さは 40 ～ 44 ㎝が主体で最小 26 ㎝を測り、旧地形に添いながら、全てにおいて中柱の方が深くなっている。なお中央P5 の深さは 36 ㎝である。柱筋の通りは、桁行は良好で、梁行は P8 がずれているため悪い。ピットプランに方形が認められるものの、縄張りされたとは言えない。なお、建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物総数は、須恵器食膳具 3 点、須恵器貯蔵具 1 点、土師器食膳具 1 点、中世土師器食膳具 16 点であり、時期は中世Ⅰ期とされる。

10．SB308

ら・り・る－25・26、り 24Gr に位置する、低床の総柱建物である。建物規模が、桁行 11.72 m、梁行 10.52 m、4 間×4 間で面積 123.29 ㎡、建物主軸は N-10°　-E。柱間寸法は、桁間 252 ～ 320 ㎝、梁間 240 ～ 280 ㎝で、柱穴プランは円形・方形・楕円形を呈して、規模は、径 52 ～ 60 ㎝を主体に 42 ～ 88 ㎝、深さ 40 ～ 52 ㎝を測る。深さについては、南北軸に対して顕著な旧地形に添う深さをもち、柱筋の通りは概ね良好である。なお、廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物は総数で、須恵器貯蔵具 13 点、土師器煮炊具 34 点、中世土師器食膳具 223 点、石製品 2 点、白磁片 1 点が出土しており、時期は中世Ⅰ－Ⅰ期を示す。



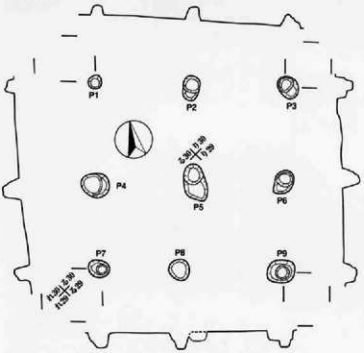
第14図　掘立柱建物遺構図2〈SB303・SB304〉



第15図　掘立柱建物遺構図3〈SB305・SB306〉

〈SB307〉

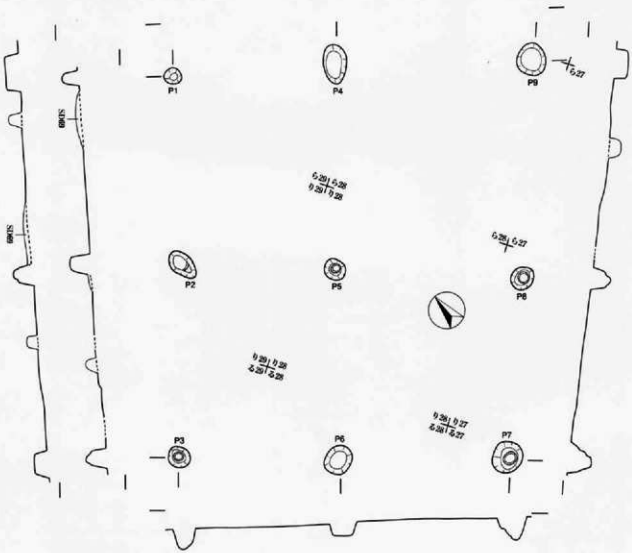
H=全て8.900m



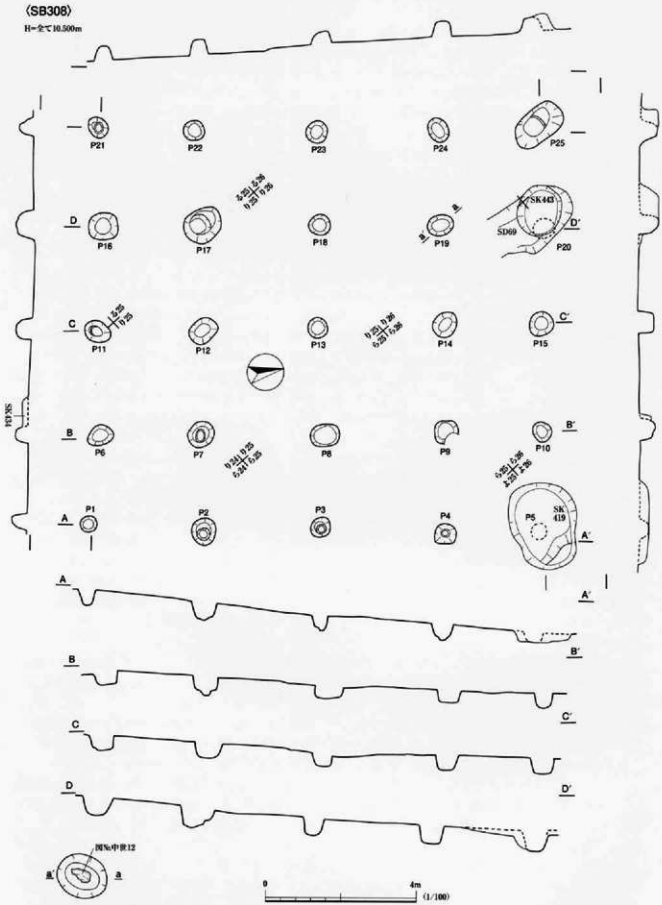
(1/100)　0　4m

〈SB309〉

H=全て10.600m



第16図　掘立柱建物遺構図4（SB307・SB309）



第17図　掘立柱建物遺構図5〈SB308〉

11. SB309

ら25、り・ろ－25・26Grに位置。建物規模は、桁行10.6 m、梁行8.8 m、建物面積93.28 ㎡。柱間寸法は、桁間480～580㎝、梁間420～520㎝。2間×2間の低床の総柱建物と現地調査で判断したものの、柱間寸法が大き過ぎることや、桁間・梁間が何れも直行せず、建物として成立するのか懸念を抱いているところである。ただ、掘図上に薄く示したように、柱間に小ピットが確認でき、4間×4間である可能性がもたれる。掘方柱穴プランは円形・不整楕円形を呈し、規模は、径56～84㎝、最小径でP1の46㎝、深さ40～60㎝を測って、基本的に旧地表に添うものの、中柱に深いものも認められる。蛋な建物の割に、しっかりと掘り込まれた良好な柱穴をもつ。柱筋の通りは良く、径6～10㎝の柱圧痕が残存し、建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物総数は、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具5点と古代遺物のみが出土するが、建物形状から中世建物と判断するのが妥当であり、古代遺物は混入品になるのだろう。建物主軸は N-40°　-E。

12. SB310

ゆ26・27、よ26～28、ら25～27Grに位置する、低床の総柱建物である。建物規模は、桁行12.2 m、梁行8.2 mの5間×3間、建物面積100 ㎡を測り、主軸は N-20°　-E。柱間寸法は、桁間216～280㎝、梁間248～300㎝、柱穴掘方プランは円形・不整楕円形・楕円形を呈し、規模は径52㎝主体に44～72㎝、深さは36～80㎝で基本的に旧地表に添いながらも、浅いもの深いものが認められる。径10～20㎝を測る柱圧痕が残存し、柱は建物廃絶時に抜き取られて埋め戻されている。なお、埋土の上層に石が埋められ、石の混入が認められるのは P3・4・6・9～11・16・17・19～21で、最大20㎝四方の不整形を呈す。柱筋の通りは悪く、当建物内では、多くの炉状遺構や鍛冶炉が重複するものの、この建物の検出レベルと似たような検出レベルをもつものは SJ67のみである。出土遺物は総数で、須恵器食膳具21点、須恵器貯蔵具17点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具59点、中世土師器食膳具246点である。この他、ミニチュア土器・カマド型の土師特殊品2点、須恵質の馬形が1点、水晶や瑪瑙を含む石製品が18点、白磁片1点が出土する。時期は、中世1－Ⅱ1期とされる。

13. SB311

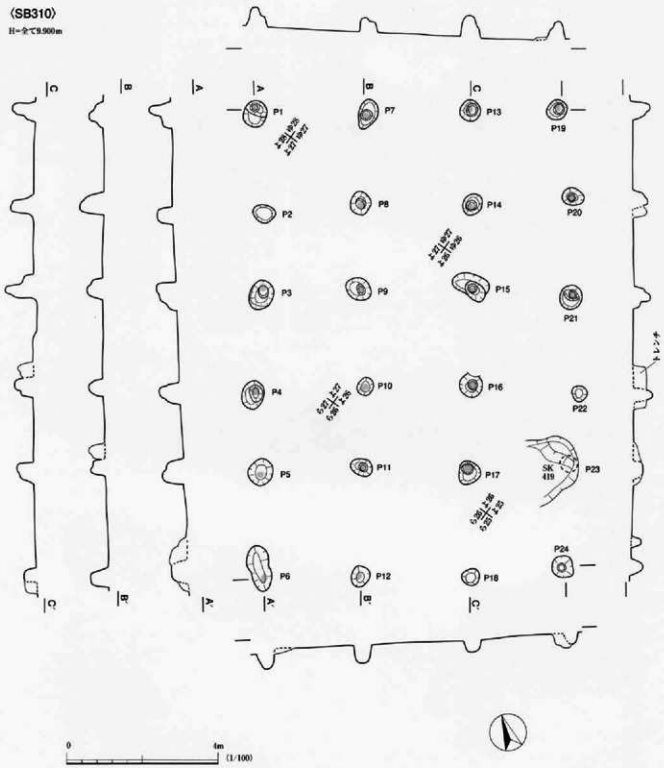
よ・ら－26・27Grに位置する。建物規模が、桁行7.2 m、梁行4.4～4.88 mの4間×3間、P1が飛び出すように配置するため建物全体が台形状となる側柱建物である。面積は33.41 ㎡、主軸は N-25°　-E、柱穴は円形・長方形状・楕円形を呈し、径48㎝を主体に38～64㎝を測り、深さは32～48㎝で、Cラインのみ深さが揃うものの、他は様々な深さをもつ。柱間寸法は、桁間136～212㎝、梁間128～160㎝で、寸法を同じにする箇所はない。これら値のばらつきから簡易で建物設置時の無計画さが窺えるのだが、柱穴はしっかり掘り込まれている。柱圧痕が2本のみ残存、この径は18㎝・20㎝を測る。柱筋の通りは悪く、建物廃絶時に柱は抜き取られている。重複する炉状遺構の SJ65は、当建物検出レベルから上位10㎝以内で検出されており、関連性が窺える。出土遺物は総破片数で、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具4点、土師器煮炊具3点、土師器食膳具2点、中世土師器食膳具45点である。中世遺物は極細片で信憑性が低く、時期は古代Ⅳ期頃になるものと判断される。

14. SB312

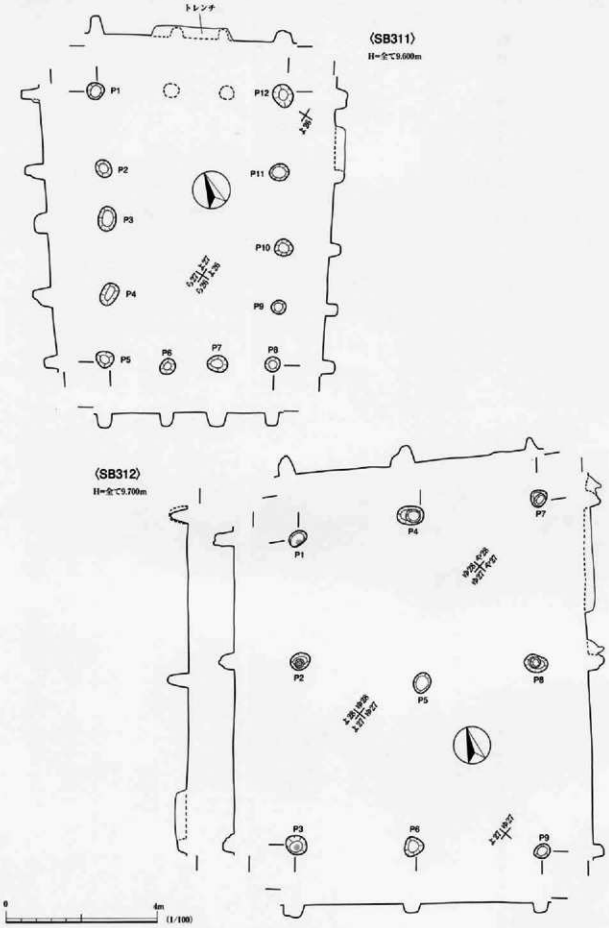
ゆ・よ－27・28Grに位置する、低床の総柱建物で、北梁行が直行しない台形状プランを呈するものである。建物規模は、桁行8.2～9.32 m、梁行6.28 mの2間×2間で、柱間寸法は桁間328～488㎝、桁間300～320㎝を測る。P1やP9が飛び出して配置、建物プランの歪さ、桁行の柱間寸法が大き過ぎるといったことから、果たして建物として成立したのか疑問を払拭できないものの、現地調査で良好な柱穴と柱圧痕が検出された。建物主軸は N-17°　-E、建物面積は44.87 ㎡。柱穴掘方プランは円形・不整形・楕円形を呈し、断面形状は柱位置が一段下がるか窪むものが多い。柱穴規模は、径52㎝主体に40～70㎝、深さは28～56㎝を測る。深さについては、基本的に四隅が深いタイプだが、中柱P5のみで深い。柱筋の通りは悪く、残存する柱圧痕は6～14㎝を測り、建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物総数は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具6点、中世土師器食膳具14点で、時期は総じて中世1－Ⅱ1期と判断される。

15. SB313

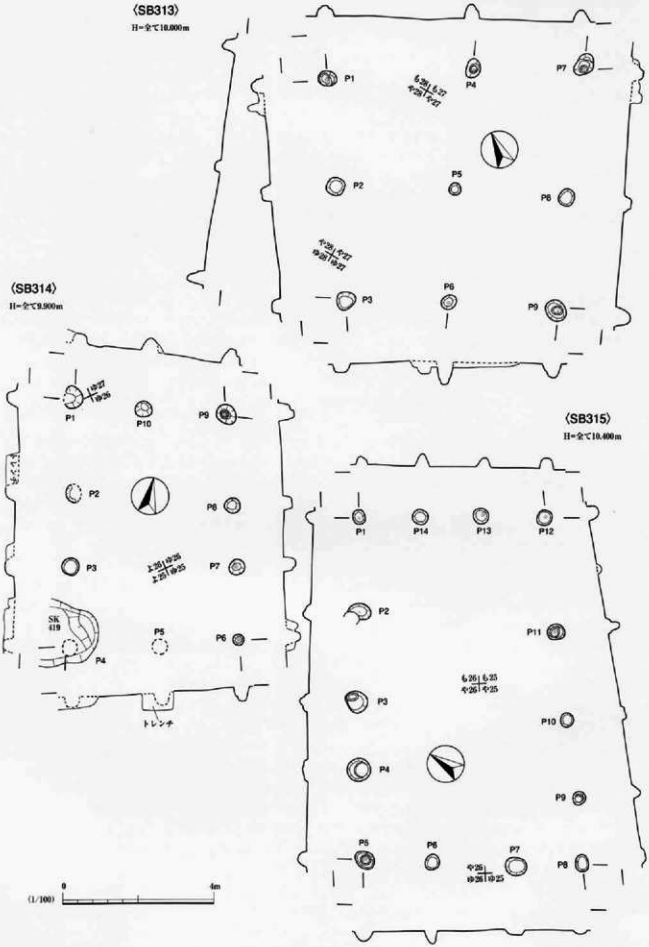
や27Gr主体に、や26～28Grに位置する、建物規模が桁行5.88～6.4 m、梁行5.6～6.8 m、建物面積38.07 ㎡、2間×2間の低床の総柱建物である。建物主軸N-32°　-E。柱間寸法は、桁間284～340㎝、梁間272～388㎝、桁行・梁行の何れも直行する箇所がない歪な建物である。柱穴は円形・方形・不整形で、断面形状は柱部分



第18図　掘立柱建物遺構図6〈SB310〉



第19図　掘立柱建物遺構図7（SB311・SB312）



第 20 図　掘立柱建物遺構図 8〈SB313・SB314・SB315〉

が下がる段掘りが多い。規模は、径が40㎝主体に30～60㎝を測り、深さは32～44㎝を主体に20～60㎝で、基本的に旧地表に添いつつ四隅深めタイプだが、P6・P9のみ中柱が深くなる。残存する柱圧痕の径は6～10㎝で、ひしゃげた建物の割に柱筋の通りは良く、建物廃絶時に柱は抜き取られている。出土遺物総数は、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具2点の古代遺物のみだが、建物構造は中世と判断される。

16. SB314

ゆ・よ－25・26Grに位置する。建物規模が、桁行6.0～6.6 m、梁行4.08～4.48 mを測り、建物面積29.96㎡、3間×2間の側柱建物である。P6位置の桁行・梁行のみ直行し、これ以外は直行しないため、全体的に歪な建物プランである。柱間寸法は、桁間120～260㎝、梁間208～220㎝、建物主軸はN-19°-Wにとる。柱穴掘方プランは円形・不整円形を呈し、柱穴規模は径40㎝を主体とするもののP6で最大56㎝を測り、深さは24～40㎝である。径12㎝の柱圧痕を3本のみ検出しており、柱筋の通りは概ね良い。出土遺物は、Ⅲ～Ⅳ期にあたる土師器煮炊具1点のみで、遺物時期からの時期判断は難しいが、建物は古代の構造をもっている。

17. SB315

も・や－24・25Grに位置する側柱建物だが、P1位置のみ桁行・梁行が直行、P8が出っ張るためにひしゃげた形状をもつもの。建物規模は、桁行9.0～9.24 m、梁行4.92～5.68 mの4間×3間、建物面積48.34㎡、建物主軸はN-52°-E。柱間寸法は、桁間が176～332㎝、梁間160～220㎝、柱穴掘方プランは円形・方形・楕円形を呈して、規模は径40～60㎝、深さ10～32㎝を測る。残存する柱圧痕の径は6～12㎝、柱筋の通りは悪い。なお、重複する炉状遺構SJ74は当建物検出レベルよりも25㎝上位にあたり、関連性はないものと考えられる。出土遺物は総数で、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具3点、土師器煮炊具6点、中世土師器食膳具16点、総じて時期はⅣ期前後になるものと判断される。中世遺物は混入品であろう。

18. SB316

む・め－26・27Grに位置する側柱建物で、P1・P10がかなり外側に配置されているため、建物プランが台形状を呈す。建物規模は桁行6.08～6.16 m、梁行4.88～5.72 mの3間×2間、面積32.37㎡、主軸N-15°-E。柱間寸法は、桁間180～244㎝、梁間220～320㎝、プランは円形や楕円形を呈し、規模は径40㎝が主体で、西桁行のみ60㎝を主体にもつ。深さは20～36㎝を測り、旧地形に添いながら四隅を深めにもつ。残存する柱圧痕の径は6～10㎝程度で、柱筋の通りは歪な建物形状の割に良好である。出土遺物は、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具9点、中世土師器食膳具1点であり、時期はⅣ2期を主体に、Ⅰ・Ⅱ期のものが混在する。

19. SB317

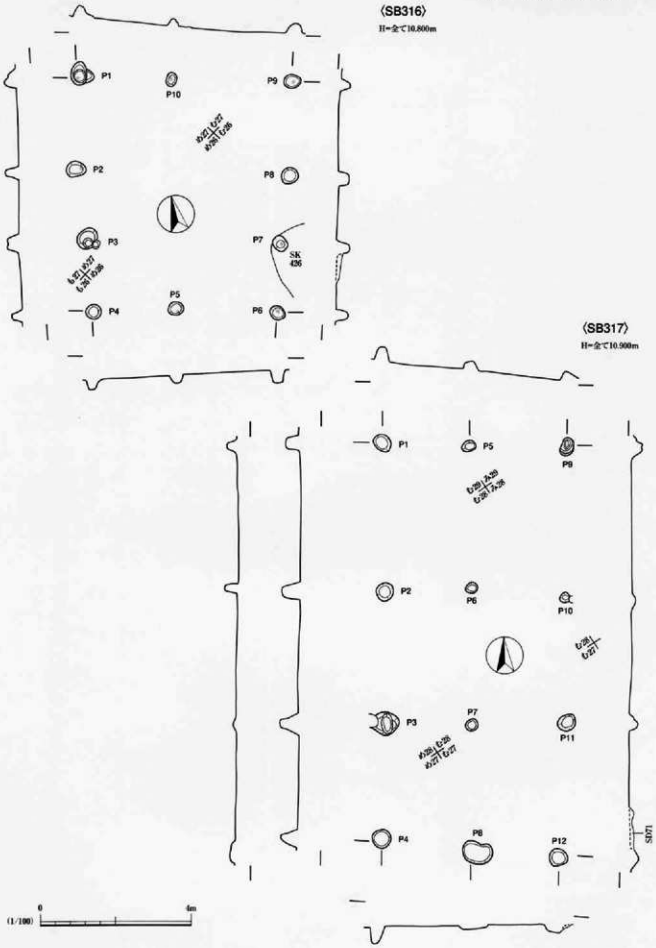
み28・29、む27～29、め27・28Grに位置するものである。建物規模は、桁行10.4～10.92 m、梁行4.8 mの3間×2間、建物面積51.17㎡、南梁行が歪となる低床の総柱建物である。建物主軸はN-1°-E。柱間寸法は、桁間300～408㎝、梁間232・248㎝で、柱穴は円形・不整形を呈す。柱穴規模は、径48㎝を主体に32～52㎝、深さは西梁行のみ48㎝主体で、この他は8～32㎝を測り、梁行は旧地表に添った掘り込みをもつものの、他は様々な深さとなる。なお、P6の深さは25㎝、P7の深さは10㎝である。柱筋の通りは良好で、出土遺物は須恵器食膳具3点のみだが、柱間寸法が広いことから建物構造は中世を示すと思われる。

20. SB318

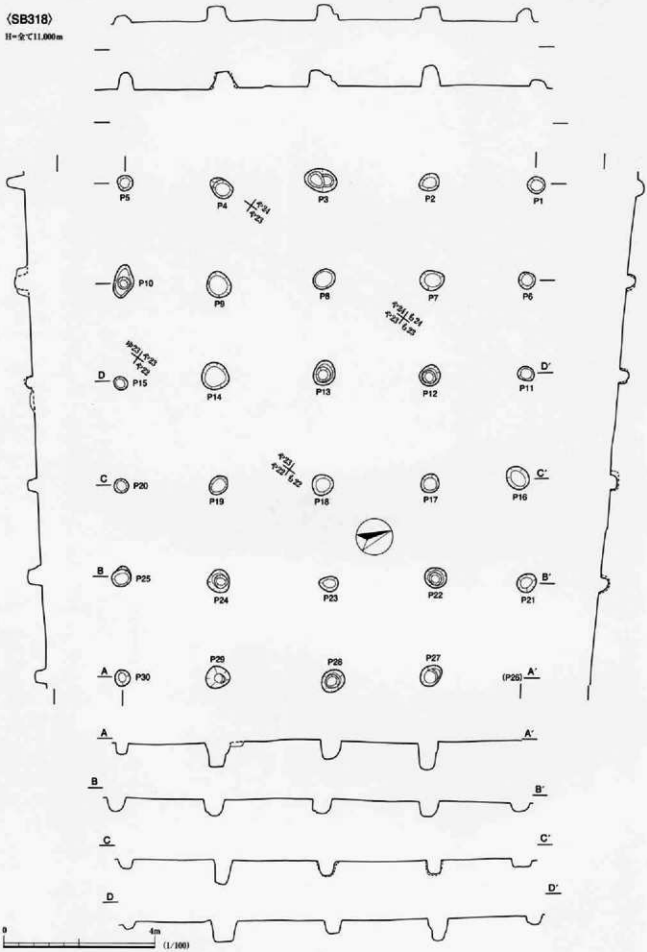
め22・23、も・や－22～24、ゆ23Grに位置、低床の総柱建物である。桁行13.12 m、梁行10.68 m、5間×4間で、面積138.84㎡、建物主軸はN-20°-E若しくはN-70°-W。柱間寸法は、桁間260㎝、梁間248～280㎝。柱穴掘方プランは、円形や不整楕円形で、柱穴規模は径52～60㎝主体に40～72㎝を測り、深さは16～64㎝、東西梁行は旧地表に添い、これ以外は様々な深さをもつ。柱筋の通りは、南桁行は良好、東梁行は概ね良好だが、北桁行・西梁行は悪い。なお、建物廃絶時に柱はランダムな方向に抜き取られている。P18上層からは、鉄製鍋が出土している。出土遺物総数は、須恵器食膳具25点、須恵器貯蔵具33点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具74点、中世土師器食膳具104点、白磁片1点、石製品7点で、時期は中世1－Ⅱ1期と判断される。

21. SB319

め～や－21・22Grに位置、桁行7.0～7.2 m、梁行7.2～8.4 mの2間×2間、低床の総柱建物だが、桁行・梁行とも直行する箇所がないため、かなりひしゃげた建物である。柱間寸法は、梁間340・360㎝、桁間320～440㎝を測り、寸法が広すぎるため建物として成立するか懸念を抱かせるもので、形状がSB309やSB313と似

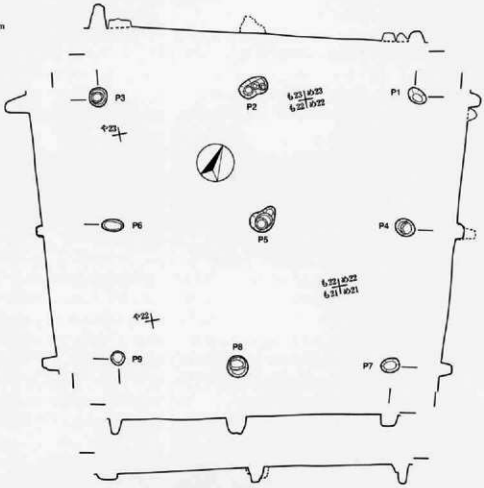


第21図　掘立柱建物遺構図9〈SB316・SB317〉

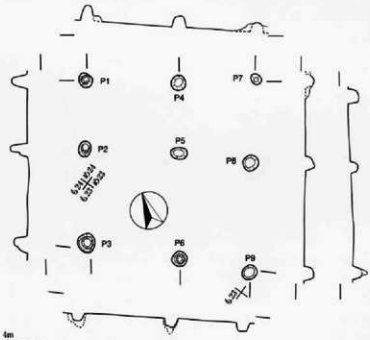


第22図　掘立柱建物遺構図10〈SB318〉

〈SB319〉
H=全て11.200m



〈SB320〉
H=全て11.000m



0　4m
(1/100)

第23図　掘立柱建物遺構図11〈SB319・SB320〉

ている。建物面積は54.94㎡、建物主軸はN-22°-W。掘方柱穴プランは円形・不整円形・楕円形を呈し、径は34～54㎝、深さ14～60㎝を測る。基本的に旧地表に添う深さをもちながら、四隅を深めにする。柱筋の通りは、桁行は概ね良く、梁行では南梁行は良いが北梁行は P2 が完全にずれていて悪い。柱は建物廃絶時に抜き取られており、かなり締まりをもつ土で埋め戻されている。出土遺物総破片数は、須恵器貯蔵具5点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具4点、中世土師器食膳具1点である。建物形状と合わせ、総じて時期は中世Ⅰ期と判断される。

22. SB320

め・も23、め24Gr に位置する。北梁行側のみ桁行と直行し、南側が酷く歪な低床の総柱建物である。建物規模は、桁行4.28～5.12 m、梁行4.4～4.48 mの2間×2間、建物面積は21.06㎡を測る。柱間寸法は、桁間176～292㎝、梁間192～248㎝、建物主軸はN-20°-E。柱穴は円形・楕円形プランを呈し、径は40㎝主体、深さ18～46㎝を測り、基本として旧地表に添う掘り込みをもつ。柱筋の通りは良く、建物廃絶時に柱は抜き取られているが、確認できるものでは全て外側へ抜かれている。出土遺物は総数で、須恵器食膳具8点、須恵器貯蔵具3点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具13点、中世土師器食膳具7点が出土する。建物時期は中世1期とされる。

23. SB326

む30、め・も－29・30Gr に位置。建物規模が、桁行8.64～9.0 m、梁行5.4～5.68 mの4間×3間の、側柱建物である。柱穴はしっかり掘り込まれた良好なものであるのに、建物が意外とひしゃげており、特に東桁行・南梁行が歪む。桁行と梁行が直行するのは P1 の位置のみである。建物面積は48.86㎡、建物主軸はN-19°-E。柱間寸法は、桁間192～280㎝、梁間120～244㎝、柱穴は円形・方形・不整形・楕円形と様々なプランをもつ。柱穴規模は、径52～56㎝を主体に最大74㎝最小28㎝を測り、深さは16～60㎝で基本的に旧地表に添う掘り込みをもちつつ四隅深めとするタイプである。但し、P2 や P9 のように深いものもある。残存する柱圧痕は10～16㎝、14㎝に主体をもち、建物廃絶時に柱はランダム方向へ抜き取られている。埋土内で確認できる'柱のあたり'の径は16～24㎝、柱筋の通りは、桁行は良好で、梁行も概ね良い。出土遺物は総数で、須恵器食膳具11点、須恵器貯蔵具3点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具13点、この他特殊品として須恵質埴輪1点が出土する。時期はⅣ2期を主体とするものである。

24. SB327

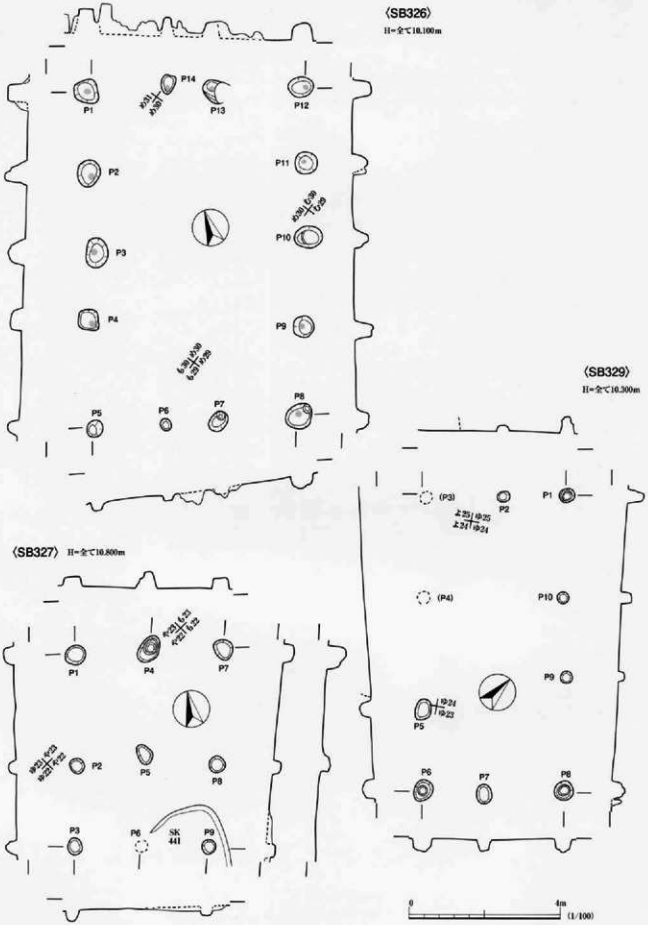
や22・23Gr に位置する、低床の総柱建物で、桁行5.2 m、梁行3.12～3.92 m、2間×2間で面積18.3㎡。主軸はN-11°-E。P7 が外側に外れて位置するため、建物が台形状を呈す。柱間寸法は、桁間220・300㎝、梁間192・200㎝。柱穴は円形・不整形プランで、径36～76㎝、深さ20～50㎝を測る。柱筋の通りは概ね良く、建物廃棄時に柱は抜き取られている。出土遺物は、須恵器貯蔵具6点、須恵器貯蔵具5点、土師器煮炊具12点が出土するものの、細片であり時期を判断できるものではない。ただし、建物形状は中世建物を示している。

25. SB328

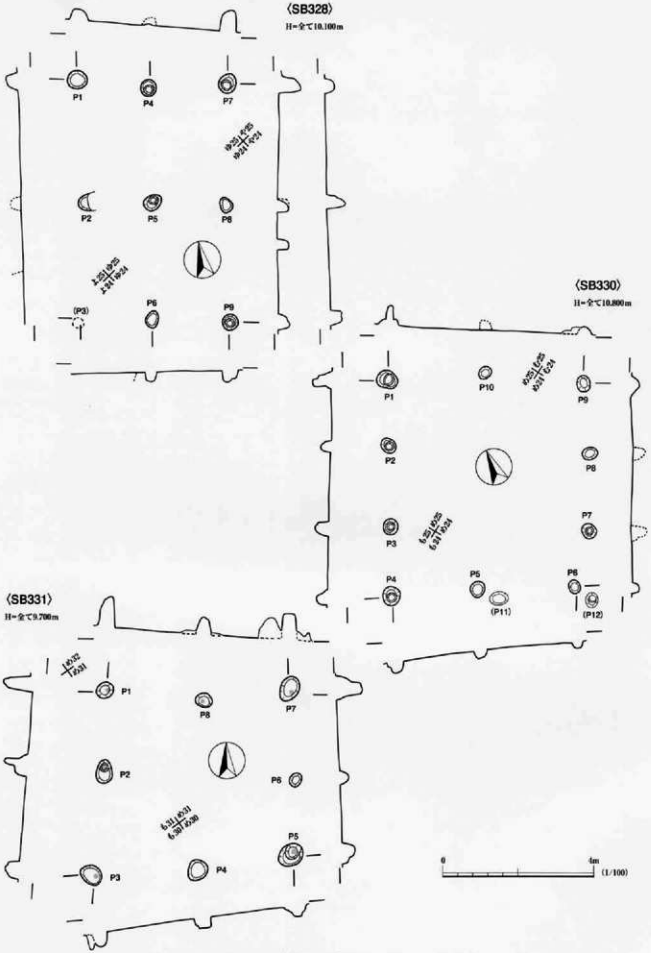
ゆ24・25Gr に位置、低床の総柱建物で、桁行6.32 m、梁行4.0 mの2間×2間、面積25.28㎡を測り、主軸はN-11°-E。柱間寸法は、桁間312・320㎝、梁間200㎝で、柱穴プランは円形・不整楕円形を呈し、断面形状で段掘りするものが多い。径は40㎝前後が主体、深さ24～56㎝を測り、若干旧地表に添いながら四隅深めとするタイプである。但し中央の P5 のみ深くなっている。柱筋の通りは、東桁行のみ良く、この他は悪い。廃絶時に柱は抜き取られている。なお、重複する SJ73 は当建物検出レベルより下位層となり、関連性は薄いものと判断される。出土遺物は総数で、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具7点、中世土師器食膳具7点である。時期は中世1－Ⅱ1期とするものである。

26. SB329

ゆ・よ－23～25Gr に位置する、建物規模は、桁行7.8 m、梁行3.8 m、3間×2間で面積29.64㎡の側柱建物である。建物主軸はN-44°-W にとる。試掘時のトレンチ撹乱により、谷側方向の柱穴を2本分消失している。柱間寸法は、桁間208～300㎝、梁間160～212㎝、円形や方形の柱穴プランを呈し、断面形状で柱位置が若干下がる柱穴も認められる。柱穴規模は、径60㎝程が主体で、最小32㎝を測り、深さは16～44㎝、旧地形に添いつつ四隅深めとするタイプである。柱筋の通りは、桁行は悪いものの梁行は良好で、建物廃棄時に柱は抜き取られている。出土遺物は、須恵器貯蔵具2点のみで、これらは古代Ⅰ・Ⅱ期を示すものの、遺物から時期を判断することは難しいが、建物構造から古代建物と判断してよいだろう。



第 24 図　掘立柱建物遺構図 12（SB326・SB327・SB329）



第25図　掘立柱建物遺構図13〈SB328・SB330・SB331〉

27. SB330

め・も－24・25Gr に位置、桁行 5.48 ～ 5.8 m、梁行 4.8 ～ 5.16 m、3 間 × 2 間で面積 28.09 ㎡の側柱建物である。主軸は N-23°-E。柱間寸法は、桁間 228 ～ 260 ㎝、梁間 156 ～ 216 ㎝、柱穴は円形・不整形を呈して、径 40 ㎝主体に 32 ～ 56 ㎝、深さ 20 ～ 52 ㎝で梁行が旧地表に添い、四隅深めとするものである。柱筋の通りは、西桁行・南梁行のみ概ね良いが、他は悪い。特に東桁行は全く通らず、桁行・梁行も直行箇所がなく、酷く歪んだ建物となる。挿図で示した P11・P12 が本来の柱穴であった可能性を考えれば、P9 位置のみ桁行・梁行が直行せず、柱筋は通ることとなる。ちなみにこれらの柱穴の底面レベルは、P11 が標高 10.26 m、P12 が標高 10.32 m で、P5 や P6 と同じ様な深さをもっている。出土遺物は、須恵器食膳具 11 点、須恵器貯蔵具 6 点、土師器食膳具 1 点、土師器煮炊具 17 点、中世土師器食膳具 7 点、石製品 1 点である。ただし、時期判断可能な遺物は限られており、判断できた時期はⅡ期である。

28. SB331

め・も－30・31Gr に位置、桁行 4.2 ～ 4.92 m、梁行 4.8 ～ 5.24 m、2 間 × 2 間の側柱建物である。面積 22.89 ㎡、建物主軸は N-1°-E。桁行・梁行の直行する箇所がない歪な建物である。柱間寸法は、桁間 236 ～ 268 ㎝、梁間 192 ～ 288 ㎝、柱穴は円形・不整楕円形を呈し、径は 48 ㎝を主体に 36 ～ 68 ㎝、深さ 24 ～ 80 ㎝を測って旧地表に添いつつ四隅深めとするタイプである。径 8 ～ 14 ㎝の柱圧痕が残存し、廃絶時に柱は抜き取られている。柱筋の通りは、桁行は概ね良いものの梁行は悪い。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 3 点、須恵器貯蔵具 3 点、土師器煮炊具 6 点、中世土師器食膳具 3 点である。建物時期はⅡ2 ～ Ⅱ 3 期と判断される。

29. SB332

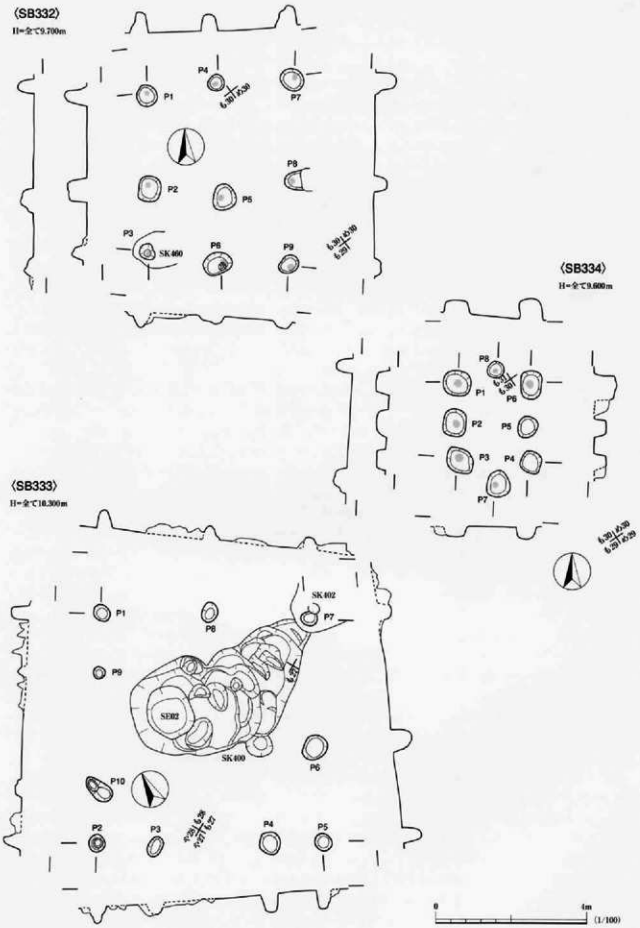
め・も 30Gr に位置する低床の総柱建物で、桁行 4.2 ～ 5.04 m、梁行 3.8 ～ 3.92 m の 2 間 × 2 間、面積 17.83 ㎡、主軸は N-2°-E。桁行・梁行の直行するところがない歪な建物である。柱間寸法は、桁間 180 ～ 272 ㎝、梁間 180 ～ 208 ㎝、柱穴は円形・方形を呈し、底面柱位置が若干窪む。径は 60 ㎝主体で 44 ～ 72 ㎝、深さ 16 ～ 56 ㎝を測って旧地表に添いながら、西桁行と中央 P5 以外は四隅深めとする。径 8 ～ 18 ㎝を測る柱圧痕が残存し、建物廃絶時に掘方土が残る状態で柱は抜き取られ、径 16 ～ 18 ㎝の‘柱のあたり’を確認できる。柱筋の通りは良い。出土遺物はないが、中世建物の形状を呈している。

30. SB333

も 27・28Gr、SK400・SE02 を取り囲むように位置する側柱建物である。桁行 6.04 ～ 6.08 m、梁行 5.52 ～ 5.92 m、3（2）間 × 2（3）間、建物面積 34.55 ㎡で、主軸は N-28°-E。建物プランは P7 が内側に位置するため台形状を呈している。柱間寸法は、桁間 156 ～ 340 ㎝、南梁間 140 ～ 300 ㎝、柱穴は円形・楕円形を呈し、径 44 ㎝を主体に最大 60 ㎝、深さ 28 ～ 52 ㎝、P9・P10 のみ深さ 14 ～ 20 ㎝と小さく断面形状も他に比べ異質である。基本として旧地形に添った深さをもち、柱筋の通りは良く、建物 廃絶時に柱は抜き取られている。SE02・SK400 を取り囲むように位置することから、井屋の可能性がもたれるが、簡易な構造をなしていたと思われる。出土遺物は総破片数で、須恵器貯蔵具 1 点、土師器食膳具 3 点、土師器煮炊具 6 点。土師器からの時期は古代Ⅰ・Ⅱ期されるものの、建物の柱間規模が広いといった中世建物の形状を捉えることができ、中世建物の可能性が高い。

31. SB334

も 30・31Gr に位置、2 間 × 2 間の近接棟持柱建物である。規模は、桁行 2.0 m、梁行 1.92 m、面積 3.84 ㎡、建物主軸 N-1°-E で、ほぼ真北にとる。柱間寸法は、桁間 88 ～ 112 ㎝、梁間 92・100 ㎝、柱穴はほぼ方形を呈す。柱穴規模は、径 60 ～ 72 ㎝主体で、P4・P5 のみ 50 ㎝、深さは 24 ～ 60 ㎝で若干旧地表に添う。棟持柱である P7・P8 は同じ深さをもち、両者の柱間寸法は 300 ㎝、側柱の梁行中間にきっちり直行して配置され、柱筋が通る。棟持柱以外の柱筋の通りは、P3 が外れ気味だが通らないということはなく、概ね良い。残存する柱圧痕径は 18 ㎝で、方形掘方は P4 のように斜めに配置するものがある。P3 が少し気になるところだが、総じて計画設計された建物と言える。しっかりと掘り込まれた柱穴を有す点、形状・規模・柱筋とも良好な点、小型の近接棟持柱建物である点から、特殊な事例と言うことができる。似た構造のもので「門」が挙げられるところだが、付随する築地塀などがなく、周囲の建物との関係からも門とは判断出来ないと考えられる。前回報告の考察内で、望月により「社的建物」として位置付け（望月精司 2009「額見町遺跡の古代「村寺」に関する考察」『額見町遺跡Ⅳ』石川県小松市教育委員会）されている。出土遺物は、須恵器食膳具 4 点のみで、時期はⅡ～Ⅲ期を示すものである。



第26図　掘立柱建物遺構図14〈SB332・SB333・SB334〉

第２節　土坑・井戸

第１項　土坑

土坑には、他遺構と同様にＡ地区からの連番で土坑番号を付している。今回の報告対象となるのは、SK393～415・419～456・460・461・466・468・469で、この内SK405・437・438は欠番であり、生産遺構でSK番号が付されているものがある。SK394が土師器焼成坑の可能性をもつもの、SK404・412・415が製炭土坑であり、これらは第３節手工業生産関連遺構で述べる。この他、SK400はSE02外周土坑と認識し、SE02内で同時に報告することとする。よって、今回報告対象の土坑数は総数61基となるのだが、この内、遺物が多く出土するものや特徴的なものを23基選んでここに報告することとする。

今回の報告区域では、前回報告まで確認できたような様々な特徴をもつものではなく、かなり偏った傾向であるということができる。これまでの土坑の分類は、Ａ類土坑を通常の土坑、Ｂ類土坑を遺物の比較的多い大型土坑で、当初は粘土掘削が目的とされ、その後土器廃棄として利用されたとするもの。但し今回粘土掘削が目的であったか不明なものが多く、大型で遺物出土の多い土坑をＢ類土坑に含めた。Ｃ類土坑は柱穴状の小型土坑。Ｄ類土坑は竪穴建物の掘方土坑状を呈するもの。Ｅ類は被熱焼結した小型炉の床下土坑と位置づけされるもの。Ｆ類土坑は焼成土坑であり、土師器焼成坑でないが何らかを焼いたとされる土坑である。墓壙またはその可能性のある土坑をＧ類土坑とし、方形プランで小型竪穴状のものをＨ類土坑とする。といったように８種類に分類されていたのだが、今回報告区域では、Ａ類土坑・Ｂ類土坑・Ｆ類土坑のみに限られている。１基のみ墓壙の可能性をもつものもあるのだが、これは確定できないため、Ａ類土坑としておいた。概して、今回調査区では、殆どが廃棄を目的として掘り込まれたものとなっている。

出土遺物については、出土量を破片数換算で数量とし、時期については田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。なお、中世と時期を記述しているものについては、古代遺物以外の当遺跡廃絶期までの11世紀２／４～12世紀中頃、中１－Ⅱ１期や中１－Ⅱ２期を示している。

１．SK393

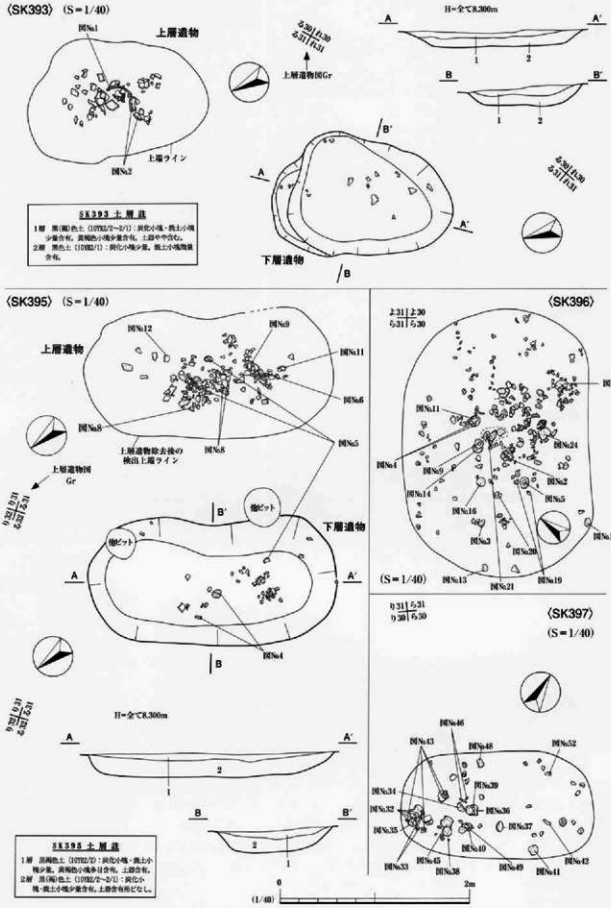
る31Grにおいて、時期を古代末にもつ土器集中が認められたため土坑と判断したものである。上面でのプランは検出できておらず、遺物取り上げ後の精査により下層でプランを検出している。上層遺物は、長径100㎝×短径70㎝の範囲に、瓶を中心に同一レベルで集中出土し、これを除去後に下層プランと落ち込みを検出、この時の規模は長径190㎝、短径100～130㎝、深さ15～20㎝、底面は平坦を呈す。本来はこれよりも規模が大きかったものと考えられるものである。土坑類型は、通常土坑と位置づけているＡ類とする。出土遺物は総数で、須恵器貯蔵具４点、土師器煮炊具105点、中世土師器食膳具10点、匣鉢片１点、石製品４点で、土師器からⅥ１～Ⅵ２期の時期が確認できる。

２．SK395

SK393と検出状況は同じである。古代末の土器集中が認められたため土坑と判断したもの。上層遺物は、長径180㎝×短径80㎝範囲に同一レベルで集中出土し、これを除去後に下層プランと落ち込みを検出、規模は長径260㎝、短径126～130㎝、深さ12㎝を測り、底面は平坦を呈す。SK393と同様に本来の規模はもっと大きかったと思われるが、土坑類型は通常土坑と位置づけているＡ類とする。出土遺物は総数で、須恵器食膳具５点（摩耗痕跡１点含む）、須恵器貯蔵具12点、土師器食膳具１点、土師器煮炊具144点、中世土師器食膳具49点、石製品13点、匣鉢片32点で、時期はⅥ２～Ⅶ１期と判断されるものである。

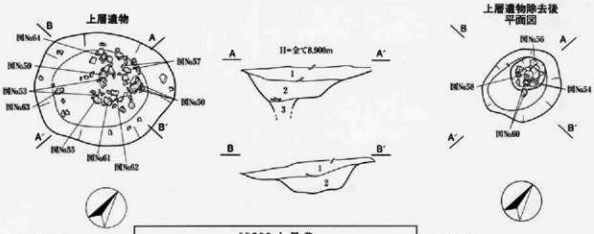
３．SK396・397

ら30Grにおいて、土器集中が認められたために土坑として取り扱い、SK393やSK395のように下層でもプランを捉えられなかったもので、２基が並んで検出されたもの。SK396は長径280㎝×短径200㎝範囲に、SK397は長径200㎝×短径110㎝範囲に、完形や略完形の埦・皿が目立って出土している。土坑分類は、いずれもＡ類土坑としておく。出土遺物は、SK396で、須恵器食膳具１点、須恵器貯蔵具14点、土師器煮炊具17点、中世土師器食膳具290点、製塩土器片２点。SK397で、須恵器食膳具１点、須恵器貯蔵具８点、土師器食膳具１点、土師器煮炊具２点、中世土師器食膳具73点、灰釉陶器片２点、石製品１点である。SK396・397とも時期は中世１-Ⅱ１期になるものと思われる。



第27図　土坑遺構図1〈SK393・SK395・SK396・SK397〉

〈SK399〉（S＝1/40）

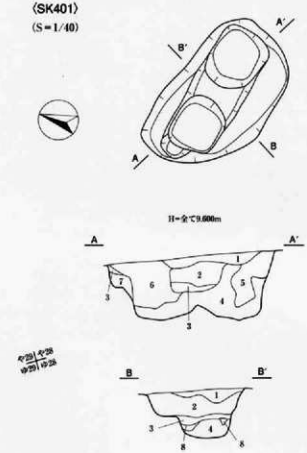


SK399 土層説明

1層　黒褐色土（10YR2/3）：黄褐色土中塊少量、炭化小塊、鉄土小塊多目含有。土器を多く含む。
2層　黒褐色土（10YR2/3）：黄褐色土中塊多目、炭化小塊・鉄土小塊多目含有。土器含有。
3層　黒（褐）色土（10YR2/2～2/1）：黄褐色土中塊少量含有。

る29｜ウ29
る28｜ウ28

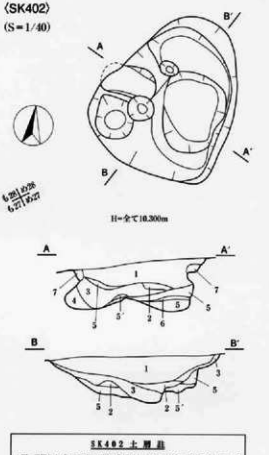
〈SK401〉
（S＝1/40）



SK401 土層説明

1層　黒褐色土（10YR2/3）：褐色土（7.5YR4/6）小塊少量含有。
2層　黒褐色土（10YR2/3～2/2）：明褐色土（10YR2/3）2層、褐色土（7.5YR4/6）中塊・大塊が3割混在。
3層　黒色土（7.5YR2/1）：褐色塊少量含有。粘質。
4層　明褐色土（10YR3/3）：黒褐色土大塊（10YR2/3）2層、褐色土塊（7.5YR4/6）混在。やや軟まり有り。
5層　黒褐色土（10YR2/3）：褐色土（7.5YR4/6）小塊・中塊多量含有。
6層　黒褐色土（10YR2/3）：褐色土（7.5YR4/6）小塊・中塊多量含有。
7層　黒褐色土（7.5YR3/2～2/3）：褐色土塊（7.5YR4/6）、鉄土小塊含有。
8層　明褐色土（7.5YR5/6）　特大塊：明褐色土（7.5YR5/6）が全面混入。締まり有り。

〈SK402〉
（S＝1/40）



SK402 土層説明

1層　黒褐色土（7.5YR2/2～2/3）：黄褐色土小塊少量含有。炭化塊含有。やや砂質。やや軟まり有り。
2層　黒褐色土（7.5YR2/2）：黄褐色土の地山中塊多目含有。締まりなし。
3層　黒褐色土（10YR2/2～2/3）：黄褐色土大塊塊量含有。締まりなし。
4層　黒褐色土（10YR2/2～2/3）：硬化する黄褐色土中塊少量含有。締まりなし。
5層　黒褐色土（7.5YR2/2）：褐色土（7.5YR4/6）塊多割含有。黄褐色土中塊・大塊多量含有。鉄土塊少量含有。締まりなし。
5'層：5層と似るが黄褐色土塊が少ない。
6層　黒色土（7.5YR2/1）：締まりなし。
7層　黒褐色土（7.5YR2/2）：褐色土塊（7.5YR4/6）4割混在。塊締まりあり。

SK402 土層説明

0　2m
（1/40）

第28図　土坑遺構図2〈SK399・SK401・SK402〉

4．SK399

り29Grに位置、長径148㎝×短径120㎝の円形プランを呈し、深さ30㎝、底面は平坦を呈し、北側端にピット状の落ち込みを有するものである。上層遺物のみならず、ピット内からも完形や半完形が出土、土坑規模からA類土坑とするのが妥当だろう。出土遺物総数は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具11点、土師器煮炊具9点、中世土師器食膳具140点、石製品2点である。時期は中世1－Ⅱ1期とされる。

5．SK401

や28Grに位置する土坑である。後述のSK402・SK403とよく似たものであり、これら3基の土坑はSK400を取り囲むように展開することも特徴である。SK401は、長径174㎝×短径102㎝の楕円状で、深さ60～70㎝と深く、壁面にテラスをもち底面に2箇所の落ち込みを有す。土坑類型はA類土坑と位置づけておく。出土遺物は総数で、須恵器食膳具17点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具5点であり、須恵器食膳具でⅢ期Ⅳ期の遺物が確認できるが、詳細は不明である。

6．SK402

め27・28Gr、SK400東側に近接する。不整円形プランの長径174㎝×短径100～145㎝、深さは40～55㎝を測る。オーバーハングする壁面、底面も凸凹状を呈す。覆土は締まりをもたず、自然堆積したものと考えられる。土坑類型はA類土坑と位置づけておく。出土遺物は総数で、須恵器食膳具10点、須恵器貯蔵具12点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具8点だが、時期を判断できるものがなく不明である。

7．SK403

め28Grに位置、長径205㎝×短径120～164㎝、深さ34～54㎝を測る不整円形土坑である。テラスをもち、底面は凸凹としてピット状の浅い落ち込みを有す。SK400北側に近接、両者間には小土坑やピットが連続する。覆土は自然堆積層を示し、土坑類型はA類土坑と位置づけておく。出土遺物は、須恵器食膳具15点（摩耗痕2点、油痕2点含む）、須恵器貯蔵具21点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具10点、石製品1点、古代でⅣ期・Ⅴ期のものが確認でき、この他、中世土師器食膳具27点が出土する。

8．SK407

れ27・28Grに位置し、トレンチ掘削により約1／4を欠損してしまった土坑で、楕円状プランになるものと思われる。規模は長径370㎝×短径残存180㎝、深さ30㎝を測る。土坑類型は土器の比較的多い大型土坑とするB類ということができる。出土遺物は総数で、須恵器食膳具14点（摩耗痕跡1点含む）、須恵器貯蔵具227点、土師器食膳具8点、土師器煮炊具41点、中世土師器食膳具9点、円筒形片2点であり、Ⅳ2期を主体としてⅡ期のものも認められる。

9．SK408

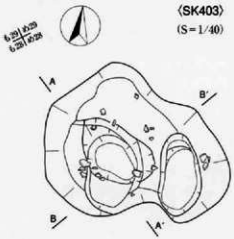
る27・28Grに位置する。不整長楕円プランで、長径368㎝×短径260㎝、深さ24㎝を測る。底面は平坦を呈しながらも南側に向かい若干下降し、覆土は、黒褐色土を基本に砂質褐色土が混在するものである。土坑類型はB類と位置づけられる。出土遺物の総数は、須恵器食膳具61点（摩耗痕跡3点含む）、須恵器貯蔵具86点、土師器食膳具11点、土師器煮炊具516点、中世土師器食膳具58点、石製品1点、円筒形片1点であり、時期はⅣ2古段階を主体とする。

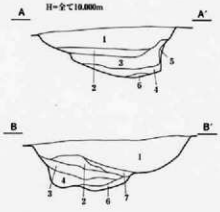
10．SK409

る28Grに位置し、不整長楕円形プランを呈し、長径240㎝×短径160㎝、深さ25㎝を測る。底面は平坦で、出土遺物は多く、典型的なA類土坑とすることが出来る。出土遺物は、須恵器食膳具40点（摩耗痕跡1点含む）、須恵器貯蔵具49点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具153点、カマド1点、支脚1点、中世土師器食膳具2点である。時期はⅣ2古段階～新段階が主体である。

11．SK410

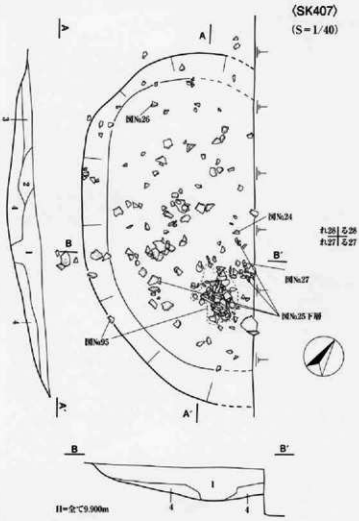
ら27Grに位置、方形プランをもち、長径100㎝×短径60㎝、深さ12㎝を測り、底面は平坦を呈する。覆土は黒色土や黒褐色土の混在土を主体に、炭化塊を極めて多量に含有するという特徴をもつ。壁や底面での被熱は認められず、また規模が小さく深さも浅いので墓壙とも言い難いため、灰などを廃棄したものと思われ、A類土坑と位置づけておく。出土遺物は、土師器煮炊具3点、匣鉢片1点と少なく、時期判断は難しいものの煮炊具でⅤ期を確認している。





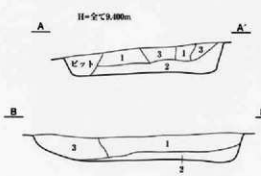
SK403 土層説

1層　黒褐色土（7.5YR3/2～2/2）：炭化・褐色土小塊を少量含有。
2層　黒褐色土（7.5YR2/2）：褐色土塊粒を含有。
3層　黒褐色土（7.5YR3/2～2/2）：褐色土（7.5YR4/6）小～大塊多量含有。炭化塊含有。
4層　黒褐色土（7.5YR2/2）：褐色土大塊少量含有。
5層　黒褐色土（7.5YR3/2～2/2）：褐色土（7.5YR4/6）とラミナ状に互層。炭化塊多量含有。
6層　黒褐色土（10YR2/2）：褐色土（7.5YR4/6）中～大塊多量含有。
7層　褐色土硬化層（7.5YR4/6）：間層に黒褐色土（7.5YR2/2）1層混入。黒色土塊多量含有。締まりあり。



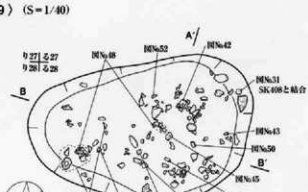
SK407 土層説

1層　黒褐色土（10YR2/2）：砂質の暗褐色土（10YR3/3）塊混入。焼土塊多量。黄褐色粘土小塊少量含有。やや締まりあり。
2層　黒褐色土（10YR2/2）：砂質の暗褐色土（10YR3/3）塊がラミナ状に混入。軟質。
3層　黒色土（7.5YR2/1）：砂質の暗褐色土（10YR3/3）混入。焼土塊少量含有。締まりあり。
4層　黒色土（7.5YR2/1）：焼土小塊為量含有。砂質の暗褐色土（10YR3/3）塊少量含有。地山土に伝るものだが、遺物を含む。

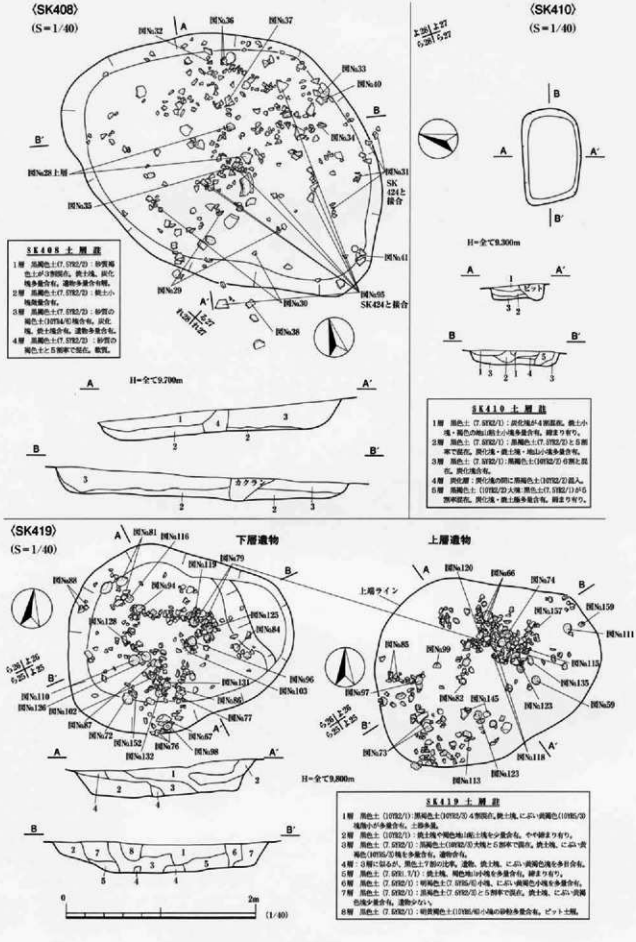


SK409 土層説

1層　黒褐色土（10YR2/2）：黒褐色土（10YR2/3）4層間に、遺物多量、炭化塊、焼土小塊、褐色土小塊(地山)塊少々を含に有る。締まりあり。
2層　黒褐色土（10YR2/2）：焼土が塊少量含有。地山土に伝るが遺物含有。遺物量は1層よりかなりと、やや締まりあり。
3層　黒色土（10YR2/1）：褐色土地山小塊少少量含有。遺物含有。やや締まりあり。



第29図　土坑遺構図3〈SK403・SK407・SK409〉



第30図　土坑遺構図4〈SK408・SK410・SK419〉

12. SK419

よ 25・26Gr に位置、洋梨状の不整円形プランで、規模は長径 240 ㎝×短径 140 ～ 200 ㎝、深さ 30 ㎝を測るものである。底面を平坦にもち、極めて多量の遺物を伴い、完形や半完形の埦・皿が目立つ。底面から 10 ㎝以内に出土する遺物を下層遺物としているが、上層・下層とも同量の出土である。土坑類型は、A 類土坑とする。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 11 点、須恵器貯蔵具 19 点、土師器食膳具 4 点、土師器煮炊具 57 点、石製品 1 点、分銅土師器 1 点、匣鉢片 1 点。中世の土師器食膳具 1,372 点と中世の鉢 2 点である。時期は中世 1 － Ⅰ期と判断される。

13. SK421

よ 25・26Gr にて埦・皿の集中出土があり、下底にて落ち込みは確認できなかったものの、土坑として判断したものである。長径 220 ㎝×短径 100 ㎝の範囲に遺物は集中しており、類型は A 類としておく。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 2 点、須恵器貯蔵具 4 点、土師器食膳具 2 点、土師器煮炊具 14 点、管状土錘 1 点、石製品 1 点、中世土師器食膳具 134 点である。時期は中世 1 － Ⅰ期と判断される。

14. SK422

や 26Gr にて、まとまった遺物時期がみられたために、土坑と捉えたもの。上層遺物を除去後に、下層プランを検出した。上層での遺物範囲は、長径 310 ㎝×150 ～ 208 ㎝を測り、下層で検出したプランは楕円形を呈し、径 276 ㎝×164 ㎝、深さ 12 ～ 16 ㎝を測る。底面は平坦だが、南に向かって若干下がり、覆土は上下 2 層からなるもので、下層は締まりが強い。土坑類型は B 類になるものと思われる。出土遺物総数は、須恵器食膳具 96 点（摩耗痕跡 4 点含む）、須恵器貯蔵具 72 点、土師器食膳具 19 点、土師器煮炊具 351 点、支脚や匣鉢等の土製品 3 点、石製品 3 点、中世土師器食膳具 12 点である。遺物の時期は、Ⅱ 3 ～Ⅲ期が主体と判断されるが、Ⅲ期からⅥ期までの時期が確認できる。

15. SK423・424

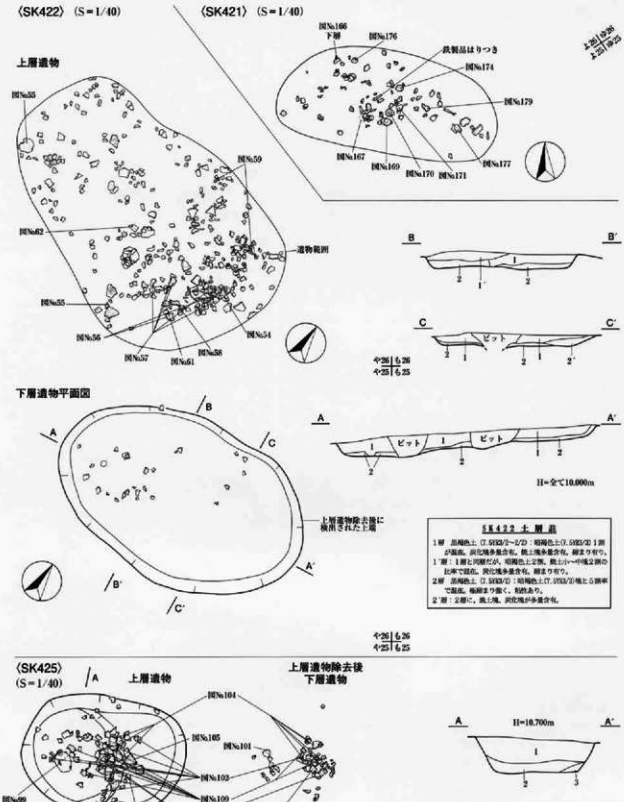
め・も 25Gr で検出されたもので、現地調査では深さに違いが認められたため 2 基が連続しているものと判断した土坑である。但し、遺物整理段階で、接合可能であった土器が多く、1 つの土坑であった可能性が高い。長径は、両者あわせて 675 ㎝、個別で、SK424 の長径は 400 ㎝程×短径 305 ㎝、SK423 の短径は 200 ㎝である。両者とも底面は平坦を呈し、深さは両者共 20 ㎝を測るものの、確認できた覆土の深さであり、SK424 では底面から 20 ㎝以上、SK423 では 30 ㎝以上のレベルで多くの遺物が出土している。遺物出土状況は、SK423 では須恵器と土師器が 5 割程の割合をもち、細片が多い。一方SK424 では、須恵器大甕破片がまとまっており、獣脚や陶馬といった特殊品、鉄製品や鉄滓も多く出土する。土坑類型は、両者とも B 類土坑である。出土遺物総数は、SK423 で、須恵器食膳具 245 点（油痕跡 2 点含む）、須恵器貯蔵具 72 点、土師器食膳具 7 点、土師器煮炊具 268 点、カマド石 1 点、円筒形 4 点で、時期はⅣ 2 期を主体にⅡ期～Ⅴ 2 期までが確認できる。SK424 では、須恵器食膳具 360 点（摩耗痕跡 12 点含む）、須恵器貯蔵具 183 点、土師器煮炊具 560 点、中世の鉢片 1 点、中世土師器食膳具 50 点、土錘 1 点、土馬 1 点、カマド 2 点で、時期はⅢ期～Ⅴ期が認められるものの、Ⅴ 1 期が主体と考えられ、中世遺物は混入した可能性がある。

16. SK425

め 26Gr に位置する楕円形の小土坑で、長径 172 ㎝×短径 124 ㎝、深さ 38 ㎝を測るものである。底面の北側に若干窪みをもつものの、ほぼ平坦を呈し、土師器釜が目立つことから、これを主体に廃棄したと考えられる土坑である。類型は A 類とする。出土遺物は、須恵器食膳具 21 点（摩耗痕跡 1 点含む）、須恵器貯蔵具 11 点、土師器食膳具 8 点、土師器煮炊具 225 点、支脚破片 1 点である。時期はⅣ 2 新段階が主体と思われるものの、Ⅴ期のものも認められる。

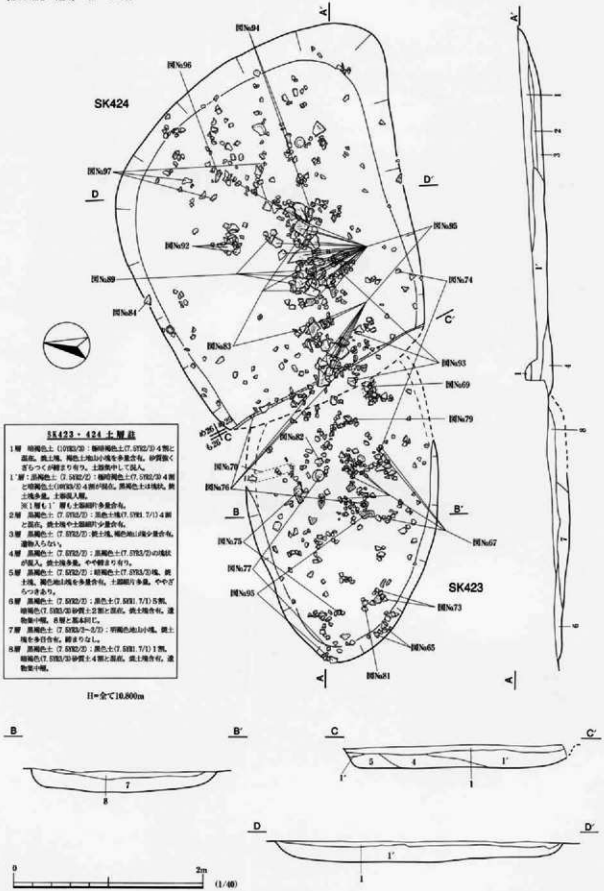
17. SK426

め 25・26Gr に位置し、方形状プランを呈した土坑である。規模は、長径 272 ㎝×短径 180 ㎝、深さ 36 ㎝を測り、底面は北側の一部に若干の落ち込みを有するものの、ほぼ平坦を呈す。規模から、類型は B 型とするのが妥当である。出土遺物には鉄滓が目立ち、特に下層で多い。出土遺物は、須恵器食膳具 90 点（摩耗痕跡 1 点含む）、須恵器貯蔵具 41 点、土師器食膳具 19 点、土師器煮炊具 215 点、円筒形土器片 2 点、カマド石 1 点である。時期はⅣ 2 新段階が主体と考えられる。



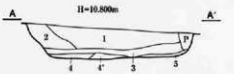
第31図　土坑遺構図5〈SK421・SK422・SK425〉

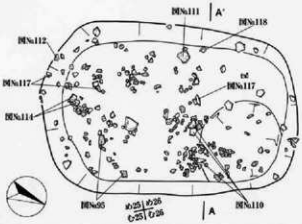
〈SK423・424〉（S＝1/40）



第 32 図　土坑遺構図 6 〈SK423・SK424〉

〈SK426〉（S＝1/40）

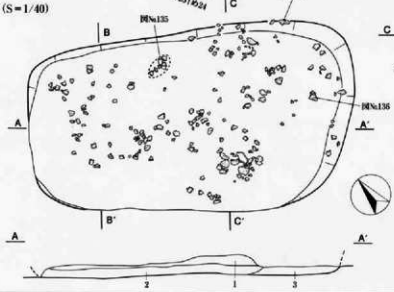


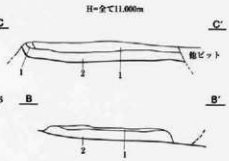


SK426 土層説

1層　黒色土（7.5YR2/1）：黒褐色土（7.5YR2/2）地５割と混在。褐色土小塊、鉄土塊多量含有。鉄まりなり。
2層：基本は１層と同質。鉄土は入らない。
3層　黒褐色土（7.5YR2/2）：褐色土（7.5YR4/6）多量、浅黄色土（2.5YR7/2）小塊多量含有。鉄土塊多量含有。粘質あり。
4層　黒褐色土（7.5YR2/2）：褐色土小塊、鉄土塊を多量含有。粘性あり。
4'層：４層と基本的に同じ。鉄土塊、褐色土小塊が４層に比べ少ない。
5層　明褐色土塊（7.5YR5/8）：隙間に黒褐色土（7.5YR2/2）が４割弱で混入する。粘性あり。鉄土塊微量含有。

〈SK428〉
（S＝1/40）

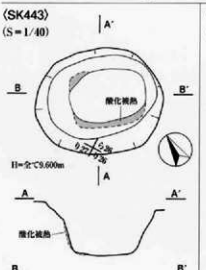




SK428 土層説

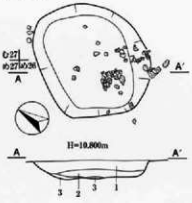
1層　黒褐色砂質土（7.5YR3/2～2/2）：褐色土塊（7.5YR5/8）、鉄土塊含有。この層より鉄滓等の遺物が集中して出土する。
2層　黒褐色土（7.5YR2/2）：鉄土塊多量含有。明褐色の地山塊多目含有。やや軟まりなり。
3層　黒色土（7.5YR2/1）：黒褐色土（7.5YR2/2）４割と混在。鉄土小塊、褐色地山塊多目含有。鉄まりなし。

〈SK443〉
（S＝1/40）



（1/40）

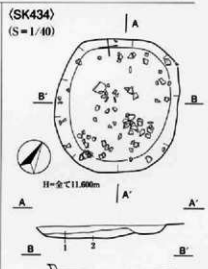
〈SK429〉
（S＝1/40）



SK429 土層説

1層　黒褐色土（7.5YR3/2～2/2）：暗褐色土（10YR3/3）２割と混在。鉄土塊、褐色の地山塊を多目含有。遺物はこの層より出土する。
2層　黒褐色土（7.5YR2/2～2/3）：暗褐色（10YR3/3）塊４割と混在。鉄土塊少量含有する粗質。
3層　黒褐色土（7.5YR3/2）：黒褐色土（10YR2/2）と５割弱で混在。鉄化塊含有。

〈SK434〉
（S＝1/40）



SK434 土層説

1層　黒褐色土（10YR2/2）：炭化材・火塊多目含有。鉄土小塊少目含有。他の地層間とく、粗質。
2層　黒褐色土（10YR2/3）：炭化材・火塊少量含有。鉄土小塊微量含有。やや軟まりあり。

第33図　土坑遺構図７〈SK426・SK428・SK429・SK434・SK443〉

18. SK428

め24・25Grで、遺物の集中が認められたため土坑と判断したものである。長径346㎝×短径推定200㎝、深さは最大20㎝を測る。底面は平坦で、出土遺物では鉄滓が非常に多く目立ち、土坑周辺からも出土している。当土坑はSB330に収まる形で位置、類型はB類としておく。出土遺物は、須恵器食膳具47点（摩耗痕跡2点含む）、須恵器貯蔵具28点、土師器食膳具6点、土師器煮炊具142点、カマド石1点、円筒形土器1点である。時期は、Ⅳ2古段階～新段階が主体である。

19. SK429

む・め16Grに位置、長径120㎝×短径110㎝、深さ20㎝の小型土坑である。上面から遺物が出土し、鉄滓が非常に目立ち、土坑周辺からも出土している状況である。土坑類型はA類土坑とする。出土遺物は、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具7点、土師器煮炊具17点である。時期は、Ⅳ期・Ⅴ期が確認でき、食膳具にもⅤ期のものが出土している。

20. SK434

り24Gr、SB308に近接して位置する。規模は、長径150㎝×短径130㎝、深さ15～18㎝を測る、円形プランの小型土坑である。遺物は少ないものの、上下2層からなる覆土で、炭化材を多量混在することが特徴である。被熱を有しないため、製炭土坑とは言えないものの炭廃棄の目的で掘り込まれた可能性がある。類型はA類土坑とする。出土遺物は、土師器煮炊具1点のみ、時期は不明である。

21. SK443

ら26・27Grに位置、楕円形プランで、規模は156㎝×110㎝、深さ50㎝を測るものである。非常に深く、焼土や粘土が混じる覆土をもつ。また、南北の壁面や底部立ち上がりの一部で酸化被熱を検出しているため、焼土坑と考えられ、土坑類型はF類と判断する。出土遺物は、須恵器食膳具12点、須恵器貯蔵具14点、土師器食膳具7点、土師器煮炊具102点であり、時期はⅢ期・Ⅳ期が確認できる。

第2項　井戸跡

本遺跡では、井戸跡が3基検出されており、今回報告対象となるのはSE02である。SE02の上層レベルではSK400が連結するように検出されており、現地調査において SE02の外周土坑と判断しているため、ここで同時に報告する。また、これら井戸と外周土坑を取り囲むように、前述したSB303も検出されており、簡易な井屋として機能していた可能性がもたれる。

1．SE02と外周土坑SK400

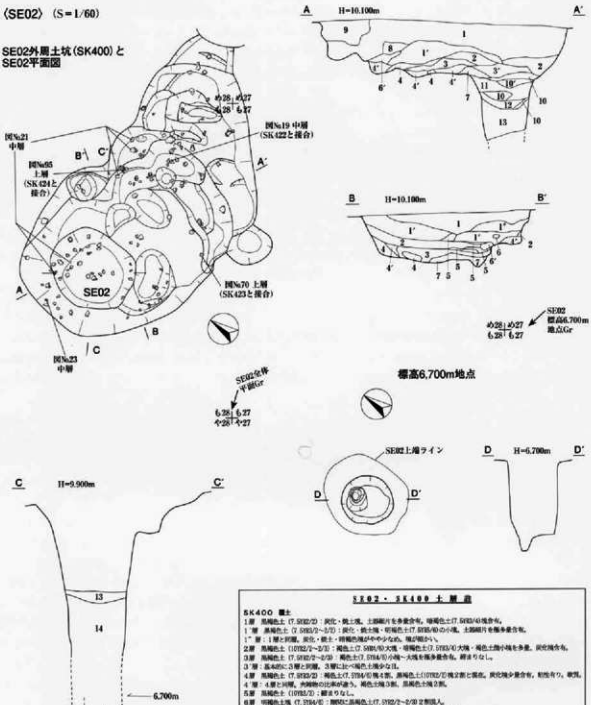
〈立地、外周土坑SK400の規模〉　日地区め・も－27・28Grに位置する。SK400外周土坑は、歪な不定形状プランをもち、土坑西端にあたる最下底平坦面に SE02井戸が位置する形である。外周土坑は、内部に段や窪みをもちながら検出面から平坦面にかけ80～90㎝の深さをもち、西側方向から平坦面へ飛び降りる形となるものの、東側からは段状を呈している。いわば、井戸へ向かって降りてゆく形状をもつ。外周土坑の規模は長軸径415㎝、短軸径270㎝を測る。深さは、東側から井戸へ向かって次第に深さを増しており、東端で30～35㎝、次の段階の深さが50㎝、最終的に深さ80～90㎝に至る。なお、土坑平坦面の標高は9.100～9.200ｍを測り、この面でSE02プランが検出されたのである。

〈井戸の規模と形状・埋土〉　SE02井戸は、プランがやや楕円状の円形で、長径138㎝、短径118㎝を測る。深さは検出地面から336㎝下で一旦平坦を呈し、この面から先細りのピットが50㎝程掘り込まれている。この井戸最下底面では、標高5.100～5.200ｍを測る。調査時に、人力による掘削作業が危険を伴うため、途中段階の標高6.700ｍまで重機で掘削、なお、標高6.700ｍ地点でのプランは円形、長径84㎝、短径80㎝を測るため、井戸の断面形状は、上端から次第に先細りする形状となる。

埋土は、基本的に軟質で脆く、上層にあたる11層内で人為的な挟雑物である炭化塊が少量、中層にあたる14層で少量の遺物が認められるものの、この他は、殆ど焼土塊や炭化塊を含まないものである。自然堆積というより埋め戻されたものとみている。下層にあたる標高6.700ｍ以下では、特に砂質土を主体とした軟弱土で、井戸壁面も砂土が地山土となっており、埋土と壁面地山土の間に流水があったためか、砂土が凝固し砂岩状になる現象が壁面周囲で認められた。前述したように、調査時に標高6.700ｍ以下人力掘削しているが、軟弱層のため、

〈SE02〉（S＝1/60）

SE02外周土坑（SK400）と
SE02平面図



SE02・SK400 土層説

SK400 盛土

1層　黒褐色土（7.5YR2/2）　炭化・焼土塊、土器片を多量含む。暗褐色土（7.5YR3/4）塊含む。

1'層　黒褐色土（7.5YR3/2～3/3）：炭化・焼土塊・明褐色土（7.5YR5/6）のごく塊、土器片を極多量含む。

1''層：1層と同質。炭化・焼土・明褐色塊がやや少なめ。塊が細かい。

2層　黒褐色土（10YR2/2～3/2）：褐色土（7.5YR5/6）大塊・明褐色土（7.5YR5/6）大塊・褐色土塊小塊を多量、炭化塊含む。

3層　黒褐色土（7.5YR2/2～3/3）　褐色土（7.5YR4/6）小塊～大塊を極多量含む。締まりなし。

3'層：基本的に3層と同質。3層に比べ褐色土塊少なし。

4層　黒褐色土（7.5YR3/2）：褐色土（7.5YR4/6）塊大数、黒褐色土（10YR2/2）塊2数に偏在。炭化塊少量含む。粘性有り。軟質。

4'層：4層と同質。色調物の比率が違う。褐色土塊3数、黒褐色土塊2数。

5層　黒褐色土（10YR2/2）：締まりなし。

6層　明褐色土塊（7.5YR4/6）　細粒に黒褐色土（7.5YR2/2～3/3）混じる。

7層　褐色土塊（7.5YR4/4～4/6）：黒褐色土（7.5YR3/2）が2割混在。締まり有り。

8層　黒褐色土（10YR2/2）：明褐色土（7.5YR4/6）大塊が2割混在。締まり強い。炭土小塊・炭化塊少量含む。

9層　黒褐色土（10YR2/2～3/2）：褐色土塊（7.5YR4/4）が細量含む。炭土塊量多く。

SE02　盛土

10層　明褐色土塊（7.5YR5/6）、黒褐色土（7.5YR2/2）が2割混在。明褐色土塊は細まりもつが、全体的に軟質。

10'層：8層と同質。明褐色土塊と黒褐色土の比率は5割弱。

11層　黒褐色土（7.5YR2/2）　が5割、黒色土（7.5YR2/1）4割、褐色土（7.5YR4/6）小～中塊1割が混在。炭化塊含む。締まりなく、極も軟質。

12層　黒色土（7.5YR2/1）：締まりなし。

13層　黒褐色土（7.5YR2/2）3割、明褐色土（7.5YR5/6）3割、明褐色土（7.5YR5/6）小～大塊4割と混在。やや締まりなり。

14層　褐色土塊（7.5YR4/4～4/6）：黒褐色土（7.5YR3/2）4割、黒色土（7.5YR2/1）塊1割と混在。砂質明褐色土（7.5YR5/6）小大塊多含有。締まりなく軟質。土器少量含む。

15層　褐色粘質土（7.5YR4/6）：暗褐色土（7.5YR3/3）塊が1割混在。黒褐色土（7.5YR2/2）小～大塊少量含む。軟質で締まりなく脆い。

16層　褐色（7.5YR4/6）が粘質化が4割と、明褐色土（7.5YR5/6）大塊4割の間間に粘質褐色土（7.5YR4/6）が2割混入。炭化塊少量含む。締まりなく脆い。　※15層・16層は調査期間中に崩壊した。

第34図　井戸遺構図（SE02・外周土坑（SK400））

途中で埋土が崩れ崩壊している。総じて埋土は、前回報告のSE01やSE03に比べ、極めて綺麗な状態で生活痕跡の夾雑物が少ないこと、壁面等にも使用痕跡が認められないことから、井戸掘削土をそのまま埋め戻した可能性が高いとみている。平坦底面以下に掘り込まれたピットは、湧水を求めて掘削してみたという印象であり、調査時での掘削中も湧水は全く認められなかった。よって、この井戸は使用されなかったのではないかと考えている。

〈遺物出土と関係性〉　SE02井戸からの出土遺物は、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具7点、土師器煮炊具6点、中世土師器食膳具34点と非常に少量である。時期は、下層から出土する中世1－Ⅱ1期が主体であり、混入する古代遺物はⅣ期・Ⅴ期のものである。

SK400外周土坑からの出土遺物の総数は、須恵器食膳具105点、須恵器貯蔵具118点、土師器食膳具10点、土師器煮炊具99点、中世土師器食膳具269点、灰釉・白磁片7点、管状土錘や製塩土器の土製品2点、石製品3点である。時期は、古代遺物はⅤ期、中世遺物は中世1－Ⅱ1期で、2時期が確認できる。

以上のように時期を確認すると、Ⅳ2～Ⅴ期段階で土坑が単独で機能し、その後、中世に入った段階で井戸と土坑が関連性をもって機能していたものと思われる。なお、同じく重複するSB303は遺物からの時期判断は不明だが、建物構造的に中世である可能性が高い。とすると、SB303も同時に機能していた可能性がもたれる。よって、当井戸には簡易な覆屋が付いていた可能性がある。

第3節　手工業生産関連遺構

これまで報告書Ⅱから前回の報告書Ⅳに渡って報告してきたように、本遺跡では手工業生産を生業としていたことは明らかである。遺構では、土師器焼成坑、鍛冶炉、製炭土坑が多く検出されており、遺物では土師器焼弾品、鉄滓・鍛造剥片・埦型滓をはじめ、鉄滓が付着する石、多くの鉄製品や鍛冶道具類など、遺構を裏付けるものが多く出土し、この他にも、南加賀窯跡群で出土するような窯道具である焼台や窯壁など、多くが出土するからである。

さて、今回報告区域では、土師器焼成坑1基、鍛冶炉4基、製炭土坑4基が検出されている。平面的な位置関係を述べると、H地区の中央、H地区とG地区の境にある遺構密集区域より南側のひらけた空間を挟むように、それぞれの遺構が位置している。今回報告の生産遺構が、比較的まとまった区域にて検出されたことは、これまでの様相とは少し異なっている。それは、この位置関係が、意図的な配置か否かはわからないものの、製炭土坑を中央にして東西に2基ずつ鍛冶炉が位置することである。

なお、ここで前回報告分について、訂正がある。前回報告分布図で示されているSK415は土師器焼成坑でなく焼土坑と判断し、ここに訂正する。また、前回分布図には掲載されていなかったのだが、SK412の西側隣りには、SJ66製炭土坑が位置することを付け加えておく。

第1項　土師器焼成坑（SK394）

今回報告はSK394の1基である。酸化被熱焼成が認められるものだが、焼き損じ品が検出されていないので、土師器焼成坑と断言できず、可能性が極めて高いだけに止めておく。規模は長径117㎝×短径60㎝を測り、この範囲が酸化被熱する。上層部分がかなり削平されているとみられるが、南側から北側に向かい、底面を平坦にもちながら立ち上がって緩やかな壁面を形成していたものと考えられる。また、この土師器焼成坑には、掘方が確認されている。掘り込んだ地山に3～5㎝の黒褐色土を投入し、この上位層に3～8㎝の厚みの粘土を貼って床面を形成しているものと考えられる。なお、重複する掘立柱建物SB304との関連だが、掘立柱建物の検出レベルよりも50㎝上位で当遺構が検出されていること、被熱面のレベルも掘立柱建物より30㎝上位であり、両者に関連性はないものと考えている。

出土遺物は総数で、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具2点と極めて少なく、時期を判断することは難しい。

第2項　製炭土坑

今回報告の製炭土坑は4基である。2カ所に分かれる鍛冶炉群の中間、鍛冶炉に挟まれるように位置しており、鍛冶炉近くで検出されている。

1．SK404

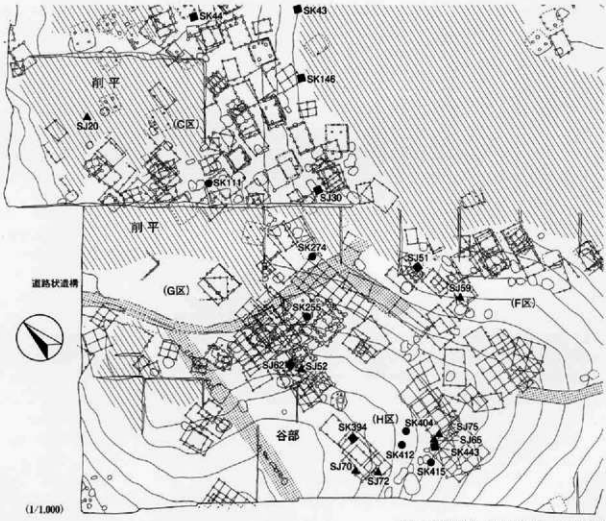
ら28Gr内、ら28Gr杭・ら29Gr杭の中間に位置する。方形土坑状を呈しており、規模は長径75㎝×短径58㎝、深さは20～22㎝を測り、底面をほぼ平坦にもつ。壁立ち上がりは緩やかで、底面から5～6㎝上位で炭化層が検出され、壁際まで及んでいる状態である。この炭化層は4層にあたり、4層に接する壁面が被熱する。また、炭下層の中央には、大きめの炭化材が集中して検出されている。

出土遺物は総数で、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具4点と極めて少ない。煮炊具はⅢ～Ⅴ期の特徴を備えているものであるが、当土坑の時期は判断しかねるものがある。

2．SK412

ら28Gr内だが、り29Gr杭に近く、SJ66のすぐ南西に隣接するものである。土坑状を呈して底面は平坦、底面からの壁立ち上がりは緩やかで、北側のみ傾斜が強く、西側・南側には幅の狭いテラスが設けられている。土坑規模は、長径100㎝×短径85㎝、深さは17～18㎝で底面となる。上面から10㎝で炭化層をもち、テラス側の壁までも続く。壁面には、部分的な酸化被熱が認められ、この被熱は、明赤褐色塊の隙間に黒褐色土や炭が混入するものの弱い被熱である。

出土遺物は、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具29点である。土師器煮炊具破片は、北陸型煮炊具の特徴を備える破片であり、時期はⅡ3期以降が確実と思われるものの、断定することはできない。



第35図　B・C・F・G・H区の手工業生産関連遺構分布図

3．SK415

り27Gr の南側、SK431 を切って構築されているもので、胴張りの楕円形を呈したプランをもち、規模は長径60㎝×短径43㎝、深さ6㎝を測る。北側壁が酸化被熱し、底面には炭化層が認められ、特に西側に炭化材が集中する。残存状況があまり良くないのだが、北側から南側の斜面に掘り込まれ、南側奥壁をしっかりもった構造であったと予想している。また、底面は若干窪んだ状態をしていたものと判断される。製炭土坑で、この1基だけが少し離れて位置している。

出土遺物は、土師器食膳具3点、土師器煮炊具4点のみである。土師器食膳具では、8世紀代の内黒高坏が認められるものの、時期判断は難しい。

4．SJ66

ら28Gr 内になるのだが、り29Gr 杭に極めて近く、SK412 の北側に隣接して位置するものである。プランは不明で、土坑状の落ち込みは検出できていないものの、長径75㎝×短径70㎝範囲に、粘土分布と被熱面と炭化層が検出されたことにより、製炭土坑の可能性があるものとして報告する。粘土は3～4㎝の厚みをもち、この粘土の東側が被熱する。粘土の下位は地山となるため、恐らく最下底面が辛うじて検出されている状況だと思われる。よって、人為的に粘土を貼った、貼床をもっていたものと考えられ、粘土層の東側には、弧を描いて幅の狭い炭化層が、地山に食い込んでいる状況で検出されている。

出土遺物は須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具7点、土師器煮炊具9点、中世土師器食膳具が1点であり、時期は須恵器食膳具でⅢ～Ⅳ1期を示すものがあるものの、時期を判断することは難しい。

第3項　鍛冶炉

今回報告となる鍛冶炉は、SJ65・SJ70・SJ72・SJ75の4基である。鍛冶炉には、精錬鍛冶と鍛錬鍛冶があり、精錬の場合には、炉を壊して鉄素材を取り出すため上部の構造がわかる例は少なく、炉に付属する遺構としては、送風管（羽口）座、送風管に空気を送る輪座がある。鍛錬の場合には、叩き台石、鍛冶場を被う施設などがある。

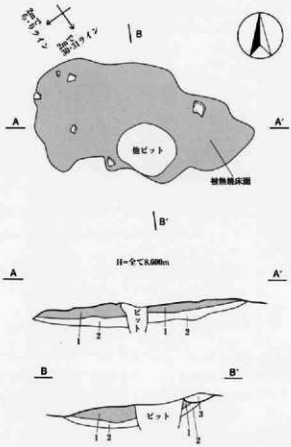
本遺跡でも、炉の上部構造がわかるものは1つも検出されておらず、炉面下底のみ検出される状況である。しかし、鍛冶炉内や周囲から出土する遺物により、本遺跡では、精錬・鍛錬鍛冶の両方が行われていたものと考えられている。当遺跡で検出されている炉底部に残された流動滓や大型の塊形鍛冶滓、羽口は精錬鍛冶に付随するものであり、一方で、炉床土内で検出された鍛造剥片や粒状滓、叩き台石など精錬鍛冶を行った痕跡があるからである。両方を分業する形で炉を設けていた可能性もあろうが、額見町遺跡Ⅲ　第Ⅱ章第2項では、穴澤氏教授により、様々な行程を可能とする鍛冶炉であったものと推測されている。

さて、4基の鍛冶炉のうち、SJ70・SJ72・SJ75の3基が古代末から中世にかけての建物構造をもつ低床の総柱建物内で重複する。本遺跡では、これまで報告されてきた事例から、掘立柱建物内に収まる形で検出される例、竪穴建物内で検出される例、屋外で単独の炉として検出している例がある。鍛冶炉の炎色を識別するために室内に設けられる方が都合がよいとされることから、掘立柱建物の重複は覆屋としての可能性が考えられると、これまでの報告で指摘してきた。また、屋外単独炉の事例においても、本来は覆屋があった可能性を掲げている。そして総柱建物との重複については、構造的に無理があるとして、これまで除外してきた。しかし、今回は総柱建物内の重複のみとなっている。中世掘立柱建物は低床構造であり、建物内には低い床が設けられているのが特徴である。こういった建物構造の中で鍛冶炉を設置するためには、土間が必要となるだろう。しかし、本遺跡では、鍛冶炉周囲の硬化、総柱内部の部分的な硬化というような検出がされておらず、確実に土間とも判断できないことから、建物との共存を証明するに至っていない。

1．SJ65

ら27Gr、H地区内中央を走る浅谷の中央の、今回報告の鍛冶炉で最も標高が高い9.500ｍに位置する。鍛冶炉上部はなく、中心が窪む小型円形状の還元炉床が残存しており、5.5～7.0㎝厚の覆土により埋まった状態である。還元炉床は、粘土を貼って構築されており、黒色を呈して被熱焼結・硬化する。炉床の規模は、径30～32㎝で、厚みは2～5㎝を測る。還元層の下位層では、還元が及ばず、粘土質が残る状態である。覆土は、黒褐色土がベースで、黒色の焼粘土塊が極めて多量に混じって焼土塊も含まれる土で、1層には小鉄滓が多量に含まれている。当鍛冶炉はSK443やSD69と重複するが、両者を切って構築されている。また、掘立柱建物や総

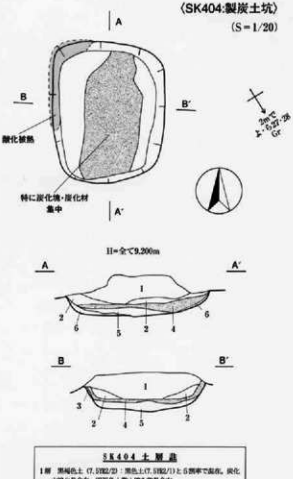
〈SK394:土師器焼成坑〉（S＝1/20）



SK394 土層説

1層　明赤褐色(5YR5/8)：強く被熱した粘土層。黒色土上に粘土を張り付けて設ける。これが被熱する。調査は明褐色で、2層近くは明赤褐色(5YR4/4)を呈す。
2層　黒褐色土（7.5YR3/2）：粘土小塊混在。炭化小塊も含有。被熱を受けて若干赤味帯びる。
3層　黒褐色土（10YR2/2）：粘土小塊・中塊多量含有。焼成坑の上層土。

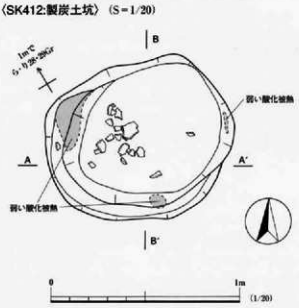
〈SK404:製炭土坑〉
（S＝1/20）

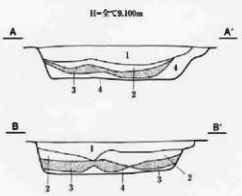


SK404 土層説

1層　黒褐色土（7.5YR2/2）：黒色土（7.5YR2/1）と5割率で混在。炭化大塊少量含有。明褐色土塊小塊も微量含有。
2層　黒褐色土（7.5YR2/2）：黒色土（7.5YR2/1）と5割率で混在。これが基本土で、炭化小塊～大塊を多量含有。基本土との割合は炭化塊4割。粘土小塊を少量含有。やや硬さ有り。
3層　赤褐色塊（5YR5/6）と炭化塊が混在。これらの間隙に黒褐色土（7.5YR2/2）が3割率で入る。土中の粘土塊が被熱するが、弱いものである。
4層　炭化層：炭塊（厚1cm大～薄状厚5cm前後）がベースになっており、間に黒褐色土（10YR2/2）が3割率で混入。粘土塊も多い。
5層　黒褐色土（10YR2/2）：炭化塊や粘土を多量含有。
6層　黒褐色土（10YR2/2）：炭化塊少量含有。

〈SK412:製炭土坑〉（S＝1/20）



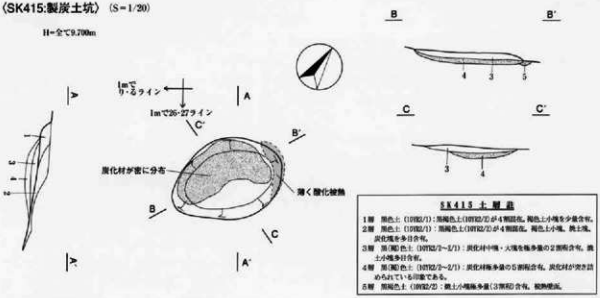


SK412 土層説

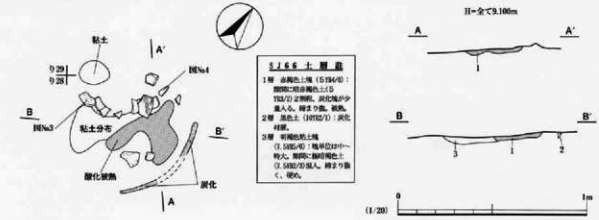
1層　黒褐色土（7.5YR2/2～2/3）：粘土小塊・炭化塊被覆含有。この層のみから遺物出土する。締まり有り。
2層　黒色土（7.5YR2/1）：炭化小塊～大塊様の不多量含有し、4割率を占める。粘土小塊被覆含有。締まり有り。
3層　炭化塊：黒色土が間間を2割間埋める。炭化塊は小塊～大塊、特大含有。締まり有り。
4層　黒色土（7.5YR2/1）：炭化塊1割混在。やや硬さ有り。

第36図　手工業生産関連遺構図1〈SK394・SK404・SK412〉

〈SK415:製炭土坑〉 (S＝1/20)

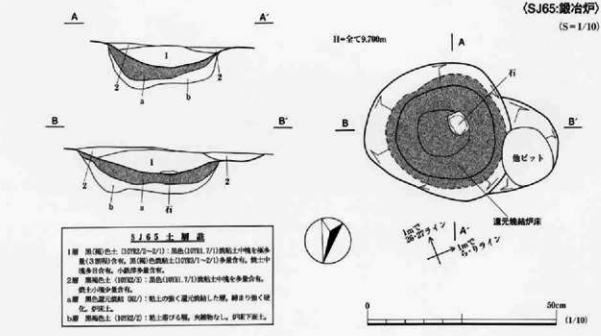


〈SJ66:製炭土坑〉 (S＝1/20)



〈SJ65:鍛冶炉〉

(S＝1/10)



第 37 図　手工業生産関連遺構図２〈SK415・SJ66・SJ65〉

柱建物との重複は認められないものの、極めて近接して位置する。当鍛冶炉が、屋外炉である可能性もあろうが、やはり極めて簡素な覆屋があった可能性ももたれる。SJ65 内からは、鍛冶滓・含鉄鍛冶滓が出土し、周辺からは塊形鍛冶滓（含鉄品含む）の極小片・羽口・含鉄鍛冶滓・鍛冶滓・含鉄流動滓・鍛造鉄製品・鋳造鉄製品が出土している。精錬鍛冶を主体として、鍛錬鍛冶も行われた可能性がもたれる。

出土遺物は総数で、須恵器食膳具２点、須恵器貯蔵具２点、土師器煮炊具６点、中世土師器食膳具２点である。須恵器食膳具ではⅣ１～Ⅳ２期の時期が確認できるものの、中世のものである可能性もあろう。

２．SJ70

る 30Gr、SB306 に収まるように位置し、SK396 とも重複する。炉床の下層に還元被熱層が認められ、この上層に、粒状鉄滓を多量に含む砂質系暗褐色土が確認されている。要するに、敷砂の痕跡が確認できているものであり、本遺跡での同事例は、SJ03 や SI37 鍛冶炉があり、塊形滓の剥離をたやすくするためであった可能性をもつ。還元炉床は、粘土で構築された貼床が還元して黒色を呈しており、規模は長径 25.5 ㎝×短径 21 ㎝である。断面形状は塊形状を呈して中央が窪み、なお、鍛冶炉南側を中心に壊されたと思われる。この鍛冶炉は、SB306 内に位置しているものの、SB306 は低床の総柱建物であり、両者の共存があったか否かは判別できない。これに関しては冒頭で述べた通りである。SJ70 からは、鍛冶滓・塊形鍛冶滓（含鉄）の極小片・鍛造鉄製品・炉壁・炉材石が出土しており、周辺からは、鍛冶滓・塊形鍛冶滓（含鉄品含む）の極小片・鉄塊系遺物・炉壁が出土する。総じて、精錬鍛冶を行った炉である可能性が高いと思われる。

出土遺物は、須恵器貯蔵具１点、土師器煮炊具２点、中世土師器食膳具９点が出土する。時期の判断出来るものは中世遺物であり、中世１- Ⅰ期？と確認できる。

３．SJ72

SJ70 から 1Gr 分南、る 29Gr にあたり、SB307 内に収まるように位置するものである。SJ70 と同様に SB307 も中世掘立柱建物・低床構造で、両者が共存していたか不明である。SJ72 は、上位層のかなりの部分が削られてしまっており、炉床が露出して上面が剥がれている状態で検出されたもので、よって理土はない。炉床は還元被熱し、規模は長径 37.5 ㎝×短径 25 ～ 33.5 ㎝を測る。炉床中央には、特に硬化し黒灰色を呈した強い還元被熱箇所が認められる。この還元層は、最大のもので長径 20 ㎝×短径 9 ㎝、５～８㎝の厚みをもつ。炉床付近からは、羽口破片や石、塊形鍛冶滓が出土している。石は、石囲炉の炉材石や、石座の可能性をもつと思われる。また、周辺のグリッド内からも炉材石や流動滓が検出されており、これらからみると、精錬鍛冶を行った炉ということができる。一方で、鍛造の石製品が検出されることから、鍛錬鍛冶も行われた可能性をもつ。

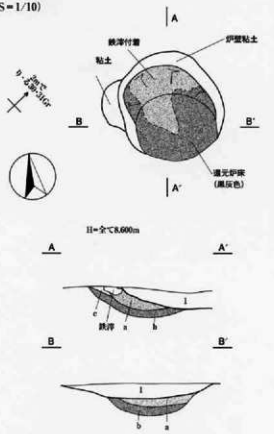
SJ72 からは、鍛冶滓・塊形鍛冶滓（含鉄品含む）の極小片・羽口・含鉄鍛冶滓・鍛造鉄製品が出土しており、周辺からは、鍛冶滓・含鉄鍛冶滓・塊形鍛冶滓（含鉄含む）の小片・鍛造鉄製品・炉壁・炉材石・流動滓が出土する。この他の出土遺物は、須恵器食膳具３点、須恵器貯蔵具５点、土師器煮炊具７点、中世土師器食膳具９点である。須恵器食膳具ではⅥ２～Ⅵ３期の時期が確認できる。

４．SJ75

SJ65 東側に隣接して位置する鍛冶炉である。包含層掘削途中に鍛冶炉を検出した経緯で、周囲と上面がかなり削られてしまったものの、炉床のみが残存していた状態である。炉床は青灰色に還元して焼結する粘土層と、その下層に黒（褐）色に半還元する粘土層の２層が認められる。炉床上の下位層で、地山土が被熱する層が認められるため、炉床粘土は地山に貼っているおり、炉床面は中央が窪む形状をしていたと思われる。なお、還元炉床の規模は、長径 12.5 ㎝×短径 9.0 ㎝である。

SJ75 から出土する鉄関連遺物はないが、周辺からは、鍛冶滓・塊形鍛冶滓・含鉄鍛冶滓・塊形鍛冶滓（含鉄品含む）極小片・鍛造鉄製品・鋳造鉄製品が出土する。これらの出土品が全て当鍛冶炉に伴うものとは言えないものの、精錬鍛冶・鍛錬鍛冶行程の最終段階の作業を主とする小型の鍛冶炉と予想する。鍛冶関連遺物の他に土器などの遺物出土がないため、時期は不明である。よって、近接する SJ65 と SJ75 が同時併存かどうかは確定出来ないものの、鍛冶関連出土遺物がよく似ている。SJ65 も精錬鍛冶・鍛錬鍛冶を同じ炉で行った可能性があるとしたため、一方で精錬鍛冶・鍛錬鍛冶の炉として、それぞれ分担して使い分けがされていた可能性も推測したい。

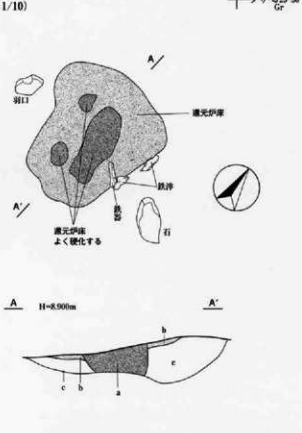
〈SJ70：鍛冶炉〉
(S＝1/10)



SJ70 土層説

l層　黒褐色土（10YR2/2）：炭化小塊多目合有。（炉）褐色土小塊少量合有。小鉄滓多量合有。
a層　暗褐色砂質土（10YR3/3）：粘状鉄滓を多量合有。灰黄褐色（10YR6/2）粘土小塊を塊多量合有。炉床土。
b層　黒色還元粘土（5Y2/1）：第ⅰ土層が還元粘土。
c層　灰黄褐色砂質粘土層（10YR6/2）：灰黄褐色（10YR5/2）粘土小塊を塊多量合有。炉壁粘土？

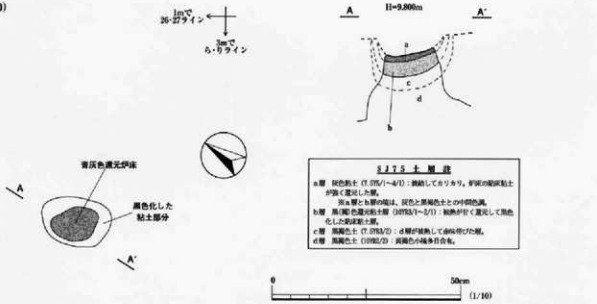
〈SJ72：鍛冶炉〉
(S＝1/10)



SJ72 土層説

a層　黒色粘土（10YR1.7/1）：還元して黒色化した炉床粘土。硬化しており、強く還元顕著。
b層　黒（褐）色土（10YR2/2～3/1）：黒色（10YR1.7/1）粘土中塊・大塊を多量合有。炉床土だが、粘土が混ざりた状態。還元顕著していない。
c層　黒褐色土（10YR2/3）：黒色（10YR1.7/1）粘土中塊多量合有。鉄小塊、黄褐色土小塊多目合有。

〈SJ75：鍛冶炉〉
(S＝1/10)



SJ75 土層説

a層　灰色粘土（7.5Y5/1～4/1）：鉄結してかりかり。炉床の硬状粘土が強く還元した層。
　　灰a層とb層の境は、灰色と黒褐色土との中間色調。
b層　黒（褐）色還元粘土層（10YR3/1～2/1）：鉄熱が甘く還元して黒色化した炉床粘土層。
c層　黒褐色土（7.5YR3/2）：d層が被熱して赤味帯びた層。
d層　黒褐色土（10YR2/3）：黄褐色小塊多目合有。

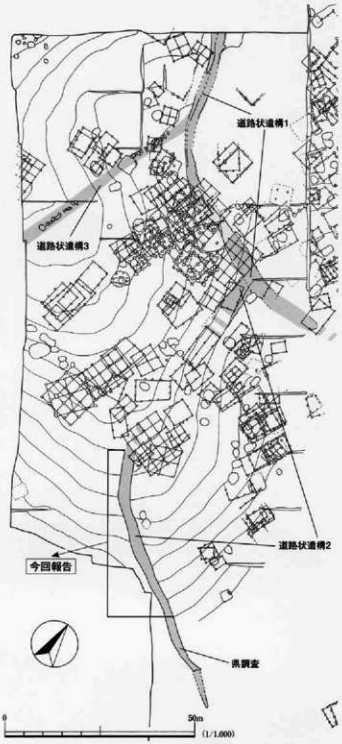
第38図　手工業生産関連遺構図3（SJ70・SJ72・SJ75）

第４節　その他の遺構と包含層

第１項　道路状遺構と今回報告部分

本遺跡で検出された道路状遺構は、路面の検出、道路幅員と思われる溝状遺構、道路の付帯的構造痕跡と思われるピット列や波板状凸凹面の検出が個別になされ、削平により路面削平や消失もみられるものの、それぞれつながり全体として面的に捉えることが出来たことから、最終的に大きく３本の道路状遺構であると判断したものである。道路状遺構１・道路状遺構３は、前回の「額見町遺跡Ⅲ」で報告済みである。これに加え、道路状遺構１から分岐するように位置する道路状遺構２の北側にあたる分岐地点を、道路状遺構１と共に「額見町遺跡Ⅳ」にて報告している。今回報告区域は、道路状遺構２の南側区域にあたり、遺構番号は SD23 である。

今回報告の道路状遺構２は、Ｆ地区とＨ地区にまたがるものである。平成９年度に（財）石川県埋蔵文化財センターがＥ地区とした区域の調査で道路状遺構を検出した。平成 11 年度の当教育委員会調査で、隣接区域であるＦ地区にて続きの道路状遺構が検出され、平成 12 年度にＨ地区の調査を実施するという経緯をもち、調査年がまたがっている。道路状遺構２は、他の道路状遺構に比べ近代削平を免れた区域に位置していたため、比較的良好な遺存状態であったものの、次第に谷部となるＨ地区区域では、土器溜まり遺構との重複により、検出においては困難を極めたと言ってもよい。

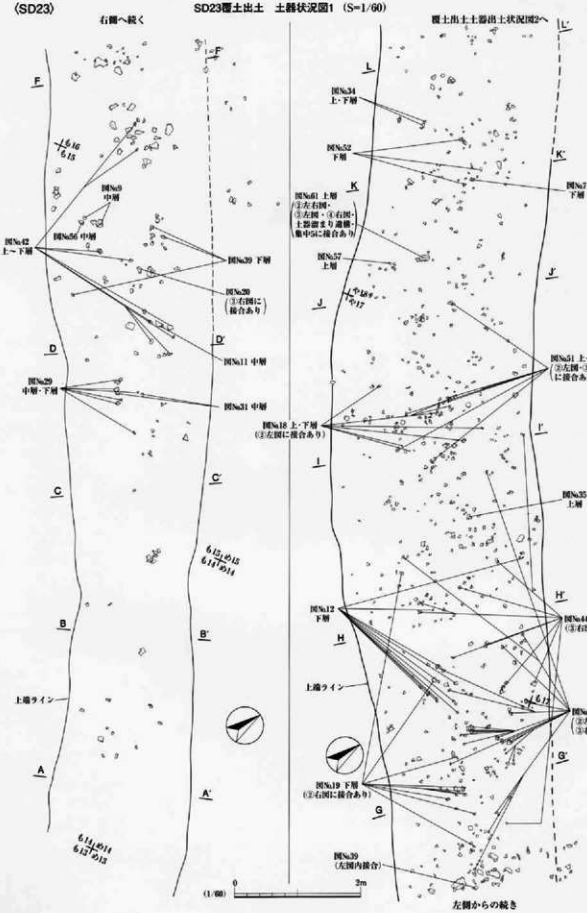


第 39 図　額見町遺跡道路状遺構全体図

１．道路状遺構２（SD23）

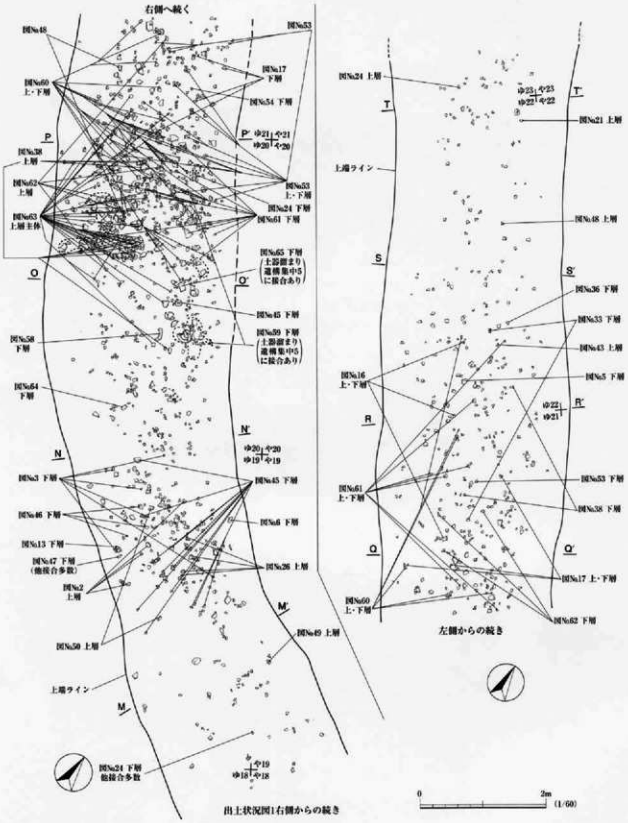
〈立地・規模〉　溝状を呈する道路状遺構で、本遺跡全体の南端、東尾根付近から西側の谷部へ下ってゆく本遺跡の中でも最も標高差をもつ傾斜地に立地する。Gr では、め 14、も 14 ～ 16、や 16 ～ 19、ゆ 18 ～ 22Gr にあたる。これより北側では検出できていない。これは、Ｈ地区における路面硬化が、南側から北側へ進むにつれ、次第に顕著でなくなっていったことによる。あわせて、土器溜まり遺構（調査当初に土器溜まり５と名付け、当報告では土器溜まり遺構とするもの）との重複により、遺物の出土量が尋常でない状況であり、硬化の顕著でなくなってゆく路面の検出ができなかったためである。

検出された SD23 の全長は 22.5 ｍである。東西を横切るように位置しながら、ゆ 20Gr で自然に北側へ向きを変えており、そのまま道路状遺構１の分岐地点に繋がるものと考えられる。上端幅は、170 ～ 330 ㎝を測り、Ｆ地区では 230 ㎝が最大となる。断面形状は皿形で、内面に路面と、路面下の路床をもつ。路面までの深さは、Ｆ



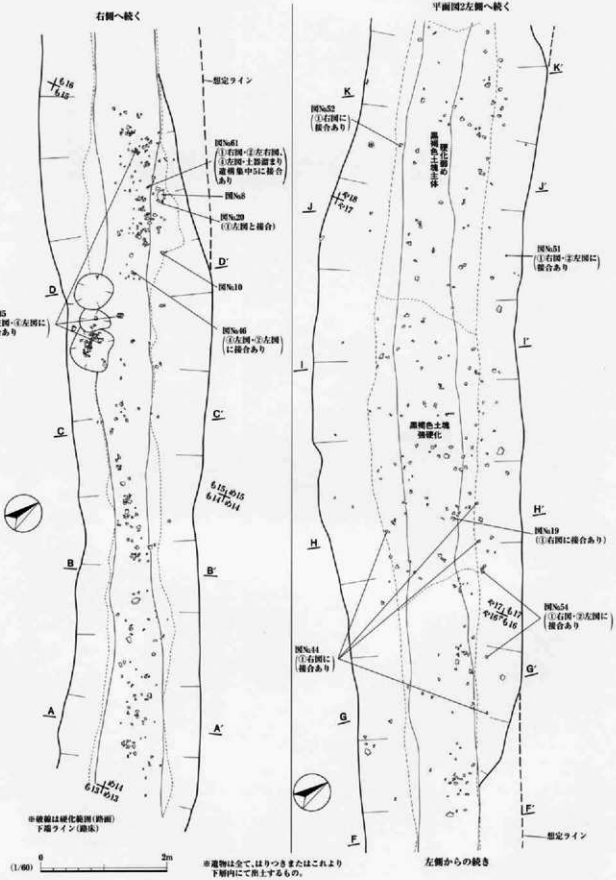
第40図　道路状遺構2 遺構図1〈SD23①〉

SD23覆土出土土器状況図2（S=1/60）

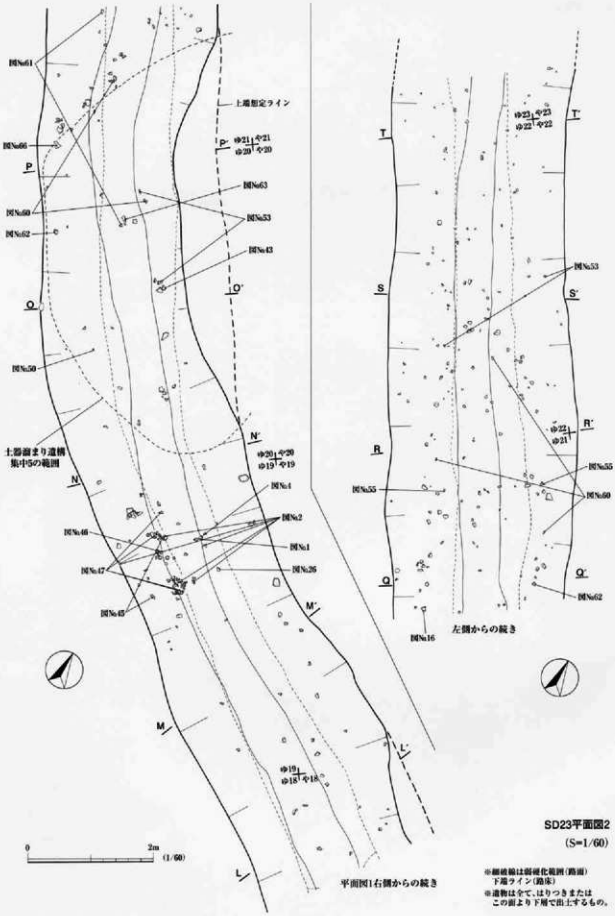


第41図　道路状遺構2 遺構図2（SD23②）

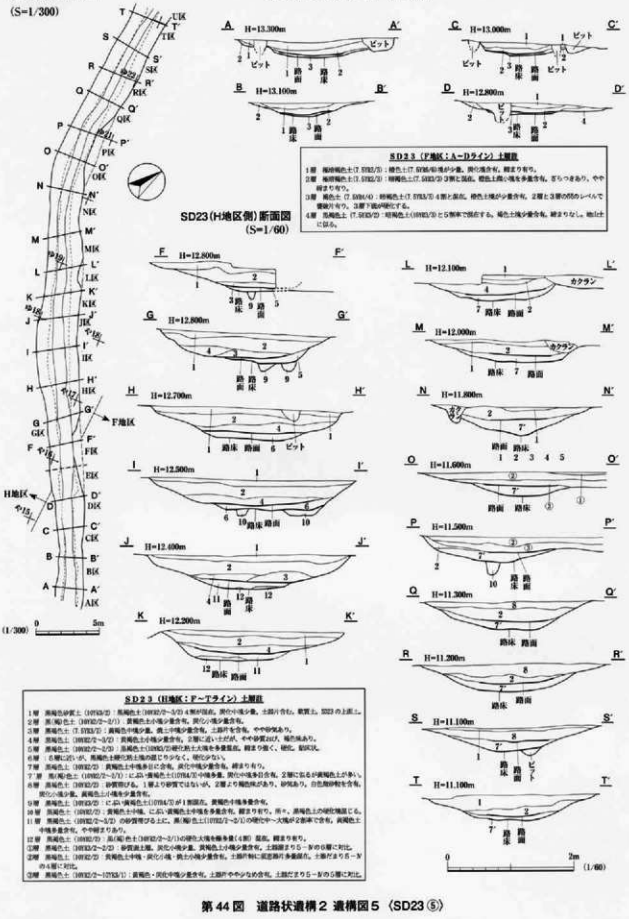
SD23平面図1（S=1/60）



第42図　道路状遺構2 遺構図3〈SD23③〉

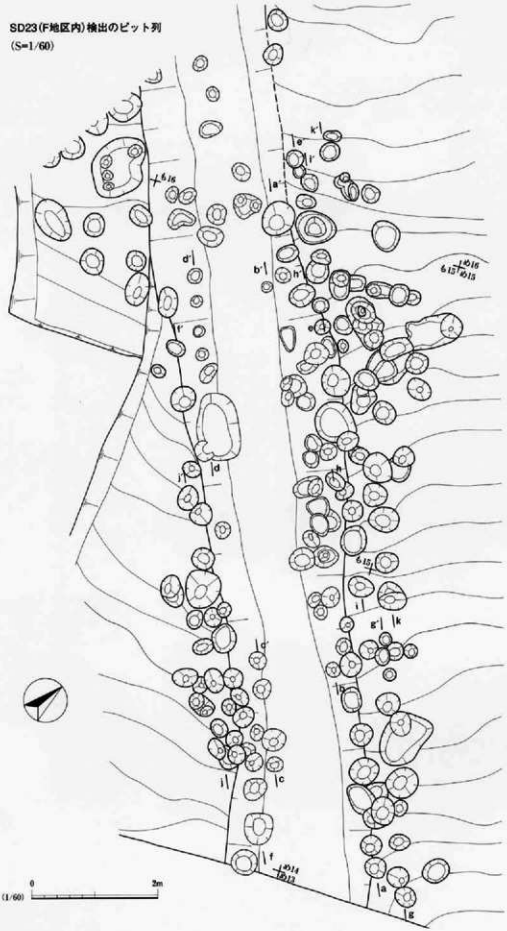


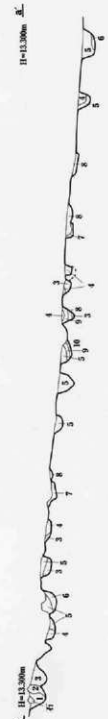
第43図　道路状遺構２ 遺構図４（SD23④）



第44図　道路状遺構2 遺構図5（SD23⑤）

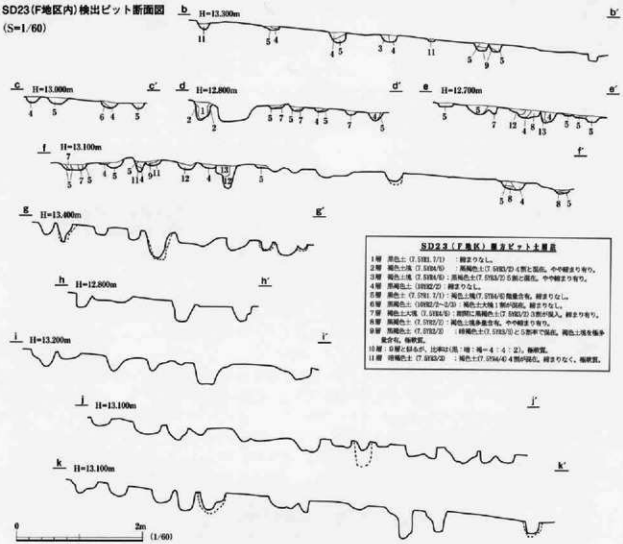
SD23(F地区内)検出のピット列
(S=1/60)





断面図　(S=1/60)

第45図　道路状遺構2 遺構図6 (SD23⑥)



第 46 図　道路状遺構２ 遺構図７〈SD23 ⑦〉

地区内あたるＡ～Ｄラインで 18 ～ 20 ㎝、Ｈ地区では 20 ～ 40 ㎝で、より標高の高いＦ地区の方が浅い。路面幅は 74 ～ 140 ㎝、路床幅は 60 ～ 100 ㎝で最小 50 ㎝、但しｊ区から北では 60 ～ 70 ㎝とほぼ一定幅を呈す。Ｆ地区の方は、路面幅が狭くなることが特徴となる。

〈路面の状況と路床〉　路面は、断面形状が皿形の溝底面がそのまま路面となっており硬化する。特に、ａ区～ｊ区までは顕著な硬化が認められる。ｊ区途中～ｋ区～ｌ区途中までは、硬化ブロックが認められるものの全体の硬化は弱く、ｌ区途中から以降北の区域では明瞭な硬化ブロックが認められる。Ｆ地区にあたるａ～ｄ区では、路面下と路床間の埋土は２～４㎝と頗る薄いものである。路面自体は平坦で、須恵器甕に見られるような土器細片が張り付いているものの、道路状遺構１・３で検出されている量と比較すれば極めて少ない方だと言える。

路面と路床の間には、埋土を伴うが、区域によって埋土や硬化に差違が認められる。

路面下の路床は、Ｆ地区での検出にあたる区域、SD23 をセクションポイント間で区割りしたａ～ｄ区で、顕著な硬化が認められる。極めて硬化しており、土そのものは貼り付けたものではなく地山である。明褐色土塊（7.5YR5/8）粘質の地山土が硬化しブロック化したもので、この限間に暗褐色土（7.5YR3/3 ～ 10YR3/3）が２割程混入する。いわば竪穴建物の硬化床に類似するところがあり、踏みしめられ、晴天風雨にさらされた通行痕跡であるのだろう。この地山面が、当初の路床として機能していたと思われ、補修によるものか次第に上位に土を補充し、新たな路面を形成したものと考えている。一方路床は、浅い皿状底面を呈して平坦面が狭まり、Ｆ地区で検出された路床では僅かだが硬化面に土器が張り付いている。路床が第１路面として相当の期間機能していた可能性をもつ。薄く張り付いて検出された３層土は、流土堆積や部分修理の補填であった可能性がもたれる。

また、2層と3層上間で、甕破片がまとまって検出されていることからも、部分的に強度をもたせるために施された痕跡として理解する。

H地区の路床は黒褐色地山土内にあり、この上位にやはり黒褐色土を補填する形で路面を形成している。路床を歩行したものか、硬化が認められないため不明だが、F地区での検出状況から自然路が形成されいたものと判断でき、H地区では黒褐色地山に自然路を形成していたものと思われる。路床上位に5～14㎝の路面土が充填されており、路面土は黒色土系を主体に、硬化する黒褐色土ブロックか、同じ主体土に黄褐色土・褐色土・にぶい褐色土ブロックが混在するものであり、F地区に近づくに従い混在ブロックの硬化が顕著となる。このような状況の中、硬化ブロックの検出をもって路面と判断している。しかし、前述した土器溜まり遺構との重複により、谷部に近づくにつれ、硬化ブロックを検出できない状況になっていったのである。

〈覆土と出土遺物・時期〉　覆土は、自然堆積していたものと考えられ、出土遺物はH地区調査分のe区より以北の区域では極めて多量の遺物を伴っているものの、土器溜まりと重複の関連で量が増加した可能性が高い。土器溜まりと重複しない区域での出土量をみると全体に満遍なく出土している。路床から出土するものは、張りついたり食い込んだりして検出されている。出土遺物はSD23全体で、須恵器食膳具884点（摩耗痕跡7点含む）、須恵器貯蔵具1,626点、土師器食膳具49点、土師器煮炊具1,050点、中世土師器煮炊具532点、白磁片6点、土製品（円筒形3点、カマド2点、製塩土器1点、土鈴1点）7点、砥石を含む石製品14点が出土する。出土遺物の時期は、Ⅰ期からⅤ期まで非常に広い時期幅をもつ。この中でもⅣ2期新段階、Ⅴ1期、Ⅴ2期にまとまりがみられ、このあたりが当遺構の時期に相当すると思われる。

SD23は、土器溜まり遺構集中3（Ⅲ～Ⅳ期）を切り、土器溜まり遺構集中5（Ⅴ期）に切られる。出土遺物時期においては、路床に張り付く遺物がⅤ2期に相当し、これ以前の遺物は検出できていない。よって、SD23はⅤ2期に機能し始めたと考えられる。道路状遺構1の場合、Ⅳ2期段階で自然路を発生し、Ⅴ1～Ⅴ2期段階で幅を拡げる等の改修を行い、Ⅵ期には通行をやめ埋没してゆく変遷をもつ。これを踏まえれば、今回報告のSD23（道路状遺構2）は、道路状遺構1の改修期に通行し始めることになる。道路状遺構1と道路状遺構2の分岐地点には、同時期のSB259四面廂建物が存在しており、この建物を中心とした道路形成がなされた可能性がもたれよう。

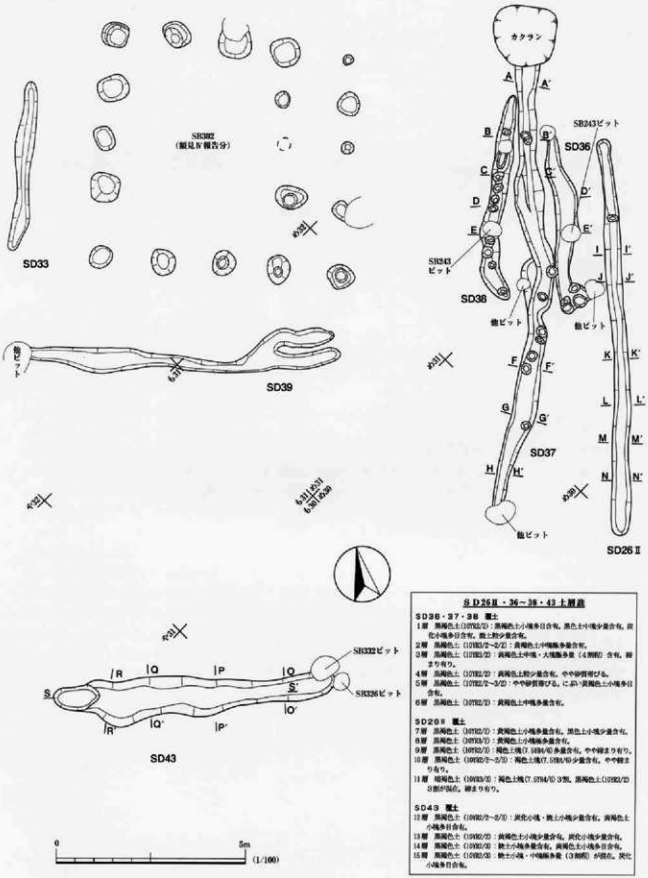
〈外内ピット群の検出〉　路床精査時、内外に小ピット群を検出している。径16～50㎝が主体で、大規模なものは径125㎝と土坑に近いものの内部にいくつかの小ピットを伴う。深さは、道路の溝内外で違いが認められる。F地区においては、溝際・溝内のものは、路床の深さと同等かこれより深いものが多く、溝外東側では路床と同等か、10㎝以内で浅いものが多い。H地区検出分では、溝際・溝内のものは路床よりも深いものが多く、溝外東側にまとまって検出されるものは路床よりも深い。H地区のこのような状況は、標高12,000ｍより標高が低くなるにつれ、より顕著となっているようである。また、H地区の西側に連続するものは、路床よりも10㎝以内で浅いものが多い。このように、大まかな傾向はあるものの、小ピット底面も平坦なもののあれば、すり鉢状のものもあり、規模・形状は様々である。埋土は軟質であることが特徴で、底面に硬化面をもつものはない。埋土には、ごく一部で検出される‘杭のあたり’と考えられる痕跡をもつものも認められる。この径は4～10㎝を測るが、これが本当に杭であるのかは疑問を抱いている。

第2項　溝状遺構

今回報告する溝状遺構は、SD26Ⅱ・36～38・43・56・57・61～71であるが、この内61・62・70は欠番となっている。今回報告する溝状遺構の特徴は、まず、前回報告した道路状遺構3主軸に並列・直交する形で位置する溝群の続きが、北区域で確認できることである（SD26Ⅱ・36～38・43・56・57）。このような溝状遺構と性格が異なると考えられる不整形状を呈するものが、中央よりやや南に位置して検出されている（SD63～66・SD69）。この他、小規模なものが点在するように検出されている（SD67・68・71）。

SD26Ⅱ・SD43は、建物や空間を区画したと考えられる直線的な溝で、SD26Ⅱの長径は1,045㎝、幅30～50㎝を測り、断面形状は皿形で深さ13～14㎝、東西軸に平行に配置する。SD43は、長さ740㎝、幅55～120㎝、深さ10～18㎝、底面は平坦面を形成、SD39と平行しSD26Ⅱに対して直行する形で位置するものである。

〈SD26Ⅱ・36～38・43〉　　平面図 (S=1/100)



SD26Ⅱ・36～38・43 土層表

SD36・37・38　覆土

1層　黒褐色土(10YR2/2)：黒褐色土小塊多目合有。黒色土中塊少量合有。炭化小塊多目合有。粘土粒少量合有。
2層　黒褐色土(10YR3/2～2/2)：黒褐色土中塊極多量合有。
3層　黒褐色土(10YR3/2)：黒褐色土中塊・大塊極多量（4層相）含有。締まり有り。
4層　黒褐色土(10YR2/2)：黒褐色土粒少量含有。やや砂質帯びる。
5層　黒褐色土(10YR2/2～3/2)：やや砂質帯びる。に赤・黄褐色土小塊多目合有。
6層　黒褐色土(10YR2/2)：黒褐色土中塊多量含有。

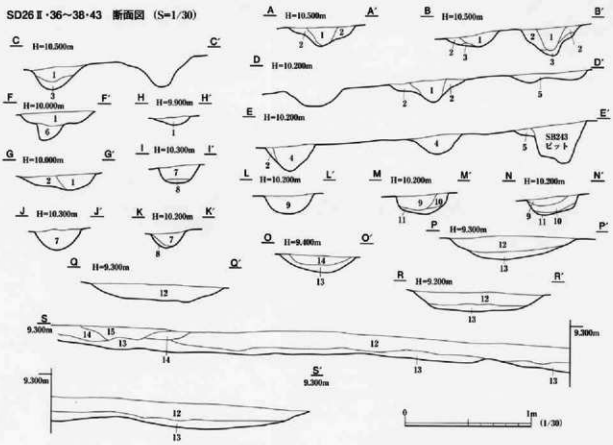
SD26Ⅱ　覆土

7層　黒褐色土(10YR2/2)：黒褐色土小塊多量含有。黒色土小塊少量含有。
8層　黒褐色土(10YR3/2)：黒褐色土小塊極多量含有。
9層　黒褐色土(10YR2/2)：褐色土塊(7.5YR4/6)多量含有。やや締まり有り。
10層　黒褐色土(10YR2/2～2/3)：褐色土塊(7.5YR4/6)少量含有。やや締まり有り。
11層　暗褐色土(10YR3/3)：褐色土塊(7.5YR4/6 3%)、黒褐色土(10YR2/2 3%)が混在。締まり有り。

SD43　覆土

12層　黒褐色土(10YR2/2～3/2)：炭化小塊・粘土小塊少量含有。黒褐色土小塊多目合有。
13層　黒褐色土(10YR2/2)：黒褐色土小塊少量含有。炭化小塊少量含有。
14層　黒褐色土(10YR2/3)：粘土小塊多量含有。黒褐色土小塊多目合有。
15層　黒褐色土(10YR2/2)：粘土小塊・中塊極多量（3層相）が混在。炭化小塊多目合有。

第47図　溝状遺構 遺構図1〈SD26Ⅱ・36～38・43－①〉



第48図　溝状遺構 遺構図2〈SD26Ⅱ・36～38・43－②〉

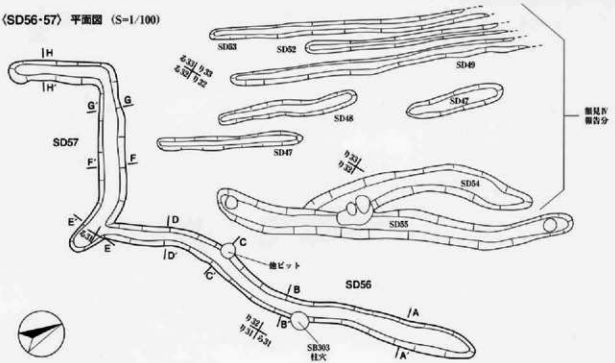
SD36～38は、SD26Ⅱ西側で同軸をとり、建物の区画溝内に位置するもので、SD26Ⅱのような直線形状ではなく、歪で曲がりくねる形状をもつ。3本がほぼ並列、SD38はSD37から分岐する形をとる。SD37・38は底面にピットを伴い、特にSD38には連続ピットが確認できる。これらの規模は、SD36が長径450㎝、幅40～45㎝を主体に最小26㎝最大62㎝、深さ6～13㎝。SD37は、長径1,170㎝、幅32～80㎝、深さ13㎝で、ピット底面までで15～22㎝。SD38は、長径510㎝、幅40～45㎝、深さ10～13㎝でピット底面までで20㎝を測る。

SD56は、前回報告のH地区西側で並列して検出された溝状遺構群の最南に位置。この SD56の南端から連結し直行してL字をなして西に延びるものがSD57である。SD56の規模は、長径1,020㎝、幅50㎝主体に最大76㎝を測り、深さ13～22㎝をもつ。SD57は、長径が分岐地点から屈曲地点までで500㎝、これより端まで240㎝の計740㎝を測り、幅は50～70㎝、深さ11～15㎝と浅い。両者の埋土に若干の違いがみられ、SD56の方が夾雑物量は少ない。高、SD56北端の方が高く、SD57末端に向かい緩やかな傾斜をもち、高低差は36㎝を測る。

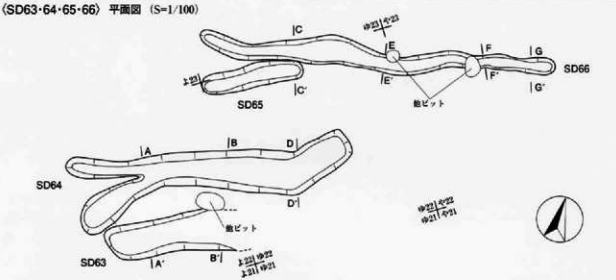
SD63～66は、H地区建物遺構群のほぼ南末端に位置するもので、4本の溝状遺構が並列するものである。SD66の東側が高く、この遺構のみ高低差33㎝を測るものの、この他は高低差が認められない。SD63は残存長径300㎝、幅90～104㎝と比較的幅広で、深さ7～13㎝、底面は平坦を呈す。SD64は、西端が二股に分岐す

遺構No / 遺物大別	26	36	37	38	43	56	57	63	64	65	66	69
須恵器食膳具	0	1	1	0	25	3	1	1	2	2	0	7
須恵器貯蔵具	2	0	3	3	7	1	0	2	4	0	1	9
土師器食膳具	0	0	1	0	2	0	1	0	0	0	0	1
土師器煮炊具	2	1	1	2	23	4	7	9	2	2	1	48
土製品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
石製品・その他	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0
中世土師器	0	0	0	0	4	1	3	0	0	0	0	5

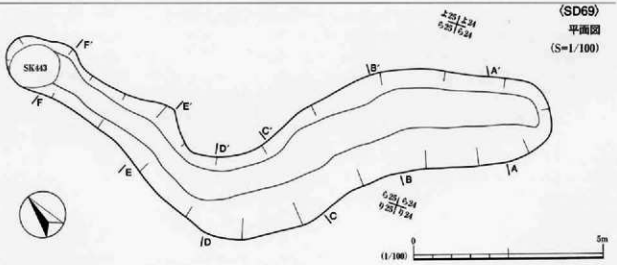
〈SD56・57〉 平面図 (S=1/100)



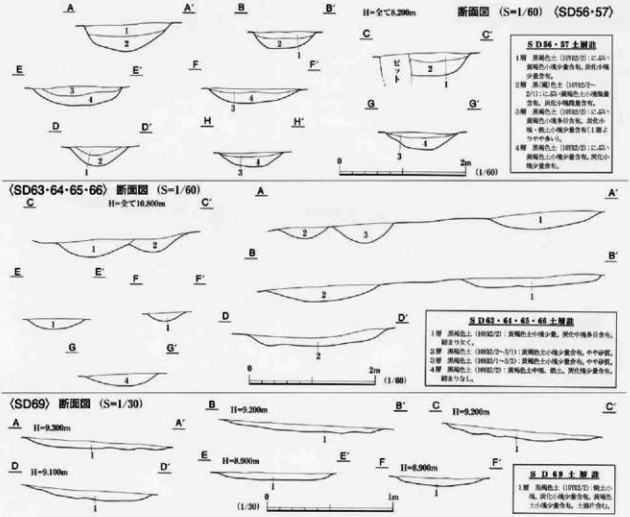
〈SD63・64・65・66〉 平面図 (S=1/100)



〈SD69〉
平面図
(S=1/100)



第49図　溝状遺構 遺構図3 〈SD56・57・63～66・69－①〉



第50図　溝状遺構 遺構図4〈SD56・57・63～66・69－②〉

るものであり、長径740㎝、幅112㎝で、二股部分で、は40～52㎝と46～86㎝を測り、深さは8.5～14㎝。SD65は、長径268㎝、幅50～60㎝、深さ10㎝。SD66は、うねるようなプランをもち、長径940㎝、幅45㎝主体に最小32㎝最大74㎝で、深さは7～13㎝。これらの溝状遺構は、深さに類似点が見いだせるものの、幅やプランは様々である。覆土は、SD63とSD66に類似点が認められ、締まりのないことも特徴である。SD64とSD65は、覆土は同質層となっており、SD66がSD65を切っているため、時間的な差をもっていた可能性がある。

SD69は、前述のSD64～66の東側に1Gr以上離れて、単独で位置するものである。東から西へ延び、り26Gr杭位置付近で北方向へ屈曲する。規模は、長径が東端から屈曲地点まで940㎝、屈曲地点から北端まで650㎝で形1,590㎝を測る。幅は、最小で105㎝、東側へ行くに従い幅広くなってゆき、最大270㎝を測る。深さは10㎝を主体に最大14㎝と非常に浅く、底面は平坦を呈すが、底面レベルに高低差が認められ、東端と北端ではおよそ60㎝の差をもつ。

出土遺物の破片総数は66ページ表のとおりである。各遺構からの出土遺物は極めて少ない。特筆できるものとして、SD37からはヘラ切りの油痕付き小皿、Ⅴ期と考えられる土師器煮炊具が出土している。SD43では、Ⅳ期と判断される須恵器食膳具や土師器煮炊具が出土するほか、中世遺物が4点出土している。SD56では、Ⅳ期からⅥ期の須恵器食膳具が確認できる。SD57・SD63からもⅣ期・Ⅴ期の遺物が多く、SD65もⅤ期を主体とする。これら遺構から出土した中世遺物は混入品である可能性がある。

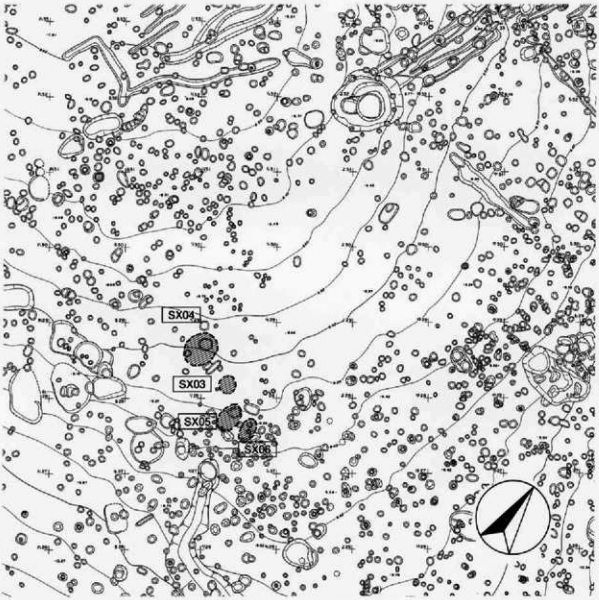
第3項　集石遺構

河原石が多量に検出されたことで、集石遺構として位置づけしている集石遺構は、前回までSX01（C地区）

とSX02(G・H地区境)の2基が報告されてきた。今回報告区域の集石遺構は、続き番号にあたるSX03～06で、全てH地区からの検出である。すべてH区中央北寄りに広がる空間の南端に集中、東西軸に一列に並ぶ。Grは、ら27～28・り28にあたる。4基の集石遺構は、河原石の除去後に土坑やピット状の落ち込みは検出されず、河原石が黒色土系地山に直接張り付いくものである。なお、SX03では鉄滓も張り付いており、SX04では土器の検出がみられる。

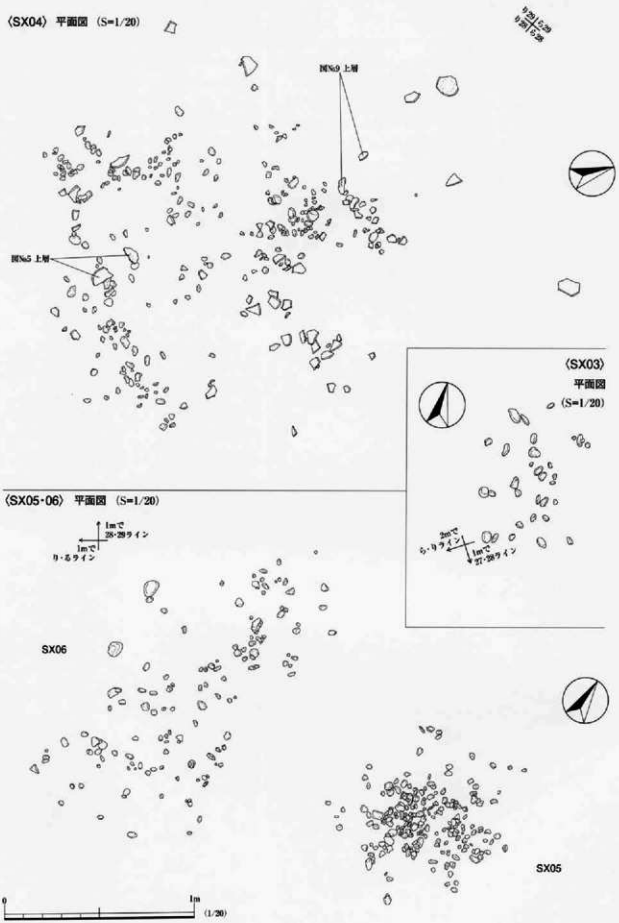
SX03は、長径85㎝×短径70㎝範囲に川原石が検出されており、石が出土するレベルは標高9.220～9.225mを示す。SX04は、4基の中で最も西に位置し、川原石の検出範囲は200㎝四方、出土レベルは標高9.150m前後である。SX05は、長径100㎝×短径80㎝範囲で、最も川原石がまとまって検出されているものであり、出土レベルは標高9.150mを示す。SX06は、SX05と比較すれば散在しているといったもので、長径190㎝×短径90㎝の範囲に及び規模としては大きく、出土レベルは標高9.100～9.150mである。

これら集石遺構の出土遺物は次の通りで、いずれも総数である。SX03から出土する遺物はないため、時期は不明である。SX04からは、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具11点、土師器煮炊具30点が出土しており、時期を判断出来るものでⅣ2期を確認できる。SX05からは、須恵器貯蔵具1点のみの出土で、時期は不明である。SX06では、須恵器煮炊具1点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具1点のみであり、時期を判断するには難しい。



第51図　集石遺構 位置図（S＝1/250）

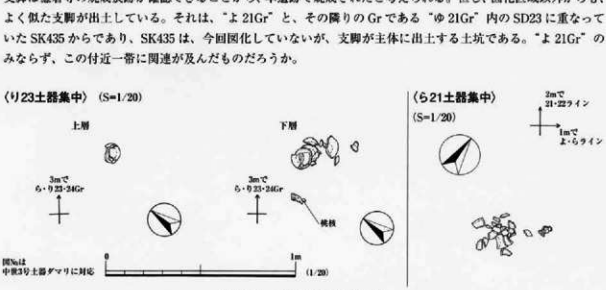
〈SX04〉 平面図 (S=1/20)



第52図　集石遺構 遺構図 〈SX03・SX04・SX05・SX06〉

第４項　土器集中遺構

土坑やピットのような掘り込みがなく、現地調査で土器集中と名称づけられた遺構である。特筆すべき遺物出土状況をもつもので、何れも、地山面で検出されている。「り 23Gr 土器集中」は、小皿が正位・合わせ口で７～８枚が重なって出土していたもので、桃核を伴っており、土器埋納されたものと考えられる。後述する第７項の「中世３号土器溜まり」と同じ遺構である。「ら 21Gr 土器集中」は、支脚が一括廃棄されていたものである。支脚は痕着等の焼成痕跡が確認できることから、本遺跡で焼成されたと考えられる。但し、図化区域以外からも、よく似た支脚が出土している。それは、“よ 21Gr”と、その隣りの Gr である“ゆ 21Gr”内の SD23 に重なっていた SK435 からであり、SK435 は、今回図化していないが、支脚が主体に出土する土坑である。“よ 21Gr”のみならず、この付近一帯に関連が及んだものだろうか。



第 53 図　土器集中遺構 遺構図

第５項　炉状遺構

炉状遺構は、被熱面を有し炉として機能したと考えているものを示し、本遺跡全体を通じて連番にて遺構番号を付けている。今回報告する区域で対象となるのは、SJ64 ～ SJ74 にあたるが、この内 SJ65・SJ66・SJ70・SJ72・SJ75 は鍛冶炉や製炭土坑であり、第３節手工業生産遺構において述べている。

今回報告の炉状遺構は、全てＨ地区から検出されたものである。Ｈ地区内では南側にまとまりが認められ、これはＨ地区とＧ地区との境の遺構密集区域に相対する位置にあたる。単体で検出されるものが殆どだが、掘立柱建物内にて検出され、検出時の標高が極めて類似するものが認められるものの、非常に少なく、掘立柱建物に伴うものと確定できないことからも、地床炉や屋外炉となるものが殆どになろう。但し、SJ73 のみ、被熱層が土坑状の底面にあたる地山となり、規模も大きいことから、焼土坑の可能性をもつものと思われる。

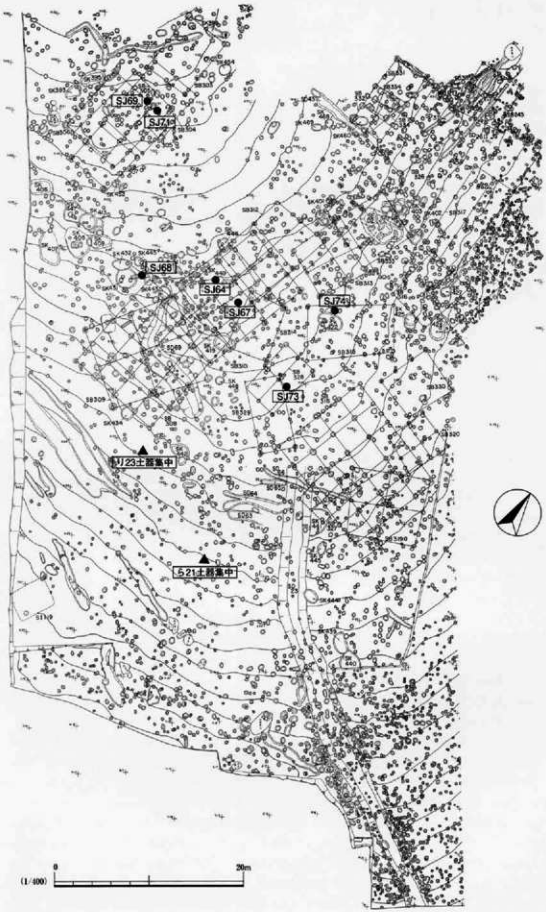
前回までの報告では、以下のような特徴を持っていることが確認されている。

1．人為的な構築（貼床）が見られ、掘方を伴っているもの（Ａ－①タイプ）
2．人為的な構築（貼床）が見られ、掘方は伴っていないもの（Ａ－②タイプ）
3．人為的な構築はなく、地山が直接被熱しているもの（Ｂタイプ）
4．竪穴建物や土坑内覆土で検出され、貼床の構築が見られるもの（Ｃ－①タイプ）
5．竪穴建物や土坑内覆土で検出され、貼床の構築はなく、下の遺構覆土が被熱するもの（Ｃ－②タイプ）

今回報告区域では、竪穴建物や土坑内覆土で検出されたものはなく、上記１～３のタイプに限られている。４・５は、竪穴建物や土坑が人為的埋め戻し・自然埋没後の窪みが利用されたと考えられ、また、当区域での竪穴建物が極めて少ないこと、土坑埋没時期と炉状遺構構築時期に隔たりがあったために、検出されなかった。

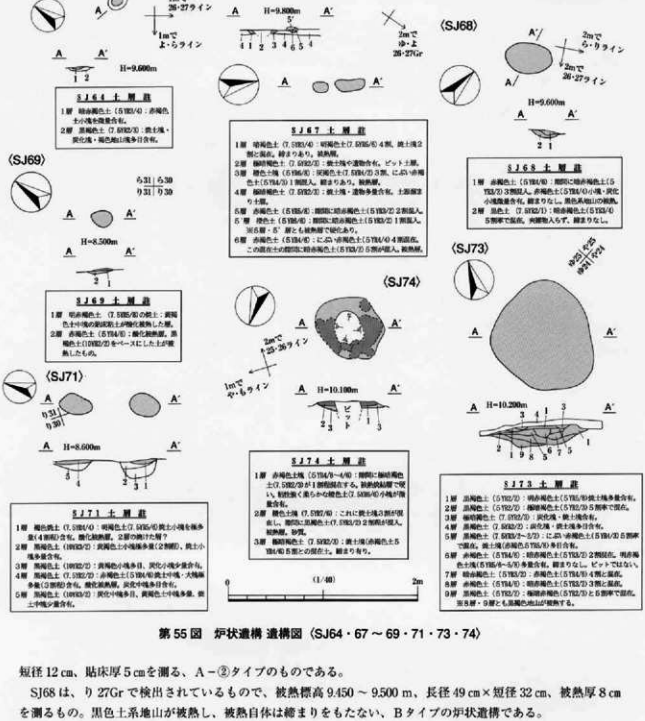
SJ64 は、被熱面標高 9.550 ～ 9.560 m、被熱長径 12 ㎝×短径 8 ㎝、被熱下の長径 23 ㎝×短径 18 ㎝に地山被熱が認められるもので、厚み 3.5 ～ 4.0 ㎝を測る。よ 27Gr、SB310・SB311 内に収まるように検出されているが、これらの掘立柱建物の検出時レベルよりと違いがありすぎるため、関連はない。特徴としてはＢタイプとなる。

SJ67 は、よ 26Gr にてピット等で破壊されつつ検出されたもので、被熱面が辛うじて残存する状況である。検出レベルを同じにして SB310 に収まるよう位置するため関連の可能性をもつ。被熱標高 9.600 m、長径 30 ㎝×



第54図　土器集中遺構・炉状遺構 全体位置図

炉状遺構平面図・断面図　(S=1/40)



第55図　炉状遺構 遺構図〈SJ64・67～69・71・73・74〉

短径12cm、貼床厚5cmを測る、A－②タイプのものである。

SJ68は、り27Grで検出されているもので、被熱標高9.450～9.500m、長径49cm×短径32cm、被熱厚8cmを測るもの。黒色土系地山が被熱し、被熱自体は締まりをもたない、Bタイプの炉状遺構である。

SJ69は、り31Gr杭付近で検出されているものである。被熱標高8.340～8.365m、平面規模は長径22cm×短径17cm、厚み4cm、炉床として人為的に構築した粘土床が被熱する。A－①タイプで、SB304・SB305内に収まるように検出されるが、SB304は検出標高に大差があり関連はないものと考えられる。一方、SB305の検出面は当炉状遺構よりも5cm程標高が低いだけであり、両者が関連性をもつ可能性はある。

SJ71は、も・り30Grにまたがり、り31Gr杭の近くに位置するもので、被熱層が北側のaと、南側のbに分かれている。SJ71aは、被熱標高8.490～8.510m、長径35cm×短径21cm、厚み11cmを測るもので、黒褐色系の炉床を構築後に被熱しているものである。SJ71bは、被熱標高8.490～8.520m、長径32cm×短径24cm、深さ18cmのピット状掘方をもち、最上面が被熱する。SJ71abとも、A－①タイプを示し、SB304・SB305内に収まるように位置しているものの、検出レベルに30cm以上の差をもつため、関連はないものと思われる。

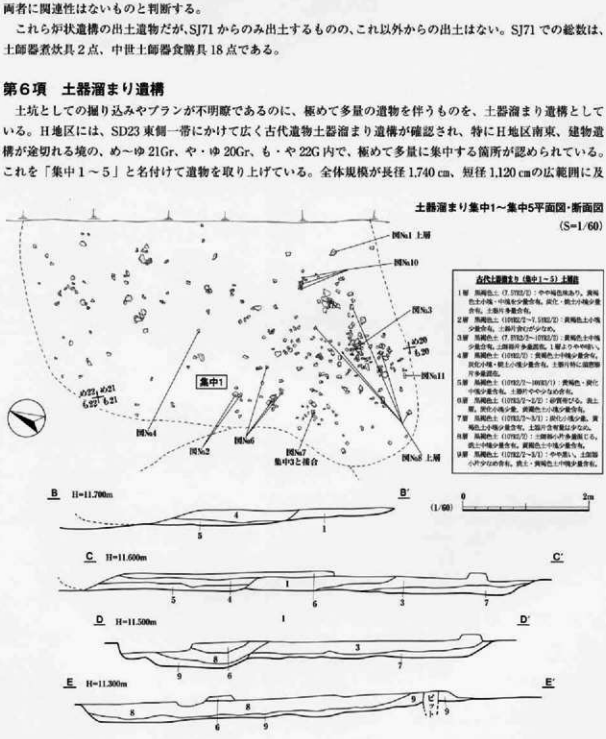
SJ73は、ゆ24・25Grに位置する。土坑状の窪みをもち、底面の地山が被熱する。埋土的な層でもある地山被熱面上位層には焼土が多量に混在、この層も黒褐色系の土が被熱しているものと考えられる。被熱層は長径236㎝×短径230㎝と大規模で、底面の被熱標高は9.920～9.970ｍを測る。炉状遺構というよりは、焼土坑に近く、土坑状の窪みを作って何かを幾度か焼くと同時に、土も堆積していったものと考えている。被熱そのものは弱いものである。地山が被熱するためＢタイプとする。

SJ74は、や26Gr中央に位置し、ピットによる破壊のため部分的に被熱層が検出されているものである。それでも被熱層は焼結して頗る硬く、規模は復元で長径75㎝×短径65㎝、被熱標高9.960～9.980ｍを測る。被熱層には、粘土が貼られており、7～11㎝の厚みをもつ。これより下位層では地山土が被熱を受けている。よって、Ａ－②タイプの炉状遺構となる。SB315内に収まる形をとるが、検出レベルに25㎝以上の差が認められるため、両者に関連性はないものと判断する。

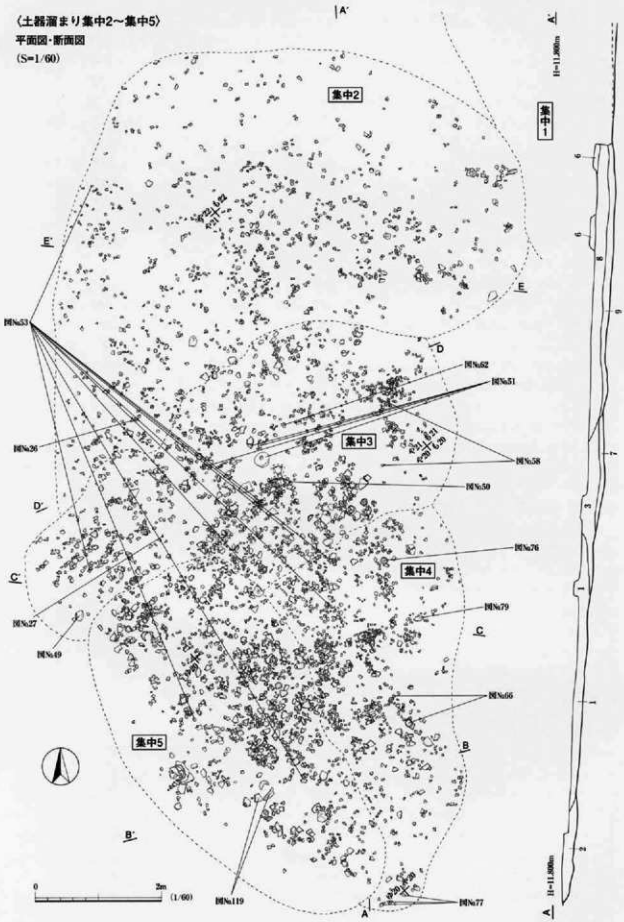
これら炉状遺構の出土遺物だが、SJ71からのみ出土するものの、これ以外からの出土はない。SJ71での総数は、土師器煮炊具２点、中世土師器食膳具18点である。

第６項　土器溜まり遺構

土坑としての掘り込みやプランが不明瞭であるのに、極めて多量の遺物を伴うものを、土器溜まり遺構としている。Ｈ地区には、SD23東側一帯にかけて広く古代遺物土器溜まり遺構が確認され、特にＨ地区南東、建物遺構が途切れる境の、め～ゆ21Gr、や・ゆ20Gr、も・や22G内で、極めて多量に集中する箇所が認められている。これを「集中１～５」と名付けて遺物を取り上げている。全体規模が長径1,740㎝、短径1,120㎝の広範囲に及



第56図　Ｈ地区古代土器溜まり遺構 遺構図１



第57図　H地区古代土器溜まり遺構 遺構図2

ぶものであり、出土遺物に時期差をもち、時期も含め分布にまとまりが確認できるために、「集中１～５」と分別した。この他にも集中１の南に接して集中が認められた箇所があり、現地調査で土器溜まり遺構として認識したものがある。これは規模も小さく、明確な円形プランと明確な掘り込みが確認でき、土坑と判断してよいと思われ、整理中にSK437と変更している。

集中１は、他に比べると細片が多く、土器分布は比較的疎らである。集中３は大型の長頸瓶のまとまりが検出される他、須恵器・土師器どちらも出土する。集中４は、土師器釜が主体に出土し、須恵器は８世紀代中頃のものと考えられる。集中５は、比較的須恵器が集中し、深さをもち、SD23を切っている遺構である。

出土遺物総数は、集中１では、須恵器食膳具123点、須恵器貯蔵具104点、土師器食膳具31点（摩耗痕３点を含む）、土師器煮炊具316点、中世土師器食膳具114点、白磁６点、須恵製品の硯１点、打製石斧２点であり、時期はⅣ２期が主体にもつ。

集中２では、須恵器食膳具424点（摩耗痕６点を含む）、須恵器貯蔵具385点、土師器食膳具42点、土師器煮炊具1,330点、中世土師器食膳具112点、土師製品５点（支脚１点、円筒形３点、カマド１点）、灰釉・白磁３点、石製品５点が出土しており、時期はⅣ２期～Ⅴ２期に位置付けされるものである。

集中３では、須恵器食膳具587点（摩耗痕５点、墨痕１点、油痕１点を含む）、須恵器貯蔵具617点、土師器食膳具51点、土師器煮炊具1,663点、中世土師器食膳具120点、土師製品として支脚３点、砥石を含む石製品４点である。これらの時期は、Ⅲ期～Ⅳ１期主体で、Ⅳ２期やⅤ期も認められる。特筆すべきものとして、突帯付獣足壺が出土している。

集中４からは、須恵器食膳具208点（摩耗痕４点含む）、須恵器貯蔵具180点、土師器食膳具10点、土師器煮炊具1,656点、中世土師器食膳具42点、須恵製品として硯１点、土製品６点（支脚３点、円筒形１点、匣鉢２点）この他カマド石が１点出土する。これらの時期はⅣ１期を主体にⅢ期～Ⅳ２期と判断されるものである。

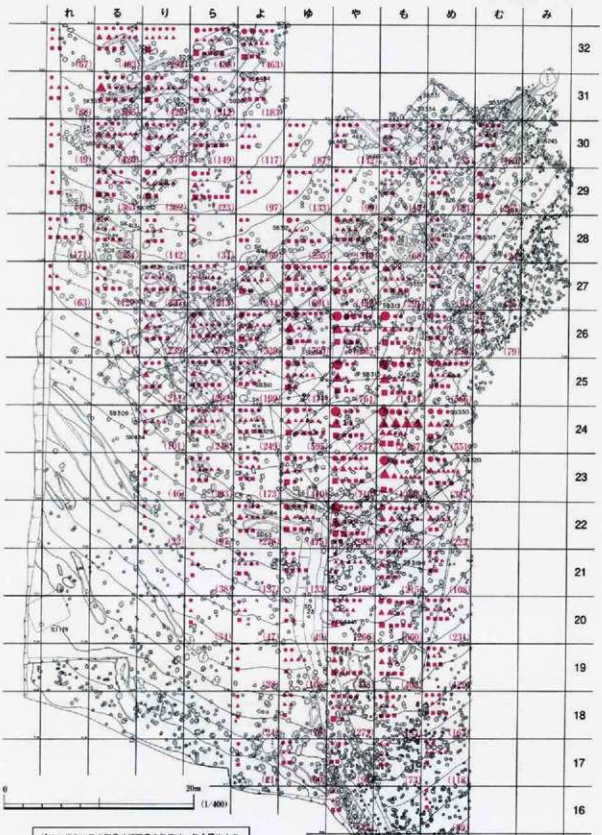
集中５からは、須恵器食膳具422点（摩耗痕５点含む）、須恵器貯蔵具645点、土師器食膳具23点、土師器煮炊具1,151点、中世土師器食膳具105点、土製品７点（カマド片１点、管状土錘３点、円筒形３点）、石鏃を含む石製品３点が出土する。これら遺物の時期は、Ⅳ１期～Ⅴ１期に相当するものである。

第７項　包含層と中世土器溜まり

包含層として提示したものは、第４項や第６項のような「土器集中遺構」や「土器溜まり遺構」以外の、遺構を認定できずに取り上げた遺物を示している。これは、土坑のように落ち込みを検出できないものであるものの、出土状況にまとまりが見られるなどの特質をもつ。

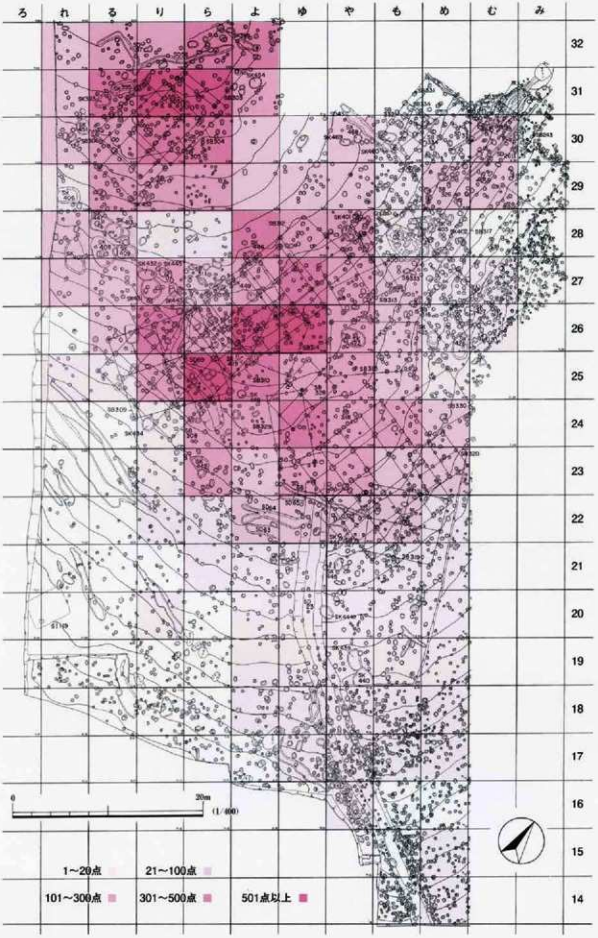
古代の包含層遺物は、これまで本遺跡が報告してきた中で最も出土量が多い。やはり、近代削平箇所が少なく包含層がよく残っていたことが一番の原因と思われる。出土遺物は時期幅をもち、Ⅰ期のものから時期が確認でき、古代全般に及ぶ。特質すべき痕跡をもつものとして、転用硯、墨書、油痕跡、漆付着のものが認められる。今回報告区域では、南端にあたる区域での出土は削平のため少なく、前回報告区域の続きにあたる西側、ほぼ中央にあたる東側ではまとまった出土が認められる。このまとまりを前回は、谷部への流れ込みとした。しかし、中央から東側にかけての分布は、谷部への流れ込みだけでは済まされない分布状況となっている。分布に満遍さが欠け、地形ではない明らかな集中箇所が認められるからである。

中世の包含層遺物は、古代遺物破片数の約２倍の数となっているものの、Gr毎の出土点数を見ると、前回報告と同じような値をもつ。中世遺物は細片が多いということもあるが、近代削平が少なかった分、出土点数の多量区域が多い。最も多いのは、ゆ26Grの828点、次いで、ら31Grの656点となる。500点以上を示すGrでの出土点数は600点前後が主体である。この値と比例するように、土器にもまとまりが認められるため、ら・り31Grを中心とする一画を「中世１号土器溜まり」とし、ゆ・よ26Grと中心とした一画を「中世２号土器溜まり」としている。「中世３号土器溜まり」は、り23Grにおいての完形皿出土を示しており、これは第６項で記述した「り23Gr土器集中」と同じものになる。中世遺物には、土師器食膳具や土師器鉢の他に、白磁や青磁、加賀焼といった陶磁器があり、これらの点数は1Grに20点以内である。これらは、中世土器溜まりの分布と相対しており、多量の遺物量がある Gr では陶磁器出土点数も多くなっている。



グリッド内に示す記号や括弧書き数字は、包含層出土の古代土器破片数を示したものである。記号の●は食膳具、■は貯蔵・調理具、▲は食饌具で、記号の大きさは出土量を示す（小－1つで1～20点、中－1つで100点、大－1つで500点）。
右下の括弧書き数字は、出土土器破片総数で、土器破片数が20点を超えないグリッドについては表示していない。竪穴建物や土坑など遺構内出土は総数に含めていない。

第58図　古代土器包含層出土分布図（S＝1/400）



第59図　中世（11～12世紀）土器包含層出土分布図（S＝1/400）

第Ⅲ章　今回報告区域出土の遺物

第１節　出土遺物の概要

第１項　出土遺物の総量と時期別比率

今回の報告の対象とした区域は、Ｈ地区の大半と報告書Ⅲから除外したＦ地区の南端区域である。８世紀以降を中心とするⅢ群集落の分布域であり、調査グリッドでは、ら～れ－31・32Gr とむ～ろ－26～30Gr、め～ろ－14～25Gr の区域だが、遺構の広がりや土器の分布のまとまりから、ゆ～ろ－30～33Gr では前回報告した部分も一部存在する。

今回報告する区域より検出された遺構は、竪穴建物１軒、掘立柱建物31棟、土坑63基、井戸１基、炉状遺構12基、集石等祭祀遺構４基、道路状遺構１本、溝状遺構15条、土器溜まり４箇所ほどで、出土した遺物は遺物収納箱(645×380×145㎜)で190箱を数える。内訳は須恵器(陶磁器含む)が89箱(Ｆ地区３箱＋Ｈ地区86箱)、土師器が72箱(Ｆ地区５箱＋Ｈ地区67箱)、石製品が10箱(Ｈ地区のみ)、鉄滓・鉄製品が19箱(Ｈ地区のみ)で、遺物片総数で示すと古代の須恵器28,856点(食膳具14,524／貯蔵具14,319／土製品13)、古代の土師器27,732点(食膳具1,494／煮炊具25,968／土製品270)、中世の土器20,339点(陶磁器401／土師器食膳具19,896／煮炊具41／土製品１)、石・石製品385点、鉄滓・鉄製品約7,800点となる。

今回の報告区域は過去の造成工事によって完全に消失した区域はなかったが、遺構下底面のみで包含層や遺構埋土層が削平された区域が600㎡ほどあり、これを今回の報告面積3,600㎡から差し引いた約3,000㎡が実質調査面積となる。これまでの報告でも示したが、遺跡における遺物出土指数（1,000㎡換算での箱数比率。田嶋明人「古代の土器と中世の土師器」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第５回北陸中世土器研究会1992年）は遺跡の格付けを示す要素となるものとされているが、今回報告区域の出土量から割り出した遺物出土指数は63.3であり、報告Ⅳ区域の54.2や報告Ⅲ区域の43.4よりも高い数値となる。遺物出土が多い竪穴建物が密集する報告Ⅱ区域の59.1よりも高い数値であり、これは大規模なＨ区古代土器溜まりが存在すること、そして中世の土器廃棄土坑が数多く存在することが要因であろう。

遺物の時期は、これまでの報告区域と同様、田嶋明人編年の北陸古代土器編年と北陸中世土器編年案（田嶋編年で示す場合の古代土器は「古代○期」、中世土器は「中世○期」と示す）、そして筆者が報告Ⅱと Ⅲ、Ⅴで考察した三湖台集落資料を基軸とした土器編年案（「三湖台○期」と示す）で示す。

額見町遺跡は、Ⅰ群集落、Ⅱ群集落が古代Ⅰ１期から古代Ⅲ期までを中心とし、古代Ⅳ期以降はやや衰退傾向を示す集落群であるのに対し、Ⅲ群集落は古代Ⅲ期以降に中心をおく傾向があり、竪穴建物の数はⅠ群、Ⅱ群集落よりも著しく低下する。それに比例して掘立柱建物が増加するわけであるが、特に中世１期に位置付けられる掘立柱建物が広く展開することが当群集落の特徴である。また、今回の報告地区では、古代Ⅳ２新期～Ⅴ期の遺構がⅢ～Ⅳ１期の遺構の数を凌ぎ、それが土器溜まりの主体的時期に反映されている。前回報告した仏堂や大型

出土遺構名	須恵器食膳具	須恵器貯蔵具	土師器食膳具	土師器煮炊具	土製品	石製品	遺構別計
竪穴建物	2(2.0%)	1(1.0%)	0(0.0%)	97(97.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	100(0.2%)
掘立柱建物	130(21.6%)	106(17.6%)	18(3.0%)	314(52.2%)	3(0.5%)	31(5.1%)	602(1.1%)
土坑	1,348(20.7%)	1,196(18.4%)	218(3.3%)	3,628(55.7%)	69(1.1%)	52(0.8%)	6,511(11.4%)
炉状遺構・集石遺構	11(11.6%)	27(28.4%)	0(0.0%)	57(60.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	95(0.2%)
道路状遺構	884(24.4%)	1,626(44.8%)	49(1.3%)	1,050(28.9%)	7(0.2%)	14(0.4%)	3,630(6.4%)
溝状遺構	59(22.7%)	44(16.9%)	5(1.9%)	146(56.1%)	3(1.2%)	3(1.2%)	260(0.4%)
土器ダマリ内集中	1,764(17.7%)	1,931(19.4%)	134(1.3%)	6,113(61.3%)	23(0.2%)	9(0.1%)	9,974(17.5%)
土器ダマリ・包含層・ピット	10,326(28.8%)	9,388(26.2%)	1,070(3.0%)	14,563(40.7%)	178(0.5%)	276(0.8%)	35,801(62.8%)
計	14,524(25.5%)	14,319(25.1%)	1,494(2.6%)	25,968(45.6%)	283(0.5%)	385(0.7%)	56,973

Ｈ地区及びＦ地区南端区域出土古代遺物集計表（破片数表示）

※なお、土器ダマリ内集中とはＨ区古代土器ダマリうち集中１～３のみを別に集計したものである

井戸を中心とする仏教施設はⅢ群集落の中核であり、その仏堂施設の存続時期や繁栄の様相が、そのまま当地区の遺構や土器の中心的時期に相当していると理解されよう。なお、これまでの報告においては古代遺構の盛衰の様子を述べたが、当地区の古代建物遺構は、竪穴建物が1軒、掘立柱建物も17棟と少なく、集落群のはずれに位置している感がある。古代においては当地区が建物空間というよりも土器廃棄場（祭祀場）という性格をもつものであり、それは上記に示した遺物集計表の、土器溜まりや包含層出土が8割という高い数値を有し、土坑が11％程度に留まるという状況からも明確であろう。

次に、中世土器についてだが、全て中世1期の範疇におさまるもので、11世紀2/4期頃から12世紀中頃の100年を超える程度の時期幅に入る。大型掘立柱建物をはじめとして14棟が存在しており、当集落群の中で最も中世遺構が分布する地区である。遺物出土は、中世土器溜まり遺構を中心に、掘立柱建物、土坑からも多く、土師器食膳具をはじめとして、白磁碗皿や灰釉陶器碗が多く出土する。前回報告地区の1.5倍近くの出土量があり、この時期の加賀地域の白磁出土量としては突出した量と言えるだろう。なお、遺物の時期は、中世1－Ⅰ期（南加賀8Ａ期）が3割弱、中世1－Ⅱ1期（南加賀8Ｂ期）が7割弱、中世1－Ⅱ2期（南加賀8Ｃ期）が1割程度といったところである。

出土遺構名	土師器食膳具	土師器煮炊具	白磁食膳具	施釉陶食膳具	陶磁貯蔵具	土製品	遺構別計
掘立柱建物	954(99.4%)	0(0.0%)	5(0.5%)	1(0.1%)	0(0.0%)	0(0.0%)	960(4.7%)
土坑・井戸	2,620(99.3%)	5(0.2%)	5(0.2%)	6(0.2%)	0(0.0%)	1(0.1%)	2,637(12.9%)
土器ダマリ・包含層・ピット	16,349(97.4%)	33(0.2%)	273(1.6%)	110(0.7%)	17(0.1%)	0(0.0%)	16,782(82.4%)
計	19,923(97.7%)	38(0.2%)	283(1.4%)	117(0.5%)	17(0.1%)	1(0.1%)	20,379

Ｈ地区及びＦ地区南端区域出土中世遺物集計表（破片数表示）

第2項　出土遺物の分類と器種名

1．古代遺物

古代遺物は大半が土器・土製品で構成されるものだが、少量の鉄製品と石製品が出土する。石製品は、砥石（大型砥石含む）、鍛冶炉材石などの鍛冶関係の遺物とカマドや炉の芯材などの部材があり、鉄製品では馬具、刀子、鉄鏃、鎌、釘、加工途中品などがある。鉄鏃の出土は多く、馬具の轡部分の完形品も良好な資料である。

古代の土器・土製品は、食器として分類される須恵器と土師器、施釉陶器、そして須恵質製品と土師質製品とがある。施釉陶器で古代に位置付けられるのは緑釉陶器のみで、近江産と推察される有台碗が2点出土する。須恵器は食膳具と貯蔵具、土師器は食膳具と煮炊具に機能分化している。各器種を食膳具、貯蔵具、煮炊具に大分類する中で、各個別の器種名を付しているが、須恵器の鉢や甑などの調理具機能を持つものについては貯蔵具に、土師器の鉢類については煮炊具に分類してある。各器種名並びに土師器粘土素材における分類、胎土特性に関しても、これまで報告してきた『類見町遺跡Ⅱ～Ⅳ』の分類案に準拠しているので参照いただきたい。

以上の食器類を除くと、各土製品は283点出土する。土製品については分類案提示とするまでもないので、今回報告地区出土の概要をここでまとめておく。

まずは、須恵質の土製品だが、文房具類である円面硯の破片が8点、土製形代である馬形土製品片が3点、南加賀窯跡群で使用された貯蔵具専用焼台2点が出土する。当地区の円面硯出土量は多いとは言えないが、時期的に古代Ⅳ～Ⅴ期に位置づけられるものが主体であることが特徴であろう。転用墨溜め・転用硯は6点、墨書土器は3点と少なく、油煙痕跡をもつ灯明皿転用坏類も26点と前回報告地区に比べて少ない。ただ、当地区では漆付着痕跡のある須恵器坏類が5点確認されており、注目される。

次に土師質土製品だが、煮炊きに伴う竈関連用具として、竈形土製品が87点、円筒形土製品が31点、支脚形土製品が51点出土する。前回報告地区の竈形21点、円筒形2点、支脚形29点に比べるとその差は歴然で、Ａ地区～Ｃ地区の出土量に近い（Ａ区＝竈：84点、円筒：6点、支脚：103点、Ⅱ報告区＝竈：38点、円筒：5点、支脚：60点、Ⅲ報告区＝竈：64点、円筒：23点、支脚：100点）。今回報告地区の掘立柱建物の数から考えて、意外な数値だが、出土箇所が古代土器溜まりに集中しており、古代Ⅲ～Ⅳ期の煮炊用土師製品をまとめて廃棄した感がある。なお、他に製塩土器片が8点、漁労網錘として使用される管状土錘が8点、土師器焼成に伴う焼成

道具として使用される匣鉢状土製品が79点出土している。

2．中世遺物

当報告地区より出土する中世遺物については、大量の土師器食膳具でほぼ構成されることは前述したとおりだが、これに灰釉陶器と白磁類などの陶磁器類が定量含まれることが特徴である。灰釉陶器は碗類が117点、瓶類が4点確認され、ほとんどが東濃窯産と推察され、灰釉陶器から山茶碗の過渡期的な段階のもので占められる。型式的には丸石2号窯式から明和27号窯式、そして一部西坂1号窯式を含み、年代的には11世紀1/4～12世紀初頭頃に位置付けられる。白磁類は碗皿類283点が出土する。細片での出土が多いが、接合可能なものは少なく、かなりの個体数が使用廃棄されていたものと見られる。山本B期から山本C期に位置付けられ、中世土器の年代と合致する。この他に、中世焼締陶器12点、中世須恵器1点が確認される。中世焼締陶器は加賀または越前と思われる甕で、中世須恵器は珠洲のすり鉢である。破片のため時期はわからないが、当中世資料には中世1－Ⅱ2期に位置付けられる土器群も存在しており、共伴する可能性もある。なお、中世土器の分類並びに胎土や焼成状況などについては、古代土器と同様、『額見町遺跡Ⅱ～Ⅳ』報告の分類案に準拠してあるので参照いただきたい。

第2節　古代の遺構出土遺物解説

ここでは、古代に位置付けられる遺物について述べるが、遺構出土の個別の遺物説明は観察表に譲るとして、特徴的なものや特記的事項、時期を代表できるような一括資料の土器様相などを中心として、竪穴建物、掘立柱建物、炉状遺構、集石遺構、土坑、道路状遺構、ピット、土器溜まり遺構の順で提示する。なお、本報告においては、鉄滓や羽口、炉壁等の製鉄及び鍛冶に関連する遺物は除外してある。これは、当遺物群の取り扱いについて、遺跡全体との検討が必要であり、地区別に報告する性格のものではないと判断したからである。当遺跡は生産・鉄加工の工程を行っていることが、集落の成立や遺跡としての性格を物語る重要な要素と見ており、遺跡総体での報告を科学分析結果とともにまとめ、報告書Ⅵとして別冊で刊行する予定である。よって、今回の報告では、鉄生産に関連する遺物群の報告は一切行わず、それと切り離して処理できる鉄製品のみを報告する。

第1項　古代竪穴建物及び古代掘立柱建物、古代炉状遺構、古代集石遺構出土遺物

当地区で検出された古代の建物遺構は、1軒の竪穴建物と17棟の掘立柱建物があるが、出土遺物が少ないため、炉状遺構、集石遺構などもふくめて、ここでは述べておきたい。

1．古代竪穴建物出土遺物（SI119）

小型竪穴建物で床面の一部まで削平を受けているため、遺物出土量は極めて少ない。カマド掘方や掘方土坑から少量の須恵器坏B蓋や坏A、土師器煮炊具が出土しており、概ね古代Ⅳ1期からⅣ2古期に位置付けられる。なお、同様に掘方土坑から鉄製鎌の刃先部分が出土している。直刃鎌の破片と思われるものである。

2．古代掘立柱建物出土遺物

掘立柱建物の柱穴から出土する遺物は、遺構としての一括性や同時期性を問いにくい資料が多い。それは遺物出土量に少なさにも起因するが、遺構重複するものが多い点と土器混入が多い点がその要因である。よって、ここで図示した遺物がこの掘立柱建物に伴うものであるのか、微妙な部分があり、最終的には出土遺物全体の様相と遺構から時期決定するしかない。以下では特筆すべき遺物のみを取り上げ、その他は一覧表に代えたい。

SB326は四面廂落ち溝をもつ仏堂的建物の南方に主軸をあわせて建ち並ぶ付属屋的建物で、仏堂的建物の時期と同様、古代Ⅳ1期からⅣ2期の土器が出土している。器種は須恵器坏B・坏A・盤A・横瓶・甕、赤彩土師器坏B蓋、土師器煮炊具で、坏Aは内外面に厚く油煙痕の付着する転用灯明具が出土している（15）。当遺物が仏教施設に関連することを示唆する資料と言えよう。なお、時期は6世紀に位置付けられるため当掘立柱建物に関係しないが、須恵質に還元焔焼成された埴輪片1点（18）が出土している。注目すべき遺物なので、ここで取り上げておきたい。

《須恵質埴輪》　当埴輪は所謂、高火度還元焔焼成された須恵質埴輪で、表面はチョコレート色に酸化冷却される。底径の大きさから見て、人物埴輪の円筒部と思われるもので、胎土から南加賀窯跡群産と推察される。外面は縦方向のハケ目調整、内面は縦方向のナデ調整で、底部内面を回立させて、底部内側にはみ出した粘土をケズリ取っている。矢田野エジリ古墳出土の人物埴輪と同一技法であり、焼成具合や発色の状況から見ても、矢田野エジリ

遺構名	遺物の概要	遺構名	遺物の概要
SB214	遺物出土なし。掘立柱建物の形態から古代認定。	SB316	遺物13点。古代Ⅳ２期までⅠ～Ⅱ期の須恵器・土師器。
SB215	遺物出土なし。掘立柱建物の形態から古代認定。	SB326	遺物28点。古代Ⅳ２期までⅤ～Ⅵ期の須恵器・土師器。坏Ａ灯明具２点、須恵質の入物埴輪１点。
SB218	遺物出土なし。掘立柱建物の形態から古代認定。		
SB303	遺物14点。古代Ⅳ２新～Ⅴ期の須恵器・土師器。	SB329	遺物２点。古代Ⅰ～Ⅱ期の須恵器。
SB304	遺物11点。古代Ⅴ期前後の須恵器期・土師器。	SB330	遺物35点。古代Ⅴ期頃の須恵器・土師器。
SB305	遺物11点。古代Ⅳ～Ⅴ期の須恵器・土師器。	SB331	遺物10点。古代Ⅱ期の須恵器・土師器。
SB311	遺物39点。古代Ⅳ期頃の須恵器・土師器。	SB332	遺物出土なし。掘立柱建物形態から古代認定。
SB314	遺物１点。古代Ⅲ～Ⅴ期の土師器。	SB333	遺物10点。古代Ⅰ～Ⅱ期の須恵器・土師器。
SB315	遺物14点。古代Ⅳ期前後の須恵器・土師器。	SB334	遺物３点。古代Ⅱ～Ⅲの須恵器。

今回報告地区の古代掘立柱建物出土遺物一覧表

の埴輪と同一窯産と考えられよう（小松市教育委員会『矢田野エジリ古墳』1992年）。額見町遺跡からは極めて少量ではあるが、６世紀前半に位置付けられる須恵器坏Ｈが出土しており、特にＨ地区からは定量出土する。近隣にそのような時期の古墳、特に人物埴輪を伴うとすれば、それは埴輪の性格からして、首長墳として位置付けられるものであり、額見町遺跡の北東に近接立地する三湖台古墳群最大の前方後円墳、臼のほぞ古墳が最も可能性が高い。当古墳の時期は、中司照世氏が古墳の形状から示した６世紀中頃という時期と（中司照世「加賀における古墳時代の展開」『古代文化』29巻９号、1977年）、伊藤雅文氏が埴輪や葺石を持たない点から示した５世紀中頃という時期とがあるが（伊藤雅文「加賀国の大型古墳の特質について」『発掘された北陸の古墳報告会資料集』まつおか古代フェスティバル実行委員会、1997年）、当埴輪を臼のほぞ古墳からの流出資料と位置付ければ、有力な時期判断資料となりえるだろう。中司氏の６世紀中頃説を支持したい。

３．古代炉状遺構出土遺物

古代炉状遺構としたものには、鍛冶炉、製炭土坑、屋外炉的な被熱遺構がある。SJ65、SJ72、SJ75は鍛冶炉で、SJ66は製炭土坑、他は屋外炉と思われるものである。遺物も少なく、特筆すべき遺物も出土してないが、鍛冶炉や製炭土坑の時期を示す遺物を図示しているので、解説しておきたい。

まず、SJ65だが、10点の須恵器と土師器が出土している。１の須恵器坏Ａが炉床下から出土しており、概ね古代Ⅳ期に位置付けられる。

SJ66は19点の須恵器・土師器が出土しているが、図示できたのは２と３の須恵器坏Ｂ蓋・坏Ａで、いずれも古代Ⅳ１期に位置付けられる。他の遺物も概ね同じ時期に位置付け可能である。

SJ72は15点の須恵器・土師器が出土しているが、図示できたのは４の須恵器椀のみで、古代Ⅵ２～Ⅵ３期に位置付けられるものである。他の遺物はⅤ期に位置付けられるものもあるため、遺構帰属時期は、古代Ⅴ～Ⅵ期とするのが妥当だろう。

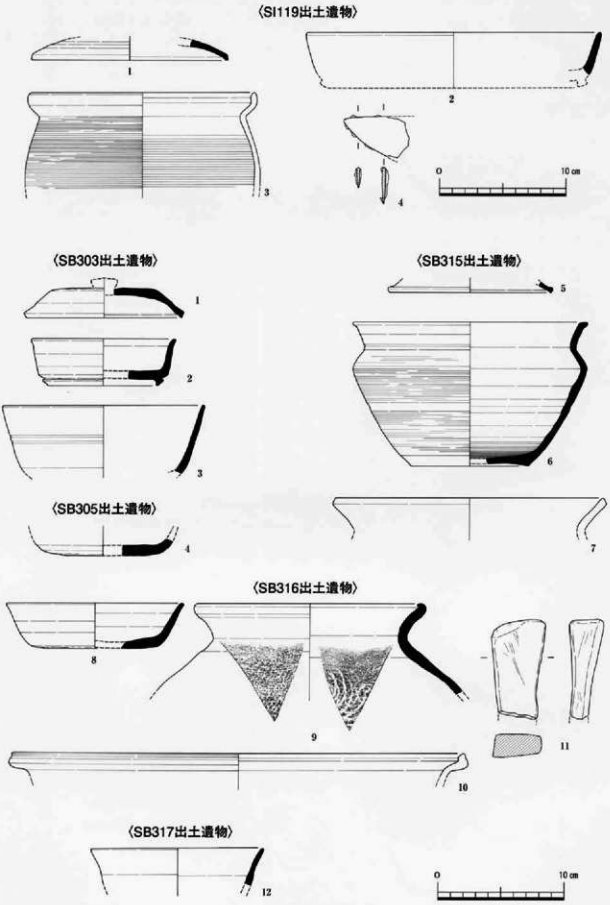
４．古代集石遺構出土遺物

本報告の古代集石遺構は４基確認されるが、図示したSX04以外はほとんど遺物の出土がない。

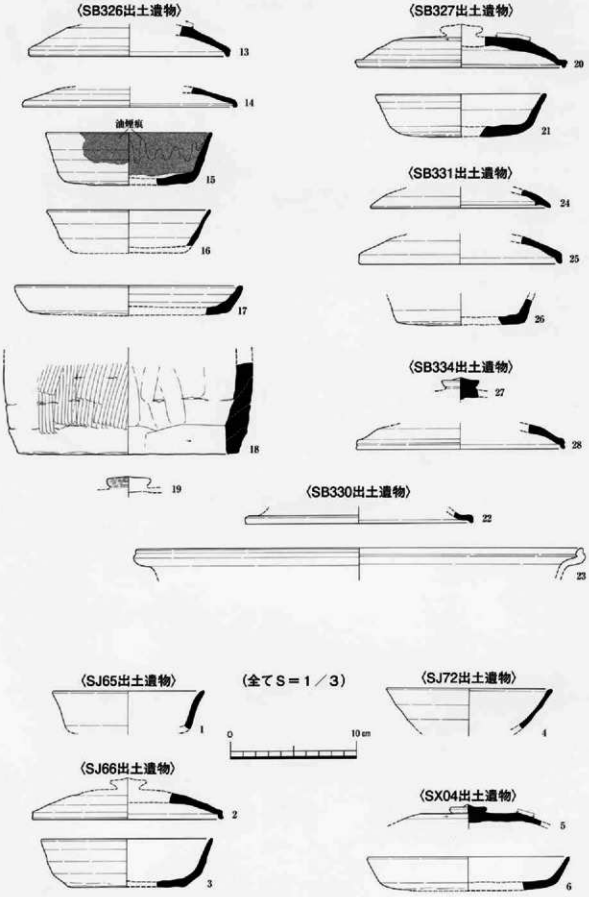
SX04は古代Ⅳ期に位置付けられる図示した須恵器坏Ｂ蓋と盤Ａ以外に壺類の破片、土師器煮炊具の破片等43点が出土している。概ね同様の時期のものである。

第２項　古代土坑出土遺物

古代土坑から出土する遺物は総点数6,511点と、今回報告地区の中では11.4％の高い割合を占める。ここに図示した遺物も140点と多いが、一つの遺構で出土する一括性高い資料群となると、その数は少ない。ここでは、編年資料として比較的一括性をもつ土器群を中心として、遺物解説を行う。また、出土遺物の中には特筆すべき資料、特殊な資料もあるため、それらについては一括資料としての性格を有していなくとも、解説を加えることとしたい。



第60図　古代竪穴建物出土遺物（SI119）・古代掘立柱建物出土遺物1（SB303～SB317、全てS＝1／3）



第61図　古代掘立柱建物出土遺物２（SB326～SB334）・古代炉状遺構等出土遺物（SJ65・SJ66・SJ72・SX04）

1．SK393 出土遺物

当土坑は通常規模の土坑で、出土遺物も多いとは言えないが、時期的にまとまった土師器煮炊具が105点ほど出土しており、浅鍋6割、長胴釜3割、短胴小釜1割で構成される。図示したものは2点とも土師器浅鍋で、古代Ⅵ1期頃に位置付けられ、外面スス痕跡、内面ヨゴレ痕跡など、煮炊き使用の痕跡を持つ。共伴する須恵器は貯蔵具のみで、使用済みの煮炊具をまとめて廃棄した感がある。

2．SK395 出土遺物

SK393に隣接する土坑で、土器の時期は若干後出するが、時期的にまとまった土師器煮炊具が多く出土する点でSK393によく似ている。須恵器は17点出土するも、ほとんどがⅤ期以前のもので、図示した3のみが当土坑に伴うものと理解する。南加賀窯産の椀Aで、4の土師器椀Aや5の椀Bと、口縁部内面が肥厚する点や器形特徴など類似しており、同時期のものと判断される。全体的な器形や法量、口縁部内側が肥厚する特徴、椀Bの高台がやや足高風となる点など、南加賀7A期の標識資料とした当遺跡SK49の土師器焼成坑に特徴に近い。つまり、古代Ⅶ1期に下る可能性があるが、3の腕Aは古代Ⅵ3期新段階に位置付けられよう。なお、須恵器腕Aは内外面にスス痕をもち、5の土師器椀Bも内外面にススの付着が見られる。これに土師器煮炊具が共伴する訳だが、古代Ⅵ3期的特徴を持つもので、144点出土する。図示したものは6点と少ないが、いずれも外面被熱による剥落やスス付着、内面頸部にコゲ帯痕跡など煮炊き使用痕跡を伴う。

以上の土器以外に匣鉢形土師製品と鉄製品が出土している。匣鉢形片は32点出土しており、12・13のとおり、円筒形の土師器焼成道具で、口径14㎝台のものである。鉄製品は刃部を欠損する雁又式鉄鏃で、鏃被部は突関形態、茎部は刺突形態を呈する。

3．SK400 出土遺物

当土坑は中世井戸SE02の外周土坑として掘削されたものであるが、古代遺物が定量出土している。須恵器食膳具105点、須恵器貯蔵具118点、土師器食膳具10点、土師器煮炊具99点を出土しており、図示した須恵器食膳具に示すように古代Ⅴ～Ⅵ期に位置付けられるものが大半を占める。同時期に位置付けられる土師器鉢Eも2個体（21・22）出土しており、図示していないが須恵器鉢E片も12点確認される。土器の時期や仏器的器種の出土から見て、仏堂的建物に関連して掘られた可能性もあるが、井戸は中世に位置付けられるものであり、周辺からの流れ込みや混在と見るのが妥当だろう。

4．SK407 出土遺物

通常規模の土坑で、概ね古代Ⅳ期に位置付けられる土器が出土している。当土坑において特筆すべきは須恵器甕の出土量である。大甕65点、中甕81点、小甕68点が出土しており、図示した須恵器小甕25は略完形品である。南加賀窯産の焼き歪み品で、焼成の際の胴部亀裂が入っている。製品出荷されずに廃棄されたものと見られるが、当土坑の甕類片は同様の意味で廃棄された可能性があろう。なお、有段式の円筒形土師製品が2個体出土しており、内面にはススの付着が見られる。

5．SK408 出土遺物

通常規模の土坑で、須恵器食膳具61点、須恵器貯蔵具86点、土師器食膳具11点、土師器煮炊具516点を出土するが、図示できたものはさほど多くはない。概ね古代Ⅳ2古期を前後する時期に位置付けられるもので、須恵器はほとんどが南加賀窯産、土師器も南加賀窯産でほぼ占められる。特筆すべき器種として40の台付き鉢が出土している。脚部に方形スカシをもつもので、内面には被熱の際のススの付着が顕著に見られる。

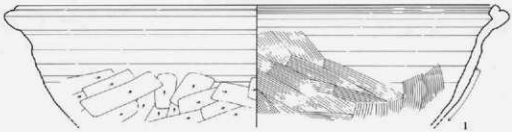
6．SK409 出土遺物

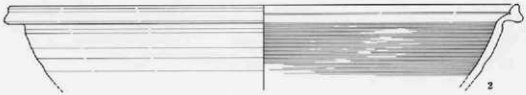
SK408に連結する土坑で、規模、形状ともに類似し、出土土器の時期も近いが、古代Ⅳ2古～新期と若干後出するものが多い。須恵器食膳具40点、須恵器貯蔵具49点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具153点が出土しており、須恵器、土師器ともにほぼ南加賀窯産で占められる。なお、42の須恵器坏B身であるが、古代Ⅳ2古期に位置付けられる略完形品で、外底面には焼成前の「生」刻書が確認される。当刻書須恵器については、『額見町遺跡Ⅳ』の第4章総括において、他の「生」墨書と共に考察しているので参照願いたい（187頁）。

7．SK422 出土遺物

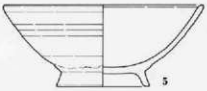
通常規模の土坑で、須恵器食膳具96点、須恵器貯蔵具72点、土師器食膳具19点、土師器煮炊具351点が出土している。図示したように、古代Ⅱ3～Ⅲ期に位置付けられるものが主体で、当地区の中では古い時期の土坑

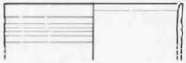
〈SK393出土遺物〉



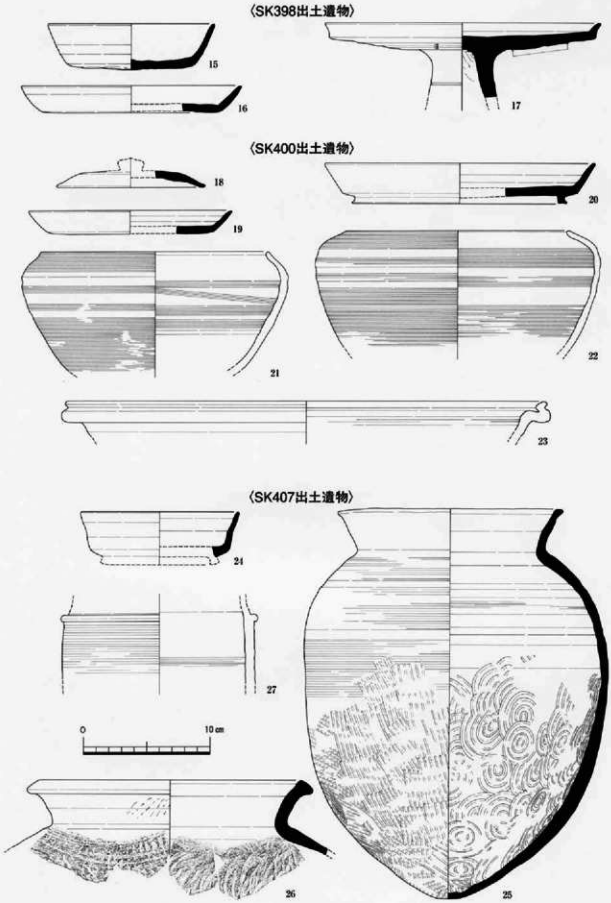


〈SK395出土遺物〉





第62図　古代土坑出土遺物1（SK393・SK395、全てS＝1／3）

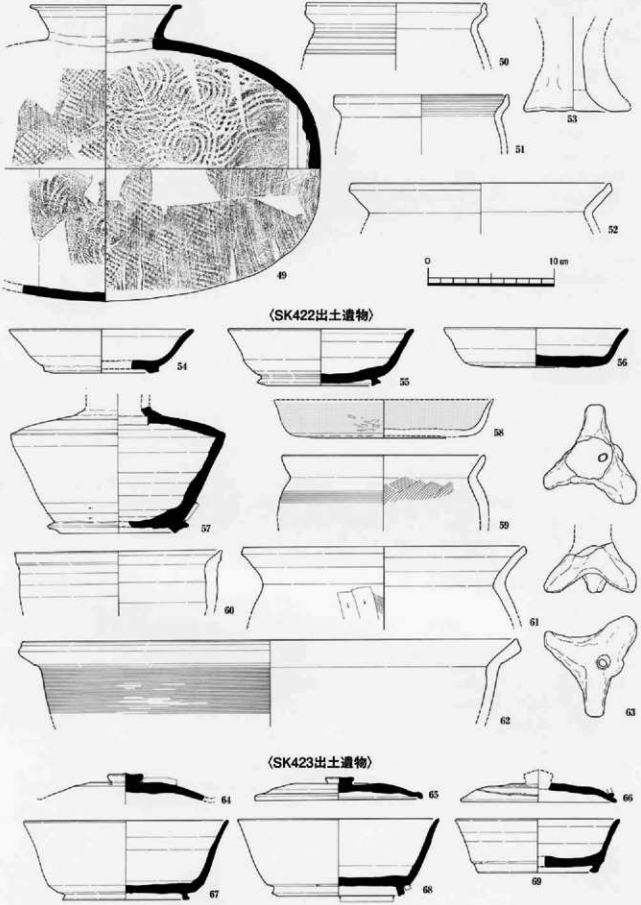


第63図　古代土坑出土遺物2（SK398・SK400・SK407、全てS＝1／3）

〈SK408出土遺物〉

〈SK409出土遺物〉

第 64 図　古代土坑出土遺物３（SK408・SK409 －１、全てＳ＝１／３）



第65図　古代土坑出土遺物4（SK409－2・SK422・SK423－1、全てS＝1／3）

資料である。須恵器、土師器ともに南加賀窯産がほとんどを占めるが、60の鉢状器形を呈す土師器短胴小釜は北加賀に多い砂粒質の素地粘土を持つもので、搬入品に位置付けた。また、63の支脚形土師製品だが、地元B類胎土のもので、脚端が三叉に分かれる形態のものである。形態などから同時期に位置づけるべきものと考える。

8．SK423・SK424 出土遺物

2基の土坑が連結しており、出土遺物が同時期であることと、接合関係にある遺物が多かったことから、同時期に廃棄、埋没した土坑と位置付けた。SK423で須恵器食膳具245点、須恵器貯蔵具72点、土師器煮炊具268点、円筒形土師製品4点、SK424で須恵器食膳具360点、須恵器貯蔵具180点、獣足盤や馬形などの特殊須恵製品3点、土師器食膳具50点、土師器煮炊具560点、支脚形や円筒形、竈形、管状鍾などの土師製品5点が出土する。遺物の出土量が多く、器種も豊富で、古代Ⅳ2新期前後の良好な土坑資料と言える。須恵器胎土は91の盤Aで能美窯産が確認できた以外は全て南加賀窯産で、南加賀窯産でも良質な胎土を使用するものが多い。この点も当期の特徴と言えよう。当土坑の特筆すべき遺物は多く、坏部内面に「大」と思われる墨書を施す須恵器高坏A（74）や胴部に波状文を3段施し、小型鉢状器形を呈す作りの良い優品の小型壺（76）、把手付鉢Bの半完形品（92）などがあるが、その中でも以下の須恵器について、詳しく述べておきたい。

《須恵器獣足盤：94》　獣足盤は盤本体部分が欠損するものの、完存する2本の足部が出土しており、接着部の様子から盤の高さが8～10㎝程度を測る平底の大型三足盤であったと推察される。足部の盤との剥離面には櫛目状線刻が入れられており、脛が曲がり、足が真っ直ぐ立つように付けられている。獣足装飾は5本の爪（指）が写実的に描かれ、極めて精巧に作られており、大きさや作りなどから見て優品価値の高い特注品と位置付けられる。古代Ⅳ2期～Ⅴ1期頃に位置付けられる南加賀窯産で、仏堂的建物で使用される火舎として特注生産されたものだろう。

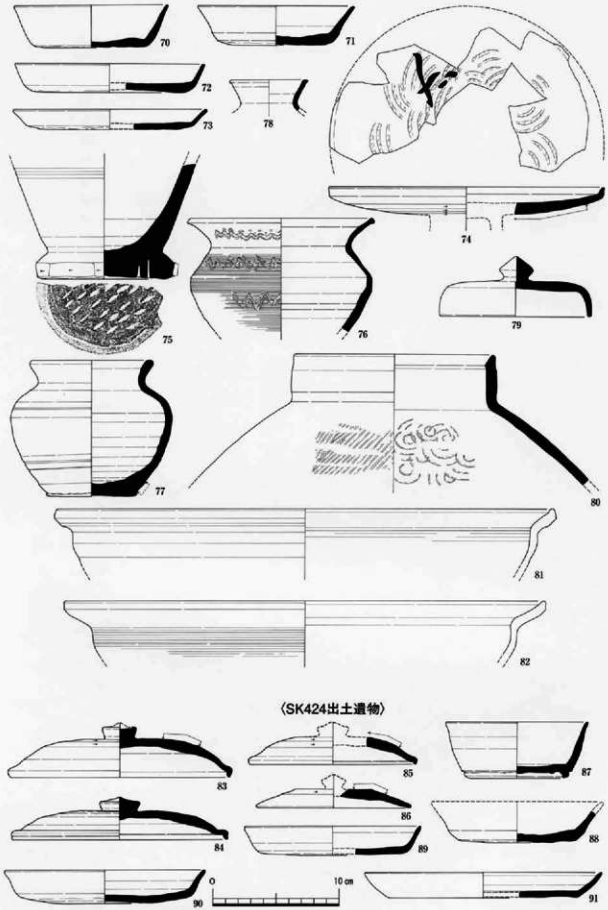
《須恵器大甕：95》　南加賀窯産で、他の器種よりも半世紀ほど古く位置付けられる。破片での出土だが、口縁部から底部まで復元できており、大甕の成形方法が復元できる数少ない資料である。復元される成形方法は、①鉢状底部成形：底部円盤に粘土紐積み上げ成形し（高15㎝程度）、丸底に叩き出し成形した後、内面をハケ目調整、外面をナデ調整する。②胴部積み上げ成形：①の鉢状底部が乾燥した後、その上へ粘土紐積み上げ＋叩き成形（内面亀裂の入ったDb当て具）をしながら、胴部上位まで積み上げ成形する。③胴部上位叩き出し成形：胴部中位の張り出しと頸部への絞りのための叩き出し成形（内面Dc当て具）をする。④胴部中位の形を整えるための叩きを施す（内面亀裂の入ったDb当て具）。⑤口縁部成形：ロクロ成形で口縁部を成形する。⑥頸部接合：胴部乾燥の後、胴部上端を切り揃え、その上に粘土紐積み上げし、⑤の別作り口縁部を接着して、接合頸部をユビナデして仕上げる。⑦黄土塗布：成形完了の甕の胴部上半内外面に黄土（赤色酸化鉄粒を混ぜ込んだ土）を塗布する。

以上が成形方法だが、黄土塗布により当部位の叩き具痕、当て具痕は目地が埋まった感じで、光沢のない黒色釉と化し、その上位では濃緑色の降下釉が垂れて付着する。鉄釉とも呼ばれる黄土塗布による化粧は、猿投窯の大甕を中心として6世紀には確認できるものであり、南加賀窯では8世紀前半から散見される。

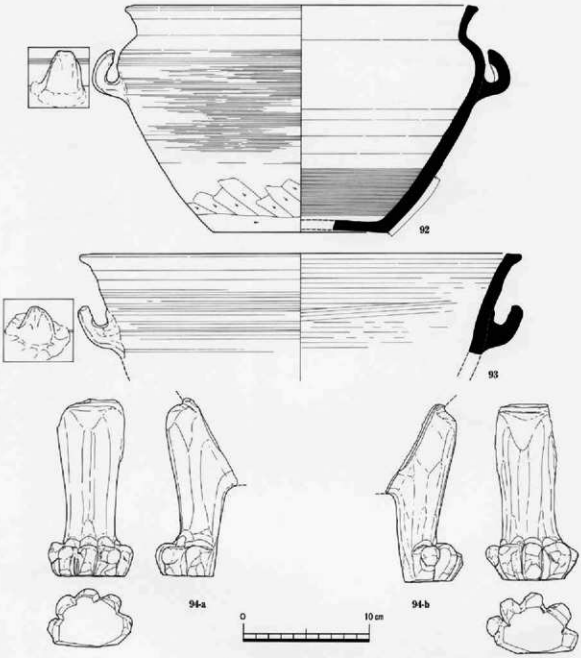
《馬形須恵製品：96》　馬形は頭部、尾部、胴部四本を欠く胴体部分の完存品で、太い粘土紐を何本か合わせて中実の胴部としている。背の部分には線刻とともに粘土の剥離痕があり、粘土貼付による鞍の装飾が施されていたものと予想される。南加賀窯産で、Ⅱ3期以降のものだろう。

9．SK425 出土遺物

小型の土坑で、須恵器食膳具21点、須恵器貯蔵具11点、土師器食膳具8点、土師器煮炊具225点の出土遺物の構成が示すように、土師器煮炊具を主に廃棄している。特に、土師器浅鍋が多く、図示したように煮炊具の9割以上が浅鍋である。ほとんどが外面スス痕、内面ヨゴレ痕の煮炊き痕跡を持つもので、何かの目的で浅鍋を大量に使用し、まとめて廃棄したものと考えられよう。時期は古代Ⅳ2新期を前後する時期にほぼまとまり、99の須恵器瓶Dもほぼその時期に位置付けられる。口頸部を欠損する胴部完存品で、頸部剥離痕から見て欠損後に使用した痕跡は認められない。肩に2個対で、胴部下位に1個の三耳が付きれる当器種の古形態で、耳の成形も粘土塊を貼り付けて整形し、穴を開けて作るものである。底部糸切りを行うもので、南加賀窯産である。なお、南加賀窯産の須恵器貯蔵具専用焼台（100）が出土しているが、口縁部がやや内傾して立ち上がる形態のもので、古代Ⅳ2新期に位置付けて問題のないものである。口縁部は欠損している。



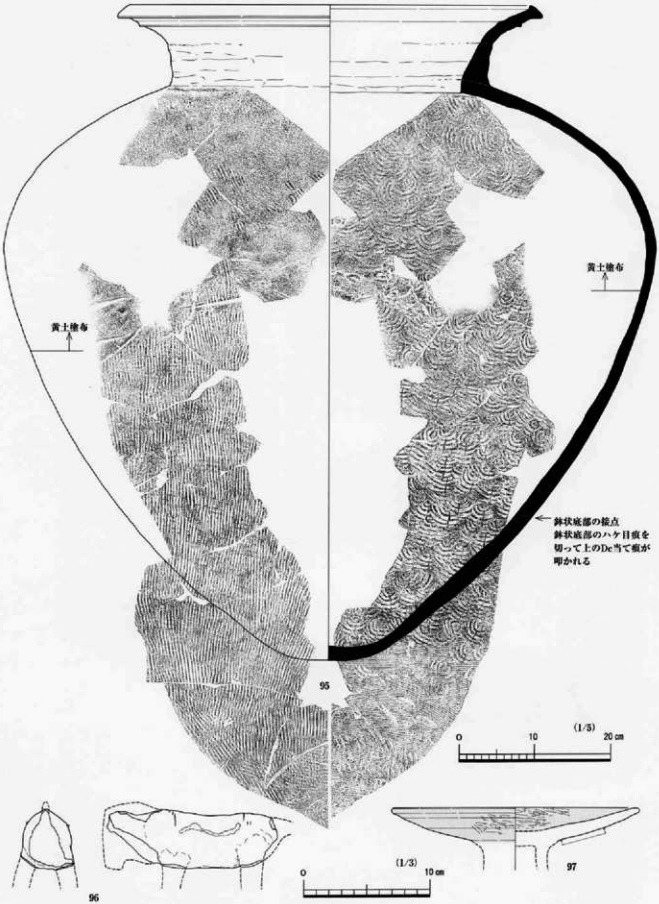
第66図　古代土坑出土遺物5（SK423－2・SK424－1、全てS＝1／3）



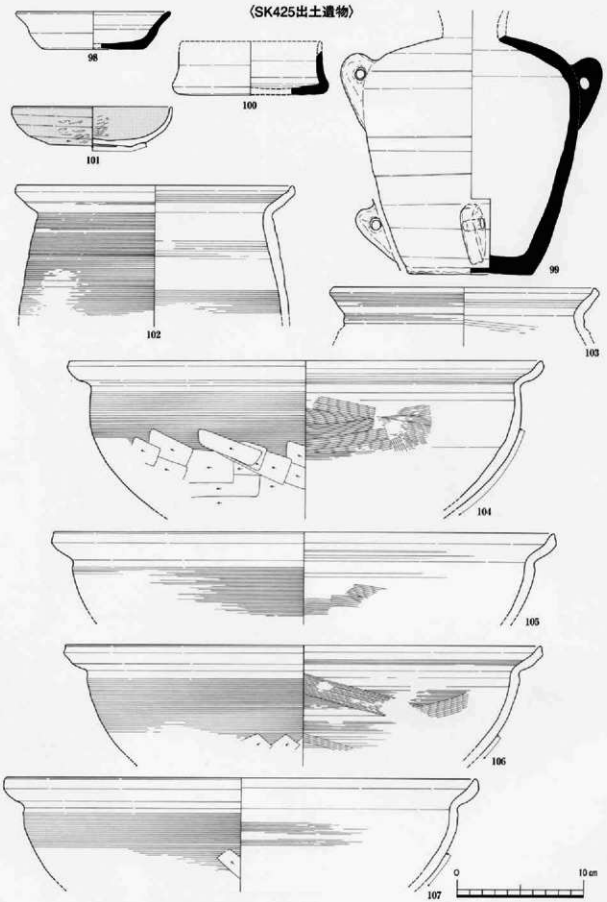
第67図　古代土坑出土遺物６（SK424－２、全てＳ＝１／３）

10. SK426 出土遺物

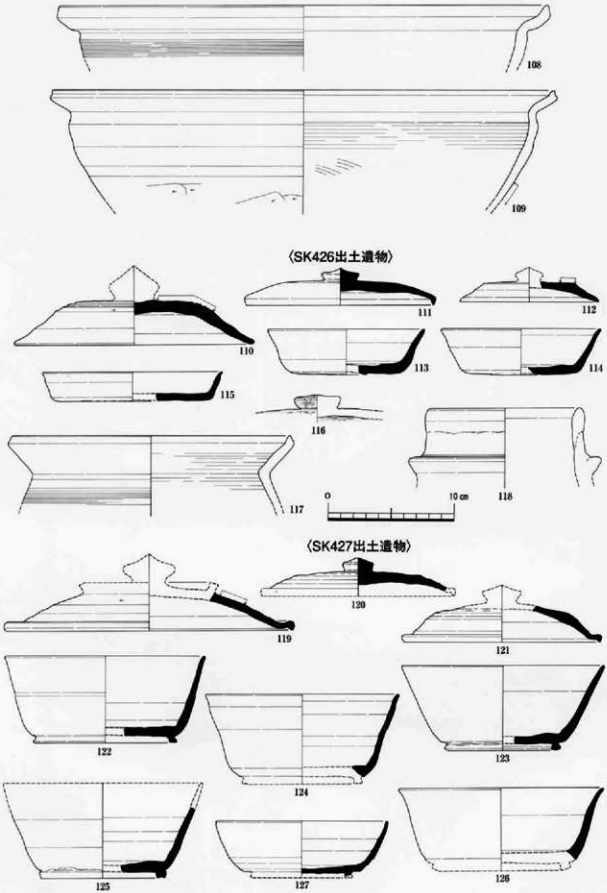
方形プランを呈す土坑で、SK425 に隣接して掘られる。出土土器は古代Ⅳ２新期を前後する時期にまとまる傾向があり、SK425 と関連性を持って掘られた土坑なのであろう。須恵器食膳具 90 点、須恵器貯蔵具 41 点、土師器食膳具 19 点、土師器煮炊具 215 点、円筒形土師製品２点が出土しており、須恵器、土師器ともに南加賀窯産で占められる。特筆すべきものとしては、110 の特殊蓋がある。口縁部折り曲げのない素口縁の大型蓋で、天井部に沈線を施すなど鉢蓋と位置付けられる。また、118 の円筒形土師製品は玉縁状有段式のもので、内面にはスス痕跡が残る。



第68図　古代土坑出土遺物7（SK424－3、95のみS＝1／5、他は全てS＝1／3）



第69図　古代土坑出土遺物8（SK425－1、全てS＝1／3）



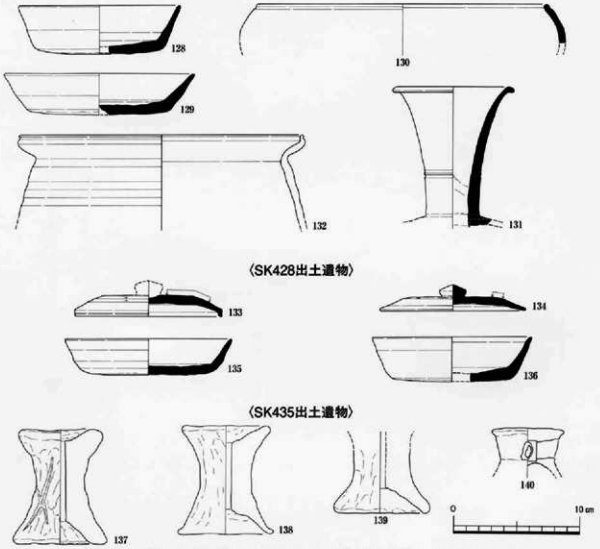
第70図　古代土坑出土遺物9（SK425－2、SK426・SK427－1、全てS＝1／3）

11. SK427 出土遺物

小型の土坑であり、出土遺物も須恵器食膳具70点、須恵器貯蔵具18点、土師器食膳具8点、土師器煮炊具150点と多くはないが、須恵器食膳具を中心に比較的残りの良いものが多い。古代Ⅴ1期を中心にⅤ2期に下るものも含む資料で、当地区では数少ない当期の良好な土坑資料である。須恵器、土師器ともに南加賀窯産が大半を占めており、坏Bを中心に出土している。南加賀窯産特有ともいえる突帯付鍋蓋（119）の出土が確認でき、130の須恵器鉢Eが出土する。鉢Eは薄手の精巧な作りのもので、当期に多い土師器鉢Eに比べると優品に位置付けられるだろう。

12. SK435 出土遺物

遺物出土総点数が40点未満の土坑であるが、図示したように支脚形土師製品が4個体廃棄されていた。当遺跡では一般的な支脚形の形態である、中心に孔をもつ円筒形のC類（137～139）が主体だが、下端がハ字に広がる低い形態の特殊な器形を呈するものが出土しており（140）、これは基部に横からスカシ孔が穿たれていた。支脚形として他に例のない特異な形態である。なお、C類の略完形品137には「×」のヘラ記号が記されている。支脚形に「×」記号を記すものは少なからず確認されており、土師器煮炊具の底面に見られる「×」のヘラ記号との関連または何か火にまつわる呪術的な意味が込められていた可能性もある。この「×」記号を持つ同形態の支脚形が当土坑の位置する、ゆ21・22Gr～ら21Grの古代土器溜まり遺構において広く出土しており、古代土器廃棄場にまとめて捨てられたものか、または、この区域がそのような煮炊き行為を伴うような飲食儀礼祭祀の場にあたっていた可能性がある。



第71図　古代土坑出土遺物10（SK427－2・SK428・SK435、全てS＝1／3）

第３項　古代の道路状遺構出土遺物

今回報告を行う区域には、道路状遺構２が存在している。道路状遺構２は、溝状遺構SD23の掘削とその下底面の整地により道路構築する切通し形態のもので、ここで扱うものは全てSD23より出土した遺物である。なお、SD23はⅡ区古代土器溜まり遺構と重複し、土器溜まり層を掘削して構築しているため、SD23として遺物取り上げしたものの中に古代土器溜まり遺構に帰属すべきものが多く混在している。極力、そのようなものはⅡ区古代土器溜まり遺構に帰属させて報告したが、抽出しきれていないものが一定量含まれていることを予め断っておきたい。

SD23から出土した遺物は、須恵器食膳具884点、須恵器貯蔵具1,626点、土師器食膳具49点、土師器煮炊具1,050点、土師製品７点、石製品14点と多い。その多くは溝状遺構の覆土より出土する遺物であるが、溝の底面整地土の中にも遺物が含まれており、これが道路構築年代を示す資料となる。Ⅱ区部分では先に示したように、下層に存在する古代土器溜まり遺構のために整地土層の土器の抽出が困難だが、Ｆ区部分では下位に遺構重複がないため、整地土に食い込む遺物の抽出が比較的容易である。細片資料の遺物の詳細を確認していないため、不確定要素はあるが、図示した８の須恵器鉢蓋や10の須恵器坏Ｂ蓋、20の須恵器坏Ｂ身が整地土層出土であり、概ね古代Ⅴ２期に位置付けられよう。これよりも古い時期の土器は確認されるが、古代Ⅵ期まで下る資料は確認できておらず、Ⅱ区についてもⅥ期に下る資料は確認されない。Ⅱ区では、26・27の須恵器坏Ａや32の須恵器盤Ａ、44の須恵器瓶Ｂが整地土層に伴う古代Ⅴ２期資料と位置付けられようか。以上、出土遺物から見て、道路状遺構２の構築年代は古代Ⅴ２期であり、以下にそれよりも古く位置付けられる遺物も含め、特筆すべき資料を中心として解説する。

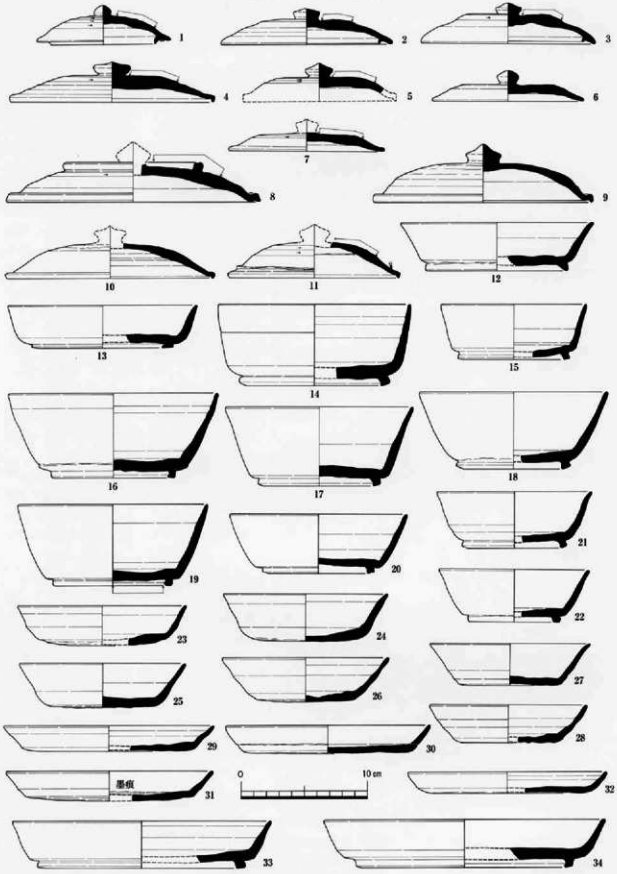
《古代Ⅰ２期の須恵器》　この時期に位置付けられる遺構資料はなく、当資料が今回報告地区の中では最もまとまった当期資料である。１の坏Ｇ蓋と41の甕、49の平瓶、55の壺Ⅰ、56～58の中甕が該当し、坏Ｇ蓋と甕は能美窯産、中甕は南加賀窯南群産、平瓶と壺Ⅰは南加賀窯北群産である。坏Ｇ蓋は当期の典型的な形態の半完形品であり、壺Ⅰも典型的な当期の器種である。また、甕の注口部外周には注口具を差し込んだ際の欠けが認められる。なお、時期は古代Ⅱ２期に下るが、坏Ａ蓋の半完形品が２個体近接して整地層に埋められており、坏Ｇ蓋の出土地点と近接するなど、意図的な埋納も感じられる。

《古代Ⅳ２新期～Ⅴ２期の須恵器食膳具》　当遺構出土土器の中心となる時期で、４～７の坏Ｂ蓋、15～22の坏Ｂ身、25～28の坏Ａ、29～32の盤Ａ、33・35の盤Ｂが該当する。31の盤Ａ（転用墨溜め）と35の盤Ｂが能美窯産である以外は、全て南加賀窯産である。能美窯産を始めとして、南加賀窯産でもこの時期の須恵器には白色に高火度焼成するものが多く、白色胎土を選択するなど優品生産の意識が感じられ、この時期の南加賀地域産須恵器の特徴となっている。

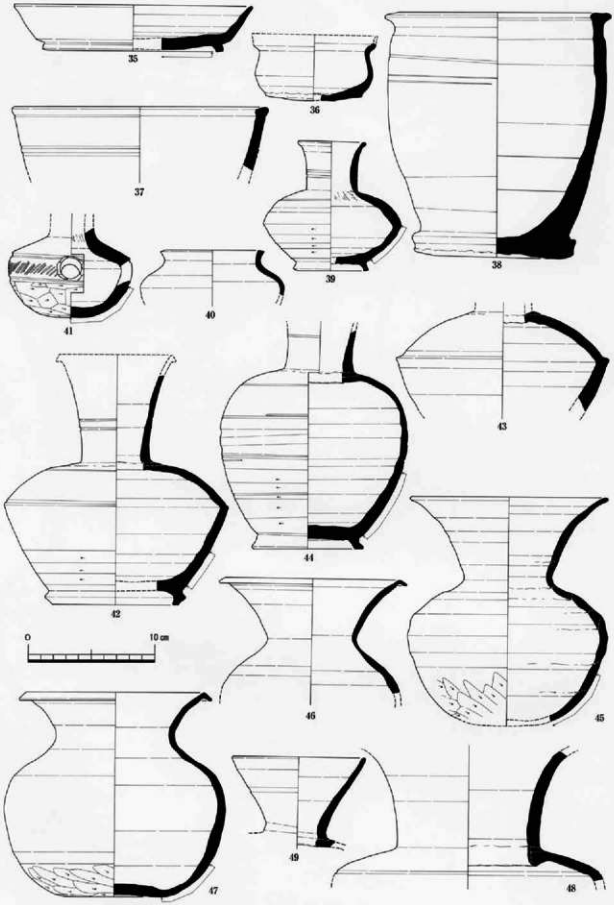
《古代Ⅳ２新期～Ⅴ２期の須恵器鉢・壺・瓶類》　38の鉢Ｆ、39・40の小型壺Ｆ・小型瓶Ａ、42～44の瓶Ａ・瓶Ｂ、51～54の壺Ｆが該当する。38の鉢Ｆや39の小型瓶Ａ、42の瓶Ａ、44の瓶Ｂ、53の壺Ｆは半完形などの遺存度高いもので、特に瓶Ａ、瓶Ｂは口縁部を欠くが、胴部は略完形のものである。破片で出土しており、完形に近いものを破砕した感がある。なお、45～47の丸底で球胴形の胴部を呈し、広口の口頸部が付く、他に例を見ない瓶が存在するが、全体的に薄手に作る点や口頸部がラッパ状に開き、口縁部端を外側に折り曲げる形状、焼成具合や色調の点から、当期に位置づけるものと判断した。南加賀窯産であり、瓶Ｇと器種名を付した。このような胴部球胴器形で頸部を絞る器形の瓶類は、胴部上端にあたる部分を円盤閉塞してから球胴に変形させる風船技法で成形するものが多いのだが、当器種については、瓶Ｄのような胴部端からそのまま粘土紐を積み上げて口頸部成形している。胴部から頸部への繋ぎの部分が薄くなる特徴や口頸部器形は瓶Ｄに近似しており、技法的に共通性を見出せる。

《古代Ⅳ２～Ⅴ期の須恵器甕》　これまで報告した道路状遺構において、路面造成する際の土器として須恵器甕を使用する事例が多かったが、当遺構においてもそれは共通しており、遺存度高く復元できる須恵器甕が５個体出土している。いずれも中甕で、59の胴部が長胴化する古代Ⅴ期に出現する形態である以外は、いずれも古代Ⅳ２期に位置付けられる。胴部上端から口頸部へ粘土紐を積み上げて外反器形を作り出すもので、口縁部端を面形成して仕上げる。４個体とも全体的な器形は似ているが、60・61が胴部径44～48㎝、器高45～51㎝の通常規模なのに対し、62・63は胴部径38～40㎝程度とひとまわり小型を呈す。小型のものは底部欠損のため、全

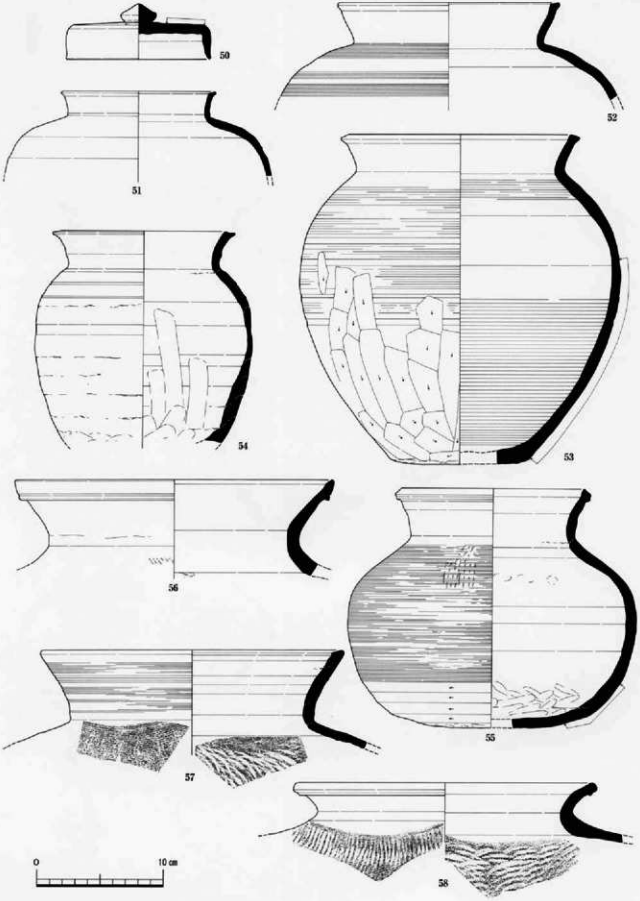
〈道路状遺構2：SD23出土遺物〉



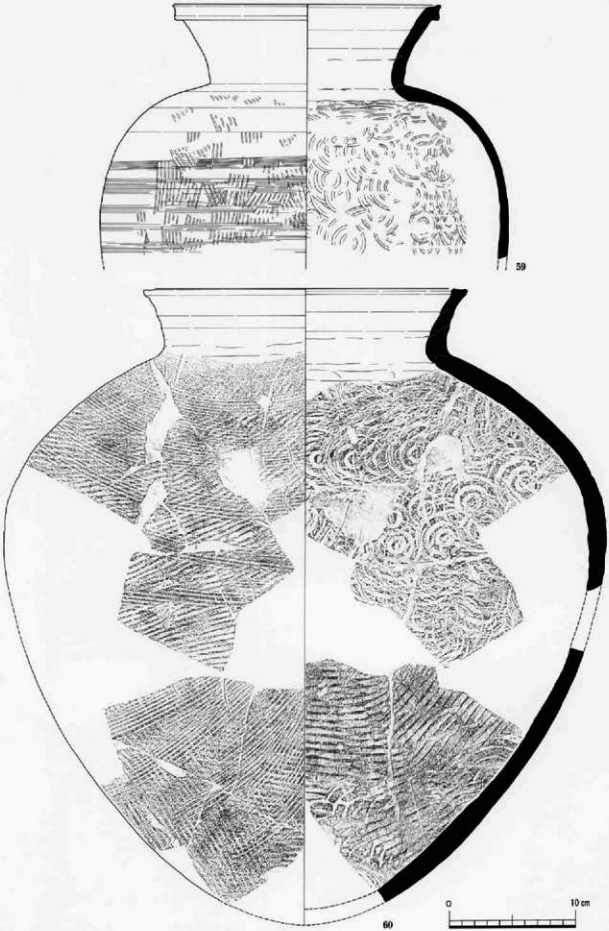
第72図　古代道路状遺構出土遺物1（道路状遺構2－1、全てS＝1／3）



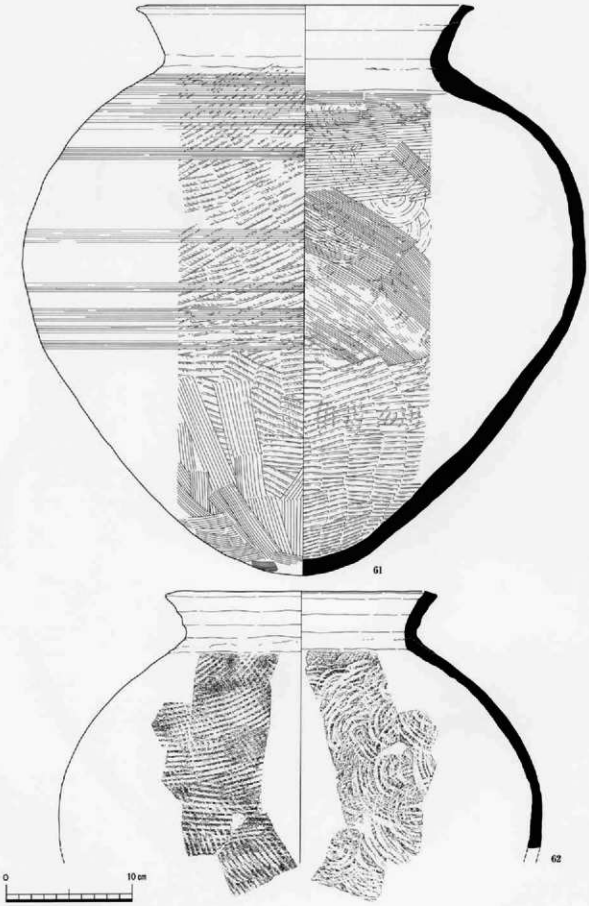
第73図　古代道路状遺構出土遺物２（道路状遺構２－２、全てS＝１／３）



第74図　古代道路状遺構出土遺物３（道路状遺構２－３、全てＳ＝１／３）

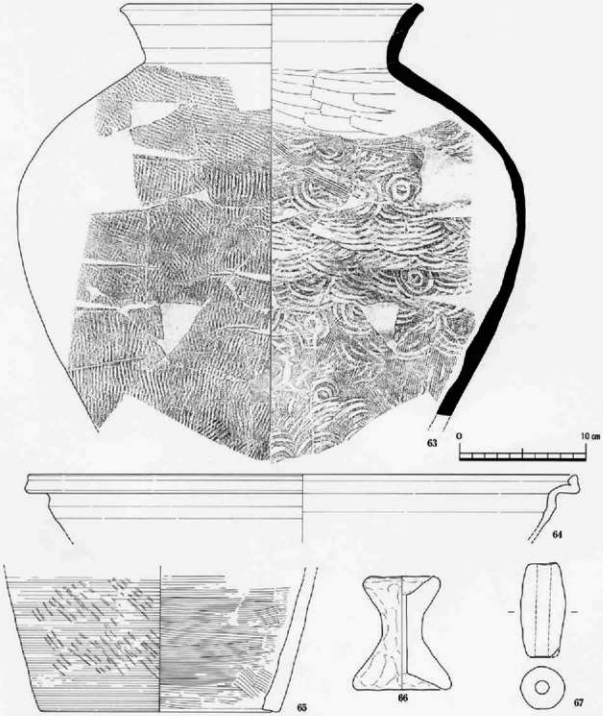


第75図　古代道路状遺構出土遺物4（道路状遺構2－4、全てS＝1／3）



第76図　古代道路状遺構出土遺物5（道路状遺構2－5、全てS＝1／3）

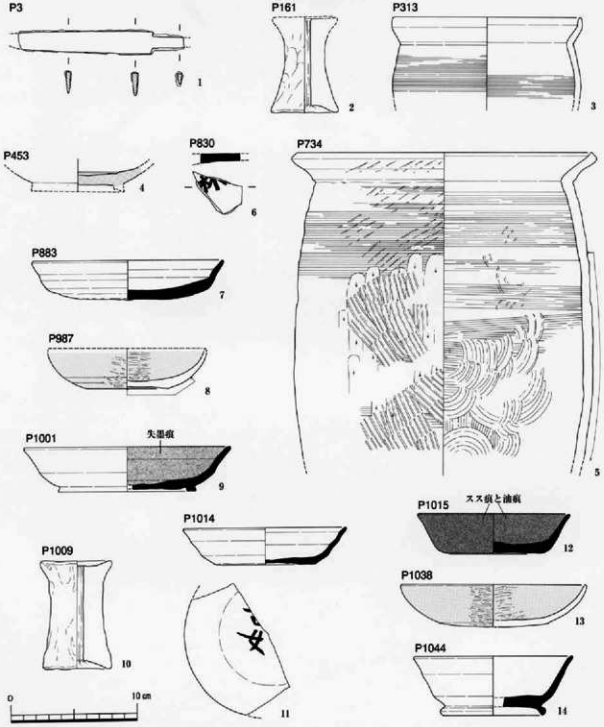
体的な成形方法は不明だが、60・61の甕は遺存度が高く、成形方法の分かる資料で、両個体に共通する叩き具や成形方法が看取できる。成形手順を示すと次の通りとなる。①胴部1次成形：底部円盤に粘土紐積み＋横軸成形叩き（外面Hc類叩き具、内面Da類当て具）をして胴部上端まで積み上げる→②胴部上半2次成形：肩部の張り出しと胴部上端への絞込みを横軸成形叩き出し（外面Hc類叩き具、内面Da類当て具）により成形する→③口頸部成形：胴部上端から口頸部へ粘土紐積み成形し、回転ナデ調整で仕上げる。④胴部調整：外面カキ目調整（61のみ内面横～斜め方向のハケ目調整）→⑤底部叩き出し成形：成形台からはずし、底部叩き出し成形を縦軸叩き（外面Hc類叩き、内面He類叩き）により行う→⑥底部調整：底部付近外面をカキ目調整工具にて縦方向ハケ目調整。以上、両個体とも同じ成形工具を使用し、底部叩き出し後に外面ハケ目調整で仕上げるという特徴を有しており、同一工人による製作の可能性が高い。



第77図　古代道路状遺構出土遺物6（道路状遺構2－6、全てS＝1／3）

第４項　古代のピット出土遺物

古代に位置付けられるピットは数多く存在するが、図化可能な遺存率高い遺物を出土する事例は少ない。意識的な埋納を思わせる完形品出土や複数の土器がまとまって出土する事例もなく、ここでは墨書土器と朱墨転用硯、緑釉陶器、鉄製品を取り上げる。まず、墨書土器は外底面に「林」と読める６の坏Ａ底部片と外底面に「吉女」と読める11の坏Ａ半完形品がある。６はⅤ期、11はⅥ１期に位置付けられる。朱墨転用硯はⅢ期に位置付けられる９の坏Ｂ身半完形品で、内面全体に朱が付９着し、内底面広く摩滅痕が確認される。劣化も著しく長期使用された可能性が高い。緑釉陶器は４の近江産軟陶の底部片で、底面糸切りナデ調整や釉色から近江中相に位置付ける。鉄製品は刃部が10㎝以上を測る１の大型刀子で、直刃形態を有し、関は両角形態、背は平造りである。



第78図　古代ピット出土遺物（全てＳ＝１／３）

第５項　古代土器溜まり遺構出土遺物

今回報告を行う区域には、H区め～ゆ－18～26Grにおいて大規模な古代土器溜まりが確認される。今回の報告でH区古代土器溜まり遺構としたものだが、特に、も～ゆ－21Grにおいて集中箇所があり、その周辺のGrにおいても土器集中が確認された。調査段階では～ゆ－21Grの集中箇所について、特に土器溜まり５として取り上げたが、その集中区の中にもまとまりを持った集中単位があり、単位ごとに時期に若干の差異があったため、今報告ではH区古代土器溜まりと大きく捉える中で、土器溜まり５とした箇所を５つの集中区（集中１～５）に分けた。集中１～５以外はH区古代土器溜まりとして一括して扱い、調査時に土器溜まり４としたものについても、隣接Gr の集中区と特に差異が認められなかったため、H区古代土器溜まりの中に包括して報告する。

１．集中１出土遺物

須恵器食膳具123点、須恵器貯蔵具104点、土師器食膳具８点、土師器煮炊具315点、総点数551点と、５つの集中単位の中では出土量が最も少ない。出土土器はH区Ⅰ期の須恵器をはじめとして、古代Ⅳ１期からⅣ２新期まで時期幅をもって土器が出土するが、Ⅳ２古期に位置付けられる須恵器が主体を占め、いずれも南加賀窯産で占められる。当集中区で特筆すべきは、９の円面硯と11の鉄鏃である。円面硯は脚部中程に「十」字スカシをもつ南加賀窯産の圏足円面硯で、脚径は復元で17cmを測る。低平で大型の形態を呈すが、古代Ⅲ期まで上がる可能性は低く、Ⅳ期頃に位置付けられようか。鉄鏃は広身柳葉形鏃で、刃部先端と茎部を欠損するものである。当遺跡では検出例の少ない形態の鉄鏃である。

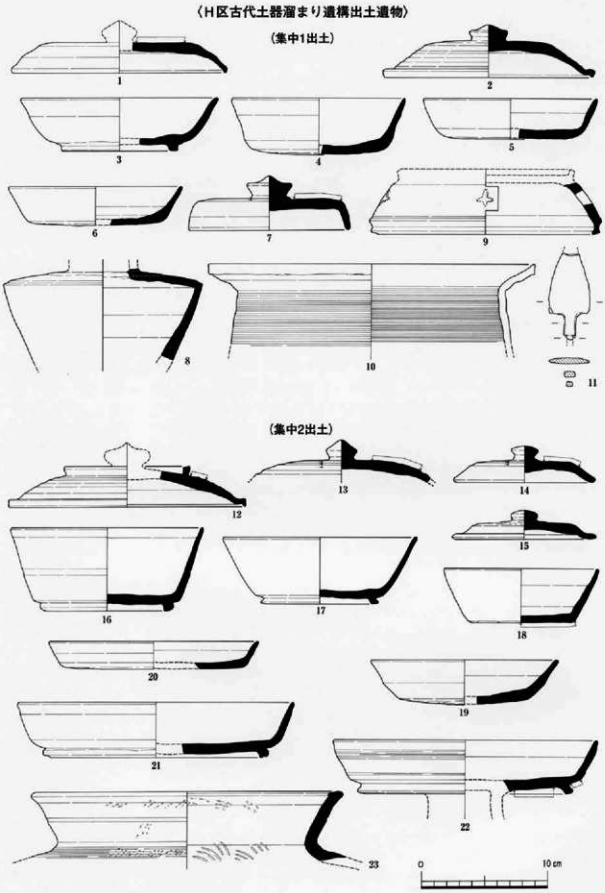
２．集中２出土遺物

須恵器食膳具424点、須恵器貯蔵具385点、土師器食膳具42点、土師器煮炊具1,330点を出土する集中単位で、古代Ⅲ期からⅥ期の幅で土器が出土する。ただ、図示した12～16・18・20～22の須恵器食膳具に見るように古代Ⅳ２新期からⅤ１期に中心があり、この時期の土器廃棄遺構と位置付けた。須恵器は南加賀窯産が大半を占め、12・18のような当期の特徴である良質の白色粘土を使用した須恵器が定量確認される。特筆される出土品としては、22の盤Ｂがある。21の盤Ｂと器形や法量が酷似しており、同時期のものと位置付けられるが、22は体部カキ目調整、底面ケズリ調整を伴う点で異なる。外底面中央には脚部の痕跡も見られ、脚付器種になる可能性が高い。盤Ｂに脚の付される器種は、赤彩土師器でⅤ２期頃に金沢未窯跡群で確認例があるが、他に例を知らない。８世紀後葉～９世紀前半の時期に信濃地域で有台坏や無台坏の坏部器形に脚部が付される特徴的な高坏が生産されており、その影響で越後頸城地方の滝寺窯跡群においても生産が確認されている（新潟県教育委員会『滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群』2006年）。南加賀窯跡群や能美窯跡群では、８世紀後葉～９世紀前半に東海系器種の生産を受容する傾向が見られており、当器種の存在もそのような東海系器種の受容の中で生まれたものと理解されよう。

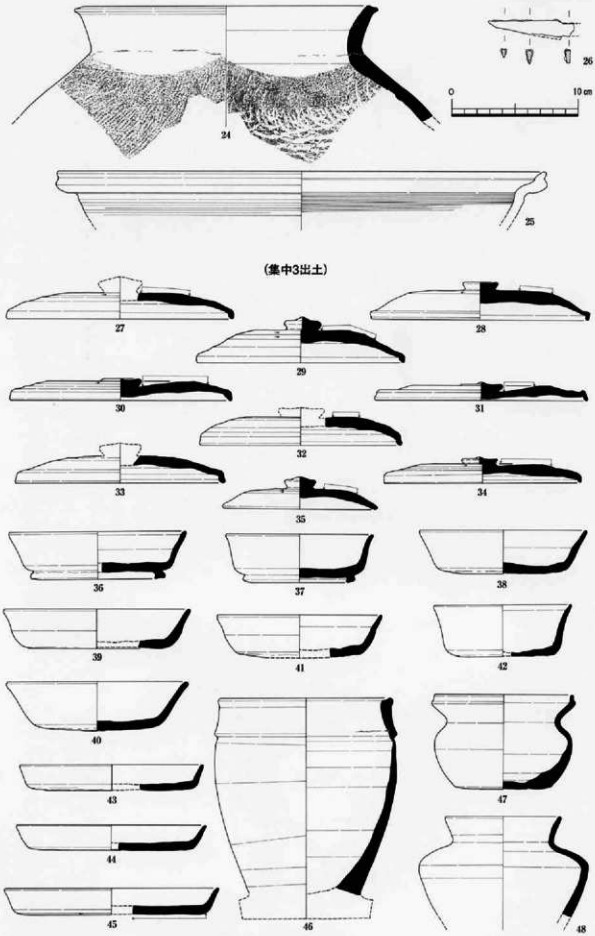
３．集中３出土遺物

須恵器食膳具587点、須恵器貯蔵具617点、土師器食膳具51点、土師器煮炊具1,663点を出土する集中単位で、H区古代土器溜まりの中では最も土器の集中が顕著な単位である。集中２同様、土器の時期幅はあるが、図示した27～45の須恵器食膳具に見るように古代Ⅲ期からⅣ１期に中心があり、共伴する完形の大型瓶Ａ２個体と獣足付羽釜についても同時期と位置付けた。須恵器は南加賀窯産ではほぼ占められ、赤彩土師器も南加賀窯産と思われる。当集中で特筆される出土品は貯蔵具である。出土点数を見ても貯蔵具割合が高く、完形品や半完形品が多い。特に、50・51の瓶Ａは器高32cm、胴径23cm程度を測る大型品で、いずれも底部や台部を一部欠損するだけの略完形２個体が横に潰れる形で出土した。口頸部の長さや外反して広がり気味となる器形、胴部の算盤玉形に張り出す形態から古代Ⅲ期頃に位置付けられるもので、当器種の一般的な法量である器高25cm、胴径18cmと比べるとひとまわり大型を呈す特殊品である。南加賀窯産であり、祭祀的な意味合いを持つ特殊容器として特注されたものだろう。

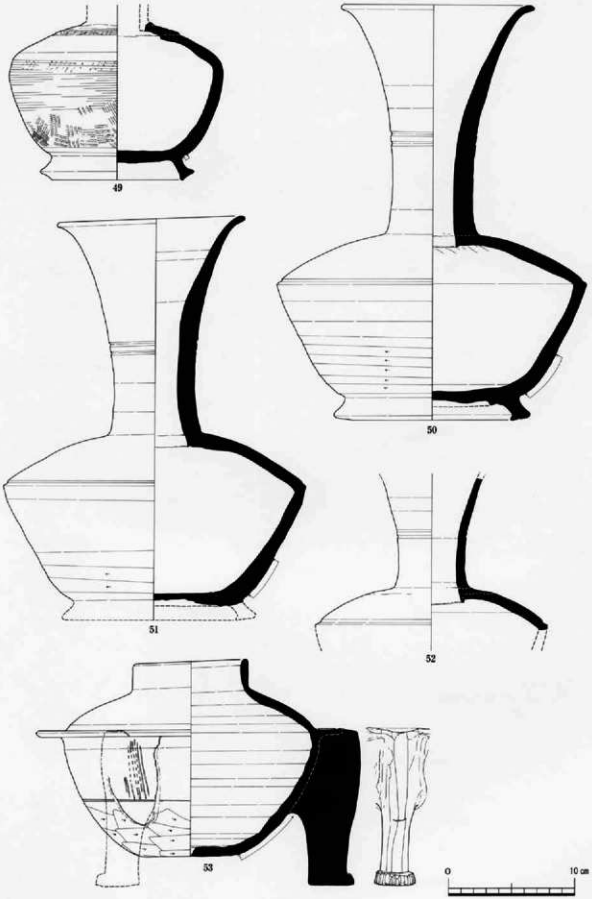
同様に祭祀的容器として使用され、当集中単位に廃棄されたものとして、53の南加賀窯産獣足付羽釜が上げられる。高台を持たない丸底気味の短頸壺を原型として、胴部中位に鍔が付され、それにかかるように長めの獣足が三足付されるもので、獣足意匠は脛状の作り出しと下端接地部の刻みによる簡易な指装飾によって表現している。羽釜は本来鋼製品が原型であり、それをモデルに８世紀代に多彩釉陶器や緑釉単彩陶器として生産される、竈とセットをなす煮炊具である。胴上位に張りをもって頸部へと窄まり、口縁部で極めて短く立ち上がる器形が基本であり、竈に掛ける煮炊具のため、足を付すことはない。どちらかと言えば、当遺跡出土の羽釜は、短頸壺



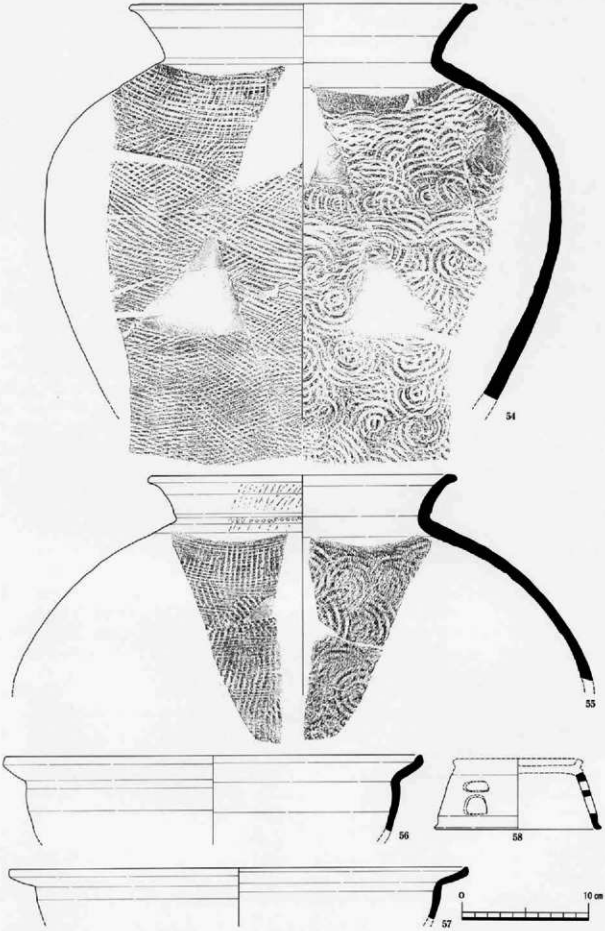
第79図　古代土器溜まり遺構出土遺物１（集中１・集中２－１、全てＳ＝１／３）



第80図　古代土器溜まり遺構出土遺物2（集中2－2・集中3－1、全てS＝1／3）



第81図　古代土器溜まり遺構出土遺物３（集中３－２、全てＳ＝１／３）



第82図　古代土器溜まり遺構出土遺物4（集中3－3、全てS＝1／3）

に三足の獣足が付される獣足壺に鍔を付したものであり、鍔付き獣足壺とするのが適当かもしれない。ただ、そうしなかったのは、当羽釜の足部が獣足壺の獣足形態とは形状に大きな違いがあったことと、獣足壺に鍔付きのものがなく、三足を付さなければ、施釉陶器羽釜に近似していたことにある。時期が新しくなれば、土師器羽釜に三足を付すものも出現していることを考え、竈に掛ける羽釜から竈を必要しない足付きの羽釜へという発展形態とし、獣足羽釜と位置付けた。なお、同じ南加賀窯産で同一形態を持つ足付羽釜の胴部片が加賀市松山C遺跡で出土しており（石川県埋文『加賀市松山C遺跡』2001年）、これに関しては胴部上位に沈線文が施される。

他の貯蔵具としては鉢類や甕類などの出土が多いが、甕類では特に中甕が多く、図示した54・55も通常法量の中甕である。破片が小さく、集中2、集中3、集中5に散在して分布しており、一括廃棄という出方はしていない。また、56・57は土師器浅鍋を須恵器窯で還元焔焼成したものである。器形や調整等から、古代Ⅳ1期からⅣ2古期に位置付けられるもので、土師器煮炊具同様に砂礫を多く混在させた胎土を使用している。土師器煮炊具の還元焔焼成品は意識的に生産されたものではなく、焼成失敗品としての位置付けがなされるものである点から、このような煮炊具の出土は須恵器生産関連遺跡であることの傍証となろう。

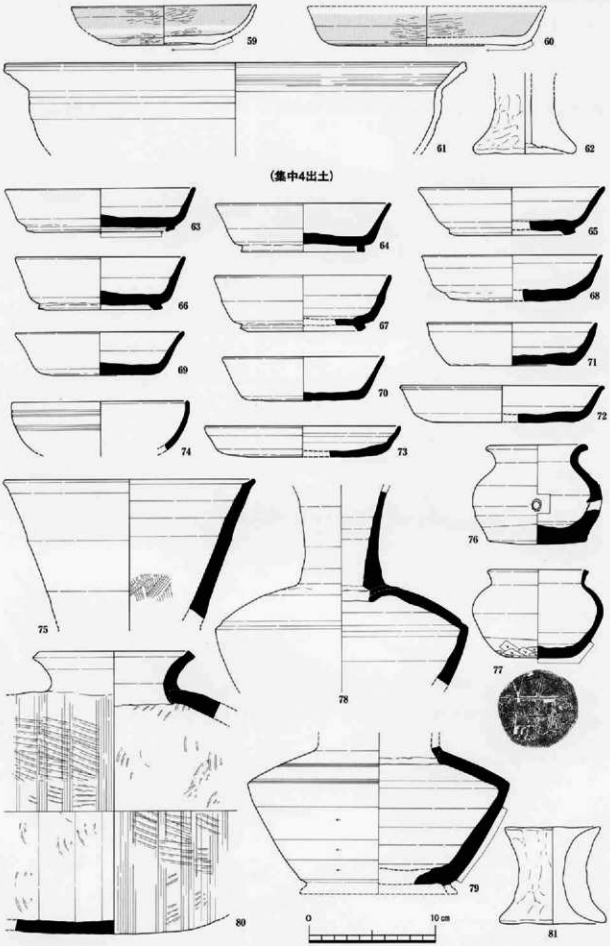
4．集中4出土遺物

須恵器食膳具208点、須恵器貯蔵具180点、土師器食膳具10点、土師器煮炊具1,656点を出土する集中単位である。図示したものは須恵器主体だが、土師器煮炊具が破片で多量出土している。出土須恵器は一部古代Ⅳ2新～Ⅴ1期に位置付けられるものも混在するが、63～69・71・72の須恵器食膳具に見るように古代Ⅲ～Ⅳ1期に位置付けられるものが主体で、図示した貯蔵具についても同時期に位置付けられる。集中3と時期的に符合しており、この時期の土器廃棄場として一体的な存在であった可能性がある。須恵器産地は79が金沢末窯産かと思われる瓶Cが確認されるが、他は南加賀窯産で占められている。当集中単位で特筆すべき遺物としては、74の鉢と76・77の小型壺Fがある。鉢は体部沈線を2条2段に施す体部内湾器形のもので、口縁端部で内側に若干肥厚させる。全体的に薄手で丁寧な作りをしており、金属器を強く意識した製品と位置付けられる。小型壺Fの2個体はいずれも完形品で、76は厚手の作りでやや粗製、77は薄手で作りの良いものである。76は胴部下位に外側からの孔径8㎜程度の穿孔があり、77は外底面に「井」のヘラ記号がある。穿孔を有する小型壺は注口器種として開けられたものと祭祀的意味合いで開けられたものとがあるが、焼成前であることと穿孔の大きさから、前者が該当しよう。ただ、完形品の小型壺廃棄は祭祀的行為であり、特に77の底面ヘラ記号には呪術的意味合いがあるのかもしれない。

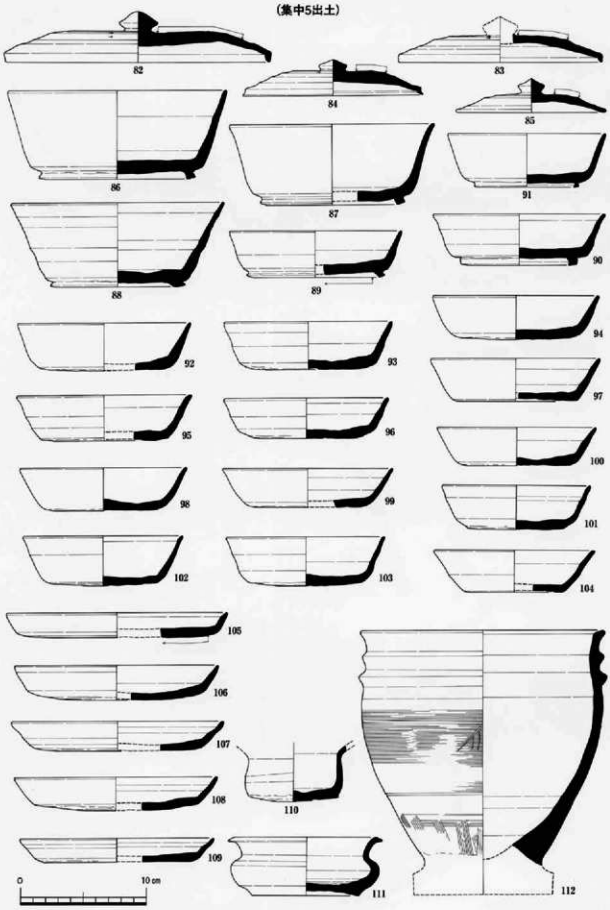
5．集中5出土遺物

須恵器食膳具422点、須恵器貯蔵具645点、土師器食膳具23点、土師器煮炊具1,151点を出土する集中単位である。須恵器貯蔵具の出土量が多く、その中でも甕類が7割近い破片数を占める。甕類の中には遺存度高いものもあり、中甕をまとめて廃棄した感がある。須恵器は古代Ⅲ～Ⅳ1期に位置付けられる食膳具を含むが、主体は古代Ⅳ2新期からⅤ1期にかけてのもので、82～85・87・88・91・96～104・106～109が当期に該当する。産地は一部能美窯産が含まれるが、主体は南加賀窯産で、この時期に見られる良質の白色胎土による須恵器はあまり目立たない。

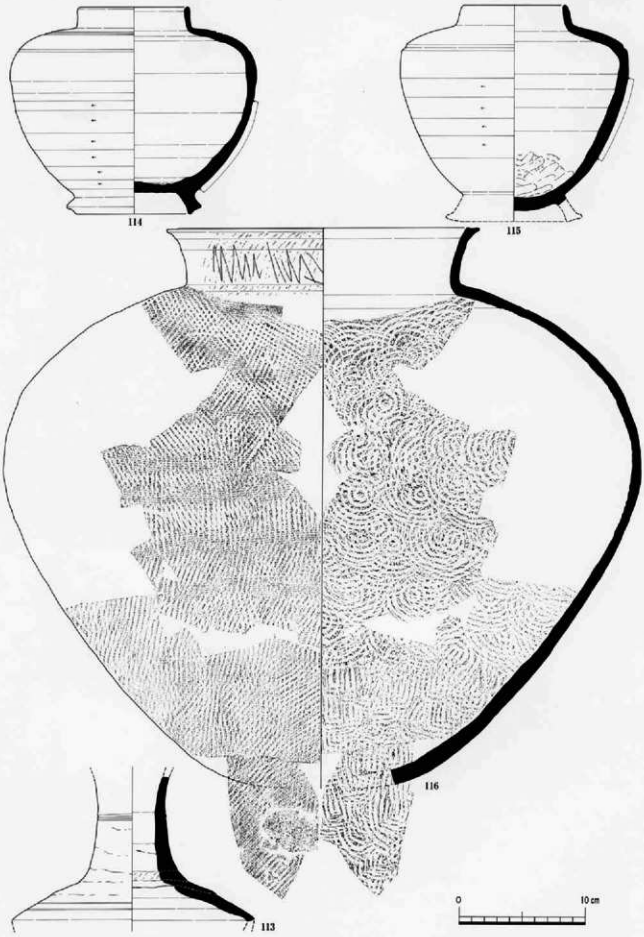
貯蔵具では112の鉢Fや114と115の壷Aの半完形品は当該期のものであり、略完形の小型鉢（111）も同時期に位置付けられる。半完形の2個体の壷Aは114が底部糸切りによる平底で胴部に張りを持つ薬壺形、115が内底面からの突き出しによる丸底成形の長胴気味の器形と、異なるタイプをしている。潰れて出土したというよりも、破片が散在する廃棄の仕方をしているが、この時期は短頸壺の完形が出土すること事態が特殊であり、2個体を廃棄する行為は祭祀的と位置付けられよう。次に甕類だが、図示したものは古代Ⅲ期からⅣ2古期頃に位置付けられるもので、食膳具や壺瓶類よりも1～2段階古く位置付けられるものが主である。これは大型貯蔵具の使用年数の長さ、伝世的な使用に起因したものであり、集落における大型貯蔵具の在り方としては普遍的に確認できる現象である。甕で特に注目されるものはないが、他の集中単位同様に、破片での出土が主で、広く散在して分布する様相が見られる。なお、時期は古代Ⅲ期頃と古いが、113の瓶Aは注目される須恵器である。瓶Aは通常、胴部円盤閉塞をした後に算盤玉形に変形させて、胴上端を円形切り取り後、別作り口頸部を接合させる器種だが、当製品においては、円形切り取り後に頸部に粘土紐を積んで胴部上で口頸部を水挽き成形した感がある。金沢末窯産のものと思われ、特徴的である。



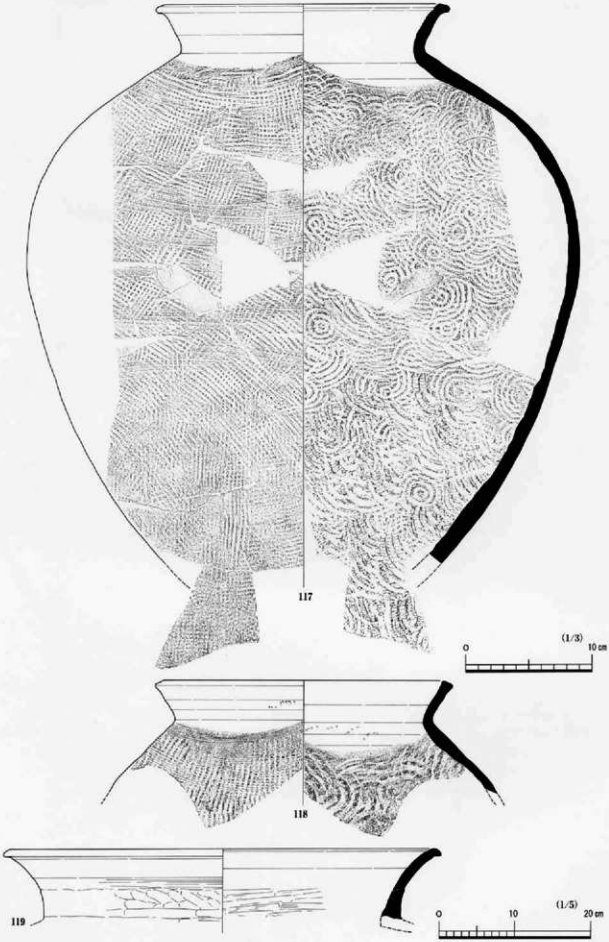
第83図　古代土器溜まり遺構出土遺物5（集中3－4・集中4、全てS＝1／3）



第84図　古代土器溜まり遺構出土遺物６（集中５－１、全てＳ＝１／３）



第85図　古代土器溜まり遺構出土遺物7（集中5－2、全てS＝1／3）



第86図　古代土器溜まり遺構出土遺物８（集中５－３、117・118はＳ＝１／３、119はＳ＝１／５）

6．集中単位以外の出土遺物

H区古代土器溜まり遺構として提示するものは、土器溜まり4と各Gr土器溜まり遺構並びに包含層として土器上げたものであり、その中から上記集中単位を除外したものについて以下に述べる。須恵器食膳具9,580点、須恵器貯蔵具8,767点、土師器食膳具1,000点、土師器煮炊具13,132点、須恵製品9点、土師製品151点、石製品245点で構成され、ここにおいても須恵器貯蔵具の割合が高い。須恵器食膳具は、古代Ⅱ3期からⅥ2期までと幅があり、時期的にまとまるとは言い難いが、集中単位出土土器の時期である古代Ⅳ1期からⅤ1期までの土器が多く確認される傾向はある。この時期のものは灯明痕をもつ坏Aが破片で22点確認されており、漆の付着するものも4点確認される。転用硯は坏B蓋で4点だが、盤Aの内底面に磨耗痕の顕著なものが10点ほどあり、これに関しても転用硯の可能性がある。前回報告のG地区古代土器溜まり遺構に見られた仏教系遺物の様相に近く、その緑辺的な位置付けがある。このようなG地区土器溜まりからの流れで分布する土器溜まりに対し、もゝゆ－21Gr周辺の集中単位を中心としてその周辺に分布する土器溜まりがある。それ以外にも土器出土はあるため、H地区古代土器溜まり遺構を明確に2分できないが、大きくはそのような2つの土器廃棄場が存在していたものと理解されよう。以上を視野に入れつつ、以下では、特筆される出土遺物の項目ごとに解説する。

《6～7世紀前半の須恵器》 120と121の坏H身、そして123の蓋が6世紀、古墳4様式に、122の坏H身と183の鉢、184の鉢F、190の甕、191の台脚が7世紀前半、古代Ⅰ期に位置付けられる。

古墳4様式の須恵器はいずれも南加賀窯産で、120は口径や口縁部端の内傾面の形成特徴から4様式Ⅰ新期に、121は立ち上がりの長さと口径の大きさから4様式Ⅱ2期にそれぞれ位置付けられる（望月精司「南加賀窯跡群における在地窯の出現都地方窯成立」『石川考古学研究会会誌』2009年）。今回報告地区で出土した人物埴輪は4様式Ⅱ1～2期に併行するものであり、同時期の須恵器と言えよう。なお、123は鈕を欠くため、確証はないが、6世紀後半の長頸瓶に付される瓶蓋と理解した。ただ、特徴的な天井部のロクロヒダ形成は仏器的でもある。

古代Ⅰ期の須恵器は、122の能美窯産坏Hが当器種の最小径段階にある点から古代Ⅰ2期に位置付けられる。当段階の典型的な形態であり、図化していないが、同時期の坏G蓋も能美窯産、190の甕も同時期の能美窯産と位置付けられ、能美窯産が定量を占める段階と言える。他の器種としては、体部内傾する無頸壺的な金属器系鉢（183）と、体部に施した沈線区画内に櫛歯の連続刺突文を施す鉢F（184）があるが、いずれも南加賀窯南群産であり、この点も当期の産地構成を示す特徴と言えよう。なお、191は小型の台脚片であるが、基部にスカシ状の切込みがあるもので、小型長頸瓶か甕の台脚になるものと理解する。台脚端部の形態は若干異なるが、類似した台脚の付く甕が南加賀窯跡群で生産されており、小型丸底瓶的な器種に付されるのが穏当だろう。

《須恵器小型鉢類》 小型鉢は平底で低い器高を呈し、口縁部で外屈した後に口縁部端を上へ摘み上げる形態のものが基本器形と言えるが、形態には器高の高いタイプのもの（集中3：47、集中5：110）や口縁部摘み上げをしないタイプのもの（集中5：111）があるなど様々である。ただ当土器溜まりで報告するタイプは前述の基本器形のものばかりで、7個体（176～182）とまとまった数が出土する。胎土は全て通常の須恵器胎土であり、油煙痕をもつような灯明具使用のものはない。当器種の用途の主な部分に灯明具があるが、灯明具使用は通常、粗い砂礫を混在させるような土師器煮炊具的胎土を持つ傾向が強く、その点から見ても異なる用途、仏教系行為に伴うものではなく、祭祀具的要素の強いものだったのだろう。供物を捧げる小分けの容器的存在だろうか。

《特徴的な須恵器貯蔵具》 195の四耳壺と199の大甕、201の中甕のみを取り上げる。四耳壺は胴部上位の破片だが、上下に貫通する方形把手形態と肩の張る胴部器形から、短頸壺器形を呈す四耳壺と判断した。南加賀窯産で、肩部外面に雨垂れ状の連続刺突文を施す。このような短頸壺器形の四耳壺は古代Ⅳ～Ⅴ期に能美窯や南加賀窯で生産が確認されているが、胴部に連続刺突文を有するものはなく、文様構成も特徴的である。

大甕（119）は口頸部外面に櫛描波状文を2段に施す古代Ⅱ3期頃に一般的に見られる形態のものだが、口頸部成形痕跡が遺存する数少ない事例であったため、成形方法と手順について以下に解説を加える。①胴部成形完了後上位端部を切り取り整形する→②別作りで口頸部を下から順に粘土紐積み叩き成形して口縁部端まで積み上げ成形する（外面平行線文叩き、内面同心円文当て）→③ロクロ回転を利用し、内外面をナデ調整し、口縁部端撓き出し成形する→④横走沈線文2条と櫛描波状文2段を施す→⑤口頸部を成形台からはずして、胴部上端に繋ぎ粘土を挟む形で接合する→⑥繋ぎ粘土部分をユビナデにより内外面調整して仕上げる。

中甕（201）は底部平底気味に仕上げる古代Ⅵ2～Ⅵ3期に特徴的に見られる長胴気味器形のもので、遺存状

態が良く、成形技法が観察できる数少ない事例であったため、以下に復元できる成形の手順を提示する。①成形台の上に底部円盤を固定し、順に胴部粘土紐積み成形（胴部張りの少ない器形や横軸叩き痕跡が見えない点から、粘土紐積み成形時に1次成形叩きを伴わない可能性が高い）を行いながら、胴部上端まで積み上げる→②頸部をロクロ回転を利用しながら絞り、口縁部へと開く器形に積み上げ成形する→③胴部上位から口頸部にかけてロクロ回転を利用したナデ調整を施すとともに、口縁部端を挽きだし成形する→④胴部の器面を整えるため、下から上への縦軸整面叩き（外面Ha叩き、内面芯持ち材の無紋当て具：中央にキズあり）を施す→⑤成形台から底部をはずし、製品を横に抱えた姿勢で、胴部下位から底部縁辺までにかけての上から下への縦軸整面叩き（外面He叩き、内面He当て）を施して仕上げる（底部中央内外面には叩きが及ばず、平底部を残して仕上げる）。

《円面硯》　H地区古代土器溜まり遺構からは、先に述べた集中単位出土のものも含め、7個体の圏足円面硯が出土している。いずれも南加賀窯産で、遺存度低く、全形を復元できるものはないが、脚部スカシ形態は、長方形スカシを有すタイプや楕円形スカシを有すタイプ、十字スカシを有すタイプ、円孔スカシを多く配すタイプなど、様々な脚部スカシ形態のものが出土しており、集中単位出土のものも含め、ここでまとめて述べたい。

長方形スカシ　圏足円面硯で最も多いタイプだが、当土器溜まりでは203のみ確認できた。硯面に陸と海の区画を行う内堤をもつ形態を呈し、堤が有台坏の高台形態に似る。その作りから古代Ⅳ期に位置付けられよう。

楕円形スカシ　当遺跡では比較的確認されるタイプで、当土器溜まりでも204と集中3－58が確認される。204は縦長楕円形を4方に、58は上下2段に開けた横長楕円形スカシを3方に穿つもので、前者は脚の厚さから8世紀前半に、後者は8世紀後半以降に位置付けられるだろう。

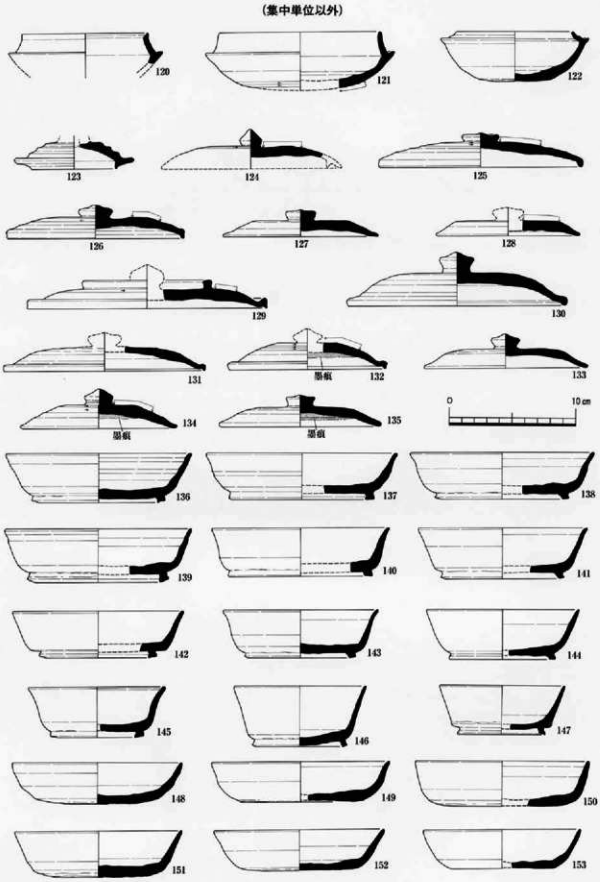
十字スカシ　集中1で硯面部を欠損する9が、集中単位以外で脚部下位を欠損する202が出土する。いずれも4方にスカシをもつが、脚の厚さや径が異なるため同一個体とは考えがたい。前者は脚下位で後を形成し、壺瓶の台脚状態を持つもの、後者は坏B高台のような小さな周縁を有するもので、硯面に顕著な磨耗痕と墨痕をもつ。

円孔スカシ　205の円孔スカシをもつタイプは、脚径が10㎝未満の小型のもので、間隔狭く、円孔を1列に配すタイプである。なお、図化していないが、円孔を上下2段に交互配するものも確認されている。

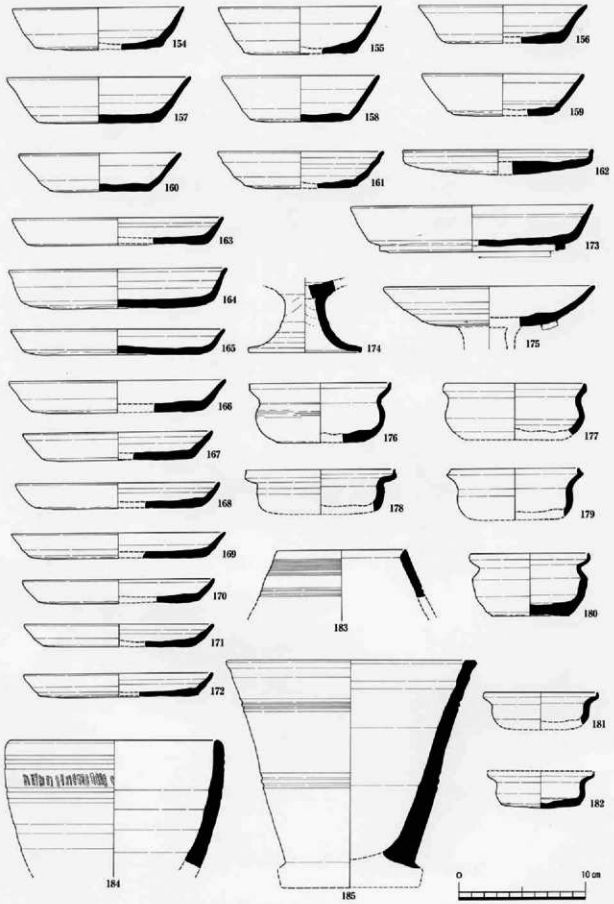
《馬形須恵製品》　208は胴幅が6.3㎝を測る大型の馬形須恵製品で、胴部前方と足部、尾部の先端を欠損する。表面は指ナデ調整するもので、鞍等の表現もなく、裸馬として作られている。大型のためか、胴部中央に空洞を有し、その気抜き穴が後ろ足後方に開けられている南加賀窯産のものである。

《支脚形土師製品》　支脚形土師製品は、中心に孔をもつ円筒形で上下端を若干広げるC類が出土するが、226・227はその中でも小型で、脚の太さが2.5㎝程度と細い形態を呈す。完形に近い2個体であり、胎土から南加賀窯産と思われる。それ以外は一般的な形態、大きさをもつもので、特にゆ～ら－21・22Grにまとまる傾向がある。SK435において同形態の支脚形が3個体廃棄されており、SK435の位置から考えても一連の廃棄品の可能性があるが、当土器溜まり出土の219・221～225は強い焼成による剥離痕や黒斑の顕著なものが多く、焼成時の焼き損じに伴う廃棄品である可能性が高い。

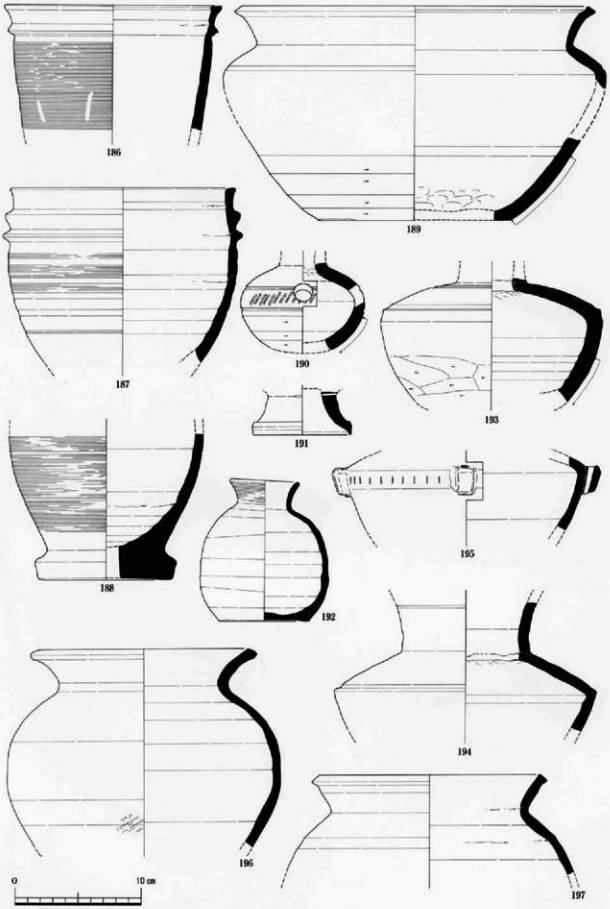
《鉄製品》　図示したもの全てが古代に位置付けられるものか不確定要素があるが、鉄鏃、刀子、馬具、鎌、釣針、釘、棒状製品等を古代の遺物として図示した。鉄鏃は柳葉形鉄鏃と雁又式鉄鏃とが出土する。柳葉形はこれまでの報告地区においてはほとんど確認できなかったものだが、H区古代土器溜りでは238と239の他、集中1でも大型の11が出土している。その中でも238は刃部が4.8㎝、鏃身8.6㎝を測る大型尖根式のもので、長い茎部にかけても遺存する良好な資料である。関部が突関形態を呈し、茎部の付け根付近から強く折れ曲がっている。239は刃部先端を欠く小型の柳葉形で、関部は突関形態を呈す。次に、雁又式鉄鏃だが、当遺跡で最も出土事例の多い形態で、ここでは240と241を図化した。両資料とも関部が突関形態となるものだが、241は茎部が長く、240は茎部が短く刺葉形態をとる。なお、254の棒状製品としたものは、断面方形のもので、中央付近が幅広くなるものであり、樺類形鉄鏃の未製品の可能性がある。他の地区でも鉄鏃未成品は出土しており、当遺跡内で武器類を生産していたことの証となろう。刀子は複数出土するが、遺存度よいものは242の略完形品のみで、他は断片的な資料である。242は刃幅1㎝程度の小型の刀子だが、刃部長は推定で9㎝程度を測り、関部は直角片関を呈する。馬具は轡類にあたる部分（247）が出土している。両端が円環状となる棒状製品で、片側の円環に角度が付いていることから、引き手部と理解される。長さは14.7㎝を測り、完形品で出土している。なお、248は曲鎌、249は釣針、その他、釘と棒状製品、不明鉄製品が出土する。



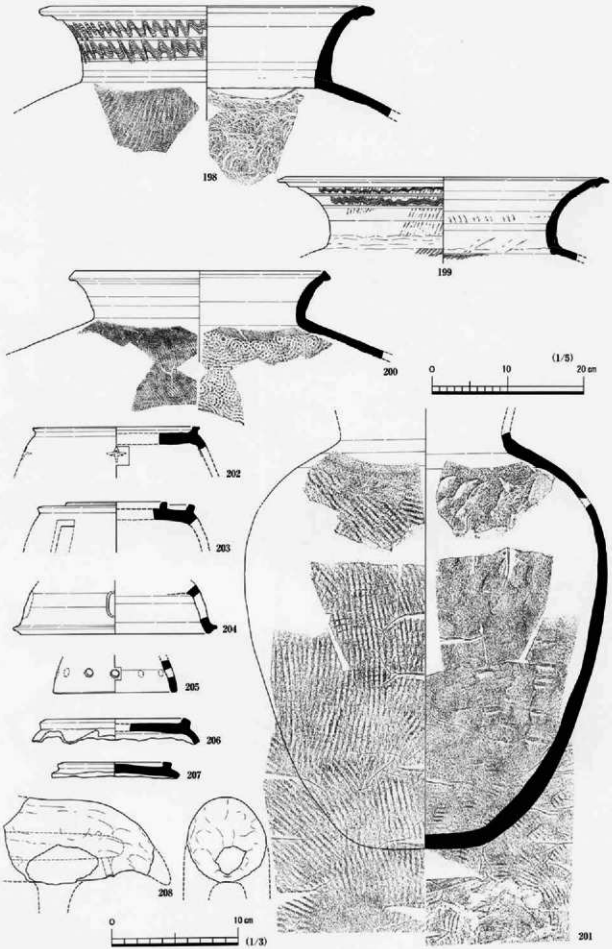
第87図　古代土器溜まり遺構出土遺物9（集中単位以外－1、全てS＝1／3）



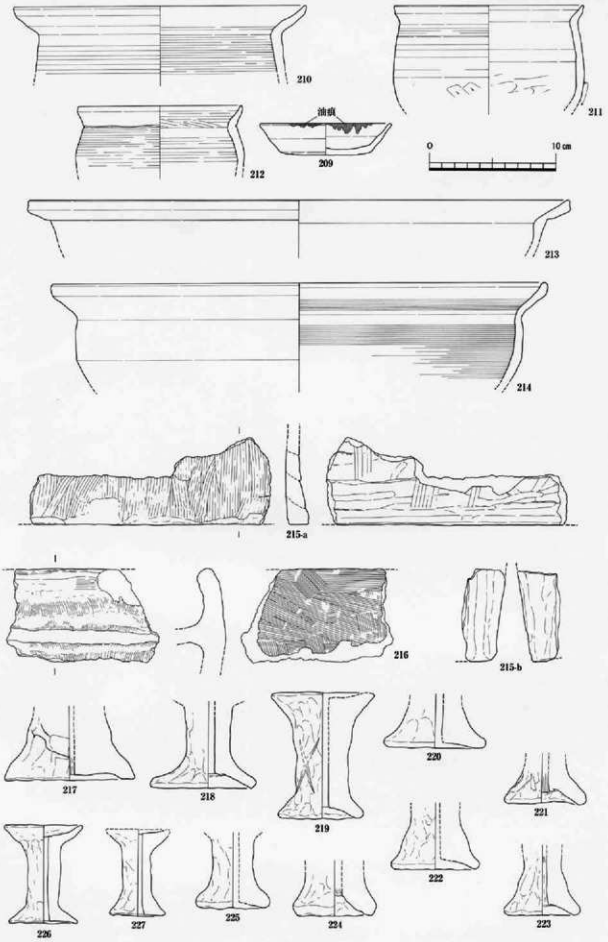
第88図　古代土器溜まり遺構出土遺物10（集中単位以外－２、全てＳ＝１／３）



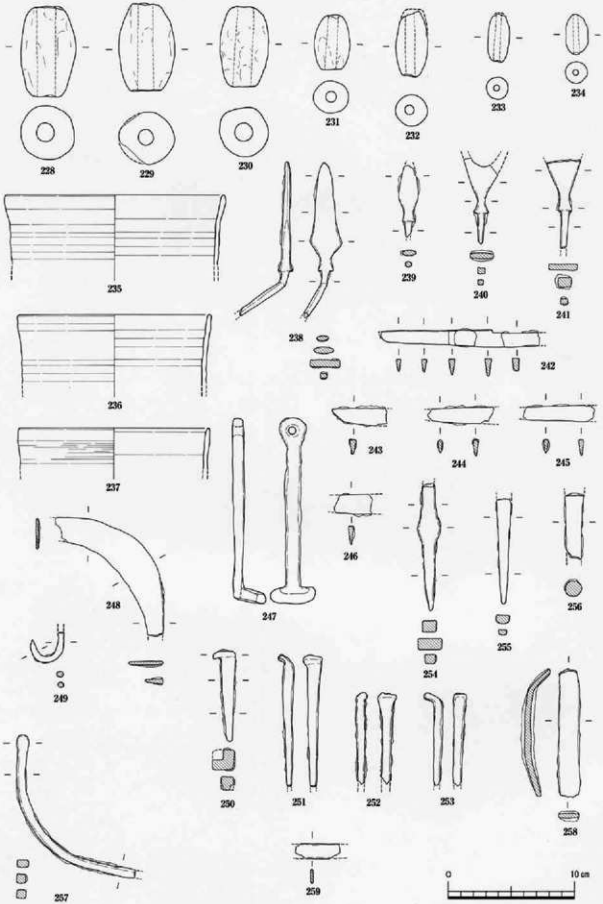
第89図　古代土器溜まり遺構出土遺物11（集中単位以外－3、全てS＝1／3）



第90図　古代土器溜まり遺構出土遺物12（集中単位以外－4、198～200はS＝1／5、201～208はS＝1／3）



第91図　古代土器溜まり遺構出土遺物13（集中単位以外－5、全てS＝1／3）



第 92 図　古代土器溜まり遺構出土遺物 14（集中単位以外－６、全てＳ＝１／３）

第３節　中世の遺構出土遺物解説

ここで述べる遺物は、中世遺構出土遺物としているが、田嶋編年の古代Ⅶ期から中世１期までのもので、室月の暦年代観では10世紀後半から12世紀末までにあたり、厳密には古代末期頃にあたるものである。

今回の調査区においては、掘立柱建物、土坑、井戸、土器溜まりなど、当期に位置付けられる遺構が多く、掘立柱建物から960点（土師器食膳具954／灰釉陶器１／白磁５）、土坑から2,306点（土師器食膳具2,296／土師器煮炊具５／土師器土製品１／灰釉陶器３／白磁１）、井戸から331点（土師器食膳具324／灰釉陶器３／白磁４）、土器溜まり及び包含層から15,309点（土師器食膳具14,894／土師器煮炊具33／灰釉陶器104／白磁267／焼締陶器10／須恵系陶器１）、その他、溝や炉状遺構、ピットから1,473点（土師器食膳具1,455／灰釉陶器10／白磁６／焼締陶器２）が出土する（古代遺構に混在する土器が多かったため、含めて示した）。以下に個別遺構出土の遺物説明を行うが、分類名称や編年区分は、筆者が『額見町遺跡Ⅲ』の中で示した総括論稿「南加賀地域の平安後期土器群に関する編年的考察」に基づくものとするので、参照いただきたい。

第１項　中世掘立柱建物出土遺物

中世掘立柱建物の柱穴から出土する遺物は、以下に示す一覧表のとおり、100点を越える遺物出土量をもつ大型掘立柱建物が確認されている。以下に出土量の多い掘立柱建物のみを記述する。

１．SB306 出土遺物

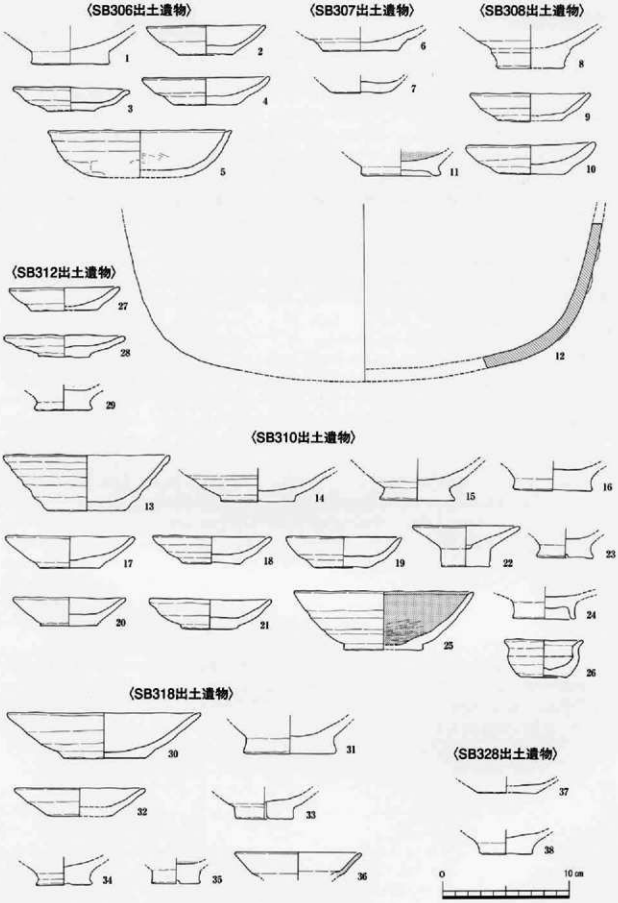
各柱穴から出土遺物があり、総点数123点を数える。図化できた土師器食膳具には通常のロクロ成形の土師器以外に、非ロクロ成形の大皿１点がある。近隣のピット出土のものにも非ロクロ成形の大皿片があり（Ｐ393、第99図33）、別個体だが、同じ胎土と色調をしている。この非ロクロ成形皿については、体部下位から底面にかけて成形時の指ナデ痕が残り、内面はハケ目工具によるナデが施されるもので、口縁部内側に面を形成し、外面に２段ナデを施すものである。口径14.4㎝を測る大皿で、胎土はＡ類胎土に近く、在地産と思われる。加賀地域における非ロクロ成形土師器食膳具の出現は、これまで藤田編年のⅡ－Ⅰ１期に位置付けられる白江梯川遺跡410号井戸が初出とされているが、当資料が他のロクロ成形土師器と同時期のものと位置付けられれば、それを遡る資料となりえる。ロクロ成形土師器は図示したとおり、柱状椀の存在や平底小皿の器形などから、南加賀編年８Ｂ期、藤田編年ではⅠ－Ⅱ１期に位置付けられるもので、非ロクロ成形土師器皿の出現期とは間に１型式ないしは２型式を挟む。ただ、京都系土師器における口縁部２段ナデを施す大皿の定着は11世紀中頃にはありそうで、その点から能登の矢駄アカメ遺跡出土非ロクロ成形土師器皿も11世紀末～12世紀初頭の年代観を与えている。口径や器形の類似性、口縁部２段ナデの特徴など類似しており、当資料も初源期の非ロクロ成形土師器皿と位置付け、図示したロクロ成形土師器と共伴するものとしたい。なお、詳細は確認していないが、ほぼ同時期の加賀市田尻シンベイダン遺跡大溝資料において、同様の非ロクロ土師器皿が出土しているとされており、南加賀地域においても、在地の中で京都系土師器皿の生産を単発的にだが、受容していたことを物語る。

２．SB308 出土遺物

柱穴から204点もの土師器が出土するが、図示できたものは少なく、柱状椀と平底小皿、内黒輪高台椀のみである。いずれも南加賀８Ｂ期頃に位置付けられるものと判断されるが、これらに伴ってＰ13からは鉄鏃片が出土している。口径40㎝程度を測ると推察されるもので、胴部下位付近の大型片が捨てられていた。大型鉄製品が遺跡に遺存することは稀であり、意識的な埋納の可能性もある。

遺構名	遺物の概要	遺構名	遺物の概要
SB243	古代遺物11点出土するも、掘立柱建物形態から中世認定。	SB313	古代遺物５点出土するも、掘立柱建物形態から中世認定。
SB306	遺物123点。中世１－Ⅱ期の土師器と白磁。	SB317	古代遺物２点出土するも、掘立柱建物形態から中世認定。
SB307	遺物16点。中世１期の土師器。	SB318	遺物79点。中世１－Ⅱ１の土師器と白磁。
SB308	遺物204点。中世１－Ⅰ期の土師器。	SB319	遺物１点。中世１期の土師器。古代遺物10点混在。
SB309	古代遺物10点出土するも、掘立柱建物形態から中世認定。	SB320	遺物７点。中世１期の土師器。古代遺物29点混在。
SB310	遺物247点。中世１－Ⅱ１期の土師器と白磁。	SB327	古代遺物23点出土するも、掘立柱建物形態から中世認定。
SB312	遺物14点。中世１－Ⅱ１期の土師器。	SB328	遺物７点。中世１－Ⅱ１期の土師器。古代遺物11点混在。

今回報告地区の中世掘立柱建物出土遺物一覧表



第93図　中世掘立柱建物出土遺物（SB306～SB328、全てS＝1／3）

3．SB310 出土遺物

各柱穴から土師器食膳具が出土しており、半完形の土師器皿など246点にのぼる。図示したものは平底小皿や柱状小皿の器形から、ほぼ8Ｂ期に位置付けられるもので、中では24の輪高台小皿は特徴的である。Ｄ類胎土のもので、Ｈ区土器溜まり集中Ｂでまとまって出土している。

第２項　中世土坑出土遺物

今回報告の区域では、多くの土師器食膳具を出土する埋納土坑が確認されている。比較的遺構数は多く、土師器食膳具を大量廃棄するSK419をはじめとして、SK396、SK397、SK399、SK420、SK421でもまとまった土器の廃棄がある。以下に各土坑出土遺物の解説を行う。なお、各器種の器形類型について、アルファベット表記しているが、これは『額見町遺跡Ⅱ』報告のＢ区上層土器溜まりでの分類を基本とし、『額見町遺跡Ⅲ』報告の筆者編年試案にて使用した小皿分類、『額見町遺跡Ⅳ』報告のSK472での器形分類に基づくものである。

1．SK396 出土遺物

浅い土坑であるが、土師器食膳具が290点出土している。図示したとおり、平底椀、平底小皿、内黒輪高台椀が多く、柱状高台器種は少ない。破片での数値割合では、通常土師器77%、内黒土師器23%で構成され、図示したものでも内黒が多い。内黒は大半が輪高台椀で、ほとんどのものが比較的丁寧な内面ミガキ調整を伴う。24～26のような深椀器形を呈するものが主体だが、底径は小さく厚手で、椀形を呈するやや外傾気味といった感じである。ただ、これに混じって体部外傾器形のものが存在しており、内面ミガキ調整を伴わない新型の27が確認される。通常土師器でも平底椀１が体部外傾器形のａ類系統を呈し、柱状高台器種も少ないが完量確認されることが時期決定の要素となろう。昨年度報告のSK472に極めて近い様相を持つもので、時期的には南加賀８Ｂ期に包括されるものの、多分に８Ａ期の様相を引き摺る資料群と言えるだろう。胎土はＡ類とＤ類が拮抗して存在し、平底小皿は８～11がＡ胎土のａ類系統、14～16がＤ胎土のｃ類系統、17～19がＤ胎土のｄ類系統に分類される。つまり、椀形系統の小皿①類型に該当するものばかりで、他類型のものは確認されない。

2．SK397 出土遺物

SK396に隣接する土坑で、出土遺物は土師器食膳具が73点と少ないが、半完形品など遺存度高いものが多い。図示したものではＡ類系胎土が８割以上を占め、特に橙褐色に発色するＢ類胎土が目立つ。破片点数での内黒土師器の率は48%の高率で、当資料が内黒再興期に位置付けられることがわかる。平底椀の体部外傾器形や内黒輪高台椀の内面ミガキ調整の省略、白磁系②類型のｂ１類が主体的に存在することなどから考えて、南加賀８Ｂ期の典型的な資料群と言えるだろう。なお、平底小皿で１点確認される北加賀系のＣ類胎土は、底部大きく体部が短く立つ器形の③類型である。SK472以降、定量確認される類型だが、SK472でもＣ類胎土にのみ確認されており、当器形が北加賀から持ち込まれたことを示唆する。以上の土師器食膳具に共伴して、１点灰釉陶器椀の底部破片が出土している。東濃窯産と思われるもので、高台の特徴や底面ナデ消しを伴うなどの点から、明和27号窯式に位置付けられる可能性がある。

3．SK399 出土遺物

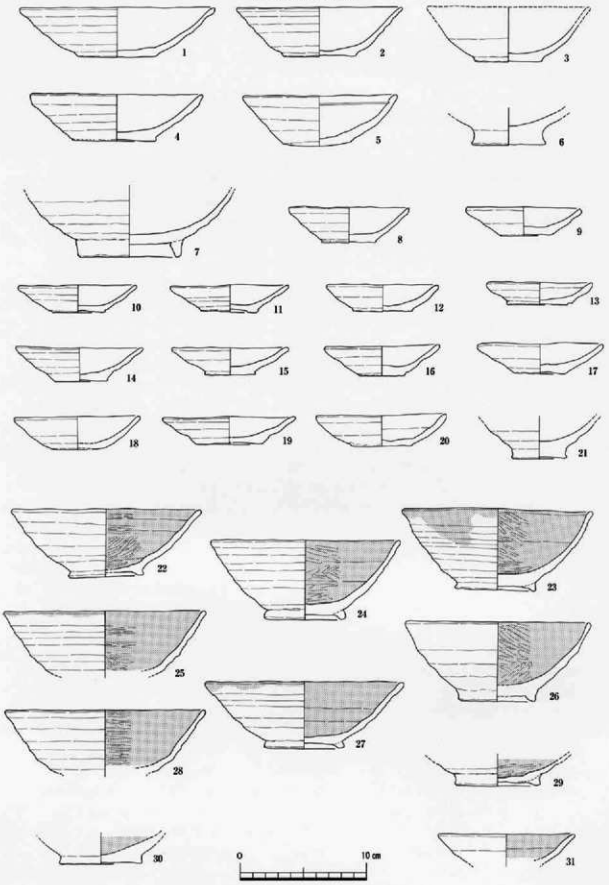
小型で浅い土坑だが、土師器食膳具が140点出土する。土師器における内黒率は18%あるが、図示できたものは64の輪高台椀の底部破片だけで、内面ミガキ調整が施されないものである。土師器胎土はＡ類系統が主体で、器形は平底椀で体部外傾のａ類系やｄ類系が主体を占める。Ｂ区上層土器溜まり資料に近い様相を持つもので、平底小皿も当資料で主体的であったａ類系とｃ類系が主体を占める。SK396と同様、南加賀８Ｂ期の典型的な土師器資料と言える。

4．SK419 出土遺物

大型の総柱建物SB308、SB310の柱穴と重複して存在する大型の土器廃棄土坑で、『額見町遺跡Ⅲ』において平安時代後期の土器編年案提示をした際に、南加賀８Ａ期の標識資料として既に土器様相の概要を提示したものである（望月精司「南加賀地域の平安後期土器群の編年的考察」『額見町遺跡Ⅲ』2008年）。ただ、今回の整理に伴い再検討した結果、一部内容変更した部分もあるため、その辺を修正提示する。

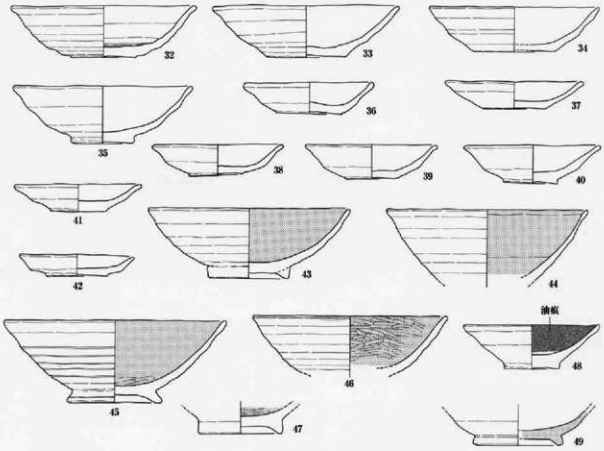
当土坑からは、土師器食膳具が1,372点出土しており、鍋等の煮炊具も２点出土する。土師器における内黒率は破片数で17%あり（『額見町遺跡Ⅳ』報告で提示した際に12%と報告したが、今回報告精査の結果17%となっ

〈SK396出土遺物〉

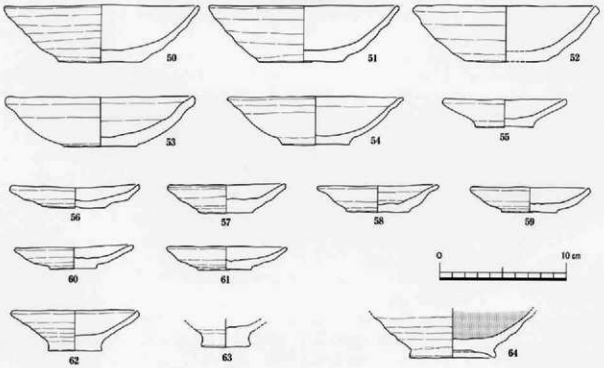


第94図　中世土坑出土遺物1（SK396、全てS＝1／3）

〈SK397出土遺物〉



〈SK399出土遺物〉



第95図　中世土坑出土遺物2（SK397、SK399、全てS＝1／3）

た)、この数値はSK472の18%に近い数値である。また、当資料では白磁を含まないことも特徴の一つにあげられ、灰釉陶器の共伴は半完形品の東濃窯産の輪高台碗が確認できる。高台の器形や底面ナデ消し調整、体部外傾器形の特徴、無釉を思わせるような口縁部のみの漬け掛けなど、明和27号窯式に位置付けられ、時期的にも当資料群と符合する。暦年代観を示す一つの模拠資料となろう。

次に土師器食膳具の組成についてだが、底部個体識別数値では、通常土師器で平底椀23%、輪高台椀2%、平底小皿62%、柱状小皿1%、内黒土師器で輪高台椀8%、柱状椀1%、柱状小皿3%であり、通常平底小皿が過半数の高い割合を持つ。以降、通常平底椀の増加と柱状高台椀皿の増加とともに減少傾向を辿るが、当期はその過渡的様相を示す段階で、柱状高台器種は依然少ない段階である。8期成立の指標の一つとして柱状高台器種の出現をあてているが、当期はその初期段階と言えるわけである。以下に、各器種の説明を行う。

通常平底椀はA類胎土主体で構成される。通常法量、小型法量ともに深椀型と浅椀型があり、どの形態が主体的に存在するかというのではなく、各形態とも定量存在の様相をもつが、通常法量深椀型（65～67）は当期に顕在化する器形法量のものと言える。A類胎土で、口径14㎝前後、厚手の底部と体部下位の張り、外反気味の口縁部が特徴であるが、類似形態がD類胎土でも見える（78）。SK472報告でe類とした器形に該当しよう。これに対し、ひとまわり大型の口径15㎝前後を測るのが、通常法量浅椀型（69～71・80）である。A類胎土で、底部は厚く、体部外傾気味をなす。B区上層土器溜まりでa類とした口径16㎝程度の大きく開く器形のタイプではないが、そのような器形へ変化する椀形態であろう。小型法量は、口径12.5～13㎝程度のもので、器形から何種かに分けられるが、やや体部下位に膨らみを持つe類系統（72～75）と底部から体部へそのまま外傾するa類系統（76・77）とがある。いずれもA類胎土で、D類胎土は浅椀形のものが確認される。

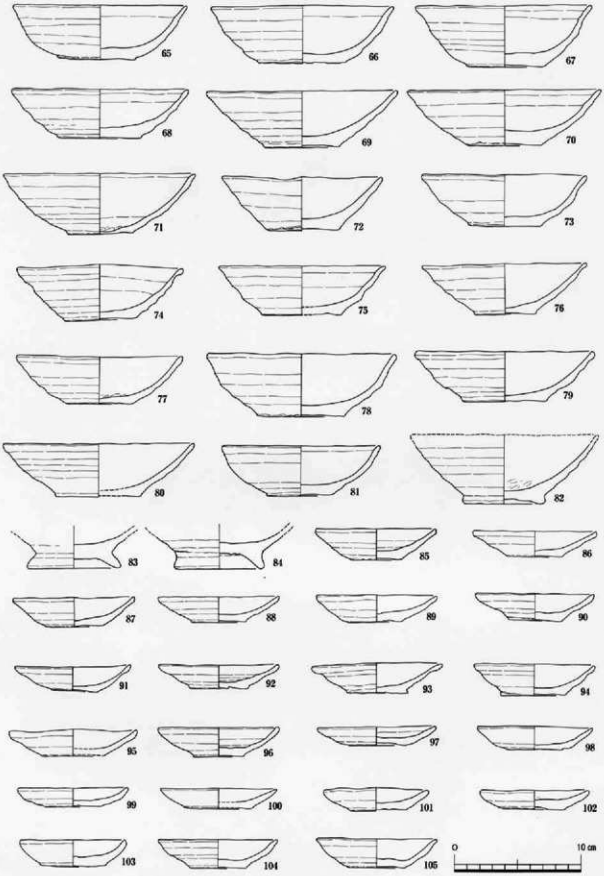
通常輪高台椀は破片での出土であるため、様相を捉えにくいが、83・84の高台器形は当期より出現し、8B期に増加する新たな輪高台椀器形で、そこから体部外傾の強い皿形輪高台椀が出現してくると予想される。数量的に少ないことも当期の特徴と捉えられようか。なお、82の高台の低い形態については、古代以来の系統を引く椀器形の可能性があるが、内底面にミガキ調整が一部見られ、色調の感じから、本来内黒土師器であったものが焼成の加減で内面の炭化吸着が酸化消滅した製品と判断するのが妥当だろう。

通常平底小皿は、口径8㎝台の小型の一群や10㎝台の大型の一群が存在するが、8割近くは9.0～10.0㎝の範囲で分布する。胎土別では、A・B類が69%、D類が27%、C類が4%で存在し、A・B類胎土は、大きな底部から体部直線的に開き口縁部端に面をもつa類系統（85～92・94・95）と、体部下位で膨らみをもち口縁部で外反するb1類系統（104～112）、砂粒多く古代的胎土（A3類）で小型底部から体部が開く器形をもち、ひとまわり大型法量を呈す薄手作りのf類（113～118）の大きく3つに分類される。f類は7期からの古代的小皿の系譜を残すもの、b1類は白磁模倣系の②類型にあたるものである。なお、口径8㎝台の小型で体部が強く開く扁平な器形が定量存在するが（99～103）、これをi類として分類する。D類胎土は、比較的径小さく突出する底部から体部開く器形のc1類系統（127～129）、底径大きめで口縁部内側の肥厚するc3類系統（130）、やや大ぶりで体部開く器形のd類系統（131・132）、そして体部下位で膨らみを持ち、口縁部で外反する②類型が定量存在する（121～126）。A類胎土のものよりも扁平器形であることが特徴で、底径大きくやや底部薄手に作られる。また、底径大きく扁平盤形器形を呈す③類型（133・134）も少量確認される。胎土は北加賀のC類に限定されるが、次の8B期古相に位置付けられるSK472で定量確認される器形のもので、当期が初出だろう。8C期に定着、主体化する器形と言える。C類胎土の平底小皿は量が少なく、類型抽出には至らない。

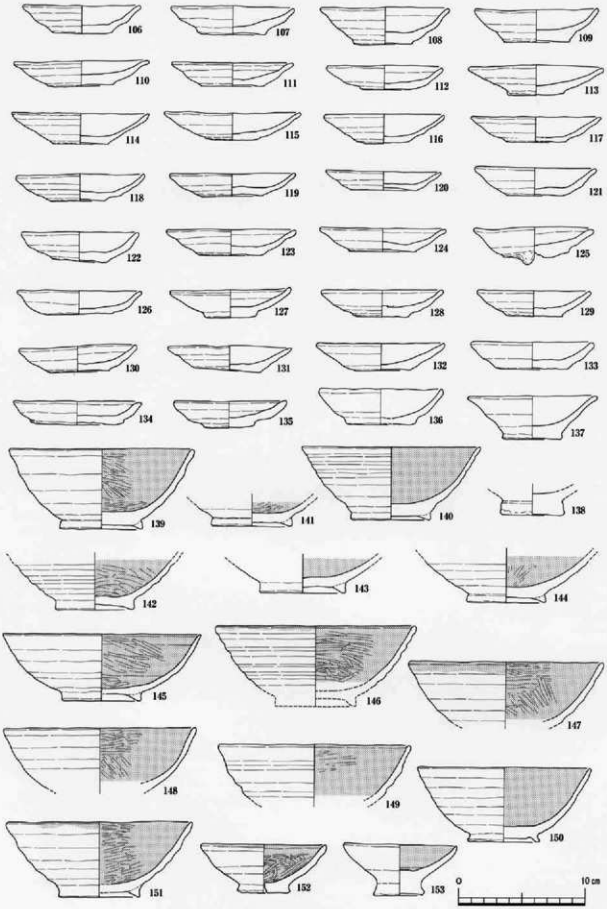
内黒輪高台椀は、口径13.5～16㎝のなかで幅を持って分布するが、法量分化する様相はない。胎土はA・B類とD類胎土とがほとんどで、C類胎土は少ない。A類胎土は、内面に粗いミガキ調整を施すものがほとんどで、ロクロナデのみで仕上げるものは140と143のみである。やや深椀気味に立ち上がる器形のもので、底面ナデ調整が基本である。D類胎土は145の浅椀器形と146～149のやや深椀気味となる器形、150のやや小型で深椀器形を呈するものとがある。内面ミガキ調整を基本的に施し、A類胎土よりも丁寧に作られる。なお、小型深椀器形のものは内面ロクロ調整のままのもので、底面に糸切り痕を残し、高台は小さく丁寧に作られる、特徴的な作りのものである。C類胎土の151は体部外傾器形のもので、底面に糸切り痕を残し、内面に比較的丁寧なミガキ調整を施すものである。SK142で出土したC類胎土のものに類似する。

柱状高台小皿は通常のものが僅かに出土するが、内黒焼成が主体の段階である。出土量が少なく、胎土はA類

〈SK419出土遺物〉



第96図　中世土坑出土遺物3（SK419－1、全てS＝1／3）



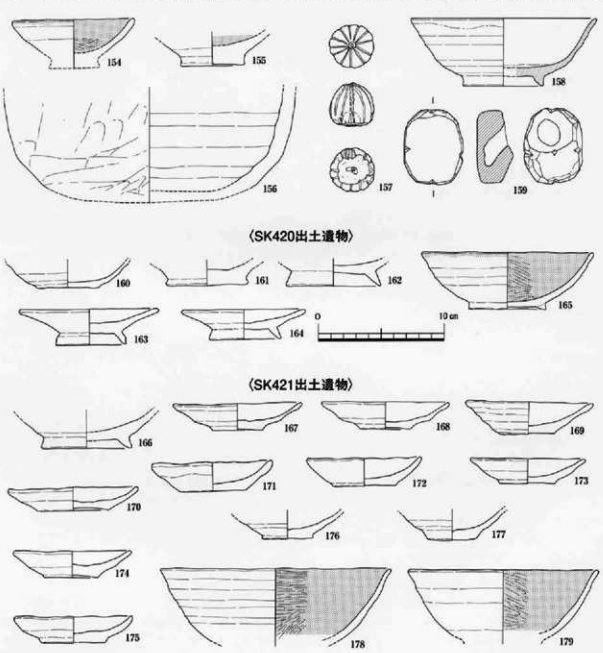
第97図　中世土坑出土遺物4（SK419－2、全てS＝1／3）

のみ、器形はいずれも椀形を呈し、内面ミガキ調整を施すものが主体的に存在する。いずれも、柱状高台器種の出現期様相と言えるもので、これ以降、量が増えるとともに通常土師器化、皿形化が進行する。なお、当器種には柱状高台椀を小型にした器形を持つ152が存在する。底面に成形時の粘土捩れによって生じる隙間が底部を貫通しているもので、これは故意に穿孔したものではないので、底部に穴が開いていても当器種の用途には何ら問題がなかったことを示すだろう。当器種の用途の一端を物語る資料と言える。

その他の器種としては、156の土師器鍋、157の土師質権状錘、そして159の錘状石製品がある。

土師器鍋はA類胎土のもので、外面ヘラナデ、内面ヨコナデを施す。胴部下半の破片だが、外反する口縁部がつく浅鍋器形の中世的土製鍋の初源的な事例と言える。外面にはススの付着が見られる。

土師質権状錘はA類胎土で、共伴関係と胎土から当期に位置付けているが、当土製品は7世紀後半に出現し、以降古代において生産され続ける竿秤の錘、つまりは権衡の土製品である。筆者は当土製品について、北陸の事例を集成し、論述したことがあるが（望月精司「古代権状錘に関する一考察―北陸出土権衡資料の検討を中心として―」『北陸古代土器研究』第10号　北陸古代土器研究会）、このような花弁状の線刻をもち、中軸に貫通孔をもつタイプは、権状錘の出現期から継続的に生産され続ける代表的なタイプである。錘の頂部に別作り鈕が取



第98図　中世土坑出土遺物5（SK419－3、SK420、SK421、全てS＝1／3）

り付くタイプで、穿孔はそのためのものと理解される。欠けなどもみられない完形品で使用痕も確認されない。

錘状石製品は、石材が砥石に使用されるような白色凝灰岩で、各面が磨かれる砥石転用かとも考えられるものである。ただ、磨かれていない部分に径1cmほどの穴が斜めに抉りこまれている点、断面台形を呈す形状など、獣脚状のものの接地部分の破片を転用したようにも見える。この原型石製品を楕円形加工し、四隅に紐掛けのための抉りを刻んだもので、四方結束による用途、つまりは錘として転用されたものと位置付ける。だが、漁撈網錘とは考え難く、同じ土坑で出土する土師質権状錘の存在を考えれば、権として使用された可能性もある。

5．SK420 出土遺物

当土坑は、SK419に隣接して存在する浅い小型土坑で、SB308、SB310の柱穴と重複する。土坑内から84点の土師器食膳具が出土しているが、図示できたものは少なく、土坑一括として提示できる資料ではない。ただ、略完形の輪高台小皿2点（163・164）が出土しており、SB310で出土する同器種と同じものと理解される。いずれもD類胎土のもので、口径10cm前後、台径5.5cm前後を測る。柱状高台小皿よりも若干口径が大きいが、全体的な作りや法量から、古代に遡る性格のものとは考え難く、柱状高台小皿の輪高台タイプと考えたい。体部が皿形に開く器形から考えて、柱状高台器種の変化過程に位置付け、8B期と判断するのが妥当だろう。なお、このような輪高台小皿は北陸地域の中では確認しにくいが、越後や出羽、陸奥においては柱状高台器種の出現とともに出現、併存してくる器種である。当遺跡においても、前後の脈絡なく突然出現する器種であり、単に柱状高台が輪高台となった偶発的なものの可能性もあるが、越後や東北との繋がりの中で出現した器種の可能性もあろう。

6．SK421 出土遺物

当土坑もSK419に隣接して存在する浅い小型土坑で、SB310の柱穴と重複する。土坑内から109点の土師器食膳具が出土しており、内黒土師器の率は約2割、器種は平底小皿を中心とする。

主体を占める平底小皿は、A・B類胎土が主体で、古手器形を呈すf類（167・168）と底径大きく体部が開くa類系統で構成される（169～173）。f類に比べてa類はひとまわり小型で、厚手のものが多い。

柱状高台小皿は底部付近の破片だが、体部の立ち上がり器形から、椀形を呈すタイプと判断される。内黒土師器ではないが、出現期的器形を呈するものと判断される。

輪高台椀は、通常土師器の166と内黒土師器とがある。通常土師器は体部椀形となるもの。内黒土師器は深椀器形を呈し、体部薄手に作られるもので、内面ミガキ調整を施す。A類胎土（179）とD類胎土（178）とがあり、D類胎土の方が薄手で内面ミガキ調整が丁寧に施される。

以上、平底小皿の器形や柱状小皿の椀形器形、内黒輪高台椀の作りなど、8A期に位置付けて妥当と判断する。

第3項　中世井戸・炉状遺構・ピット出土遺物

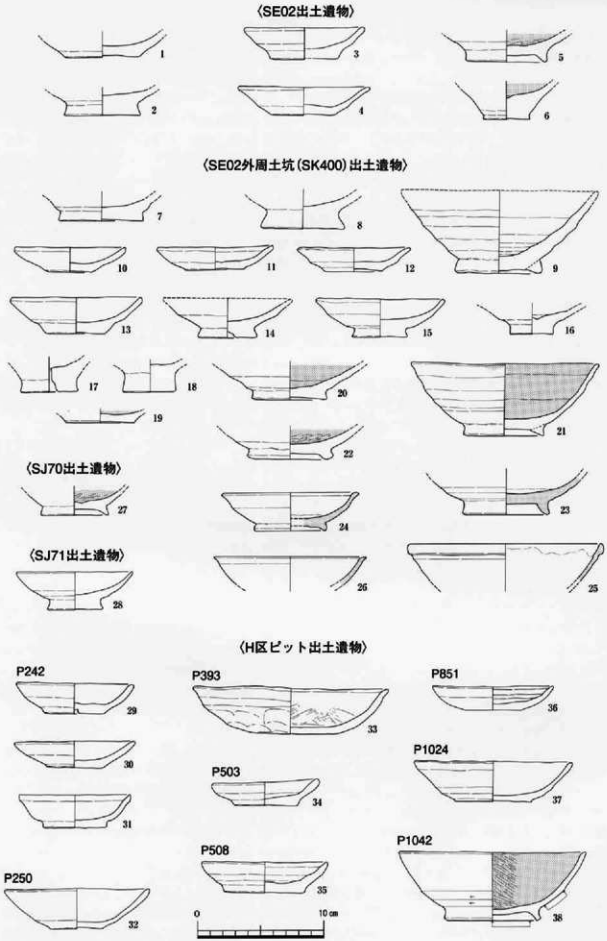
1．中世井戸出土遺物

（1）SE02 出土遺物

形状や深さから井戸と判断されるものだが、埋土状況や下底面の掘削形状から、掘りかけ途中で廃絶された井戸と判断される遺構である。埋土中に土器が含まれており、中世に位置付けられる土師器食膳具が34点出土する。破片が主であるため、遺構の時期決定には不確定要素が含まれるが、いずれの土器も概ね8B期に位置付けられるものである。SE02の外周土坑としたSK400の出土遺物も概ね8B期であるため、そこから紛れた込んだ可能性もあるが、掘削、埋め戻し時に混入したものだとすれば、井戸掘削段階は、出土遺物の時期よりも新しいこととなろう。類似する中世の素掘り井戸SE01が西方で検出されているが、これは8C期に位置付けられる遺構であり、SE02の掘削断念の後に、場所を谷の下方へと改めて、掘削し直した井戸とすれば、SE02の掘削もこの時期に下る可能性があるだろう。ただ、SE01の掘削から廃絶までに時間差がある可能性もあり、その場合は8B期という考えも成り立つことになる。

（2）SE02 外周土坑（SK400）出土遺物

大型の不整形土坑で、古代土器と中世土器とがほぼ同量程度で出土する。ただ、古代土器は時期幅があり、特定時期にまとまらない点と中世土器に遺存度高いものが定量確認される点から、中世に位置付けられる遺構と判断した。土師器が食膳具269点、煮炊具1点に対し、白磁・灰釉陶器は7点と多く、図化できた資料も多い。



第99図　中世井戸・炉状遺構・ピット出土遺物（SE02、SE02外周土坑、SJ70、SJ71、ピット、全てS＝1／3）

土師器食膳具は、内黒土師器率が2割強であり、小皿類が主体的に存在する。体部浅椀形または皿形を呈す柱状高台小皿が定量存在する点や、定型的な柱状高台椀が少量ながら確認される点、内黒輪高台椀が内面ロクロナデ仕上げを主体としている点、平底小皿形態が典型的な a 1 類、b 1 類を主に構成される点などを総合して、B 区上層土器溜まり遺構に極めて近い様相と判断し、8 B 期と位置付ける。なお、これら土師器食膳具に伴って、白磁や東濃窯産灰釉陶器が出土する。灰釉陶器は碗 23 の高台形状や回転ミガキ調整、皿 24 の体部開く器形、施釉範囲などから、明和 27 号窯式期に位置づけられるものと判断される。白磁に関しても、25 の椀は玉縁口縁部形状と釉調などから山本Ⅳ 1 b 類、26 の皿は口縁部形状から山本Ⅴ 2 類に該当可能なものであり、いずれも 8 B 期の暦年代観に矛盾はない。

2．中世炉状遺構出土遺物

中世に位置付けられる炉状遺構は少なく、SJ70 では内黒土師器輪高台椀を、SJ71 では通常土師器柱状高台小皿を掲載した。SJ70 の内黒輪高台椀は、底部付近の破片だが内面ミガキ調整が残る点から 8 A 期に、SJ71 の土師器柱状高台小皿は、浅椀形を呈する器形の定型化した柱状小皿の形態を持つ点から 8 B 期に位置付ける。

3．中世ピット出土遺物

今回の報告地区では中世の掘立柱建物が多いこともあって、中世ピットの数は多く、特に半完形復元可能な土師器食膳具を出土するピットのみを図示した。38 の内黒輪高台椀は、高台が断面方形で体部下位から底面にかけてケズリ調整が入り、内面ミガキ調整も丁寧に施される点、全体的な器形、法量から 7 A 期から 7 B 期に、37 の通常平底椀は、胎土や器形、法量から 7 B 期か 7 C 期に、32 の通常平底椀も、同様の時期と位置付けられるが、小型法量となっている点から 7 C 期に位置付けるのが妥当だろう。それ以外は全て 8 B 期に位置付けられるものと見られる。小皿類はいずれも略完形に近いもので、ピット埋納の性格を考えられよう。特に、3 個体の小皿類を埋納する P 242 は、SB310 の建物脇に掘られるピットで、建物の地鎮に伴う可能性がある。

当ピット遺物の中で最も注目されるのは、P 393 より出土した 33 の土師器大皿である。P 393 は SB306 P 8 の横に掘られるピットで、SB308 の建物に伴う可能性を持つものだが、その可能性を示すように、同形態、同胎土の土師器大皿が SB306 で出土している。この土師器大皿は体部下位から底面にかけて成形時の指ナデ痕を残し、内面はハケ目工具によるナデ調整、口縁部内側に面を形成し、外面に 2 段ナデを施す非ロクロ成形の半完形品である。先の掘立柱建物出土遺物の中でも説明したが、加賀地域における在地産非ロクロ成形土師器食膳具としては最古事例であり、8 B 期に南加賀地域においても、在地の中で京都系土師器皿の生産を一部ではあるが、開始していることを物語る資料と言える。

第4項　H 区中世土器溜まり遺構出土遺物

G 地区から H 地区の谷部には広く中世土器の廃棄が見られるが、大きくは 5 つの土器集中区に分けられ、西から順に G 区で 1 と 2、H 区で 1 ～ 3 の番号を付した。つまり、前回報告の G 地区では、り・る・れ－ 44Gr を G 区 1 号土器溜まり、れ・る－ 36・37Gr を G 区 2 号土器溜まりとして報告し、今回報告の H 地区では、よ・ら・り・る－ 29 ～ 33Gr を H 区 1 号土器溜まり、や・ゆ・よ・ら・り－ 24 ～ 28Gr を H 区 2 号土器溜まり、り－ 23Gr を H 区 3 号土器溜まりとして報告することとした。以下に 1 ～ 3 号の 3 箇所の土器溜まりについて述べる。

1．H 区中世 1 号土器溜まり出土遺物

H 区の西南端区域、よ・ら・り・る－ 29 ～ 33Gr に分布する土器溜まりで、土師器食膳具片 4,196 点、土師器煮炊具片 8 点、陶磁器片 103 点を出土する。土師器食膳具から大きく 7 B 期、8 B 期、8 C 期の 3 時期に区分することが可能で、土師器食膳具様相については各時期に分けて、陶磁器類については土師器食膳具に帰属させて報告することは困難であるため、一括して述べる。

7 B 期の土師器食膳具　数量は少ないが、り 30Gr 付近を中心に当期の土師器食膳具が分布する。口径 12 ㎝前後の土師器平底椀と輪高台椀を主に構成され、これに口径 10 ㎝前半台の平底小皿（8）が加わる。口径の大きさや小型椀的な器形など、平底小皿出現期の様相を有しており、定型的な小皿とはなっていない段階である。胎土は全て A3 類で、古代的土師器発色を有する。なお、8 の平底小皿の底部には焼成前の穿孔がある。

8 B 期の土師器食膳具　ら 31Gr、り 29・30Gr に多い傾向はあるが、特に集中するわけではなく、広く散在する様相である。通常土師器平底椀の器形が体部外傾する新型器形である点や、平底小皿の法量と a 類系統、b 類系

統の器形が主体を占める点、柱状高台小皿が通常土師器主体で存在する点、内黒土師器輪高台椀の体部外傾器形と内面ミガキ調整の省略化傾向、内黒柱状高台椀の器形と内面ミガキ調整の省略などから、８Ｂ期と位置付けた土師器群である。なお、注目されるものとしては、30の内黒輪高台椀がある。北加賀産と思われるＣ類胎土の底部破片で、内底面には入念なミガキ調整、底面には「菊花状かき出し高台技法」の痕跡を残す。北加賀の８Ａ期に顕在化する内黒輪高台椀の高台技法であるが、８Ｂ期にも残存する可能性がある。

８Ｃ期の土師器食膳具　ら31～33Grを中心に比較的多く土師器食膳具が出土する。土器溜まりという性格から、一括性に乏しい資料だが、当期の数少ないまとまった土師器資料群と言える。器種は通常土師器の平底椀と柱状高台椀、平底小皿、柱状高台小皿、内黒土師器の輪高台椀と柱状高台椀・小皿であるが、内黒土師器は８Ｂ期に比べると減少しており、特に輪高台椀の減少が著しい。主体を占めるのは平底小皿で、36～54を上げたが、口径８cm台に主体を置き、全体的に厚手の作りをもつ。各胎土類型により器形が異なり、Ａ類胎土では古代から続く椀系統①類型36～38と、底径大きく偏平型③類型の39～41が存在。Ｄ類胎土では③類型は確認できず、いずれも椀系統の①類型で構成（42～46）。北加賀産Ｃ類胎土では椀系の①類型は47のみで、③類型が器形にバリエーションをもちながら、大半を占める（48～54）。Ｃ類胎土が多い点と③類型が主体を占める点が特徴と言えるだろう。また、当期の特徴として柱状高台器種が定量加わることがあげられる。59・60の体部皿形に広く器形のものと55～58の底径大きくやや椀形呈するものとがあり、全体的に厚手の特徴を持つ。なお、66の浅鍋も当期に位置付けたが、非ロクロ成形の厚手のもので、石英状の細砂粒素地をもつ北加賀系の胎土である。当期以降、散見される中世的煮炊具で、外面にはススが付着している。

陶磁器類　陶磁器類は８Ｂ～８Ｃ期の土師器群に伴うものである。灰釉陶器の碗と小瓶、白磁の碗と皿が出土しており、図化可能な遺存度高いものが多い。まず、灰釉陶器だが、碗はいずれも東濃窯産と思われるもので、67・68は口縁部外反器形や無釉である状況から西坂１号窯式に、69は内面体部に施釉が認められる点から明和27号窯式に位置付けられる可能性がある。なお、70の小瓶は碗類とは胎土が異なり、やや赤味を呈す。胴部下位に沈線が施され、底面ナデ消しの比較的丁寧な作りのもので、猿投窯産の可能性がある。白磁は、いずれも玉縁口縁をもつもので、玉縁の形態と胎土や釉調から、中規模玉縁で胎土は硬質、釉調は水色系を呈す71・72と、小さな玉縁で体部内湾器形、陶器質の胎土、白く化粧土がのる73～75、薄く長い玉縁で体部は外傾、内面に段があり、化粧土を伴う76、大きく厚い玉縁で、全体的に厚手、硬質の胎土を持ち、釉調は灰色を呈す77に分けられる。それぞれ、山本信夫氏の太宰府白磁分類でのⅪ１類、Ⅱ１類、Ⅱ５類、Ⅳ１類に該当し、Ⅺ１類は山本Ｂ期、Ⅱ１～Ⅳ１類は山本Ｃ期に位置付けられる。山本Ｂ期は10世紀末～11世紀に、山本Ｃ期は11世紀後葉から12世紀前半に対比されることから、山本Ｂ期の白磁は７Ｂ期に伴う可能性もないとは言えないが、加賀地域における白磁の共伴は主に８期以降であり、伝世品と見るのが穏当だろう。

２．Ｈ区中世２号土器溜まり出土遺物

１号土器溜まりの北東方、Ｈ区古代土器溜まりの南西側に隣接して分布する土器溜まりで、分布域は、や・ゆ・よ・ら・り－24～28Grと広く、土師器食膳具片6,607点、土師器煮炊具片13点、陶磁器片178点を出土する。内黒土師器率は比較的高く、陶磁器類の出土が目立つことが特徴として上げられよう。当土器溜まりは出土土器に時期的なまとまりがあり、特に、図化可能な遺存度高いものは、概ね８Ｂ期に位置付けられる。出土地点は、ゆ26・27Gr～よ27Grと、ら25・26Grに集中しており、比較的一括性高い土器廃棄遺構と捉えられる。

通常土師器食膳具では、平底椀、柱状高台椀、輪高台椀、平底小皿、柱状高台小皿、輪高台小皿が出土する。平底小皿と平底椀が主体的に存在し、定型的な柱状高台椀が存在している。

平底椀は８個体図示したが、やや小型を呈す80・81・87が存在することと、深椀器形を呈す85が存在すること、82の古手ｆ類器形を呈すものが存在することが特徴であるが、一方、83・84の椀は体部開く新型器形であり、それらが共存する様相を持つ。胎土はＡ類胎土とＤ類胎土とが拮抗して存在し、柱状高台椀に近い深椀器形を呈す86はＤ類胎土のものである。

柱状高台椀は、数は多くないが、体部外傾器形の定型的な器形のものを２個体図示した。いずれもＡ類胎土で、口縁部端を面形成する特徴を持つ。８Ａ期の深椀器形を呈すタイプが、体部外傾化の器形変化を行ったものだろう。なお、輪高台椀は底部破片のみで、様相は掴めないが、94の北加賀系Ｃ類胎土は大型法量を持つ。

平底小皿は遺存度高いＡ・Ｂ類胎土16個体とＤ類胎土６個体を図示した。口径は８cm台のものや10cm台のも

のもあるが、ほぼ9㎝台に中心を持つ。器形は古代以来の椀器形の系統にある①類型が主体で、白磁模倣の②類型は少数派。③類型は確認できない。①類型ではB区上層溜まりの小皿分類で示したa類系統が主体を占める。当器形はA・B類貝土の7割を占め、D類貝土では②類型が目立つ。

柱状高台小皿は少ないが、内黒土師器の同器種よりは多く、当器種が通常土師器として定着し始めたことを物語る。ただ、図示したものは全て底部破片であり、様相を捉えにくい。遺存する体部の様相から、椀形呈すものと皿形呈するものが確認でき、椀形から皿形へ変化する過程の段階と位置づけられよう。なお、当資料では柱状高台小皿の輪高台タイプとも言える、輪高台小皿が定量出土する。SB310、SK420のところでも述べたが、北陸地域には定着しない器種で、新潟や東北からの影響下で出現した可能性がある。口径10.5㎝を測る118とそれよりやや大型の119とやや小型の121があり、底面糸切り後のナデ調整を施す。SB310、SK420と同様に、全てD類胎土であり、体部器形は強く開く皿形を呈する。これら皿形器形に対し、117は椀形器形を呈す同一器種の可能性がある。小型輪高台椀とも位置付けられるが、口径9.6㎝と柱状高台小皿と同じ口径である点と輪高台の作りが小皿とよく似ている点などから、輪高台小皿の椀形タイプと位置付けたい。

内黒土師器食膳具では輪高台椀を主に、少量の柱状高台椀、柱状高台小皿が出土する。

輪高台椀は口径15㎝台を中心として、13㎝台の小型一群と16㎝以上を測る体部外傾器形がある。胎土はA類とD類が拮抗して存在する。128の体部外傾器形は8B期に新たに出現する新型器形で、内面ロクロナデで仕上げるが、他の椀は粗いながらも内面ミガキ調整を施す。131のようなミガキ調整を入念に施し、シャープな作りの高台を付すものも存在し、古い様相を残す。器形も先の体部開くタイプを少数派とし、深椀器形が体部外傾化してきたような器形が主流など、8A期の様相を残す傾向があり、小法量の一群の存在も同様と言えるだろう。

柱状高台椀はD類胎土のみで、深椀器形を呈す。内面ミガキ調整が丁寧で、作りの良いものである。

柱状高台小皿については先に触れたように数が少なく、内黒土師器主体から通常土師器主体へ移行する段階と言えるだろう。内面にミガキ調整をもたない浅椀形を呈す。

以上の土師器食膳具については、冒頭で8B期に位置付けられると述べたが、平底椀や内黒輪高台椀の小型法量、深椀器形の残存傾向、内黒土師器のミガキ調整の残存など、8A期の様相を残しており、G区SK472の土師器様相に近い。過渡的段階とは言えないが、8B期の中では古相呈す一群と言えるだろう。

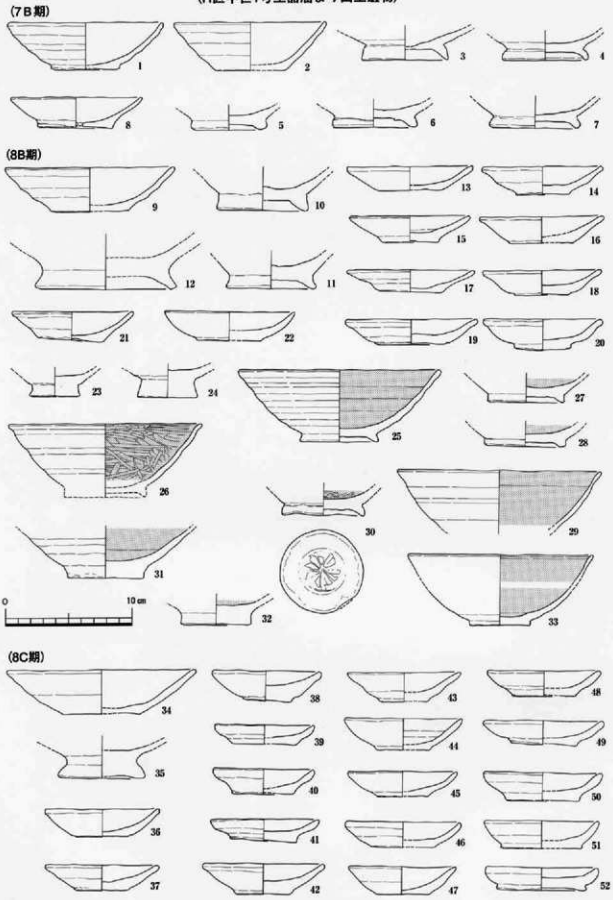
土師器煮炊具では新旧2タイプの鍋が出土している。新型の142は、口縁部が「く」字屈曲する内外面ユビナデ調整する厚手の非ロクロ成形品で、胎土は北加賀系の胎土。同種のものが、H区中世1号土器溜まりで出土している。8B期以降に出現してくる煮炊具と言えよう。これに対し、旧型の140・141は、体部が大きく開き、口縁部端で内側に屈曲するもので、古代以来の北陸型の系譜を引く、ロクロ成形の浅鍋である。体部外面に手持ちケズリ調整を施し、底部は丸底に仕上げる。胎土は地元A類胎土で、当期をもって消滅する器種だろう。

陶磁器類は灰釉陶器碗と白磁碗が出土するが、白磁の出土量が多く、冒頭で述べた一括性高い土師器食膳具集中廃棄区域でほぼ出土している。灰釉陶器碗は東濃窯産と思われるもので、145・146は施釉を厚めに施すことと高台形態から丸石2号窯式に、144・147は施釉が極めて薄いか無釉で、器形等から明和27号窯式に位置付けられるものと見る。白磁碗は数が多いが、149～151が中規模の玉縁口縁をもち、釉調や胎土から山本信夫氏の白磁分類でのⅪ1類、山本B期に位置付けられる以外は、全て山本C期に位置付けられるものである。C期のものは玉縁口縁をもつものと、やや外反する口縁部をもつものとがある。玉縁状口縁の中で、小型玉縁を呈す152・154は陶器質胎土や化粧土の特徴から山本Ⅱ1類に、長く薄い玉縁となる153・155・156は山本Ⅱ5類に、厚く大きな玉縁を呈す158・159は山本Ⅳ1類に分類される。外反口縁のものは、底部付近の見込み段と底部形態から、160を山本Ⅱ3類、161を山本Ⅴ1類にそれぞれ分類する。

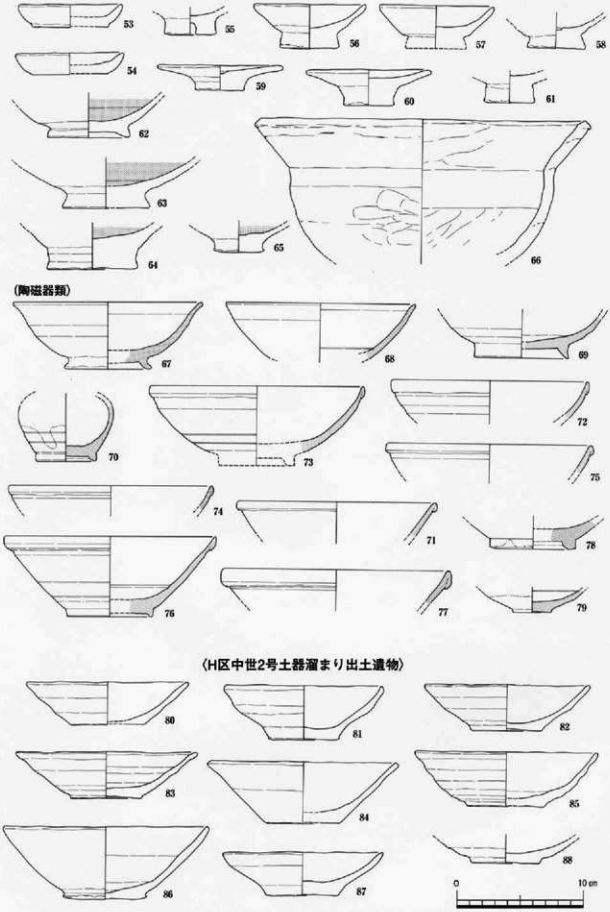
3．H区中世3号土器溜まり出土遺物

り23Gr の一角に通常土師器平底小皿8枚が完形ないしは半完形でまとめて廃棄されていた一括資料である。全ての小皿が歪み、粗雑に作られており、同じ胎土（A類胎土）、焼色をもつ。同時焼成された土師器小皿を一括して持ち込み、当地に廃棄した可能性があるが、ただ、作りの特徴は数種類あり、口径にもばらつきがある。つまり、作り手は複数存在している可能性が高く、底径大きなa類系の器形のものが主体だが、168と169はb2類系統のものだろう。また、a類系統の中でも口径10㎝近い大振りのものと9㎝未満の小振りのものとがあり、体部の厚さにも違いがある。小皿の器形から、時期は8B期と推察される。

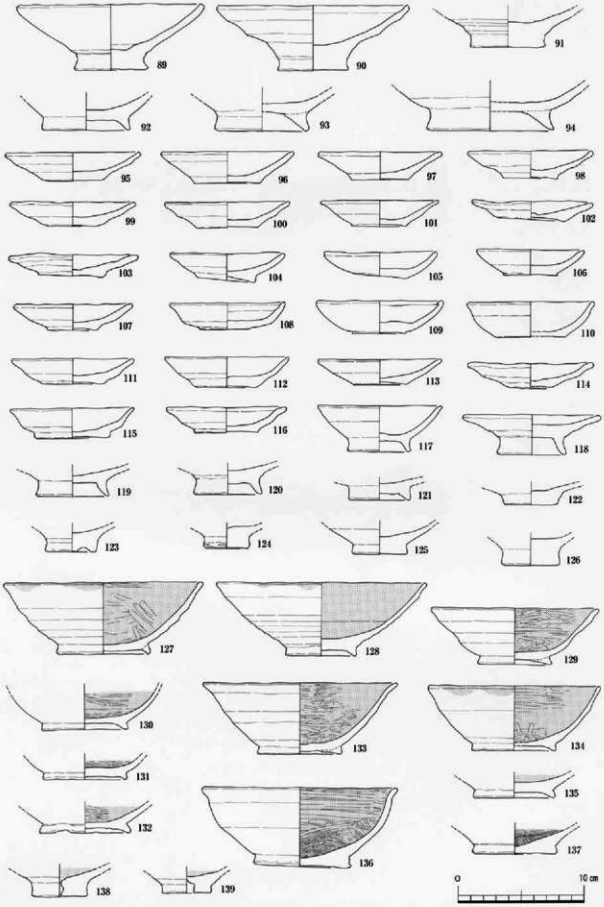
〈H区中世1号土器溜まり出土遺物〉



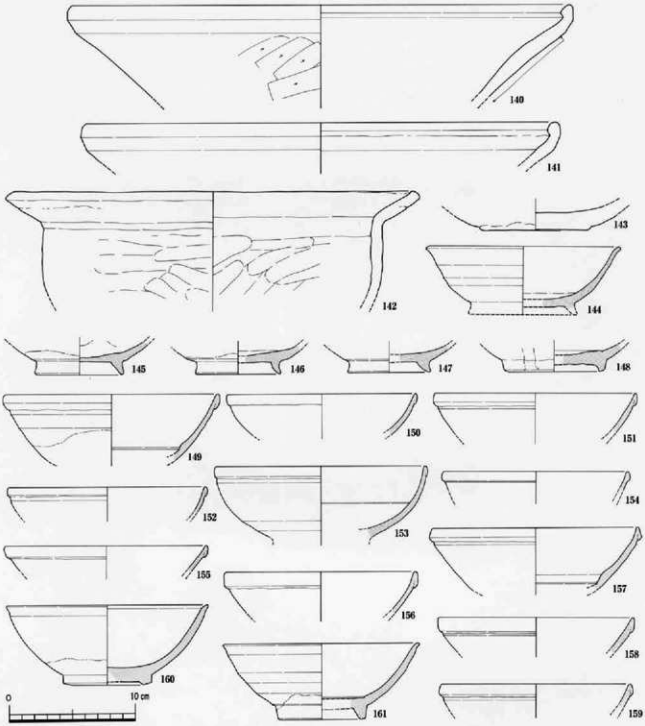
第100図　中世土器溜まり遺構出土遺物1（1号土器溜まり－1、全てS＝1／3）



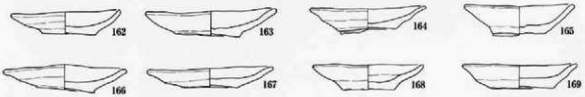
第101図　中世土器溜まり遺構出土遺物2（1号土器溜まり－2、2号土器溜まり－1、全てS＝1／3）



第102図　中世土器溜まり遺構出土遺物3（2号土器溜まり－2、全てS＝1／3）



〈H区中世3号土器溜まり出土遺物〉



第103図　中世土器溜まり遺構出土遺物４（２号土器溜まり－３、３号土器溜まり、全てＳ＝１／３）

付表１　額見町遺跡Ｖ報告区域出土古代遺物観察表

１．竪穴建物出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
SI119	1	須恵・坏B蓋中	SE108Dカ１	□15.5	南加工粗	5Y6/1・良好	口縁片	Ⅳ1		重複Ⅰａ	SE119-1
	2	須恵・壺B	SE108Dカ13	□22.2	南加細質	2.5YR5/1・不良	1/20	Ⅳ1			SE119-2
	3	土師・甕B小型	SE108Dカ7	□17.7, 底84, 側18.5	雲母A3	10YR8/4・良好	1/5	Ⅳ2カ	内外ヨコナデ		SE119-3
	4	鉄・鎌	SE108Dカ3	5.1×3.8×0.2	～	～	刃先片	～		重量16.6g	SE119-4

２．掘立柱建物出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
SB003	1	須恵・坏B蓋中	SB03Dカ1	□12.3	南加良土	5Y6/1・弱酸	1/6	Ⅳ2新	天ヘラ切りナデ	重複Ⅰａ	SB03-1
	2	須恵・坏B身中	SB03DP6・2.32ᵐ ᵛᵉ・4.34	□11.3, 底3.7, 側5.1, 台部0.65	南加細質	5Y6/1・良好	1/3	Ⅳ2新	底ヘラ切りナデ	焼酸敷物	SB03-2
SB005	3	須恵・坏B身大	SB005D4・0.93ᵐ ᵛᵉ・2.32-2.33ᵐ ᵛᵉ	□15.8	南加細質	2.5Y7/1・良好	1/6	Ⅳ2新	焼酸敷物		SB005-3
	4	須恵・坏A	SB005P11	～	南加細質	2.5YR5/2・不良	胴片	Ⅳ2カ	底ヘラ切りナデ		SB005-4
SB015	5	須恵・坏B蓋中	SB015P27	□12.7	雲母サラさ	2.5Y7/1・良好	口縁片	Ⅴ		重複Ⅰａ	SB015-1
	6	須恵・鉢B	SB015P5・5D23・土器ᵛᵉ ᵛᵉ4・0.17-0.27ᵐ ᵛᵉ	□18.4, 底8.5, 高11.4, 側9.3	南加細質	2.5Y6/1・良好	1/4	Ⅴ	外ヨコナデ, 底糸切り痕	焼酸敷物	SB015-2
	7	土師・鍋側面部	SB015P14	□25.2, 側10.2	雲母A2	7.5YR6/4・良	口縁片	Ⅳ1～Ⅳ2			SB015-3
SB016	8	須恵・坏A	SB016Dカ・5.26	□13.8, 底5.6	南加細質	7.5Y6/1・良	2/5	Ⅳ2カ	底ヘラ切りナデ	焼酸敷物	SB016-1
	9	須恵・小甕	SB016Dカ1・6.36-37	□17.9, 側15.5	南加細石英	10YR6/1・弱酸	1/20	Ⅰ1	外面ヘラ状ナデ, 内面ヨコナデ	焼成焼酸痕	SB016-2
	10	土師・鍋B	SB016Dカ5	□30.0, 側18	雲母A2	7.5YR7/4・良	口縁片	Ⅳ2	内ヨコナデ		SB016-3
	11	石製品・紡石	SB016Dカ3	7.9×4.3×2.7	凝灰岩		4/5	～		擦痕有, 紡錘4, 重量92g	SB016-2
SB017	12	須恵・坏B身中	SB017P3	□13.5	南加細質	2.5Y7/1・良	1/5	Ⅴ			SB017-1
	13	須恵・坏B蓋中	SB017P4	□13.8	南加細質	2.5Y6/1・弱酸	1/6	Ⅳ1	天ナデ	重複Ⅰ	SB017-2
	14	須恵・坏B蓋大	SB017P4・6.30	□16.7	南加細質	5R6/0・良好	1/4	Ⅳ2		重複Ⅰ	SB017-3
	15	須恵・坏A（石明孔）	SB017P10	□11.0, 底3.5	南加細質	2.5YR5/2・不良	1/2	Ⅳ2	底ヘラ切りナデ	内外面剥落	SB017-4
SB020	16	須恵・坏A	SB020P10	□13.8	南加良土	10BG6/1・良好	1/6	Ⅴ2			SB020-3
	17	須恵・鉢A	SB020P11	□17.8, 底座2.4	南加細質	2.5Y6/1・良好	1/5	Ⅳ2	底ヘラ切りナデ		SB020-5
	18	須恵・大甕B縁	SB020P2	残17.5	南加細質	2.5YR5/2・良好	胴部破片	6C2～4	外縁ハケ目, 内縁ナデ後ヨコナデ		SB020-6
SB027	19	土師・坏B蓋	SB027P10	残3.5, 底残0.6	雲母A1	5YR7/6・良好	Ⅳ1～Ⅳ2	内ヨコ・ボキ		使用痕不明, 焼酸敷物	SB028-1
	20	須恵・坏B蓋中	SB027P1・土器ᵛᵉ ᵛᵉ5・6.34ᵐ ᵛᵉ・9.22-23ᵐ ᵛᵉ	□16.4	南加細質	10YR6/1・弱酸	1/5	Ⅳ1	天ナデ	重複Ⅰ, 使用痕無, 内ヘラ状ヒ	SB027-4
SB027	21	須恵・坏A	SB027P5・0.26ᵐ ᵛᵉ・2.27ᵐ ᵛᵉ・6.16-33ᵐ ᵛᵉ	□13.4, 底3.4	南加細質	5YR5/4・良	1/3	Ⅳ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SB027-2
SB030	22	須恵・坏B蓋大	SB030P2	□17.8	南加良土	5Y6/1・良	口縁片	Ⅴ2			SB030-2
	23	土師・鍋B	SB030P3	□35.4, 側22.6	雲母A3	7.5YR6/2・良	口縁片	Ⅴ2			SB030-1
SB031	24	須恵・坏A蓋中	SB031P6	□14.2, 底11.8	南加長石	10YR7/1・良好	口縁片	Ⅳ2		重複Ⅰ	SB031-1
	25	須恵・坏A蓋中	SB031P9	□15.3	南加細質	2.5Y7/1・良好	口縁片	Ⅳ2		重複Ⅰ	SB031-2
	26	須恵・坏A	SB031P7	～	南加細質	2.5Y7/1・良好	1/10	Ⅳ2	底ヘラ切りナデ		SB031-3
SB034	27	須恵・坏B蓋	SB034P6	残2.9, 底残0.95	南加細質	10Y5/1・良	胴片	Ⅳ3		重複Ⅰ	SB034-1
	28	須恵・坏B蓋中	SB034P1	□16.4	南加細質	2.5Y5/1・弱酸	口縁片	Ⅳ3		重複Ⅰ	SB034-2

３．炉状遺構・集石遺構出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
S365	1	須恵・坏A	S365K7	□11.8	南加砂多	2.5YR5/4・良	1/10	Ⅳ1～Ⅳ2			S365-1
S366	2	須恵・坏B蓋中	S366-4・0.27ᵐ ᵛᵉ・2.26ᵐ ᵛᵉ	□14.8	南加細質	2.5YR6/1・弱酸	1/6	Ⅳ1	天ヘラ切りナデ	重複Ⅰ	S366-1
	3	須恵・坏A	S366-1	□13.4, 底3.8	南加細質	2.5YR7/1・良	1/4	Ⅳ1	底ヘラ切りナデ		S366-2
S372	4	須恵・鉢	S372	□13.0	南加細質	2.5YR6/1・弱酸	1/5	Ⅴ2～Ⅵ3			S372-1
S384	5	須恵・坏B蓋中	S384-14-15	残2.9, 底残0.6	南加細質	2.5YR6/1・弱酸	1/2	Ⅳ	天ナデヘラ	重複Ⅰ, 使用痕無	S384-1
	6	須恵・鉢A	S384-43-44	□15.8	南加細質	2.5Y7/1・良	1/6	Ⅳ2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	S384-2
S385	1	土師・鍋B	S385K7	□11.8	南加砂多	2.5YR5/4・良	1/10	Ⅳ1～Ⅳ2			S385-1
	2	須恵・坏B蓋中	S385-1・0.27ᵐ ᵛᵉ・2.26ᵐ ᵛᵉ	□14.8	南加細質	2.5YR6/1・弱酸	1/6	Ⅳ1	天ヘラ切りナデ	重複Ⅰ	S385-2
	3	須恵・坏A	S385-1	□13.4, 底3.8	南加細質	2.5Y7/1・良	1/4	Ⅳ1	底ヘラ切りナデ		S385-3
	4	須恵・鉢	S372	□13.0	南加細質	2.5YR6/1・弱酸	1/5	Ⅴ2～Ⅵ3			S372-1
	5	須恵・坏B蓋中	S385-19-20	□15.6, 側7.8	雲母A2	2.5YR6/1・良	1/2	Ⅳ	天ナデヘラ	重複Ⅰ, 使用痕無	S385-4
	6	須恵・坏B蓋大	S385-27	□20.0, 側10.2, 側19.6	南加細質	2.5Y7/1・良	1/5	Ⅳ2	内外ヨコナデ	内外面剥落	S385-5
	7	土師・坏B蓋大	S385-6	□11.2, 側12.2	雲母A2	5YR6/4・良好	口縁片	Ⅴ2	内外ヨコナデ	外面, 内面ボキ	S385-9
	8	土師・坏B小蓋大	S385-39-43	□15.6, 側7.8	雲母A2	2.5YR6/3・良	口縁片	Ⅴ3	内面ヘラ状ナデ	内面に墨書ノ字型	S385-10
	9	土師・長胴鍋B	S385-27	□28.0, 側19.2, 側19.6	雲母A2	2.5YR7/4・良	1/15	Ⅴ3	内外ヨコナデ	外面, 内ヨコナデ	S385-11
	10	土師・長胴鍋B	S385-6	□22.0, 側20.2	雲母A2	5YR7/4・良	口縁片	Ⅴ3	外ヨコナデ	内ヨコナデ外面剥落	S385-8
	11	土師・鍋B	S385-2	□28.4, 側26.0	雲母A1	2.5YR7/4・良	口縁片	Ⅴ3	内外ヨコナデ		S385-3
	12	土師・鉢B小型	S385-121	□14.4	雲母A2	2.5YR7/3・不良	1/10	Ⅴ1～Ⅵ	内外ヨコナデ		S385-5
	13	土師・鉢B小型	S385-122	□14.0	雲母A2	2.5YR6/4・良	1/10	Ⅴ1～Ⅵ	内外ヨコナデ		S385-6
	14	鉄・釘C頭	S385-98	7.3×2.7×0.6	～	～	刃先片欠	～		重複Ⅰ, 断面円形, 重量60.6g	S385-14
SB398	15	須恵・坏A	SB398-3・7・2.32ᵐ ᵛᵉ	□13.0, 底3.7	南加細質	10Y6/1・良好	2/5	Ⅳ2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SB398-1
	16	須恵・鉢A	SB398-9	□17.3, 底3.2	南加細質	2.5Y7/1・弱酸	1/6	Ⅳ2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SB398-2
	17	須恵・高坏A	SB398-8	□22.8, 側7.2	南加砂多	5Y6/1・良好	脚2片	外不ケズリ	内ヨコナデ	円内線刻紋有	SB398-4
SB400	18	須恵・坏B蓋小	SB400B C上層・SE423-8・31・294・6.25-9.27	□11.0	南加細質	5B6/0・弱酸	2/3	Ⅴ	天ヘラ切りナデ	重複Ⅰｂ, 使用痕無	SB400-1
	19	須恵・鉢A	SB400-26・SE423-335・P969・土器ᵛᵉ ᵛᵉ・6.26-6.28ᵐ ᵛᵉ	残10.1, 底7.8	南加良土	2.5Y7/1・弱酸	1/4	Ⅴ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SB400-2
	20	須恵・鉢B	SB400D E・SE002上層・6.25	□12.2, 底3.2, 台17.0, 台部0.6	南加細質	7.5Y7/1・良	1/6	Ⅴ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SB400-3
	21	土師・鉢C	SB400-20-29・07-92・98	□18.0, 側21.0	雲母A1	10YR7/3・良	1/6	Ⅴ	内外ヨコナデ	使用痕無	SB400-2
	22	土師・鉢C	SB400A・B・C・D上～下層	□17.6, 側22.6	雲母A1	10YR7/3・良	1/10	Ⅴ	内外ヨコナデ	使用痕無	SB400-4

付表1　額見町道跡V 報告区域出土古代遺物観察表

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	製土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
SK400	23	土師・浅鉢D	SK400-63	口22.6, 底30.0	密雑A3	10YR2/3・良	口縁片	V2			SK400-3
SK407	24	須恵・坏B身中	SK407-27	口12.4	南加通常	2.5Y7/1・甲類	1/6	8C2			SK407-1
	25	須恵・小甕	SK407-11・13・19・21・23・24・26・27・29・30・34・43・47・50・56・60・137・138・160・161・163・165・172・174・176・179・181・184・185・187・189・201～203・210・211＋SK400＋G.57	口12.8, 底14.8, 器22.8, 底部3.3, 胴高27.7, 最大径	南加通常	2.5Y7/1・甲類	4/5	8C2	外カキ目後当明ヨ、内ロル当て	使用痕無、焼成が不一致が ひずみ品、焼成中の胴亀裂	SK407-2
	26	須恵・中甕	SK407-40＋G.28ア・ウ	口20.4, 底18.6	南加通常	5PB4/1・良好	口縁片	8C	外ロル平目後ヨ明、内ロル当て		SK407-3
	27	土師・円筒形	SK407-214	器15.6	密雑A3	7.5YR7/3・良	破片	8C2	外カキ目	内面付着	SK407-4
SK408	28	須恵・坏B身中	SK408-216・209・A	口14.2, 底12.5, 器2.8, 底部厚0.9	南加通常	2.5Y7/1・甲類	1/2	8C2b	天ケズリ	重複1, 使用痕無	SK408-4
	29	須恵・坏B底中	SK408-275・186・B＋SK409＋G.29	口11.1, 底7.9, 器2.5, 底部0.95	南加通常	10Y6/1・良好	2/3	8C2b	天ケズリ	重複3b, 使用痕無	SK408-5
	30	須恵・坏B底中	SK408-147・300＋G.20・27	口10.2	南加通常	2.5Y7/1・良好	2/3	8C2b	天ケズリ	重複3a, 使用痕無	SK408-6
	31	須恵・盤B	SK408-187・194・199・202＋SK409＋G.22・28・G.28	口18.4, 器3.5, 台17.1, 台径8.4	南加中多	10YR7/1・甲類	3/4	8C2b	底ヘラ切りナデ	使用痕無, 底焼出	SK408-8
	32	須恵・小坏B	SK408-116・9・27	口10.6, 器0.1, 器0.9, 高4.9	南加通常	10YR7/1・甲類	1/4	8C	底ヘラ切り	使用痕無	SK408-6
SK408	33	土師・鍋A	SK408-8	底7.8	密雑A1	7.5YR6/4・良	4/5	8C2b	底表切りナデ後内外ミガキ	使用痕無, 内面赤彩	SK408-1
	34	土師・短脚小坏B	SK408-21	口13.6, 底12.1, 脚2.9	密雑A3	7.5YR5/6・良	1/20	8C2	内外ヨコナデ		SK408-5
	35	土師・短脚小坏B	SK408-130	口14.2, 底12.9, 脚4.2	密雑A3	10YR5/4・良好	1/6	8C2	内外ヨコナデ	内面剥落ず	SK408-4
	36	土師・皮袋B台	SK408-100	口22.2, 底20.0	密雑A3	5YR5/6・良好	口縁片	8C2b	外ヨコナデ		SK408-3
	37	土師・皮袋B台	SK408-263	口22.2, 底19.4, 器20.6	密雑A3	10YR7/4・良	1/20	8C2b	底部回ヨ後ヨコナデ		SK408-2
	38	土師・高盤B	SK408-256	口40.2, 底22.9	密雑A3	10YR7/4・良	1/20	8C2	内外ヨコナデ		SK408-1
	39	土師・鍋A	SK408-214・245・247	底15.6	密雑A3	7.5YR5/4・良好	底片	8C2	内外ヨコナデ, 内ア面ハケ目	内底煤黒ず	SK408-9
	40	土師・台付甕	SK408-9・10	口22.0, 器22.3, 脚19.5	密雑A3	10YR7/4・良	1/20	8C2	内外ヨコナデ, ハケ目	内面, 脚部万遍スス付	SK408-8
	41	土師・円筒形	SK408-134＋SK407-152	口11.4	密雑A3	7.5YR7/6・良	口縁片	8C2			SK408-6
	42	須恵・坏B身中	SK409-21	口12.8, 底7.7, 器4.5, 台径8.4	南加通常	7.5Y6/1・良好	5/6	8C2b	底ヘラ切りナデ	内底煤黒ず, 外底焼ヘラ記号(生)	SK409-5
	43	須恵・坏A	SK409-44	口13.5, 底4.35	南加通常	5Y5/1・良好	1/10	8C2			SK409-2
	44	須恵・坏A	SK409-75・6.30ア・ウ・G.28	口10.1, 底4.2	南加通常	5Y6/1・良好	2/3	8C2b	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK409-4
	45	須恵・坏A	SK409-20	口11.4, 底2.9	南加通常	2.5GY6/1・良好	1/5	8C2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK409-3
	46	須恵・坏A	SK409-40	口11.0	南加通常	5Y6/1・良好	1/6	8C2			SK409-①
	47	須恵・盤B	SK409-119・9・19・G.28	口22.0, 底5.2, 台18.7, 台径7	南加通常	7.5YR7/4・良	1/5	8C2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK409-7
SK409	48	須恵・盤B	SK409-30・38・103	口22.1, 底5.0, 台19.1, 台径9	南加通常	10Y6/1・良	1/4	8C2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK409-6
	49	須恵・鉢B	SK409-84・100・102・105・107・116＋SK408＋2.28ア・ウ・6.26・30・31ア・9・9.29・31ア・ウ・6.29・30ア・ウ明	口18.8, 器9.2, 底3.4	南加通常	2.5Y7/1・甲類	1/3	8C	外底ヘラ目後ヨ明, 内ロクロナデ後ヨ当て後ナデ	内面煤黒跡状	SK409-9
	50	土師・短脚小坏B	SK409-14	口14.0, 脚12.9	密雑A2	10YR7/3・良好	1/10	8C2b	外カキ目		SK409-2
	51	土師・短脚小坏B	SK409-92	口13.6, 脚11.7	密雑A3	5YR7/4・良好	1/10	8C2b	内カキ目	外面煤	SK409-3
	52	土師・長脚皿B	SK409-31	口16.5, 脚17.0	密雑A3	7.5YR6/4・良	口縁片	8C2b			SK409-1
	53	土師・皮袋B	SK409-32	口22.2	密雑A2	10YR7/3・良好	1/4	8C～9		使用痕無	SK409-4
	54	須恵・坏B身中	SK423-174＋SK410PD＋土器ア・外6・ウ・G.27ウ	口14.5, 底13.5, 台9.5, 台高3.3	南加南雑	2.5Y6/1・甲類	1/4	8C2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK423-2
	55	須恵・坏B身中	SK423-1	口14.0, 底4.5, 台9.8, 台高0.5	南加通常	10YR7/2・良好	5/6	8C3	底ヘラ切り後ミガキ	内底煤黒跡	SK423-3
	56	須恵・坏A	SK423-121・129・221	口14.8, 底5.3	南加通常	10Y6/1・良	1/2	8	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK423-4
	57	須恵・盤A	SK423-118・123・124・130・170＋土器ア・外4.22ア・6.02・08＋6.25ア・ウ	口21.1, 底17.0, 器0.9, 台11.6, 台径8.4	密雑A3	2.5Y6/1・甲類	2/3	8C～9	底糸切りナデ	内面煤黒跡状	SK423-7
SK423	58	土師・坏F	SK423-125	口10.7 2, 底8.56	密雑A1	10YR6/4・良	1/6	8	底ヘラ切り, 内外ミガキ	内面赤彩	SK423-1
	59	土師・短脚皿B	SK423-179・245	口15.8, 脚4.5, 脚16.8	密雑A3	10YR6/3・良好	1/10	8C3	脚内カキ目, 内ハケ目	内面線書風ナデ	SK423-2
	60	土師・短脚小坏B	SK423-356・374＋9.26	口16.2, 脚12.6, 脚15.6	鉄人(北加賀?)	5YR6/3・良好	1/10	E～H	内外ロクロナデ	内面線状ナデ	SK423-5
	61	土師・長脚皿B	SK423-136	口22.2, 脚19.2	密雑A3	5YR7/3・良好	口縁片	E3	外ヘラ目後ヨ, ケズリ		SK423-3
	62	土師・皮袋D	SK423-231	口20.0, 底16.6	密雑A3	5YR6/3・良好	口縁片	8	外カキ目		SK423-4
	63	土師・支脚形	SK423-258-219	下7.4, 脚2.8, 残高4.0	粗A2	7.5YR7/4・良好	1/3	E3	指頭痕	脚外面, 煤痕有, 下部に足痕	SK423-7
	64	須恵・坏B身中	SK423-171・261＋SK424-138・125	底12.8, 器0.67	南加通常	10Y7/1・良	2/3	8C2	天ケズリ	重複1b, 使用痕無	SK423-4
	65	須恵・坏B身中	SK423-11・15＋SK424-165・176・325・D	口13.2, 底11.7, 器2.2, 台径8.4	南加通常	N6/0・甲類	2/3	V1	天ヘラ切りナデ	重複1b, 使用痕無	SK423-3
	66	須恵・坏B身小	SK423-C.1層＋SK424.268	口12.2	南加通常	10YR6/1・甲類	1/2	V1	天ヘラ切りナデ	重複1b, 使用痕無	SK423-2
	67	須恵・坏B身大	SK423-79・143・147・148・150・152・168・182・183	口16.6, 底4.25, 台9.65, 台高0.5	南加通常	2.5Y7/1・良好	2/3	V1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK423-5
	68	須恵・坏B身大	SK423A.2層＋5.23ア・ウ	口15.8, 底6.1, 台10.1, 台径8.0	南加中ウ土	5PB5/1・甲類	1/10	8C2	底ヘケズリ	使用痕無	SK423-6
	69	須恵・坏B身中	SK423-199・200・202・205・206・208・210・209・308	口13.2, 底7.2, 台9.2, 台径8.0	南加通常	N6/0・良好	5/6	8C2b	底ヘラ切りナデ	内口縁・内底煤黒ず	SK423-7
	70	須恵・坏A	SK423-240・243・269＋SK400.37	口12.8, 底3.25	南加通常	2.5GY6/1・良好	1/3	V1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK423-9
	71	須恵・坏A	SK423-140・232＋SK424-11・180・208	口12.2, 底3.15	南加中多	5Y6/1・不良	2/3	V1	底ヘラ切りナデ	使用痕無, 外底焼ヘラ記号ア(?)	SK423-8
	72	須恵・盤A	SK423.21＋SK424-67・A＋土器ア・外4＋6.26ア・ウ＋6.27ア・ウ・6.29ア・ウ	口14.8, 底2.3	南加中ウ土	2.5Y6/1・良好	1/2	8C2b	底ヘラ切りナデ	内底煤黒跡	SK423-10
	73	須恵・盤A	SK423-41・45・C.7層＋土器ア・外4＋6.25ア・ウ・6.28ア・ウ	口15.2, 底7.6	南加通常	2.5Y6/1・甲類	1/4	V2	底ヘラ切りナデ	使用痕無	SK423-11
	74	須恵・高坏A	SK423-160＋SK424-419＋土器ア・外5＋6.30ア・ウ	口21.7	南加通常	2.5Y6/1・良好	外部1/4	8C2b	外部内面ヨコナデ	内面煤黒, 脚部「大ヨ」	SK423-13
	75	須恵・鉢F	SK423-25・215	底10.7	南加通常	5Y6/1・良好	1/6	8C2	底ヘラ先刻突, 底外側面ケズリ	内底煤黒ず	SK423-18
	76	須恵・小型壺A	SK423-4・251＋6.26ア・ウ・6.27ア・ウ・G.28	口13.1, 底11.1, 器14	南加通常	5Y6/1・良好	1/4	8	外カキ目後, 3条波状文を3段		SK423-14
	77	須恵・小型壺	SK423-4.層＋SK424D＋5.23ア・ウ	口8.2, 底4.1	南加中ウ土	2.5Y6/1・甲類	口縁片	8			SK423-15
	78	須恵・横瓶A	SK423-217＋SK424-217	口11.8, 高4.8, 最27, 最径26	南加中多	2.5Y6/1・甲類	1/2	V	底糸切り	底煤ず, 紐	SK423-12
	79	須恵・中甕	SK423-50・260＋土器ア・外5＋6.22ア・ウ	口15.7, 底14.2	南加通常	2.5Y7/1・甲類	胴上片	E～H	外胴明ヨ, 内当て		SK423-19
	81	土師・浅鉢D	SK423-32	口28.4, 底32.0	密雑A2	2.5YR5/2・良	1/20	V1	内カキ目		SK423-2
	82	土師・浅鉢D	SK423-31	口26.0, 底24.0	密雑A3	7.5YR6/4・良	1/20	V1	外カキ目		SK423-1
SK424	83	須恵・坏B底大	SK424-183・202・305・326・327・A・D＋6.30ア・ウ・6.25	口17.2, 高最4.5, 最27, 最径26	南加通常	5Y7/1・良好	略完	V1	天ケズリ	重複2a, 使用痕無	SK424-2
	84	須恵・坏B底大	SK424-130＋6.26	口16.9, 底4.4, 最12, 最径12.2	南加通常	2.5Y6/1・甲類	1/3	V1	底ヘラ切りナデ	重複2a, 使用痕無	SK424-1

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・備	焼成	時期	調整等	備考	実測番号
SK424	85	須恵・杯B蓋か	SK424-61・257・379＋SK425上層＋包括	口13.2	南加通常	10YR6/1・黒褐	1/2・V1	天ヤリ	天ヤリ	重焼主か、焼成極無	SK426-1
	86	須恵・杯B蓋か	SK424-67・261・281・285・368・369・420・C	口12.2, 器4.5, 円5.2, 台径3.5	南加通常	10YR5/1・黒褐	2/5・V	天ヤリ	天ヤリ	重焼主か、焼成極無	SK426-2
	87	須恵・杯A	SK424-197・261・281・285・368・369・420・C	口13.6	南加通常	10YR5/1・黒褐	5/6・V1	底ヘラ切ヨナデ	底ヘラ切ヨナデ	焼成極無	SK426-3
	88	須恵・杯A	SK424-279・375・＋425・426	－	南加通常	10YR5/1・黒褐	1/2・V	底ヘラ切ヨナデ	底ヘラ切ヨナデ	焼成極無	SK426-4
	89	須恵・盤A	SK424-303・304・306・341・475・D	口13.0, 底2.3	南加通常	7.5YR5/1・灰	2/5・B2弱	底ヘラ切ヨナデ	底ヘラ切ヨナデ	焼成極無	SK426-6
	90	須恵・盤A	SK424-311・397・402・D＋＋＋	口15.6, 底2.6	南加通常	2.5Y7/2・A	2/5・V1	底ヘラ切ヨナデ	底ヘラ切ヨナデ	内面摩耗剥	SK426-7
	91	須恵・盤A	SK424-378＋SK397下層＋＋＋	口18.8, 底2.0	鬼芯	2.5Y7/1・灰白	1/4・V	底ヘラ切ヨナデ	底ヘラ切ヨナデ	内面摩耗剥	SK426-8
	92	須恵・下付B B	SK424-246・345・347＋SK400B12＋SK425-146＋土器ヲ＋＋＋	口26.5, 底28.3, 高17.3, 底3.0	南加通常	2.5Y6/1・灰白	1/2・V	外ヨナ目後下ヘラケズリ、内下位ヨナ目、外上位立ち部底	底焼成無	焼成極無	SK426-10
	93	須恵・鉢A	SK424-214・405・434	口33.0	南加砂多	2.5YR5/2・赤灰	1/20・B2	内外ヨナ目、外上位立ち部底			SK426-14
	94	須恵・瓶(長胴・頸)	a.SK424-54 b.SK424-371	a.底6.7＋4.5, 底14.0, b.底27.7＋4.8, 底14.0	南加通常	2.5Y6/1・灰白	酸化形・B2	凸・指表痕ヤヘリ底取り	焼成極無		SK425-11・12
	95	須恵・大壺	SK424-96・147・184・186・201・203・206・208・230・238・263・267・268・272・276・280・286・288・290・307・313・314・316・317・320・322・324・329・332・339・340・356・361・362・390・457・456・457・467・482＋SK397＋SK400＋SK407＋SK408＋SK420＋SK423＋SK426＋SK430＋SK500＋SK600＋SK03＋SK03＋土器ヲ＋＋＋土器ヲ＋＋＋その他土器ヲ＋＋	口22.8, 底22.2, 底66.0, 胴最大66.0, 胴高76.0, 底厚6	南加砂多	10YR2/1・黒褐	1/4・B～B1	外面ヘラ目、内上半位当て ヨナ目(為当て→下面ハケ目	外底表内、側上ヘラ内ヘラ目 底部内面(黒色無機)	焼成極無	SK425-13
	96	須恵・瓶形	SK424-05	胴φ41, 残高15.5	南加通常	10YR6/1・灰	酸化形・B2	底ナデ	胴・肩部・頸ヨ矢筋、指ヒ痕 底底線	焼成極無、指ヒ痕	SK426-15
	97	土師・高杯A	SK424-47・105・113・125・A上層＋A 28・L28・28F＋D・0・0・0F＋	口19.2	粗砂A1	7.5YR6/5・赤橙	酸化1/5・V1	内外ミガキ	内外ミガキ	焼成極不明、画面赤彩	SK426-1
	98	須恵・平A	SK425B1上層＋SK427-22・23・29	口12.0, 底3.0	南加通常	2.5Y7/1・灰白	2/5・B2弱	底ヘラ切ヨナデ	底ヘラ切ヨナデ	内面・外底部摩耗	SK425-1
	99	須恵・鉢D(三足)	SK425-62・68	口31.1, 胴17.2, 底10.5, 脚高15.0	南加通常	2.5YR6/1・灰白	酸化形・B2弱	底形未明瞭	底形未明瞭	焼成極無	SK425-2
	100	須恵・壺台B	SK425-67	－	南加通常	2.5Y7/1・黒褐	1/6・B2	底ヘラ切ヨナデ	底ヘラ切ヨナデ		SK425-3
	101	土師・鉢A	SK425-44・62・68	口12.5, 底3.1, 器6.5	粗砂A1	7.5YR6/5・赤	2/3・B2弱	体下・底ヨナ 端内外ミガキ	体下・底ヘラ切	焼成極無、画面赤彩	SK425-5
SK425	102	土師・長頸瓶B	SK425A-8・9・15・23・39・77・84・101	口25.6, 頸16.5, 胴21.4	粗砂A3	7.5YR6/5・赤	1/5・B2弱	内側ヘラ目	内側ヘラ目	内面ユビ	SK425-2
	103	土師・長頸瓶B	SK425-13	口20.5, 頸3.9	粗砂A2	7.5YR6/5・赤灰	1/3B2弱	内側ヘラ目	内側ヘラ目		SK425-3
	104	土師・浅鉢B	SK425-30・34・72・94・97・103・120・125・132・139	口27.4, 底20.8, 器5.2	粗砂A2	7.5YR6/4・赤	1/5・B2	内外ヨナ目後下手外ヨナ目、内ハケ目	外底ヘラ切ヨナ目、内ハケ目	外底、内下手調整ナデ	SK425-4
	105	土師・浅鉢B	SK425-73	口30.6, 底30.6, 器30.7	粗砂A3	2.5YR5/4・赤	1/20・B2弱	内外ヨナ目、内下手ハケ目	内外ヨナ目、内下手ハケ目		SK425-6
	106	土師・浅鉢B	SK425-82・83・89・98・100・121	口27.8, 底30.4	粗砂A3	10YR6/3・赤	1/8・B2弱	内外ヨナ目後下手外ヨナ目、内下手ハケ目	内下手調	内下手調	SK425-5
	107	土師・浅鉢B	SK425-98	口27.2, 底30.4, 器3.6	粗砂A3	10YR5/3・赤	1/20・B2弱	内外ヨナ目、内下手ヨナ目	内下手調	内下手調	SK425-7
	108	土師・浅鉢B	SK425-114	口30.7, 底30.6, 器3.4	粗砂A3	10YR6/3・赤灰	1/20・V1	内外ヨナ目	内下手調	内下手調	SK425-9
	109	土師・浅鉢B	SK425-14・21・41・42・47・70・86・111	口30.6, 底30.0, 器3.2	粗砂A2	10YR6/4・赤	1/5・V1	外下手ヨナ、内上ヨナ手目下ヨナハケ目	外下手調	外下手調	SK425-6
SK426	110	須恵・鉢蓋A	SK426-72・73・80＋＋2B F＋V	口18.8	南加通常	2.5Y7/1・黒褐	1/4・B2弱	天ヤリ底底線ヨ各	重焼主、焼成極無		SK426-2
	111	須恵・杯B蓋か	SK426-30＋J 24F＋V	口14.8, 器2.90, 底3.0, 脚高0.8	南加通常	7.5YR5/3・黒褐	2/3・B1	天ヤリ底ヘラ切ナデ	重焼主、焼成極無		SK426-3
	112	須恵・杯B蓋か	SK426-174＋＋0.25	口11.0	南加通常	5Y6/1・灰白	1/3・B2弱	天ヤリ	重焼主か、焼成極無		SK426-1
	113	須恵・杯A	SK426-166＋B F 9F	口12.2, 底3.6	南加通常	10Y7/1・黒灰	1/3・B2弱	底ヘラ切ヨナデ	焼成極無		SK426-4
	114	須恵・杯A	SK426-150・151	口12.5, 底3.7	南加通常	10Y6/1・黒灰	1/3・B2弱	底ヘラ切ヨナデ	焼成極無		SK426-5
	115	須恵・盤A	SK426D7層＋＋J 9F ＋V・0.25F ＋V	口14.2, 底2.3	南加砂多	5G/6・B4F	1/5・B2弱	底ヘラ切ヨナデ	焼成極無		SK426-6
	116	土師・杯B蓋	SK426-250	口17.2, 底8.0	粗砂A1	7.5YR5/5・赤	底片・B2	内外ハケ	内面赤彩		SK426-8
	117	土師・長頸瓶B	SK426-41	口21.9, 底10.8	粗砂A3	10YR7/4・赤	口縁片・B2弱	内外ヨナ目			SK426-2
	118	土師・坩堝B	SK426-1	口11.7	粗砂A3	7.5YR6/5・赤	1/5・B2	内外ロクロナデ	内外指圧痕、口縁式		SK426-3
SK427	119	須恵・鉢蓋大	SK427-91・93＋＋5.25F ＋V・0.25F ＋V・0.25	口22.6	南加砂多	5Y6/1・黒褐	1/10・V	天ヤリ	重焼主か		SK427-3
	120	須恵・杯B蓋か	SK427-69＋＋5.25・0.25F ＋V・0.25F ＋V	口11.4, 底4.1	南加通常	7.5Y7/6・灰白	2/5・V1	天ヤリ底ヘラ切ナデ	重焼主か、焼成極無		SK427-1
	123	須恵・杯B蓋大	SK427-33・27	口15.4	南加B1.L	2.5Y6/1・黒褐	1/4・V1	天ヤリ底ヘラ切ナデ	重焼主か、焼成極無		SK427-2
	124	須恵・杯B身か	SK427-6・11・17・18＋＋0.25F ＋V	口15.6, 底5.9, 台12.5, 台底0.5	南加通常	7.5Y6/1・黒灰	1/4・V1	底ヘラ切ヨナデ	内底摩耗剥		SK427-8
	125	須恵・杯B身大	SK427-50＋SK426-60＋5.25F ＋V＋0.25	口16.8, 底5.7, 台9.1, 台底0.5	南加通常	10YR6/2・黒灰	5/6・V2	底ヘラ切ヨナデ	使用痕無、外底ヘラ記号「↑」		SK427-10
	126	須恵・杯B身大	SK427-38＋5.25F ＋V・0.25F ＋V・0.25F ＋V	口15.0	南加通常	7.5Y6/4・A	1/6・V2				SK427-7
	127	須恵・杯B身大	SK427-41・35・36＋＋0.25F ＋V	口17.0	南加通常	2.5Y7/1・黒灰	1/4・V1	底ヘラ切ヨナデ	使用痕無、外底ヘラ記号「↑」		SK427-9
	128	須恵・平A	SK427-51	口16.0	南加通常	2.5Y7/1・黒灰	1/8・V1				SK427-6
	129	須恵・平A	SK427-30＋2D 2L F＋0.25F ＋V	口15.3	南加通常	2.5Y6/1・黒褐	1/3・V2	底ヘラ切ヨナデ	使用痕無		SK427-11
	130	須恵・平A	SK427-56・58	口12.7, 底8.8	鬼芯	7.5YR6/4・赤灰	1/3・V1	底ヘラ切ヨナデ	外底ヘラ記号「×」		SK427-5
	129	須恵・平A	SK427-73＋＋0.25F ＋V	口14.0, 底3.3	南加通常	2.5Y7/1・黒褐	1/5・V1	底ヘラ切ヨナデ	使用痕無		SK427-4
	130	須恵・鉢E	SK427-76	口22.6, 底25.0	南加砂多	10G5/1・灰白	口縁片・V				SK427-12
	131	須恵・鉢A	SK427-43	口18.8, 胴12.2, 底8.0	南加通常	2.5Y7/1・黒褐	1/3B1弱	口縁横撫回止			SK427-13
	132	土師・長頸瓶B	SK427-46	口22.2, 胴19.0	粗砂A2	10YR5/3・赤灰	1/20・V2	内面ロクロナデ			SK427-2
SK428	133	須恵・杯B蓋か(転用皿)	SK426-230＋2B F ＋V・0.25F ＋V	口11.4	鬼芯	7.5Y5/1・A	2/3・B2弱	天ヤリ	重焼主、内天摩耗剥、器底	重焼主、焼成極無、器底	SK428-2
	134	須恵・杯B蓋か	SK428-69	口11.5, 底11.8, 器2.1, 底0.0	南加通常	N6/0・黒褐	1/2・B2弱	天ヤリ	重焼主か、焼成極無		SK428-1
	135	須恵・平A	SK428-30・26	口13.0, 底8	南加通常	5YR6/6・平灰	1/3・B2A	底ヘラ切ヨナデ	使用痕無、外底ヘラ記号「×」		SK428-4
	136	須恵・平A	SK428-79	口12.4, 底3.5	鬼芯	2.5YR7/1・A	1/3・B2弱	底ヘラ切ヨナデ	内底摩耗強		SK428-3
SK435	137	土師・皿類B	SK435-9・SK436-41・2.21	口8.7, 7.7＋4, 底9.2, 器0.9	粗砂A1	2.5YR7/6・赤灰	酸化・B1～B2	指ナデ	重焼主か、焼成ヘラ記号「×」		SK435-2
	138	土師・皿類B	SK435-10・11＋2.21	口7.0, 底5.1, 器1.0	粗砂A2	10YR6/4・赤灰	1/2・B1～B2	指ナデ	使用痕無		SK435-3
	139	土師・皿類B	SK435-22・25	口7.6, 底5.1, 器1.0	粗砂A2	10YR6/4・赤灰	1/2・B1～B2	指ナデ	使用痕無		SK435-4
	140	土師・皿類B	SK435-19	口5.6, 底5.2	粗砂A2	10YR7/3・A	1/2・B	指ナデ、上部横ヨヘラ先摩ら.1	使用痕無		SK435-5

付表１　観見町道路Ｖ報告区域出土古代遺物観察表

５．道路状遺構２出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	品質	胎土	色・地	残存	時期	調整等	備考	実測番号
道路２ SD22	1	須恵・平瓦系	SD22N-23・141・東下24・0-176・P上 層＋＋0.98°＞	C110.5, D82.5, J6.105, 側21.8, 厚20.0	細黒砂＋主	2.5Y7/1・良好	3/4	I 2	天ヤスリ	表側主, 使用痕跡, 天ヤスリ記号？	SD22-1
	2	須恵・平A系平	SD22N-24・124・133・150・164・主層・東下18・23・33・72・82	C113.5, H11.4, J6.5, 側21, 厚20.0	細黒砂	10YR7/1・明灰	4/5	I 2	天ヤスリ	表側？, 使用痕跡	SD22-2
	3	須恵・平A系平	SD22N-50・132・137・175・196・199＋＋0.98°＞	C117, J6.15, 厚12, 側20, 厚20.0	細黒砂	10YR7/1・明灰	2/3	I 2	天ヤスリ	表側？, 使用痕跡, 天ヤスリ記	SD22-3
	4	須恵・平B系天	SD22N-72・95・103・142・219・東下25・上層	C110.5, H13.5, 側25, 厚20.1	細砂多	10Y6/1・不良	2/3	3?2	天ヤスリ	使用痕跡	SD22-11
	5	須恵・平B系平	SD22N-25	側21.5, 厚20.1	細黒砂＋主	2.5Y7/1・良	1/4	3?2	天ヤスリ	内天焼成中	SD22-12
	6	須恵・平B系平（転用）	SD22N-94	C110.5, J22.5, 厚17, 側20.1	細黒砂	2.5Y7/1・明灰	2/3	3?2	天ヤスリ＋ケズリ	表側？, 内天焼成跡上 墨痕	SD22-13
	7	須恵・平B系小	SD22N-44	C12.1	細黒砂	10Y7/1・良好	1/3	V1	天ヤスリ	表側？b, 使用痕跡	SD22-14
	8	須恵・鍋蓋大	SD22N-105	側20.1	細黒砂＋主	2.5Y6/1・明灰	2/3	V2	天ヤスリ	表側？, 使用痕跡, 突帯付	SD22-15
	9	須恵・平B系天	SD22N-16・20・21・上層・22・26・下・6・19・38	C117.5, J6.45, 厚12.8, 側20.1	細黒砂	N6/・良好	1/3	V2	天ヤスリ＋ケズリ	表側？b, 使用痕跡	SD22-4
	10	須恵・平B系天	SD22N-148・1019	C110.5	細砂＋主	10YR7/1・明灰	1/8	V2	天ヤスリ＋ケズリ	表側？, 使用痕跡	SD22-5
	11	須恵・平B系平	SD22N-1・東42・7・6.15・16	C113.4	細砂＋主	2.5Y6/1・明灰	1/5	V1	天ヤスリ	表側？b, 使用痕跡	SD22-6
	12	須恵・平B系平	SD22N-10・17・18・22・23・26・29・31・下層・5.10・106・上層	C115.0, J6.35, 厚11.0, 側20.85	細黒砂＋主	10Y6/1・良好	1/2	II	天ヤスリ＋ケズリ	使用痕跡	SD22-25
	13	須恵・平B系平	SD22N-135	C114.5, J6.35, 厚11.1, 側20.4	細黒砂多	10YR7/1・良好	2/3	II系	天ヤスリ＋ケズリ	使用痕跡	SD22-26
	14	須恵・平B系平	SD22N-21・24＋主層＋＋0.98°＞	C115.0, J6.5, 厚11.3, 側20.6	細黒砂多	10YR7/1・良好	2/3	3?2.0	天ヤスリ＋ケズリ, 体部外辺 縁上多	使用痕跡	SD22-27
	15	須恵・平B系小	SD22N-232・237＋主層＋＋0.98°＞	C111.4, J6.35, 厚8.6, 側20.85	細黒砂多	10YR7/1・良好	1/5	3?2.0	天ヤスリ＋ケズリ	使用痕跡	SD22-28
	16	須恵・平B系平	SD22N-30・下20・B-8・5.39・40・上層＋P13B＋＋0.98°＞22°＋＋0.21°＞＋＋0.27°＞0.22	C115.4, J6.5, 厚9.6, 側20.85	細黒砂多	2.5Y7/1・明灰	2/3	V1	天ヤスリ＋ケズリ	内面中央軟刷毛, 外底ヘラ記号？[ ]	SD22-29
	17	須恵・平B系平	SD22N-51・101・111・202・230・254・下層＋上層＋＋0.98°＞＋0.22°＞＋0.02°＞	C117, J6.5, 厚9.6, 側20.65	細黒砂多	10YR7/1・明灰	4/5	V1	天ヤスリ＋ケズリ	使用痕跡	SD22-30
	18	須恵・平B系平	SD22N-7・17・19・52・66・68・69・下層＋上層＋＋0.17°＞10°＞＋P10	C114.5, J6.6, 厚9.0, 側20.0	細黒砂多	2.5Y7/1・良好	1/2	V2	天ヤスリ＋ケズリ	使用痕跡, 外底面ヘラ記号？	SD22-32
	19	須恵・平B系平	SD22N-16・47・140・166・下3・上層・下層＋5.35・G.1・4・11	C114.4, J6.45, 厚9.4, 側20.5	細黒砂多	2.5Y7/1・良好	1/2	V1	天ヤスリ	使用痕跡	SD22-33
	20	須恵・平B系平	SD22N-22・上層＋	C113.9, J6.7, 厚9.7, 側20.55	細黒砂多	2.5Y6/1・良好	1/2	V2	天ヤスリ＋ケズリ	内面軟刷痕	SD22-7
	21	須恵・平B系平	SD22N-29・上層＋＋0.98°＞＋0.22°＞＋＋0.26°＞	C112.2, J6.45, 厚8.3, 側20.6	細黒砂多	10YR7/1・明灰	1/3	V1	天ヤスリ＋ケズリ	使用痕跡	SD22-29
	22	須恵・平B系平	SD22N-110＋上層＋P5	C111.7, J6.4, 厚7.2, 側20.4	細砂	2.5Y6/1・良	2/3	V2	天ヤスリ＋ケズリ	使用痕跡	SD22-29
	23	須恵・平A	SD22P-40・43・1・上層	C113.1, J6.52	細黒砂多	2.5Y7/1・良	1/4	3?2.0	天ヤスリ＋ケズリ	使用痕跡	SD22-17
	24	須恵・平A	SD22P-260・326・406	C112.8, J6.58	細砂	2.5Y6/1・良	1/2	3?2.0	天ヤスリ＋ケズリ	内底軟刷	SD22-16
	25	須恵・平A	SD22P-220・上層＋P5	C112.9, J6.55	細黒砂多	N5/0・良好	1/2	3?2.0	天ヤスリ＋ケズリ	使用痕跡	SD22-15
	26	須恵・平A	SD22N-37・38・60・63・56・東下30・下層	C111, J6.55	細黒砂多	2.5Y6/1・不良	2/3	V1	天ヤスリ＋ケズリ	使用痕跡, 外底ヘラ記号 [＞]	SD22-19
	27	須恵・平A	SD22P-300・322・245・283・437＋主層＋＋0.98°＞＋＋0.18°＞	C112.6, J6.53	細黒砂多	2.5Y7/1・良好	3/4	V2	天ヤスリ＋ケズリ	使用痕跡	SD22-18
	28	須恵・平A	SD22P-1・M-24	C112.5, J6.50	細黒砂多	10Y6/1・良好	1/3	V2	天ヤスリ＋ケズリ	使用痕跡	SD22-8
	29	須恵・平A	SD22P-M-34・36・59・61・70	C106.4, J6.20	細黒砂多	10Y6/1・良好	2/3	V2	天ヤスリ＋ケズリ		SD22-10
	30	須恵・平A	SD22P-M-4・M-7・M-9・P5	C106.6, J6.32	細黒砂多	10YR7/1・明灰	1/2	V2	天ヤスリ＋ケズリ	内底軟刷	SD22-30
	31	須恵・平A（転用）	SD22P-J-M-M-52・65・C・P	C106.6, J6.24	細砂	5Y6/1・良好	1/4	V2	天ヤスリ＋ケズリ	内底焼成上軟刷ヘ	SD22-9
	32	須恵・平A	SD22P-430・420・732＋主層＋P5＋＋20°＞＋＋0.28°＞	C116.6, J6.17	細黒砂多	5Y6/1・良	1/2	V2	天ヤスリ＋ケズリ	使用痕跡	SD22-31
	33	須恵・平B	SD22N-31・5.74＋主層＋P5＋＋22°＞＋P	C106.4, J6.175, 厚16.4, 側20.6	細黒砂多	2.5Y6/1・良好	2/5	V1	天ヤスリ＋ケズリ	使用痕跡	SD22-32
	34	須恵・平B	SD22L-46・62＋＋0.98°＞	C120.6, J6.15, 厚17.1, 側20.7	細黒砂多	2.5Y7/1・良	1/4	3?2.0	天ヤスリ＋ケズリ	使用痕跡	SD22-34
	35	須恵・平B系小	SD22N-97＋L-17・G17	C108.8, J6.17, 厚12.3, 側20.45	細砂	2.5Y6/1・良好	1/3	3?2.0	天ヤスリ	内底軟刷痕	SD22-33
	36	須恵・小型鉢	SD22N-5・下層＋P5	B8.5, B8.4	細黒砂多	2.5Y7/1・明灰	2/5	3?2.5	天ヤスリ＋ケズリ	使用痕跡	SD22-37
	37	須恵・鍋子	SD22P-9＋J7	C108	細黒砂多	5Y6/1・良	1/10	II?2	沈線		SD22-2
	38	須恵・鍋子	SD22P-120・140・147・148・154・361・264＋266・412・414・465・467・C-M-Q-10・B-23・5.4＋主層＋P5＋＋P21・24＞＋＋0.21°＞22°＞＋0.32°＞＋0.23	C115.2, B47.6, 厚19.3, 側22.6	細黒砂多	2.5Y7/1・良好	5/6	3?2.0	表成形台輪, 体部上位沈線	内底軟刷痕, 外底ヘらがら 書	SD22-41
	39	須恵・小鳥人	SD22P-10・上層＋D-31	C143, B46.6, 厚30.8, 高10.2, 台6.5, 台高0.55	細黒砂多	5PB6/1・明紫	3/4	V	脚下ヨコケズリ, 脚ヨコ軸		SD22-39
	40	須恵・小瓶	SD22P-38＋＋0.22°＞	C17.2, B27.6, 厚11.4	細黒砂多	5Y7/1・明灰	1/10	3?2.5			SD22-38
	41	須恵・瓶	SD22N-152	B23.5, B30.7, 厚40.5	細黒砂多	7.5Y8/1・白	胴完	II	底ケズリ, 胴中前刺突文	底口縁欠け	SD22-40
	42	須恵・瓶A	SD22L-L-M-14・19・22・35・39・41・43・44・47・P-20・40＋＋0.16°＞17	B46.6, 厚17.7, 胴径11.3, 台11.6, 台高2.2	細黒砂多	5B6/1・明灰	9/10	V1	脚下位ケズリ, 円盤開閉孔 底		SD22-42
	43	須恵・瓶A	SD22P-261・255・223・313・東下4・Q-26・42・5.75＋P22°＞	C113.5, B47.5, 厚11.4, 側6.5	細黒砂多	10YR7/1・明灰	1/2	V1	円盤開閉孔底		SD22-43
	44	須恵・瓶B	SD22L-10・東下20・15.7・B-129・132・東下G-1・11・19・22・23・114・東下2・東下7・上層＋上層＋P35＋＋0.17°＞5＋0.19°＞	B35.7, 厚14.8, 胴径14.1, 台8.8, 台高0.7	細黒砂多	10YR6/1・良好	9/10	V2	底糸切り後, 円盤開閉孔, 脚下位ケズリ, 脚部底面, 脚部底縁4段	外底ヘラ記号？＜	SD22-46
	45	須恵・瓶G	SD22N-90・119・206・東下・N-14・17・18・21・28・32・35・78・98・114・156・180・217・230・東下14・東下30＋上層＋P14＋＋上層＋P5	C115.6, J27.5, 厚15.8, 胴径8.5	細黒砂多	5PB6/1・明紫	2/3	V?	胴部縦ヘラ上げ, 脚下ヨコケズリ		SD22-54
	46	須恵・瓶G	SD22P-137・C-137・139・147・東下19・上層＋上層＋P20°＞P	C115.6, J27.5	細黒砂多	5PB6/1・明紫	1/5	V			SD22-49
	47	須恵・瓶G	SD22N-134・東下30・43・64・81＋SK141＋SK136＋上層＋P13B-170・B-6・42・54B-473・609・V-484・1000・1020・1022・1029・1032＋＋P27°＞	C110.5, B39.6, 厚17.6, 高16.2	細黒砂多	2.5Y7/1・明灰	1/2	V	底部縦ヘラ, 脚下位ケズリ		SD22-3
	48	須恵・瓶C	SD22P-M-M-M

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
遺構2 SD23	53	須恵・壺ア	SD22P-8・34・34-58・146・239・258・279・287・306・350・443・※下5・12・Q-5・36・47・61・62・99・117・140・154・155・163・※下2・9・27・5・※下19・T-66・T13・＋土器ア・竹5・＋土器ア・竹・A・土器ア・竹・＋22・23ア・竹・W・W・22・23ア・竹5。	C175.B164.B255.4.B258.B264.D4.B262.D5	南加通常	2.5YR4/1・暗褐	1/2	V	胴内外ヨコナデ後、外ヨコ手縦ケズリ		SD23-52
	54	須恵・壺ア	SD22P-25・88・95・B-10・25・56・66・79・85・87・89・92・96・106・108・109・113・117・132・138・142・144・※下30・36・141・151・Q-86・＋5・＋18ア・竹＋6・17	C118.B118.B117.B264.D2	南加砂多	2.5Y7/1・良好	4/5	V	内面ナデ		SD23-53
	55	須恵・壺ア	SD22M-56・T30・SD22T4・＋49・25ア・竹・A・土器ア・竹・＋A・25ア・竹・5・22・23ア・竹。	C119.A9.B130.B262.B263.D10	南加粒際	5YR5/4・良	1/4	I	胴体部多量のヨコ位ケズリ、胴内ヨコナデ		SD23-3
	56	須恵・中甕	SD22P-25	C125.D5.B130.B264.D5	南加サラさ	10YR7/1・良好	口縁片	II	胴外ヨコ		SD23-59
	57	須恵・中甕	SD22M-12・＋5.23ア・竹・＋19・20ア・竹	C125.6.B262.B264.D4	南加砂多	10YR7/1・暗褐	口縁片	I	胴外ヨコ強ナデ、内ロ当て		SD23-60
	58	須恵・中甕	SD22O-84	C125.4.B262.B264.D5	南加砂多	2.5Y7/1・良	口縁片	VI	胴外ヨコ、内ロ当て		SD23-58
	59	須恵・中甕	SD22O-104・108・114・117・119・121・124・126・128・130・132・134・135・142・146・159・T 8ア・竹・23・24・＋土器ア・竹8。	C125.2.B155.B267.B264.D4.3	南加通常	2.5Y7/1・良好	1/4	V2	胴体部ヨコ強ナデ・タタキ目、内ロ当て		SD23-55
	60	須恵・中甕	SD22J-T 8・G-177・P-10・22・33・46・52・120・142・172・180・200・215・218・268・270・272・292・294・297・300・309・315・319・322・329・341・351・354・358・360・362・370・374・382・384・395・403・407・436・453・454・※下11・Q-8・9・11・24・28・30・34・40・49・52・58・60・64・77・165・173・183・203・206・237・253・291・※下20・※R-111・112・※下6・21・※Q-87・※下・※R-148・＋SK449＋土器ア・竹5・＋22ア・竹・＋A・21・22ア・竹・2.5ア・竹・5.29ア・竹・9.30ア・竹8。	C125.4.B262.3.B267.8.B264.5.B265.6.B267	南加サラ土	2.5YR4/1・良好	1/2	IV	胴体部多一段ヨコ目→下位ヨコ目多出し→下半縦ハケ目、胴内ヨコ当て→ロ下半ヨコ当て	使用痕無	SD23-6
	61	須恵・中甕	SD22D-179・K-18・P-1・18・19・28・31・42・63・102・105・107・108・121・147・190・190・203・219・220・224・230・260・304・305・311・333・352・361・375・385・430・441・※下7・Q-7・14・20・※下19・R-106・123・125・S-32・72・＋土器ア・竹5・＋L22ア・竹・＋20・26・27・25・30ア・竹。	C125.8.B262.2.B264.6.B265.3.B267.5	南加通常	10YR6/1・良好	4/5	IV	胴体部多一→ヨコ目→下位ヨコ目多出し→下半縦ハケ目、胴内ヨコ当て→縦ハケ目上下下部ハケ目→下半ヨコ明ハケ目。	外底糸底中	SD23-56
	62	須恵・中甕	SD22P-4・85・295・※下1・Q-162・※下22・B-30・35ア・竹・＋SD22P1＋土器ア・竹5・＋9.23ア・竹・＋22・23ア・竹・5.26ア・竹。	C125.6.B262.8.B264.B265	南加通常	10YR6/1・良好	1/20	IV	胴外体部3.内ロ当て		SD23-1
	63	須恵・中甕	SD22O-83・171・183・186・P-1・5・13・35・37・65・69・77・79・82・83・86・101・104・106・110・112・114・116・118・119・11 7・120・121・123・124・126・134・137・140・144・145・150・152・153・156・158・160・164・168・171・176・180・185・202・235・250・263・271・277・279・286・303・340・377・386・410・411・413・416・418・420・424・425・427・440・441・460・※下9・Q-10・26・31・61・90・※下・＋土器ア・竹5・＋5.29ア・竹・＋22・23ア・竹。	C125.0.B263.B264.D4.3	南加通常	5YR6/1・良	1/4	IV2	胴体部多一内外ヨコ目→外胴下半縦ケズリ→下半ヨコ明ヨ出し、内胴下半縦ハケ目→下半ロ当て		SD23-37
	64	土師・高杯B	SD22O-6	C143.D.B262	南通A2	7.5YR6/6・良好	1/20	V	ロクロナデ		SD23-2
	65	土師・鉢	SD22O-125・土器ア・竹5	C[illegible]D3	南通A2	10YR7/4・良	底片	K	外体部多量ヨコ目、内底ハケ	内面ユゴケ	SD23-5
	66	土師・支脚形	SD22O-R-T24＋土器ア・竹5・＋G21	C140.T28.B9.6.G58	南加M2	10YR7/4・良好	3/5	II	指ナデ	使用痕無	SD23-3
	67	土師・管状鍋	SD22P-39	C[illegible]＋35.E.L1	南通A1	2.5YR7/6・良好	略完	-	指ナデ	重量43.1g	SD23-4

6．H区古代ピット出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
H区古代ピット	1	鉄・刀子	P3	132＋13＋0.6		刃部先端	-			刃角度、重量23.6g	H13-6
	2	土師・支脚形	P362	F3.4.B267.6.E.L13	南KM	10YR6/4・良	4/5	II	指ナデ	使用痕無、黒斑	P-9
	3	土師・短脚小鉢B	P313	C114.B.B138.B140	南通A2	10YR6/3・良	1/4	IV2	内外ヨコ目	外面内黒?!	P-3
	4	緑釉・有台椀	P633・＋K.33		粗生黒結色	7.5YR6/6・暗褐	1/3	石江中期	底糸切手縦ヘラ	使用痕無	P-6
	5	土師・浅鍋底台	P536・＋P536	C125.2.B263.3.B264	南通A2	5YR6/6・良好	1/4	IV2	底部平多一内外ハケ目→外胴下半縦ケズリ→下半ヨコ明ヨ出し、内胴下半縦ハケ目→下半ロ当て	使用痕無	P-5
	6	須恵・甕A	P630	-	粗生	2.5Y7/1・良好	底片	V	底ヘラ切りナデ	使用痕無、外底黒斑?!	P-5
	7	須恵・甕A	P680	D150.B.K15	粗生	2.5Y7/2・色	1/2	VI	底ヘラ切りナデ	使用痕不明	P-6
	8	土師・鉢A	P682	略G5	南KM	2.5YR6/4・良	2/5	IV1	底糸切り後ケズリ後内外ミガキ	内面赤彩	P-2
	9	須恵・浅鉢B（矢部転用説）	P8604・＋L29・9.25・9.21・G29	C162.B.K5.F103.G.B63	南加通常	5R/6・暗褐	2/5	II	底ヘラ切りナデ	内・外体部多量ヨコ位ケズリ	P-2
	10	土師・支脚形	P869	I.5.7.T5.B8.6.E.L9	南通A1	5YR5/3・良好	2/5	II・V	指ナデ	黒色斑	P-8
	11	須恵・甕A	P884	C112.B.B29	南加通常	10YR6/1・良好	2/5	VI1	底ヘラ切り後	使用痕無、外底黒斑多?（ケズ?）	
	12	須恵・甕A（打痕用）	P885	C125.D.B.K12	南加通常	2.5YR7/4・不良	2/3	IV2M	底ヘラ切りナデ	内外全体、無地と強斑	P-3
	13	土師・鉢F	P21・＋P1638	C114.5.B.K35	南通A1	5YR7/6・良好	2/5	II3	底ヘラ切り後内外ミガキ	使用痕無、内面赤彩	P-1
	14	須恵・杯B身かえ	P3883・＋P1044＋9.25・9.22	C112.4.B.K7.F7.E.G.B.K.D.B263	南加M粗	5Y5/1・良好	1/2	II2	底ヘラ切りナデ	内底摩耗痕	P-1

7．H区古代土器溜り遺構

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・地	残存	時期	調整等	備考	実測番号
H区古代土器溜まり集中2	1	須恵・坏B蓋大	上部ピット1：113-162	口16.0	角閃通常	2.5YY7/1・良好	1/4	第2段	ヘラケズリ	使用痕有。内面剥離	HF-V55-8
	2	須恵・坏B蓋大	上部ピット1：213-215	口16.8、高1.4、径30、径高1.1	角閃通常	7.5YY7/1・良好	1/3	第2段	ヘラ切りナデ	使用痕有。内面剥離	HF-V55-39
	3	須恵・坏B身中	上部ピット1：78・6.2m"ヤ	口15.4、高4.2、台径2、台高0.5	角閃通常	2.5YR6/3・良好	1/3	第1	底ヘラ切りナデ	内底摩耗痕	HF-V55-31
	4	須恵・坏A	上部ピット1：255	口13.8、高4.45	角閃通常	2.5BY6/1・不良	2/3	第2段	底ヘラ切りナデ	使用痕有	HF-V55-46
	5	須恵・坏A	上部ピット1：46	口13.8、高3.2	角閃通常	7.5YR6/1・良好	1/3	第2段	底ヘラ切りナデ	内面摩耗痕	HF-V55-45
	6	須恵・坏A蓋	上部ピット1：207-210-294	口13.4、高1.1	角閃通常	10YR5/1・良好	1/4	第2段	底ヘラ切りナデ	使用痕有	HF-V55-36
	7	須恵・壺A蓋	上部ピット1：122-N-186・6.2m"ヤ	口12.6、高4.5、径3.5、台径3.9	角閃通常	2.5YY7/1・特異	1/2	第2段	ヘラケズリ	正位焼、内天井剥離	HF-V55-38
	8	須恵・鉢A	上部ピット1：28-73-106-113-177・6.2m"ヤ	口16.8、高11.8	角閃通常	2.5BY6/1・特異	1/3	第1	内面横方向ヘラ	使用痕有	HF-V55-16
	9	須恵・瓶底付胴部	上部ピット1：m20	胴12.0	角閃通常	2.5YY7/1・良好	1/15	第2		脚に十字スカシ	HF-V55-20
	10	土師・長胴長台	上部ピット1：192	口25.6、胴21.2	雲母粗	5YR7/6・良好	1/20	第2段	内外ヨコナデ		HF-V55-7
	11	鉄・鎌製石鹿	上部ピット1：42	6.8×3.3×0.5	鉄鹿先端					鹿鹿部分欠損、重量11.6g	H13-10
	12	須恵・鍋蓋	上部ピット1：m25-35"ヤ	口18.6	角閃小石	2.5YR5/1・特異	1/5	V1	天ケズリ	表面1、使用痕有	HF-V55-43
	13	須恵・坏B蓋大	上部ピット1：824	口21.4、高2.15	角閃通常	10YR6/1・良好	1/4	V1	天ケズリ	表面1a、内天井剥離	HF-V55-9
	14	須恵・坏B蓋小	上部ピット1：203-787	口11.2、高2.6、径2.2、台径1.1	角閃通常	10YR6/2・良好	1/2	第2段	天ケズリ	表面2、使用痕有	HF-V55-77
	15	須恵・坏B蓋小	上部ピット1：1044・1.6m	口11.3、高2.3、径2.1、台径0.9	角閃通常	5YR6/1・良好	1/3	第2段	天ヘラ切りナデ	表面2、使用痕有。内天井剥離、内面ヘラ記号「ノ」	HF-V55-15
	16	須恵・坏B身大	上部ピット1：B-19-K-95-345・N-104-630-633・148・W-C・4.9m"ヤ	口15.0、高6.0、台径5.5、台高0.55	角閃通常	2.5YR7/1・良好	2/3	V1	底ヘラ切りナデ	内天井剥離	HF-V55-22
H区古代土器溜まり集中2	17	須恵・坏B身大	上部ピット1：372-691・718・804・1020-K・C・4.9m"ヤ	口15.2、高5.35、台径3、台高0.45	角閃通常	10YR6/1・良好	2/3	V2	底ヘラ切りナデ	使用痕有	HF-V55-26
	18	須恵・坏A	上部ピット1：B-205-B・S2424・6.0m"ヤ・6.2m"ヤ・6.4m"ヤ	口12.0、高4.1	角閃小石	7.5YR6/3・良好	4/5	V1	底ヘラケズリ	使用痕有	HF-V55-44
	19	須恵・坏A	上部ピット1：B-577・1.12m"ヤ・6.2m"ヤ・2.5m"ヤ	口14.0、高3.5	角閃通常	10YR7/1・特異	3/5	第2	底ヘラ切りナデ	外底摩耗中	HF-V55-30
	20	須恵・壺A	上部ピット1：B-250-261-793・N-288・6.2m"ヤ	口16.5、高22	角閃通常	5Y7/1・良	1/5	第2段	底ヘラ切りナデ		HF-V55-64
	21	須恵・壺B	上部ピット1：B-258-482-778・S2424-1014・N-451・6.2m"ヤ・2.2m"ヤ・4.2m"ヤ	口21.6、高4.4、台径7.8、台高3	角閃通常	5B/6・良好	1/4	第2段	底ヘラ切りナデ	使用痕有	HF-V55-72
	22	須恵・鉢付脚B	上部ピット1：B-20-39-266-309・N-292-1300・1.6m"ヤ・2.2m"ヤ	口20.7、外高4.25、台径7.0、台高6	角閃中多	7.5B/6・良好	1/5	第2段	脚部縦ケズリ	使用痕有	HF-V55-73
	23	須恵・中甕	上部ピット1：B-890	口24.2、胴22.5、頸高4.2	角閃通常	2.5YR5/2・不良	口縁片	第1	口縁部を横ヨコナデ、内面ヘラ削ナデ		HF-V55-23
	24	須恵・中甕	上部ピット1：B-214-502-519・W-440-1178・SK425・SK435・SK440・SK440・S2424・6.0m"ヤ・6.2m"ヤ・6.2m"ヤ・6.2m"ヤ	口22.5、胴21.5、頸高3.5	角閃中多	2.5YR6/1・良好	口縁片	第2	胴部は縦ヘラ削ナデ、内面ヘラ当て		HF-V55-4
	25	土師・鍋蓋B	上部ピット1：B-239	口36.6、胴35.3	雲母A2	7.5YR5/4・良好	1/40	V1	内外ヨコナデ	内面ススボ、外煤痕	HF-V55-13
	26	鉄・刀子	上部ピット1：B-1-13・G5	6.8×1.3×0.6	-	-	2/3	-		刃部は有角形、重量7.4g	H13-8-ii
	27	須恵・坏B蓋大（転用鉢）	上部ピット1：B-S2424・S2425B・4.2m"ヤ・6.2m"ヤ・6.2m"ヤ・6.2m"ヤ	口17.7	角閃通常	7.5Y/6・特異	1/3	第2	ヘラケズリ	表面1、内天井剥離、焼成有	HF-V55-6
	28	須恵・坏B蓋中	上部ピット1：B-1011-1254・1237-C・6.2m"ヤ・6.2m"ヤ	口17.0、高3.6、台径3.7、台高0.6	角閃通常	2.5YR6/1・特異	1/2	第2	ヘラケズリ	表面1、内天井剥離中	HF-V55-1
	29	須恵・坏B蓋中	上部ピット1：B-1108	口18.4、高3.6、台径3.5、台高0.1	角閃中多	7.5Y/6・良好	3/4	第1	ヘラケズリ	表面1、使用痕有	HF-V55-5
	30	須恵・坏B蓋中	上部ピット1：B-1120-1121	口17.4、高4.7、台径3.3、台高0.7	角閃通常	10YR6/1・良	1/4	第2	ヘラケズリ	表面1、使用痕有。底中央ヘラ	HF-V55-2
	31	須恵・坏B蓋中	上部ピット1：B-S2424-1242・1-100	口18.8、高4.3、台径3.4、台高0.75	角閃通常	10YR5/1・特異	1/2	第2	ヘラケズリ	表面1、使用痕有	HF-V55-11
	32	須恵・坏B蓋中	上部ピット1：B-1003-1005	口18.8	角閃通常	N5/0・良好	1/3	第1	ヘラケズリ	表面1、使用痕有	HF-V55-3
	33	須恵・坏B蓋中	上部ピット1：B-1121-1421	口18.4	角閃通常	N5/0・良好	1/4	E・第1	ヘラケズリ	表面1、使用痕有	HF-V55-4
	34	須恵・坏B蓋中	上部ピット1：B-1510-450-509-792・V-S20・SK444	口18.6、高2.1、台径7.5、台高0.7	角閃通常	N5/0・良好	完形	第1	ヘラケズリ	表面1、内天井剥離中	HF-V55-1
	35	須恵・坏B蓋小	上部ピット1：B-792-792-991	口12.2、台径5、台高2.5、台高0.6	角閃通常	5Y6/1・良好	1/2	第2段	ヘラケズリ	表面1a、使用痕有。内天井剥離、内面ヘラ記号「ノ」	HF-V55-12
	36	須恵・坏B身中	上部ピット1：B-1408・1440・5.2m"ヤ	口13.8、高3.6、台径7、台高0.6	角閃通常	5Y6/1・良好	1/3	E	底ヘラ切りナデ	使用痕有	HF-V55-65
	37	須恵・坏B身小	上部ピット1：B-N-T-713-1306・1318-1346	口11.6、高3.8、台径5、台高0.45	角閃通常	2.5Y7/1・良好	3/5	第1	底ヘラ切りナデ	内面中央摩耗中	HF-V55-28
	38	須恵・坏A	上部ピット1：B-856-883-1181	口13.0、高3.5	角閃通常	2.5YR6/1・良	1/2	第1	底ヘラ切りナデ	使用痕有	HF-V55-41
	39	須恵・坏A	上部ピット1：B-S2424・S2425・2m"ヤ	口14.6、高3.1	角閃通常	7.5Y6/1・良好	1/5	E	底ヘラ切りナデ		HF-V55-62
	40	須恵・坏A	上部ピット1：B-1248-1256	口14.0、高3.9	角閃通常	10Y6/1・良好	1/3	第1	底ヘラ切りナデ	内面摩耗中	HF-V55-47
H区古代土器溜まり集中2	41	須恵・坏A	上部ピット1：B-S2424・D・6.0m"ヤ	口13.8、高3.4	角閃通常	5Y6/1・良好	1/5	第1	底ヘラ切りナデ	使用痕有	HF-V55-37
	42	須恵・坏A	上部ピット1：B-S2424	口14.8、高4.1	角閃通常	5Y6/1・良好	1/4	V1	底ヘラ切りナデ	使用痕有	HF-V55-55
	43	須恵・坏A	上部ピット1：B-N-T-896-1180・6.0m"ヤ・2.2m"ヤ	口13.3、高3.6	角閃通常	2.5YR6/2・不良	1/5	第1	底ヘラ切りナデ	使用痕有	HF-V55-68
	44	須恵・壺A	上部ピット1：B-418-636-950-1453・B-SK441・6.0m"ヤ	口14.8、高2.0	角閃通常	5Y5/1・良好	2/5	第2段	底ヘラ切りナデ	使用痕有	HF-V55-2
	45	須恵・壺A	上部ピット1：B-686-B・U-1078-1088・1137	口14.8、高2.1	角閃通常	N5/0・良好	1/2	第1	底ヘラ切り	使用痕有	HF-V55-80
	46	須恵・鉢F	上部ピット1：B-N-315-341・N-168-444・449-471-477-480-491-492-857-982・1145-1175-1196-1205・6.0m"ヤ・2.2m"ヤ・6.2m"ヤ・6.2m"ヤ	口14.4、高14.4	角閃中多	N6/0・良好	4/5	第1	ロクロナデ	使用痕有	HF-V55-9
	47	須恵・小型鉢	上部ピット1：B-N-C・V-509・6.0m"ヤ・6.0m"ヤ・6.2m"ヤ	口10.0、高7.6、胴9.0、頸10.8	角閃通常	5B5/1・良好	1/3	第2	底ヘラ切りナデ	使用痕有	HF-V55-8
	48	須恵・小壺F	上部ピット1：1116	口9.0、胴8.0、頸12.4	角閃通常	10YR7/6・特異	3/5	第1	ロクロナデ		HF-V55-17
	49	須恵・壺A	上部ピット1：546・U-289	口15.0、胴14.5、頸高12.5、台径11、台高1.6	角閃通常	N6/0・良好	胴完形	第2	内面胴部横ヨコ、頸部ヨコ	使用痕有	HF-V55-11
	50	須恵・大型壺A	上部ピット1：K-663	口11.5、胴27.4、胴21.5、頸高17.0、底径17.0、底高12.4、台径3.1	角閃中多	2.5Y7/1・良好	特定	第2	内面胴部横ヨコ、胴外下位ケズリ、頸部上部横ヨコ		HF-V55-12
	51	須恵・大型壺A	上部ピット1：K-464・841・863・863・1135-B	口14.2、胴27.4、胴21.5、頸高17.0、底径11.4	角閃中多	2.5Y7/1・良好	台欠完形	第2	内面胴部横ヨコ、胴外下位ケズリ、頸部上部横ヨコ		HF-V55-12
	52	須恵・壺A	上部ピット1：328-1015-1285・U-C・S2424・6.2m"ヤ・6.2m"ヤ・6.2m"ヤ・6.2m"ヤ・6.2m"ヤ	口15.6、胴14.8	角閃通常	5Y5/1・特異	1/5	第1	内面胴部横ヨコ、頸部近傍		HF-V55-66
	53	須恵・鉢底付台脚	上部ピット1：B-S2424・B-400-773-983-984・1009-1186・V-583-780・U-224・480-908・S2425・6.2m"ヤ・6.2m"ヤ・6.2m"ヤ・6.2m"ヤ・6.2m"ヤ

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
旧区 古代 土器 溜まり 集中3	54	須恵・中甕	土器F ｹ55-B-37・46・74・291・323・353・527・584・984・ｻ-376・541・574・586・687・736・750・761・800・806・900・1172・1282・1272・V-241・620・U-133・163・164・168・179・201・229・242・296・334・345・352・642・928・+ 53118・+ 58441・+ 58444・+ 53023・+ 6.22-25ｱ ﾔ・+ 6.22ｱ ﾔ・+6.22-26ｱ ﾔ他	(1257, 1262.0, 脚径5.0, 底高4.3	角閃石等	10YR2/1・良好	1/6	第一Ⅳ1	外面ヘラ削り、内面当て		HF ｻ5-4
	55	須恵・中甕	土器F ｹ55-B-404・114・122・132・172・280・382・446・538・ｻ-136・138・152・154・450・832・624・472・479・480・503・1040・1152・1153・1239・1416・1042・1443・+ 53118・+ 58438・+ 58422・+ 53023・+ 6.22ｱ ﾔ・+ 2.27ｱ ﾔ・+ 6.23-26ｱ ﾔ他	(1250, 底30.0, 脚径35	角閃石等	N4/0・良好	1/30	第一Ⅳ1	口縁部多歪チ、側外面ヘラ削り後ヨコナデ、内面当て	焼成崩れ	HF ｻ5-5
	56	須恵・壺蓋	土器F ｹ55-B-1・17・103・ｻ-236・617	(1323.0, 底29.6	角閃石等	2.5YR 5/1・堅緻	1/30	Ⅳ1	ロクロナデ	土師器産か焼成成	HF ｻ5-18
	57	須恵・壺蓋	土器F ｹ55-B-249・324・V-C・+ 6.22ｱ ﾔ	(1363, 底32.2	角閃石等	2.5YR 5/1・堅緻	1/30	Ⅳ1	ロクロナデ	土師器産か焼成成	HF ｻ5-19
	58	須恵・無足円頂蓋	土器F ｹ55-B-272・234・+ 9.20ｱ ﾔ・+ 6.22ｱ ﾔ・+ 2.22ｱ ﾔ	脚13.2	角閃石等	2.5YR 5/2・堅緻	1/3	V	上下2段共円形スキシ全3方		HF ｻ5-3
	59	土師・埴輪A	土器F ｹ55-B-290・270・271・344	(1144, 底7.4	雲母A1	5YR7/6・良好	1/2	B	底ケズリ後内外ミガキ	埴輪系か	HF ｻ5-5
	60	土師・壺A	土器F ｹ55-B-・383		雲母A1	7.5YR8/4・良	1/5	Ⅳ2	底ケズリ後内外ミガキ	埴輪系か	HF ｻ5-6
	61	土師・甕B	土器F ｹ55-B-1259	(1360.0, 底32.0	雲母B2	7.5YR8/4・良	1/30	B	内ヨコナデ	焼成崩れ相	HF ｻ5-14
	62	土師・支脚形	土器F ｹ55-B-847	径4.8, 孔1.0	角閃石	5YR7/3・良	1/4	3	指ナデ痕	鍛冶系か	HF ｻ5-20
旧区 古代 土器 溜まり 集中3	63	須恵・ﾎﾛﾎﾛ中甕	土器F ｹ55-V-370・613・510・620・712・713・794	(1118, 底8.6, 径61.6, 径40.4	角閃石等	2.5Y7/1・堅緻	3/5	B	底ケズリ	内面摩耗中	HF ｻ5-27
	64	須恵・ﾎﾛﾎﾛ中甕	土器F ｹ55-V-287・+ 9.20ｱ ﾔ	(1138, 底18.5, 径58.8, 径40.0	角閃石等	2.5Y6/1・良好	3/4	Ⅳ1	底ケズリ後ナデ	内面摩耗前	HF ｻ5-25
	65	須恵・ﾎﾛﾎﾛ中甕	土器F ｹ55-V-442・土器F ｹ54-121・+ 6.25-26ｱ ﾔ・+ 6.24-25ｱ ﾔ	(1146, 底4.8, 径60.0, 径40.4	角閃石等	5Y6/1・良好	1/4	B	底ケヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-24
	66	須恵・ﾎﾛﾎﾛ中甕	土器F ｹ55-V-45・171	(1133, 底4.2, 径68.8, 径40.4	角閃石等	N3/1・良好	4/5	Ⅳ1	底ヘラ切りナデ	内面摩耗前	HF ｻ5-29
	67	須恵・ﾎﾛﾎﾛ中甕	土器F ｹ55-V-405・463・864・U-143・239・1020	(1117, 底4.4, 径68.8, 径40.4	角閃石等	2.5Y7/1・堅緻	1/3	Ⅳ1	底ヘラ切りナデ	内面摩耗	HF ｻ5-23
	68	須恵・甕A	土器F ｹ55-V-453・V-787・789・790・791	(1141, 底3.05	角閃石等	2.5YR 5/2・不良	1/3	B	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-44
	69	須恵・甕A	土器F ｹ55-V-453・604	(1132, 底3.4	角閃石等	5Y7/1・良	1/3	Ⅳ1	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-42
	70	須恵・甕A	土器F ｹ55-V-120・122	(1127, 底3.3	角閃石等	10Y7/1・良	1/5	Ⅳ2他	底ヘラ切りナデ	内面摩耗中	HF ｻ5-49
	71	須恵・甕A	土器F ｹ55-V-73・149・170・200・876	(1133, 底3.4	角閃石等	10Y7/1・良	2/3	Ⅳ1	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-60
	72	須恵・甕A	土器F ｹ55-V-40・114	(1133.8, 底7.9	角閃石等	10Y6/1・良好	1/3	Ⅳ1	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-46
	73	須恵・甕A	土器F ｹ55-V-436	(1134, 底2.45	角閃石等	7.5Y6/1・良好	1/4	V1	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-70
	74	須恵・鉢甕	土器F ｹ55-V-404	(1133.8	角閃石等	N5/0・堅緻	1/10	E	体底端まで為ヘラ削		HF ｻ5-73
	75	須恵・鉢??	土器F ｹ55-V-597・598	(1194	角閃石等	5Y5/2・良好	1/6	B	内ヨコ縦ハケ目	焼成崩壊	HF ｻ5-10
	76	須恵・小甕F	土器F ｹ55-V-252	(1172.8, 底7.95, 脚3.5, 脚3.5, 底7.8	角閃石等	5Y6/1・良好	完形	Ⅳ1	底ヘラ切り	焼成崩壊、脚中部円孔	HF ｻ5-1
	77	須恵・小甕F	土器F ｹ55-V-101・105・980・U-A3・+ 6.20-19ｱ ﾔ・+ 6.19-20ｱ ﾔ	(1173, 底7.3, 径70.6, 脚10.3	角閃石等	10Y6/1・堅緻	9/10	Ⅳ1	底ケズリ	焼成崩壊、外周ヘラ記号「脚」	HF ｻ5-6
	78	須恵・瓶A	土器F ｹ55-B-41・V-75・108・109・112・U-12・13・15・28・+30・A・+ 6.21-6.26	脚6.8, 脚20	角閃石1	10YR7/1・良好	1/5	Ⅳ1	円盤閉塞技法		HF ｻ5-14
	79	須恵・瓶C	土器F ｹ55-V-294・U-K23・1144・+ 53023・+ 6.20-+18	脚96, 脚207	未焼?	2.5Y6/1・良好	1/4	Ⅳ-Ⅳ	頸上位一位沈線各2本、脚下位ケズリ		HF ｻ5-47
	80	須恵・鉢瓶	土器F ｹ55-B-793・V-471・490・+ 58387・+ 58409・+ 土器F ｹ55-219・+ 6.20-22ｱ ﾔ・+6.22ｱ ﾔ・+6.22-26ｱ ﾔ・+ 2.24ｱ ﾔ・+ 6.16ｱ ﾔ・+ 6.26ｱ ﾔ	(1318, 底10.0, 底22.4	角閃石等	2.5Y6/1・良好	1/20	Ⅳ1	脚外周中央部ヘラキキ目、内面当て痕ナデ		HF ｻ5-23
	81	土師・支脚形	土器F ｹ55-V-275-326	下2.4, 下8.4, 径27.4, 径1.8	角閃石2	5YR7/4・不良	2/5	E	指ナデ痕	焼熟品か	HF ｻ5-19
旧区 古代 土器 溜まり 集中3	82	須恵・鉢蓋A	土器F ｹ55-B-805・880・1109・V-35・+ 53023	(1367, 底6.8, 径55, 脚径16	角閃石等	2.5Y6/1・良好	2/3	Ⅳ2他	天ケズリ、天丸条痕調	蓋鉢1、使用痕無	HF ｻ5-6
	83	須恵・ﾎﾛﾎﾛ蓋大 (転用蓋)	土器F ｹ55-B-327・+ 53023・+ 7蓋・+ 6.22-27ｱ ﾔ	(1163	角閃石等	2.5Y7/1・堅緻	1/3	Ⅳ2他	天ケズリ	蓋鉢1、内天部研磨、墨痕	HF ｻ5-9
	84	須恵・ﾎﾛﾎﾛ蓋中	土器F ｹ55-B-549	(1342, 底28, 径22, 脚径6.9	角閃石等	5Y6/1・良好	1/5	Ⅳ2他	天ケズリ	蓋鉢1、使用痕無	HF ｻ5-15
	85	須恵・ﾎﾛﾎﾛ蓋小	土器F ｹ55-V-72・73・75	(1319, 底27.2, 脚径12	角閃石等	10Y6/1・堅緻	1/2	V1	天ケズリ	蓋鉢1、使用痕無	HF ｻ5-12
	86	須恵・ﾎﾛﾎﾛ身大	土器F ｹ55-B-A・V-17・847・881・V-495・518・630・956・+ 9.21ｱ ﾔ	(1372, 底7.95, 径12.3, 径60.6	角閃石等	10YR7/1・堅緻	2/3	Ⅳ1	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-20
	87	須恵・ﾎﾛﾎﾛ身大	土器F ｹ55-B-404・495・1253・V-207・207・+ 6.22ｱ ﾔ・+ 6.23ｱ ﾔ・+ 6.23-24ｱ ﾔ	(1368, 底6.4, 径11.4, 径60.0	角閃石等	2.5Y7/1・良好	2/5	Ⅳ2他	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-19
	88	須恵・ﾎﾛﾎﾛ身大	土器F ｹ55-V-153・873・U-116・727・+ 6.20ｱ ﾔ	(1366, 底5.7, 径106, 径60.4	角閃石等	5Y7/1・良好	2/5	V1	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-21
	89	須恵・ﾎﾛﾎﾛ身中	土器F ｹ55-V-368・369・839	(1135, 底32, 径109, 径60.4	角閃石多	10Y7/1・良	2/5	E	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-22
	90	須恵・ﾎﾛﾎﾛ身中	土器F ｹ55-B-324・323・335	(1324.4, 底4.1, 径66, 径60.6	角閃石等	2.5Y7/1・良好	2/3	Ⅳ1	底ヘラ切りナデ	内面中央摩耗前	HF ｻ5-24
旧区 古代 土器 溜まり 集中3	91	須恵・ﾎﾛﾎﾛ身小	土器F ｹ55-B-22・44・46	(1323.8, 底4.25, 径6.2, 径60.4	角閃石等	2.5Y6/1・堅緻	1/3	Ⅳ2八	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-33
	92	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-B-931	(1336, 底3.9	角閃石等	5Y7/1・不良	1/5	Ⅳ1	底ヘラ切りナデ		HF ｻ5-54
	93	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-B-1007・1010・1189	(1332, 底3.8	角閃石等	2.5Y6/2・不良	3/4	Ⅳ1	底ヘラ切りナデ		HF ｻ5-36
	94	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-B-1109・1134・1135・1136	(1330, 底3.5	角閃石多	2.5Y6/1・良好	1/2	Ⅳ1	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-37
	95	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-B-324・349・404	(1336, 底3.6	角閃石等	7.5Y7/1・良	1/4	Ⅳ1	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-32
	96	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-B-48・50・52・62	(1326, 底3.3	角閃石等	2.5Y7/1・良	1/2	Ⅳ2他	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-38
	97	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-B-843・846・860・863	(1332, 底3.4	角閃石等	10Y7/1・良	4/5	Ⅳ2他	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-34
	98	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-B-420・B-441・442・448・944	(1338, 底3.4	角閃石等	5Y7/1・良	2/5	Ⅳ2	底ヘラ切りナデ	内面中央摩耗前、外周ヘラ記号「/」	HF ｻ5-48
	99	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-B-756・845・1064・C・+ 6.24ｱ ﾔ	(1334, 底3.8	角閃石等	5Y6/1・良好	2/3	V1	底ヘラ切りナデ	内面摩耗中	HF ｻ5-78
	100	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-B-637・652・749・1020	(1324, 底3.0	角閃石等	2.5Y7/1・良好	3/4	Ⅳ2他	底ヘラ切りナデ	内面摩耗前	HF ｻ5-35
	101	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-V・U-A・+ 9.19-20ｱ ﾔ・+ 19ｱ ﾔ	(1116, 底3.5	角閃石等	2.5Y6/1・良好	4/5	V1	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-62
	102	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-B-・U-181・226・577	(1125, 底4.0	角閃石等	10Y6/1・良好	2/5	Ⅳ2他	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-43
	103	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-B-303・370・443・953	(1125, 底3.85	角閃石等	10Y7/1・良	2/3	Ⅳ2他	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-40
	104	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-B-107・227・233・363・564	(1127, 底3.3	角閃石1	10YR6/1・良好	1/3	V1	底ヘラ切りナデ	内面摩耗前	HF ｻ5-50
	105	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-B-145・C・+ 6.23ｱ ﾔ・+ 21	(1172, 底4.9	雲母	2.5Y7/1・良	1/6	Ⅳ1	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-7
	106	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-B-403・512・951・+ 58444	(1160, 底2.75	角閃石等	10YR6/1・良好	1/5	V1	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-3
	107	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-B-719・840・851・9	(1167, 底2.35	角閃石等	10Y7/1・良好	1/4	V1	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-67
	108	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-B-11	(1158, 底2.05	角閃石等	5Y7/1・良	1/9	V1	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-79
	109	須恵・ﾎﾛ身A	土器F ｹ55-V-172・987	(1153, 底1.85	角閃石等	5Y6/1・良好	1/5	V1	底ヘラ切りナデ	焼成崩壊	HF ｻ5-65

付表1　額見町遺跡V報告区域出土古代遺物観察表

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・味	残存	焼成	調整等	備考	実測番号
旧区古代土器溜まり集中ゾーン	110	須恵・小型壺	土器F'ｸﾘｽﾄ-9-61-45	底7.2	南加通母	2.5Y6/1-灰褐	7/8	焼2	底ヘラ切り痕	使用痕無	HP'ｸﾘｽ2
	111	須恵・小型壺	土器F'ｸﾘｽ-68	口11.3, 底4.7, 高8.5	南加通母	10YR7/1-灰白	9/10	焼2	底糸切り痕	使用痕無	HP'ｸﾘｽ4
	112	須恵・鉢子	土器F'ｸﾘｽ8.557-567-626-989-Ⅱ-572-Ⅴ-4.38-196-195-329-857-1056 +＊6229'ｸﾘ-6229'ｸﾘ-5.22-26-6921	口[illegible], 底[illegible], 高[illegible]	南加細多	2.5Y6/1-灰白	4/5	Ⅴ1	外ヨコ目後ケズリ後ハケ、静止糸切り痕、体外ヘラ記号？	使用痕無、体外ヘラ記号？	HP'ｸﾘ5-4
	113	須恵・瓶入	土器F'ｸﾘ5-607-1006	底5.8, 残8.1[illegible]	不明？	2.5Y7/1-灰白	1/5	Ⅱ～Ⅲ	内面間車痕認、静止、側上記あ2条		HP'ｸﾘ5-45
	114	須恵・瓶入	土器F'ｸﾘ5'ｸ-67-97-120-154-458-459-464-466-473-480-485-496-633-654-655-827-946-968＋SK133＋SK444＋SD23＋ｸﾘ6'ｸ'ｸ-6'ｸ6'ｸ'ｸ	口8.5, 頸8, 胴19.4, 底8.6, 高18.4.5, 高18.4	南加通母	10YR7/1-灰白	3/4	Ⅴ	底糸切り痕、胴内下半ケズリ、胴上記記録		HP'ｸﾘ5-3
	115	須恵・瓶入	土器F'ｸﾘ5-439-Ⅵ-247-350-386-392-393-490-619-635-646-711＋SD23＋ﾚ[illegible]F'ｸ'ｸ＋ﾚ[illegible]F'ｸ	口8.1, 頸9.5, 胴18.1, 底8.6	南加通母	2.5Y7/1-灰白	3/4	Ⅲ2	胴外下半ケズリ、胴内下位明き指ナデ痕	石英長石	HP'ｸﾘ5-51
	116	須恵・甕	土器F'ｸﾘ5-B.56-62-113-191-279-294-297-307-379-1109-9-372-389-419-421-448-529-586-588-606-631-693-709-729-741-993-997-1121-1136-1152-1194-V-248-Ⅵ-113-130-236-285-371-372-374-402-404-405-406-411-413-415-417-423-424-427-432-737-903＋SK408＋SK421＋SK436＋SD23＋ﾚ[illegible]20-22'ｸ'ｸ-6'ｸ6'ｸ-23'ｸ'ｸ-6'ｸ1-23'ｸ'ｸ-2.32-25'ｸ'ｸ-5.28'ｸ'ｸ-6.38'ｸ'ｸ	口22.6, 頸21.6, 胴35.5, 底8.4.4, 高46.6	南加通母	2.5Y6/1-灰白	1/8	Ⅲ2	胴外面ヨコ→ナナ目→胴下半面ﾖｺ3目ﾅﾅ、胴内面当て→胴下半面当て、口縁内面ヨコ→ナデ→ナデ痕跡文		HP'ｸﾘ5-7
	117	須恵・甕	土器F'ｸﾘ5.B-49-167-9-92-1067-V-614-Ⅵ-20-132-232-314-319-347-514-521-590-593-604-611-681-682-694-697-712-713-729-738-774-792-794-796-802-816-817-819-821-835-838-1004-1006-1012-1062-1118＋SD23＋SD23＋SD23＋SK424＋SD23＋SD42＋ﾚ[illegible]F'ｸ14＋ﾚ[illegible]F'ｸ-6.28-23-28'ｸ'ｸ-6'ｸ1-20-22-26-28'ｸ'ｸ-6'ｸ2-25-28'ｸ'ｸ-6'ｸ1F'ｸ'ｸ	口21.4, 頸19.4, 胴43.8, 底20.6	南加砂多	N5/0-灰好	1/3	Ⅱ～Ⅲ1	胴外面ﾖｺ3→ﾅﾅ目→胴下半面ﾖｺ3目ﾅﾅ、胴内当て→胴下半面当て、口縁内面当て→胴下半面当て		HP'ｸﾘ5-6
	118	須恵・中甕	土器F'ｸﾘ5.B-183-V-386-601	口22.2, 頸20.6, 胴36.1	南加砂土	N4/0-黒褐	1/16口	Ⅱ～Ⅲ	胴外面ﾖｺ3→強ナナ目、内面当て痕ナデ		HP'ｸﾘ5-32
	119	須恵・大甕	土器F'ｸﾘ5.B-109-110＋6.24'ｸ'ｸ	口50.4, 頸47.6, 胴60.3	南加通母	2.5Y6/1-灰好	1/16口	Ⅲ	胴部ヨコ多数1条		HP'ｸﾘ5-30
	120	須恵・平底壺	J-23	口19.9, 底12.2, 高14.6	南加通母	2.5Y6/1-オ灰	1/10	内焼4 1 胴	口縁端内側面形成	重複正位	HP'ｸﾘ5-3
	121	須恵・平底壺	G-19	口12.7, 底15.8, 高16.7	南加砂多	2.5Y7/1-黒褐	1/6	内焼4-1 2	底ヘラ切	重複正位、使用痕無	HP'ｸﾘ5-2
	122	須恵・平底壺	G-28-29'ｸ	口19.3, 底11.6, 高16.6, 高20	南加砂多	N6/0-灰好	3/4	1/2	底ヘラ切りナデ	重複正位、使用痕無	HP'ｸﾘ5-19
	123	須恵・瓶底？	土器F'ｸ14	口9.4, 底6.6	南加砂土	2.5Y7/1-灰	細片	？	糸切ヨコロクロナデ	重複正位	HP'ｸﾘ5-1
	124	須恵・外口縁甕	J-26'ｸ	頸17, 胴高14	南加砂多	2.5Y6/1-黒褐	1/3	Ⅲ1	天ケズリ	重複1、使用痕無	HP'ｸﾘ5-4
	125	須恵・外口縁甕	G-25'ｸ'ｸ-6'ｸ2-23'ｸ'ｸ	口15.8, 高27, 頸22.9, 胴高37	南加通母	10YR5/1-黒褐	2/5	Ⅲ3	天ケズリ	重複1、使用痕無	HP'ｸﾘ5-5
	126	須恵・外口縁甕	G-24'ｸ'ｸ	口13.8, 頸26, 胴17, 胴高19	南加通母	10YR5/1-黒褐	1/2	Ⅲ2	天ケズリ	重複1、使用痕無	HP'ｸﾘ5-6
	127	須恵・外口縁甕	G-27'ｸ'ｸ	口12.2, 頸21, 胴24, 胴高29	南加通母	5Y5/1-黒褐	1/2	Ⅲ2	天ケズリ	重複2ｏ、内天線残痕	HP'ｸﾘ5-7
	128	須恵・外口縁甕	G-24'ｸ'ｸ	口11.4	南加通母	10YR5/1-黒褐	1/3	Ⅲ1	天ケズリ	重複1、使用痕無	HP'ｸﾘ5-1
	129	須恵・頸部大	G-25'ｸ'ｸ-6'ｸ1	口18.9	南加通母	10YR7/1-黒褐	1/3	Ⅴ	天ケズリ	重複1、使用痕無、焼ゆが	HP'ｸﾘ5-7
	130	須恵・外口縁大	G-27'ｸ'ｸ-6.25	口17.2, 高43, 頸27, 胴高145	南加通母	10YR7/3-浅白	1/5	Ⅴ1	天ヘラ切りナデ	重複2ｏ、使用痕無	HP'ｸﾘ5-6
	131	須恵・外口縁大	G-28'ｸ'ｸ	口15.8	南加通母	2.5Y6/1-灰好	1/3	Ⅴ2	天ヘラ切りナデ	重複2ｏ、内天中央線残	HP'ｸﾘ5-2
	132	須恵・外口縁甕（胴部）	G-28'ｸ'ｸ	口12.5	南加砂土	2.5Y6/1-灰好	1/3	Ⅴ1	天ケズリ	内天中央線残痕、重複	HP'ｸﾘ5-3
	133	須恵・外口縁甕（胴部）	J-25'ｸ'ｸ-6.23	口12.9, 高27, 頸22, 胴高12	南加通母	10YR7/1-黒褐	1/3	Ⅲ2d	底ヘラ切りナデ	重複1、内天中央線残痕	HP'ｸﾘ5-8
	134	須恵・外口縁甕（胴部）	G-28'ｸ'ｸ	口12.4, 高31, 頸22, 胴高17	南加通母	N6/0-灰好	1/3	Ⅲ2d	天ケズリ	重複1、内天中央線残痕、使用	HP'ｸﾘ5-10
旧区古代土器溜まり集中ゾーン以外	135	須恵・外口縁甕（胴部）	G-28'ｸ'ｸ-6.26'ｸ'ｸ	口12.8, 高25, 頸23, 胴高38	南加通母	2.5Y5/1-灰好	2/5	Ⅴ1	底ヘラ切りナデ	重複1、内天線残痕、使用痕有	HP'ｸﾘ5-11
	136	須恵・外口縁甕	G-28'ｸ'ｸ-6.27'ｸ'ｸ	口14.6, 頸19, 胴9.6, 外径14	南加通母	5Y5/1-灰好	1/2	Ⅲ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-25
	137	須恵・外口縁甕	G-24'ｸ'	口15.6, 底17, 9, 11.4, 外径15	南加通母	2.5Y6/1-灰好	1/5	Ⅲ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-9
	138	須恵・外口縁甕	G-27'ｸ'ｸ-6.26-27'ｸ'ｸ	口14.5, 底17, 9, 10.6, 外径14	南加通母	2.5Y6/1-灰好	1/3	Ⅲ	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-22
	139	須恵・外口縁甕	G-24-25'ｸ'	口14.6, 底12, 9, 11.2, 外径17	南加通母	10YR5/1-黒好	1/4	Ⅲ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-24
	140	須恵・外口縁甕	G-27	口13.9, 底13, 9, 11.4, 外径15	南加通母	2.5Y8/1-白	1/8	Ⅲ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-4
	141	須恵・外口縁甕	G-27'ｸ'ｸ-6.28'ｸ'ｸ-2.27'ｸ'	口13.3, 底13, 9, 10.7, 外径14.5	南加通母	10YR6/1-黒好	1/4	Ⅲ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-29
	142	須恵・外口縁甕	J-25'ｸ'	口13.3, 底12.7, 外径13.5	南加通母	2.5Y6/1-黒褐	1/5	Ⅲ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-30
	143	須恵・外口縁甕	G-28'ｸ'ｸ-6.26'ｸ'	口12.8, 底13, 9, 9.8, 外径14	南加砂多	2.5Y6/1-灰白	2/3	Ⅲ2d	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-2
	144	須恵・外口縁甕	G-28'ｸ'	口12.6, 底13.5, 外径14, 外径15	南加砂多	10YR6/1-黒褐	1/3	Ⅲ2d	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-3
	145	須恵・外口縁甕	G-28'ｸ'	口10.7, 底13, 外径13	南加通母	N6/0-灰好	1/3	Ⅲ2d	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-5
	146	須恵・外口縁甕	G-28'ｸ'ｸ-6.23'ｸ'ｸ-6.23-28'ｸ'	口10.3, 底13, 外径14, 外径15	南加砂土	10YR8/1-白	1/2	Ⅴ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-4
	147	須恵・外口縁小甕	G-25-28'ｸ'	口9.8, 底9.6, 外径7.0, 外径13.5	南加通母	7.5Y6/1-灰	2/5	Ⅴ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-27
	148	須恵・不A	G-25'ｸ'	口13.3, 底3.3	南加通母	5Y6/0-不灰	2/5	Ⅲ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無、外底ヘラ記号	HP'ｸﾘ5-27
	149	須恵・不A	G-25'ｸ'	口14.1, 底3.2	南加通母	10YR7/2-白	3/4	Ⅲ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-13
	150	須恵・不A	G-26'ｸ'	口13.6, 底3.6	南加通母	2.5Y7/2-灰	2/5	Ⅲ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-11
	151	須恵・不A	J-26'ｸ'	口13.1, 底3.05	南加通母	5Y7/1-灰	2/5	Ⅲ1	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-30
	152	須恵・不A	G-24-25'ｸ'ｸ-5.25'ｸ'ｸ-9.23	口13.4, 底3.2	砂天	5Y7/1-灰好	2/3	Ⅲ2d	底ヘラ切りナデ	使用痕無、外底ヘラ記号「1」	HP'ｸﾘ5-24
	153	須恵・不A	J-25'ｸ'	口12.3, 底3.1	南加通母	2.5Y6/1-灰好	1/5	Ⅲ2d	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-7
	154	須恵・不A	G-25'ｸ'	口13.4, 底3.3	南加通母	10YR5/1-不灰	3/4	Ⅲ2d	底ヘラ切りナデ	使用痕無	HP'ｸﾘ5-16

遺構	番号	種類・器種	出土地点	法量	製土	色・釉	焼成	時期	調整等	備考	実測番号
	155	須恵・坏A	上段	口12.6、高3.2	角加工型	25YR3/2-灰	1/3	8-2新	底ヘラ切りナデ	焼成磁気	HF-#8.6
	156	須恵・坏A	中28下	口13.2、高3.05	角加工型	N5/0-灰	1/4	V1	底ヘラ切りナデ	内底摩滅面	HF-#8.22
	157	須恵・坏A	上段下	口14.6、高3.6	角加工型	N6/0-灰	1/3	V1	底ヘラ切りナデ	焼成磁気	HF-#8.57
	158	須恵・坏A	上段下・西4・中27下・L32	口14.8、高3.05	角加工型	10YR7/1-明褐	3/3	V2	底ヘラ切りナデ	焼成磁気、外底ヘラ記号「×」	HF-#8.14
	159	須恵・坏A	L21	口12.6、高3.3	粗荒	7.5YR4/1-黒灰	1/4	V2	底ヘラ切りナデ	外底ヘラ記号「×」	HF-#8.80
	160	須恵・坏A	中28下・西	口13.2、高3.0	角加工型	5YR4/1-黒灰	3/4	V12	底ヘラ切りナデ	焼成磁気	HF-#8.41
	161	須恵・坏A	中23下・西	口13.8、高3.0	角加工型	25YR4/1-不良	1/3	V12	底ヘラ切りナデ	焼成磁気	HF-#8.44
	162	須恵・坏A	下28下・西・中23下・中・中22下	口14.8、高3.9	角加工型	5Y7/1-灰	1/5	F1	底ヘラ切りナデ	焼成磁気	HF-#8.65
	163	須恵・坏A	中23・L24下・中・中22下・中・中21下	口14.8、高3.8	粗荒砂多	5PB6/1-灰	1/4	9-2新	底ヘラ切りナデ	内底摩滅面	HF-#8.54
	164	須恵・坏A	上段下・西4・中26下・中・L22下・中	口17.6、高3.1	粗荒	10YR7/2-黒灰	4/5	9-2新	底ヘラ切りナデ	内底中央摩滅面	HF-#8.11
	165	須恵・坏A	上段下・西4・L26下・中	口16.7、高2.0	角加工型	5YR6/1-黒灰	1/2	V1	底ヘラ切りナデ	内底中央摩滅中	HF-#8.90
	166	須恵・坏A	L20下・西・L22下・中	口17.8、高3.5	角加工型	10YR7/1-明褐	1/3	V1	底ヘラ切りナデ	焼成磁気	HF-#8.24
	167	須恵・坏A	中23下・西・上段下・中5	口15.8、高2.2	角加工型	5YR6/1-黒灰	1/3	V1	底ヘラ切りナデ	内底摩滅面、外底ヘラ記号「×」	HF-#8.81
	168	須恵・坏A	中22下・中	口16.6、高3.0	粗荒	10YR6/1-黒灰	1/3	V1	底ヘラ切りナデ	内外底摩滅中	HF-#8.22
	169	須恵・坏A	中22・中23下・中	口16.8、高3.0	角加工型	25YR3/2-不良	1/4	V1	底ヘラ切りナデ	焼成磁不明	HF-#8.51
	170	須恵・坏A	中22下・中	口15.8、高3.0	角加工型	25YR3/2-不良	1/4	V1	底ヘラ切りナデ	焼成磁不明	HF-#8.52
	171	須恵・坏A	中20下・中	口14.8、高3.0	角加工型	5YR6/1-黒灰	1/3	V2	底ヘラ切りナデ	焼成磁気	HF-#8.53
	172	須恵・坏A	L22	口14.8、高3.3	角加工型	5YR6/1-黒灰	1/3	V12	底ヘラ切りナデ		HF-#8.12
	173	須恵・坏B	上段下・西4	口13.0、高3.6、台径6.6、台高0.5	角加工型	25YR6/1-黒灰	1/3	9-2新	底ヘラケズリ	焼成磁気	HF-#8.8
	174	須恵・高坏C小	L23下・L5・L22	脚8.0、脚径4.5、脚3.2	角加工型	5Y7/1-不良	脚可	12	シボリ痕		HF-#8.32
	175	須恵・高坏C	L23・24下・L7・L24下・中	口15.6、中径3.2	角加工型	25YR7/2-灰	1/6	12	坏下位ケズリ	脚芯無、焼焼磁無	HF-#8.6
	176	須恵・小型器	中27下・L6	口11.1、脚6.6、脚径2.2、高4.6、脚2.9	角加工型	10YR7/1-明褐	1/6	8-1新	底ヘラ切りナデ		HF-#8.1
	177	須恵・小型器	L26下・V1	口11.1、脚10.4、脚11.0	角加工型	5YR5/1-黒灰	1/3	8-1新			HF-#8.2
	178	須恵・小型器	L19下・V1	口11.8、脚10.6、脚10.0	角加工型	5YR5/1-黒灰	1/3	8-1新			HF-#8.7
	179	須恵・小型器	中23下・中・中25下・中	口10.0、脚8.0、脚9.2	角加工型	N6/0-黒灰	1/6	8-1新			HF-#8.4
	180	須恵・小型器	L25下・中・中25下・中	口9.3、脚8.0、脚9.2、高4.95、脚4.1	角加工型	5YR5/1-黒灰	2/3	8-1新	底ヘラ切り痕		HF-#8.3
	181	須恵・小型器	L19下・V1	口8.9、脚7.8、脚7.8	角加工型	N5/0-灰	1/5	8-1新			HF-#8.5
	182	須恵・小型器	L24・25下・V1・L28下・V1	口8.8、脚7.9、脚7.0、高4.2、脚3.2	角加工型	N6/0-黒灰	2/3	8-1新	底ヘラ切り痕		HF-#8.4
	183	須恵・鉢（脚）	中25	口10.1	角加工型	N6/0-黒灰	口縁部	1	外面ヘラ削、底面ナデ		HF-#8.11
	184	須恵・鉢C	中20下・中25・L28	口16.2	角加工型	10YR7/1-明褐	1/6	1～2	底面回転糸切痕残存大	焼焼磁不明	HF-#8.23
	185	須恵・小型器	中20下・L22下・中・L24・L26・L27・中・SD42・SD45・SD46・SD48・SD38	口10.6	角加工型	25YR6/1-黒灰	2/5	8-1～9	底ヘラ切痕	内底摩滅	HF-#8.2
	186	須恵・鉢F	L20下・L22・L23・L25下・中	口17.0	角加工型	N5/0-黒灰	1/3	8～9-1	外面ヘラ削	焼焼磁無	HF-#8.25
	187	須恵・鉢F	9-1・32下・中・中28下・中・SD43	口17.6、底8.9	角加工型	25YR6/1-黒灰	1/3	V	外面ヘラ削、2条沈線	焼焼磁無	HF-#8.3
	188	須恵・鉢F	上段下・西4・L26下・中・L28・27下・中・中28・29・30下	底10.7	角加工型	25YR7/1-灰	1/3	V	外面ヘラ削、2条沈線、底糸切痕	内底摩滅面	HF-#8.6
	189	須恵・鉢B	L24・25下・中・中24・25下・中・L24・25下・中・L25下・中・上段下・中4・SD32・SD41	口27.6、底25.0、脚30.2	角加工型	5YR6/1-灰	1/6	V	外面下位ケズリ、内底指ナデ痕		HF-#8.17
北区古代土器溜まり集中部北辺	190	須恵・鉢	L19下・V1・L18・19下・V1	脚3.6、脚9.8	粗荒	N5/0-黒灰	1/5	1	外脚下半ケズリ、脚中位迄刷毛目、脚中位3.5cm内残、脚区内外焼成良		HF-#8.16
	191	須恵・瓶？	中22下・V1	口7.6、台高3.2	角加工型	25YR7/2-灰	台内	1～1.2	スタンプ痕	蓋の分離面の可能性有	HF-#8.15
	192	須恵・小型器王	L27下・V1	口5.5、脚4.2、脚10.2、高11.3、脚7.2	角加工型	N6/0-灰	完形	M	底糸切り痕		HF-#8.14
	193	須恵・瓶A	L19下・V1・L22下・V1・L23下・V1・上段下・西4・上段下・V5・SD23	口11.7、底8.7	角加工型	25YR5/1-黒灰	1/3	8～9	円筒部等間隔、外側上位2条沈線、下位ケズリ		HF-#8.42
	194	須恵・瓶C	中27・L6・L19・9-2下・V1・SD38	脚10.1、脚20.8	角加工型	25YR7/1-明褐	1/5	8-2	円筒部等間隔、脚部沈線		HF-#8.3
	195	須恵・四足器	L30下・V1・SD32	脚9.0	角加工型	25YR7/1-黒灰	脚可	9-2	脚部縦ヘラ状研磨ケズ、上部脚部孔位不4方形対		HF-#8.2
	196	須恵・壺F	L23・24下・V1・L24・25下・V1・中24・25下・中・L27下・中・L22・24下・V1・上段下・V14・SD30・SD31・SD32・SD33・SD34・SD42	口16.6、脚13.4、脚18.7	角加工型	25YR5/1-黒灰	1/10	8～9	脚下位迄刷毛目ナデ		HF-#8.3
	197	須恵・壺F	L29下・V1	口17.4、脚13.5、脚22.9	角加工型	5YR6/1-明褐	脚上半	不			HF-#8.25
	198	須恵・大甕	中19・25・28下・中・中23・24・26・27下・中・L24・26下・中・L28・29下・中・V1・上段下・V1・SD39・SD40・SD41・SD43・SD44・SD45・SD46・SD47・SD48・SD49・SD50・SD51・SD52・SD53・SD54・SD55・SD56・SD57・SD58・SD59・SD60・SD61・SD62・SD63・SD64・SD65・SD66・SD67・SD68・SD69・SD70・SD71・SD72・SD73・SD74・SD75・SD76・SD77・SD78・SD79・SD80・SD81・SD82・SD83・SD84・SD85・SD86・SD87・SD88・SD89・SD90・SD91・SD92・SD93・SD94・SD95・SD96・SD97・SD98・SD99・SD100・SD101・SD102・SD103・SD104・SD105・SD106・SD107・SD108・SD109・SD110・SD111・SD112・SD113・SD114・SD115・SD116・SD117・SD118・SD119・SD120・SD121・SD122・SD123・SD124・SD125・SD126・SD127・SD128・SD129・SD130・SD131・SD132・SD133・SD134・SD135・SD136・SD137・SD138・SD139・SD140・SD141・SD142・SD143・SD144・SD145・SD146・SD147・SD148・SD149・SD150・SD151・SD152・SD153・SD154・SD155・SD156・SD157・SD158・SD159・SD160・SD161・SD162・SD163・SD164・SD165・SD166・SD167・SD168・SD169・SD170・SD171・SD172・SD173・SD174・SD175・SD176・SD177・SD178・SD179・SD180・SD181・SD182・SD183・SD184・SD185・SD186・SD187・SD188・SD189・SD190・SD191・SD192・SD193・SD194・SD195・SD196・SD197・SD198・SD199・SD200・SD201・SD202・SD203・SD204・SD205・SD206・SD207・SD208・SD209・SD210・SD211・SD212・SD213・SD214・SD215・SD216・SD217・SD218・SD219・SD220・SD221・SD222・SD223・SD224・SD225・SD226・SD227・SD228・SD229・SD230・SD231・SD232・SD233・SD234・SD235・SD236・SD237・SD238・SD239・SD240・SD241・SD242・SD243・SD244・SD245・SD246・SD247・SD248・SD249・SD250・SD251・SD252・SD253・SD254・SD255・SD256・SD257・SD258・SD259・SD260・SD261・SD262・SD263・SD264・SD265・SD266・SD267・SD268・SD269・SD270・SD271・SD272・SD273・SD274・SD275・SD276・SD277・SD278・SD279・SD280・SD281・SD282・SD283・SD284・SD285・SD286・SD287・SD288・SD289・SD290・SD291・SD292・SD293・SD294・SD295・SD296・SD297・SD298・SD299・SD300・SD301・SD302・SD303・SD304・SD305・SD306・SD307・SD308・SD309・SD310・SD311・SD312・SD313・SD314・SD315・SD316・SD317・SD318・SD319・SD320・SD321・SD322・SD323・SD324・SD325・SD326・SD327・SD328・SD329・SD330・SD331・SD332・SD333・SD334・SD335・SD336・SD337・SD338・SD339・SD340・SD341・SD342・SD343・SD344・SD345・SD346・SD347・SD348・SD349・SD350・SD351・SD352・SD353・SD354・SD355・SD356・SD357・SD358・SD359・SD360・SD361・SD362・SD363・SD364・SD365・SD366・SD367・SD368・SD369・SD370・SD371・SD372・SD373・SD374・SD375・SD376・SD377・SD378・SD379・SD380・SD381・SD382・SD383・SD384・SD385・SD386・SD387・SD388・SD389・SD390・SD391・SD392・SD393・SD394・SD395・SD396・SD397・SD398・SD399・SD400・SD401・SD402・SD403・SD404・SD405・SD406・SD407・SD408・SD409・SD410・SD411・SD412・SD413・SD414・SD415・SD416・SD417・SD418・SD419・SD420・SD421・SD422・SD423・SD424・SD425・SD426・SD427・SD428・SD429・SD430・SD431・SD432・SD433・SD434・SD435・SD436・SD437・SD438・SD439・SD440・SD441・SD442・SD443・SD444・SD445・SD446・SD447・SD448・SD449・SD450・SD451・SD452・SD453・SD454・SD455・SD456・SD457・SD458・SD459・SD460・SD461・SD462・SD463・SD464・SD465・SD466・SD467・SD468・SD469・SD470・SD471・SD472・SD473・SD474・SD475・SD476・SD477・SD478・SD479・SD480・SD481・SD482・SD483・SD484・SD485・SD486・SD487・SD488・SD489・SD490・SD491・SD492・SD493・SD494・SD495・SD496・SD497・SD498・SD499・SD500・SD501・SD502・SD503・SD504・SD505・SD506・SD507・SD508・SD509・SD510・SD511・SD512・SD513・SD514・SD515・SD516・SD517・SD518・SD519・SD520・SD521・SD522・SD523・SD524・SD525・SD526・SD527・SD528・SD529・SD530・SD531・SD532・SD533・SD534・SD535・SD536・SD537・SD538・SD539・SD540・SD541・SD542・SD543・SD544・SD545・SD546・SD547・SD548・SD549・SD550・SD551・SD552・SD553・SD554・SD555・SD556・SD557・SD558・SD559・SD560・SD561・SD562・SD563・SD564・SD565・SD566・SD567・SD568・SD569・SD570・SD571・SD572・SD573・SD574・SD575・SD576・SD577・SD578・SD579・SD580・SD581・SD582・SD583・SD584・SD585・SD586・SD587・SD588・SD589・SD590・SD591・SD592・SD593・SD594・SD595・SD596・SD597・SD598・SD599・SD600・SD601・SD602・SD603・SD604・SD605・SD606・SD607・SD608・SD609・SD610・SD611・SD612・SD613・SD614・SD615・SD616・SD617・SD618・SD619・SD620・SD621・SD622・SD623・SD624・SD625・SD626・SD627・SD628・SD629・SD630・SD631・SD632・SD633・SD634・SD635・SD636・SD637・SD638・SD639・SD640・SD641・SD642・SD643・SD644・SD645・SD646・SD647・SD648・SD649・SD650・SD651・SD652・SD653・SD654・SD655・SD656・SD657・SD658・SD659・SD660・SD661・SD662・SD663・SD664・SD665・SD666・SD667・SD668・SD669・SD670・SD671・SD672・SD673・SD674・SD675・SD676・SD677・SD678・SD679・SD680・SD681・SD682・SD683・SD684・SD685・SD686・SD687・SD688・SD689・SD690・SD691・SD692・SD693・SD694・SD695・SD696・SD697・SD698・SD699・SD700・SD701・SD702・SD703・SD704・SD705・SD706・SD707・SD708・SD709・SD710・SD711・SD712・SD713・SD714・SD715・SD716・SD717・SD718・SD719・SD720・SD721・SD722・SD723・SD724・SD725・SD726・SD727・SD728・SD729・SD730・SD731・SD732・SD733・SD734・SD735・SD736・SD737・SD738・SD739・SD740・SD741・SD742・SD743・SD744・SD745・SD746・SD747・SD748・SD749・SD750・SD751・SD752・SD753・SD754・SD755・SD756・SD757・SD758・SD759・SD760・SD761・SD762・SD763・SD764・SD765・SD766・SD767・SD768・SD769・SD770・SD771・SD772・SD773・SD774・SD775・SD776・SD777・SD778・SD779・SD780・SD781・SD782・SD783・SD784・SD785・SD786・SD787・SD788・SD789・SD790・SD791・SD792・SD793・SD794・SD795・SD796・SD797・SD798・SD799・SD800・SD801・SD802・SD803・SD804・SD805・SD806・SD807・SD808・SD809・SD810・SD811・SD812・SD813・SD814・SD815・SD816・SD817・SD818・SD819・SD820・SD821・SD822・SD823・SD824・SD825・SD826・SD827・SD828・SD829・SD830・SD831・SD832・SD833・SD834・SD835・SD836・SD837・SD838・SD839・SD840・SD841・SD842・SD843・SD844・SD845・SD846・SD847・SD848・SD849・SD850・SD851・SD852・SD853・SD854・SD855・SD856・SD857・SD858・SD859・SD860・SD861・SD862・SD863・SD864・SD865・SD866・SD867・SD868・SD869・SD870・SD871・SD872・SD873・SD874・SD875・SD876・SD877・SD878・SD879・SD880・SD881・SD882・SD883・SD884・SD885・SD886・SD887・SD888・SD889・SD890・SD891・SD892・SD893・SD894・SD895・SD896・SD897・SD898・SD899・SD900・SD901・SD902・SD903・SD904・SD905・SD906・SD907・SD908・SD909・SD910・SD911・SD912・SD913・SD914・SD915・SD916・SD917・SD918・SD919・SD920・SD921・SD922・SD923・SD924・SD925・SD926・SD927・SD928・SD929・SD930・SD931・SD932・SD933・SD934・SD935・SD936・SD937・SD938・SD939・SD940・SD941・SD942・SD943・SD944・SD945・SD946・SD947・SD948・SD949・SD950・SD951・SD952・SD953・SD954・SD955・SD956・SD957・SD958・SD959・SD960・SD961・SD962・SD963・SD964・SD965・SD966・SD967・SD968・SD969・SD970・SD971・SD972・SD973・SD974・SD975・SD976・SD977・SD978・SD979・SD980・SD981・SD982・SD983・SD984・SD985・SD986・SD987・SD988・SD989・SD990・SD991・SD992・SD993・SD994・SD995・SD996・SD997・SD998・SD999・SD1000・SD1001・SD1002・SD1003・SD1004・SD1005・SD1006・SD1007・SD1008・SD1009・SD1010・SD1011・SD1012・SD1013・SD1014・SD1015・SD1016・SD1017・SD1018・SD1019・SD1020・SD1021・SD1022・SD1023・SD1024・SD1025・SD1026・SD1027・SD1028・SD1029・SD1030・SD1031・SD1032・SD1033・SD1034・SD1035・SD1036・SD1037・SD1038・SD1039・SD1040・SD1041・SD1042・SD1043・SD1044・SD1045・SD1046・SD1047・SD1048・SD1049・SD1050・SD1051・SD1052・SD1053・SD1054・SD1055・SD1056・SD1057・SD1058・SD1059・SD1060・SD1061・SD1062・SD1063・SD1064・SD1065・SD1066・SD1067・SD1068・SD1069・SD1070・SD1071・SD1072・SD1073・SD1074・SD1075・SD1076・SD1077・SD1078・SD1079・SD1080・SD1081・SD1082・SD1083・SD1084・SD1085・SD1086・SD1087・SD1088・SD1089・SD1090・SD1091・SD1092・SD1093・SD1094・SD1095・SD1096・SD1097・SD1098・SD1099・SD1100・SD1101・SD1102・SD1103・SD1104・SD1105・SD1106・SD1107・SD1108・SD1109・SD1110・SD1111・SD1112・SD1113・SD1114・SD1115・SD1116・SD1117・SD1118・SD1119・SD1120・SD1121・SD1122・SD1123・SD1124・SD1125・SD1126・SD1127・SD1128・SD1129・SD1130・SD1131・SD1132・SD1133・SD1134・SD1135・SD1136・SD1137・SD1138・SD1139・SD1140・SD1141・SD1142・SD1143・SD1144・SD1145・SD1146・SD1147・SD1148・SD1149・SD1150・SD1151・SD1152・SD1153・SD1154・SD1155・SD1156・SD1157・SD1158・SD1159・SD1160・SD1161・SD1162・SD1163・SD1164・SD1165・SD1166・SD1167・SD1168・SD1169・SD1170・SD1171・SD1172・SD1173・SD1174・SD1175・SD1176・SD1177・SD1178・SD1179・SD1180・SD1181・SD1182・SD1183・SD1184・SD1185・SD1186・SD1187・SD1188・SD1189・SD1190・SD1191・SD1192・SD1193・SD1194・SD1195・SD1196・SD1197・SD1198・SD1199・SD1200・SD1201・SD1202・SD1203・SD1204・SD1205・SD1206・SD1207・SD1208・SD1209・SD1210・SD1211・SD1212・SD1213・SD1214・SD1215・SD1216・SD1217・SD1218・SD1219・SD1220・SD1221・SD1222・SD1223・SD1224・SD1225・SD1226・SD1227・SD1228・SD1229・SD1230・SD1231・SD1232・SD1233・SD1234・SD1235・SD1236・SD1237・SD1238・SD1239・SD1240・SD1241・SD1242・SD1243・SD1244・SD1245・SD1246・SD1247・SD1248・SD1249・SD1250・SD1251・SD1252・SD1253・SD1254・SD1255・SD1256・SD1257・SD1258・SD1259・SD1260・SD1261・SD1262・SD1263・SD1264・SD1265・SD1266・SD1267・SD1268・SD1269・SD1270・SD1271・SD1272・SD1273・SD1274・SD1275・SD1276・SD1277・SD1278・SD1279・SD1280・SD1281・SD1282・SD1283・SD1284・SD1285・SD1286・SD1287・SD1288・SD1289・SD1290・SD1291・SD1292・SD1293・SD1294・SD1295・SD1296・SD1297・SD1298・SD1299・SD1300・SD1301・SD1302・SD1303・SD1304・SD1305・SD1306・SD1307・SD1308・SD1309・SD1310・SD1311・SD1312・SD1313・SD1314・SD1315・SD1316・SD1317・SD1318・SD1319・SD1320・SD1321・SD1322・SD1323・SD1324・SD1325・SD1326・SD1327・SD1328・SD1329・SD1330・SD1331・SD1332・SD1333・SD1334・SD1335・SD1336・SD1337・SD1338・SD1339・SD1340・SD1341・SD1342・SD1343・SD1344・SD1345・SD1346・SD1347・SD1348・SD1349・SD1350・SD1351・SD1352・SD1353・SD1354・SD1355・SD1356・SD1357・SD1358・SD1359・SD1360・SD1361・SD1362・SD1363・SD1364・SD1365・SD1366・SD1367・SD1368・SD1369・SD1370・SD1371・SD1372・SD1373・SD1374・SD1375・SD1376・SD1377・SD1378・SD1379・SD1380・SD1381・SD1382・SD1383・SD1384・SD1385・SD1386・SD1387・SD1388・SD1389・SD1390・SD1391・SD1392・SD1393・SD1394・SD1395・SD1396・SD1397・SD1398・SD1399・SD1400・SD1401・SD1402・SD1403・SD1404・SD1405・SD1406・SD1407・SD1408・SD1409・SD1410・SD1411・SD1412・SD1413・SD1414・SD1415・SD1416・SD1417・SD1418・SD1419・SD1420・SD1421・SD1422・SD1423・SD1424・SD1425・SD1426・SD1427・SD1428・SD1429・SD1430・SD1431・SD1432・SD1433・SD1434・SD1435・SD1436・SD1437・SD1438・SD1439・SD1440・SD1441・SD1442・SD1443・SD1444・SD1445・SD1446・SD1447・SD1448・SD1449・SD1450・SD1451・SD1452・SD1453・SD1454・SD1455・SD1456・SD1457・SD1458・SD1459・SD1460・SD1461・SD1462・SD1463・SD1464・SD1465・SD1466・SD1467・SD1468・SD1469・SD1470・SD1471・SD1472・SD1473・SD1474・SD1475・SD1476・SD1477・SD1478・SD1479・SD1480・SD1481・SD1482・SD1483・SD1484・SD1485・SD1486・SD1487・SD1488・SD1489・SD1490・SD1491・SD1492・SD1493・SD1494・SD1495・SD1496・SD1497・SD1498・SD1499・SD1500・SD1501・SD1502・SD1503・SD1504・SD1505・SD1506・SD1507・SD1508・SD1509・SD1510・SD1511・SD1512・SD1513・SD1514・SD1515・SD1516・SD1517・SD1518・SD1519・SD1520・SD1521・SD1522・SD1523・SD1524・SD1525・SD1526・SD1527・SD1528・SD1529・SD1530・SD1531・SD1532・SD1533・SD1534・SD1535・SD1536・SD1537・SD1538・SD1539・SD1540・SD1541・SD1542・SD1543・SD1544・SD1545・SD1546・SD1547・SD1548・SD1549・SD1550・SD1551・SD1552・SD1553・SD1554・SD1555・SD1556・SD1557・SD1558・SD1559・SD1560・SD1561・SD1562・SD1563・SD1564・SD1565・SD1566・SD1567・SD1568・SD1569・SD1570・SD1571・SD1572・SD1573・SD1574・SD1575・SD1576・SD1577・SD1578・SD1579・SD1580・SD1581・SD1582・SD1583・SD1584・SD1585・SD1586・SD1587・SD1588・SD1589・SD1590・SD1591・SD1592・SD1593・SD1594・SD1595・SD1596・SD1597・SD1598・SD1599・SD1600・SD1601・SD1602・SD1603・SD1604・SD1605・SD1606・SD1607・SD1608・SD1609・SD1610・SD1611・SD1612・SD1613・SD1614・SD1615・SD1616・SD1617・SD1618・SD1619・SD1620・SD1621・SD1622・SD1623・SD1624・SD1625・SD1626・SD1627・SD1628・SD1629・SD1630・SD1631・SD1632・SD1633・SD1634・SD1635・SD1636・SD1637・SD1638・SD1639・SD1640・SD1641・SD1642・SD1643・SD1644・SD1645・SD1646・SD1647・SD1648・SD1649・SD1650・SD1651・SD1652・SD1653・SD1654・SD1655・SD1656・SD1657・SD1658・SD1659・SD1660・SD1661・SD1662・SD1663・SD1664・SD1665・SD1666・SD1667・SD1668・SD1669・SD1670・SD1671・SD1672・SD1673・SD1674・SD1675・SD1676・SD1677・SD1678・SD1679・SD1680・SD1681・SD1682・SD1683・SD1684・SD1685・SD1686・SD1687・SD1688・SD1689・SD1690・SD1691・SD1692・SD1693・SD1694・SD1695・SD1696・SD1697・SD1698・SD1699・SD1700・SD1701・SD1702・SD1703・SD1704・SD1705・SD1706・SD1707・SD1708・SD1709・SD1710・SD1711・SD1712・SD1713・SD1714・SD1715・SD1716・SD1717・SD1718・SD1719・SD1720・SD1721・SD1722・SD1723・SD1724・SD1725・SD1726・SD1727・SD1728・SD1729・SD1730・SD1731・SD1732・SD1733・SD1734・SD1735・SD1736・SD1737・SD1738・SD1739・SD1740・SD1741・SD1742・SD1743・SD1744・SD1745・SD1746・SD1747・SD1748・SD1749・SD1750・SD1751・SD1752・SD1753・SD1754・SD1755・SD1756・SD1757・SD1758・SD1759・SD1760・SD1761・SD1762・SD1763・SD1764・SD1765・SD1766・SD1767・SD1768・SD1769・SD1770・SD1771・SD1772・SD1773・SD1774・SD1775・SD1776・SD1777・SD1778・SD1779・SD1780・SD1781・SD1782・SD1783・SD1784・SD1785・SD1786・SD1787・SD1788・SD1789・SD1790・SD1791・SD1792・SD1793・SD1794・SD1795・SD1796・SD1797・SD1798・SD1799・SD1800・SD1801・SD1802・SD1803・SD1804・SD1805・SD1806・SD1807・SD1808・SD1809・SD1810・SD1811・SD1812・SD1813・SD1814・SD1815・SD1816・SD1817・SD1818・SD1819・SD1820・SD1821・SD1822・SD1823・SD1824・SD1825・SD1826・SD1827・SD1828・SD1829・SD1830・SD1831・SD1832・SD1833・SD1834・SD1835・SD1836・SD1837・SD1838・SD1839・SD1840・SD1841・SD1842・SD1843・SD1844・SD1845・SD1846・SD1847・SD1848・SD1849・SD1850・SD1851・SD1852・SD1853・SD1854・SD1855・SD1856・SD1857・SD1858・SD1859・SD1860・SD1861・SD1862・SD1863・SD1864・SD1865・SD1866・SD1867・SD1868・SD1869・SD1870・SD1871・SD1872・SD1873・SD1874・SD1875・SD1876・SD1877・SD1878・SD1879・SD1880・SD1881・SD1882・SD1883・SD1884・SD1885・SD1886・SD1887・SD1888・SD1889・SD1890・SD1891・SD1892・SD1893・SD1894・SD1895・SD1896・SD1897・SD1898・SD1899・SD1900・SD1901・SD1902・SD1903・SD1904・SD1905・SD1906・SD1907・SD1908・SD1909・SD1910・SD1911・SD1912・SD1913・SD1914・SD1915・SD1916・SD1917・SD1918・SD1919・SD1920・SD1921・SD1922・SD1923・SD1924・SD1925・SD1926・SD1927・SD1928・SD1929・SD1930・SD1931・SD1932・SD1933・SD1934・SD1935・SD1936・SD1937・SD1938・SD1939・SD1940・SD1941・SD1942・SD1943・SD1944・SD1945・SD1946・SD1947・SD1948・SD1949・SD1950・SD1951・SD1952・SD1953・SD1954・SD1955・SD1956・SD1957・SD1958・SD1959・SD1960・SD1961・SD1962・SD1963・SD1964・SD1965・SD1966・SD1967・SD1968・SD1969・SD1970・SD1971・SD1972・SD1973・SD1974・SD1975・SD1976・SD1977・SD1978・SD1979・SD1980・SD1981・SD1982・SD1983・SD1984・SD1985・SD1986・SD1987・SD1988・SD1989・SD1990・SD1991・SD1992・SD1993・SD1994・SD1995・SD1996・SD1997・SD1998・SD1999・SD2000・SD2001・SD2002・SD2003・SD2004・SD2005・SD2006・SD2007・SD2008・SD2009・SD2010・SD2011・SD2012・SD2013・SD2014・SD2015・SD2016・SD2017・SD2018・SD2019・SD2020・SD2021・SD2022・SD2023・SD2024・SD2025・SD2026・SD2027・SD2028・SD2029・SD2030・SD2031・SD2032・SD2033・SD2034・SD2035・SD2036・SD2037・SD2038・SD2039・SD2040・SD2041・SD2042・SD2043・SD2044・SD2045・SD2046・SD2047・SD2048・SD2049・SD2050・SD2051・SD2052・SD2053・SD2054・SD2055・SD2056・SD2057・SD2058・SD2059・SD2060・SD2061・SD2062・SD2063・SD2064・SD2065・SD2066・SD2067・SD2068・SD2069・SD2070・SD2071・SD2072・SD2073・SD2074・SD2075・SD2076・SD2077・SD2078・SD2079・SD2080・SD2081・SD2082・SD2083・SD2084・SD2085・SD2086・SD2087・SD2088・SD2089・SD2090・SD2091・SD2092・SD2093・SD2094・SD2095・SD2096・SD2097・SD2098・SD2099・SD2100・SD2101・SD2102・SD2103・SD2104・SD2105・SD2106・SD2107・SD2108・SD2109・SD2110・SD2111・SD2112・SD2113・SD2114・SD2115・SD2116・SD2117・SD2118・SD2119・SD2120・SD2121・SD2122・SD2123・SD2124・SD2125・SD2126・SD2127・SD2128・SD2129・SD2130・SD2131・SD2132・SD2133・SD2134・SD2135・SD2136・SD2137・SD2138・SD2139・SD2140・SD2141・SD2142・SD2143・SD2144・SD2145・SD2146・SD2147・SD2148・SD2149・SD2150・SD2151・SD2152・SD2153・SD2154・SD2155・SD2156・SD2157・SD2158・SD2159・SD2160・SD2161・SD2162・SD2163・SD2164・SD2165・SD2166・SD2167・SD2168・SD2169・SD2170・SD2171・SD2172・SD2173・SD2174・SD2175・SD2176・SD2177・SD2178・SD2179・SD2180・SD2181・SD2182・SD2183・SD2184・SD2185・SD2186・SD2187・SD2188・SD2189・SD2190・SD2191・SD2192・SD2193・SD2194・SD2195・SD2196・SD2197・SD2198・SD2199・SD2200・SD2201・SD2202・SD2203・SD2204・SD2205・SD2206・SD2207・SD2208・SD2209・SD2210・SD2211・SD2212・SD2213・SD2214・SD2215・SD2216・SD2217・SD2218・SD2219・SD2220・SD2221・SD2222・SD2223・SD2224・SD2225・SD2226・SD2227・SD2228・SD2229・SD2230・SD2231・SD2232・SD2233・SD2234・SD2235・SD2236・SD2237・SD2238・SD2239・SD2240・SD2241・SD2242・SD2243・SD2244・SD2245・SD2246・SD2247・SD2248・SD2249・SD2250・SD2251・SD2252・SD2253・SD2254・SD2255・SD2256・SD2257・SD2258・SD2259・SD2260・SD2261・SD2262・SD2263・SD2264・SD2265・SD2266・SD2267・SD2268・SD2269・SD2270・SD2271・SD2272・SD2273・SD2274・SD2275・SD2276・SD2277・SD2278・SD2279・SD2280・SD2281・SD2282・SD2283・SD2284・SD2285・SD2286・SD2287・SD2288・SD2289・SD2290・SD2291・SD2292・SD2293・SD2294・SD2295・SD2296・SD2297・SD2298・SD2299・SD2300・SD2301・SD2302・SD2303・SD2304・SD2305・SD2306・SD2307・SD2308・SD2309・SD2310・SD2311・SD2312・SD2313・SD2314・SD2315・SD2316・SD2317・SD2318・SD2319・SD2320・SD2321・SD2322・SD2323・SD2324・SD2325・SD2326・SD2327・SD2328・SD2329・SD2330・SD2331・SD2332・SD2333・SD2334・SD2335・SD2336・SD2337・SD2338・SD2339・SD2340・SD2341・SD2342・SD2343・SD2344・SD2345・SD2346・SD2347・SD2348・SD2349・SD2350・SD2351・SD2352・SD2353・SD2354・SD2355・SD2356・SD2357・SD2358・SD2359・SD2360・SD2361・SD2362・SD2363・SD2364・SD2365・SD2366・SD2367・SD2368・SD2369・SD2370・SD2371・SD2372・SD2373・SD2374・SD2375・SD2376・SD2377・SD2378・SD2379・SD2380・SD2381・SD2382・SD2383・SD2384・SD2385・SD2386・SD2387・SD2388・SD2389・SD2390・SD2391・SD2392・SD2393・SD2394・SD2395・SD2396・SD2397・SD2398・SD2399・SD2400・SD2401・SD2402・SD2403・SD2404・SD2405・SD2406・SD2407・SD2408・SD2409・SD2410・SD2411・SD2412・SD2413・SD2414・SD2415・SD2416・SD2417・SD2418・SD2419・SD2420・SD2421・SD2422・SD2423・SD2424・SD2425・SD2426・SD2427・SD2428・SD2429・SD2430・SD2431・SD2432・SD2433・SD2434・SD2435・SD2436・SD2437・SD2438・SD2439・SD2440・SD2441・SD2442・SD2443・SD2444・SD2445・SD2446・SD2447・SD2448・SD2449・SD2450・SD2451・SD2452・SD2453・SD2454・SD2455・SD2456・SD2457・

付表２　額見町遺跡Ｖ報告区域出土中世遺物観察表

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	印刷	調整等	備考	実測番号
	220	1段・支脚形	6-Z2	7.8×6.7×6.5	亀ヶ沢1	5YR7/4-浅黄	1/10	無	指ナデ	外縁焦点化	H7 ヤ-2
	221	1段・支脚形	Z-21	7.6×4.7×6.3	亀ヶ沢2	10YR5/1-灰黒	1/6	無	指ナデ	全体焦痕	H7 ヤ-10
	222	1段・支脚形	6-21	7.7×5.4×6.7	亀ヶ沢2	10YR7/3-浅黄	1/10	無	指ナデ	受け皿痕、焼成調整、黒斑	H7 ヤ-4
	223	1段・支脚形	水洗-21ドヤ	7.6×6.7×6.9	亀ヶ沢1	10YR8/4-浅黄	1/3	無	指ナデ	黒斑	H7 ヤ-1
	224	1段・支脚形	Z-22	7.6×6.7×6.5	亀ヶ沢2	7.5YR7/3-浅黄	1/6	無	指ナデ	受け皿痕	H7 ヤ-1
	225	1段・支脚形	6-Z2ドヤ	7.5×5.7×6.5	亀ヶ沢1	10YR5/2-浅黄	1/5	無	指ナデ	受け皿痕、黒斑	H7 ヤ-2
	226	1段・支脚形	6-Z6ドヤ	7.6×5.7×6.4(6)75	常陸A3	7.5YR6/8-浅黄	略完	無	指ナデ	焼成点化	H7 ヤ-5
	227	1段・支脚形	6-Z3	高部6.9、上部5.0、9.4×3	常陸A3	7.5YR5/8-浅	略完	無	指ナデ	受け皿痕	H7 ヤ-9
	228	1段・管状鍋	6-Z2ドヤ	7.2×4.5、6.4(5)	常陸A1	7.5YR5/2-灰黒	略完形	－	指ナデ	重量113.6g	H7 ヤ-2
	229	1段・管状鍋	6-Z4ドヤ	6.8×4.4、6.1(2	常陸A1	10YR7/3-浅	略完	－	指ナデ	重量98.6g	H7 ヤ-1
	230	1段・管状鍋	Z-Z5ドヤ	6.3×3.9、6.1(4	常陸A1	10YR8/4-不良	完形	－	指ナデ	重量68.3g	H7 ヤ-1
	231	1段・管状鍋	Z-Z7ドヤ	6.3×4.8、6.8(8	常陸B1	10YR7/4-浅黄	完形	－	指ナデ	重量34.7g	H7 ヤ-3
	232	1段・管状鍋	6-Z4	略3.9×4.5、6.8(7	常陸A1	7.5YR7/3-浅	略完	－	指ナデ	重量28.2g	H7 ヤ-8
	233	1段・管状鍋	6-Z5ドヤ	略3.8×4.7、6.8(4	常陸A1	10YR6/3-浅	略完	－	指ナデ	重量8.1g	H7 ヤ-2
	234	1段・管状鍋	6-Z6ドヤ	3.2×4.7、6.8(4	常陸A1	2.5YR5/4-浅	略完	－	指ナデ	重量7.1g	H7 ヤ-2
	235	1段・注油具	6-Z1ドヤ	1.8T.2	常陸A1	10YR8/4-浅	1/3	無	内外ロクロナデ	焼成後不明	H7 ヤ-2
	236	1段・注油具	6-Z1ドヤ	1.1(5.1	常陸A1	10YR8/3-浅	1/3	無	内外ロクロナデ	焼成後不明	H7 ヤ-4
	237	1段・注油具	6-Z1ドヤ	1.3(4.8	常陸A1	7.5YR6/4-浅	1/10	無	外－指ナデ目、他ロクロナデ	焼成後不明	H7 ヤ-3
北区古代土器溜まり集中部位以外	238	鉄・刀剣形鋼	6-J8	12.4×2.5×1.8	－	－	略完	－		鉄鋼部分残、重量213.3g	H14-ヨ
	239	鉄・刀剣形鋼	6-Z6ドヤ	5.8×1.55×0.7	－	－	3/4	－		鉄鋼部分残、重量30.3g	H7 ヤ-8
	240	鉄・釘又鋲	6-Z5ドヤ(5)	4.7×2.7×0.45	－	－	3/4	－		鉄鋼部分残、基部残残、重量11.1g	H7 ヤ-A
	241	鉄・釘又鋲	Z-Z6ドヤ(7	7.0×2.7×0.8	－	－	両端欠損	－		鉄鋼部分残、重量14.7g	H13-ヨ
	242	鉄・刀子	6-Z4ドヤ(7)	12.4×1.4×0.5	－	－	略完	－		直角小関、刃十重、重量11.5g	H13-ヨ
	243	鉄・刀子	6-Z4	4.5×1.4×0.5	－	－	刃部欠	－		刃十重、重量3.5g	H7 ヤ-C
	244	鉄・刀子	6-Z5ドヤ(1	5.2×1.4×0.4	－	－	刃部欠	－		重量3.7g	H7 ヤ-E
	245	鉄・刀子	6-Z2	5.6×1.2×0.35	－	－	刃部欠	－		重量4.8g	H7 ヤ-D
	246	鉄・刀子	6-Z5ドヤ	3.1×1.8×0.3	－	－	刃部欠	－		重量4.8g	H7 ヤ-F
	247	鉄・鉄滓	6-Z5ドヤ(8)	1.7×1.6×1.6	－	－	完形	－		（ハの字型）、重量34.5g	H13-ヨ
	248	鉄・鉄鐘	6-Z3ドヤ(2)	－	－	－	両端欠損	－		重量22.2g	図版A
	249	鉄・釘頭	6-Z3	2.3×2.7、φ0.45	－	－	基部欠損	－		重量2.5g	H13-ヨ
	250	鉄・釘	5-Z6ドヤ(9)	7.3×1.8×1.6	－	－	略完	－		断面方形、重量11.2g	H14-ヨ
	251	鉄・釘	Z-Z6ドヤ(2)	10.5×1.5×0.85	－	－	略完	－		重量15.1g	H15-ヨ-E
	252	鉄・釘	6-Z5ドヤ(3)	7.3×1.5×0.8	－	－	3/4	－		重量13.1g	H14-ヨ
	253	鉄・釘	Z-Z7	7.3×1.6×1.6	－	－	略完	－		重量9.2g	H15-ヨ
	254	鉄・鉄金具	5-Z5ドヤ(4)	10.1×1.9×0.9	－	－	上部欠損	－		鉄製釘鋲か或品、重量20.1g	H14-ヨ
	255	鉄・鉄釘基品	6-Z6	8.4×1.2×0.7	－	－	不明	－		八角鉄金具、重量6.6g	H13-ヨ-ヨ
	256	鉄・鉄釘基品	Z-Z3	5.2、φ1.35	－	－	破片	－		重量40.6g	H13-ヨ
	257	鉄・鉄釘基品	土器ドヤ4-340-341	10.0×0.7×0.7	－	－	不明	－		軍刀方形棟状製品の先端部片か或品、重量27.5g	H14-ヨ
	258	鉄・不明品	6-Z2ドヤ	10.2×1.7×0.9	－	－	不明	－		不明品？重量28.0g	H13-ヨ
	259	鉄・不明品	6-Z3	3.9×1.2×0.2	－	－	破片	－		重量4.7g	H7 ヤ-G

付表２　額見町遺跡Ｖ報告区域出土中世遺物観察表

１．掘立柱建物出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	印刷	調整等	備考	実測番号
SB306	1	土師・須恵鉢	SB306P7	略5.2	B-D2	7.5YR5/6-浅	底片	中心-B1	底石由切り痕	使用痕無	SB306-1
	2	土師・平底小皿	SB306P2	口9.2、底3.2、略2.4	B-D2	7.5YR7/6-浅	2/3	中心-B1	底石由切り痕	使用痕無	SB306-2
	3	土師・平底小皿	SB306	口9.0、底3.6、略3.0	B-B	10YR7/3-浅	3/4	中心-B1	底石由切り痕	使用痕無、口縁部黒煤	SB306-3
	4	土師・平底小皿	SB306P9	口9.0、底3.2、略3.0	B-A	10YR8/3-浅	3/4	中心-B1	底糸切り痕	使用痕無	SB306-5
	5	土師・天目	SB306P4	口14.4、底3.7	B-A1、石英	10YR6/2-浅	1/6	中心-B1	表ロクロ成形、外面一底部ナデ痕、内ハケナデ、口縁部之字ヨコナデ	表面黒土細部黒の痕跡品	SB306-6
SB307	6	土師・平底鉢	SB307P7	略6.0	B-D2	10YR8/3-浅	底片	中心	底糸切り痕	使用痕無	SB307-2
	7	土師・平底鉢	SB307P7	略4.0	B-A3	10YR8/3-浅	底片	中心	底糸切り痕	使用痕無	SB307-1
	8	土師・平底鉢	SB307P7	略5.4	B-D2	7.5YR6/3-浅	底片	中心-B1	底糸切り痕	使用痕無	SB308-1
SB308	9	土師・平底小皿	SB308P12	口8.4、底2.0、略5.0	B-B	7.5YR7/4-浅	1/4	中心-B1	底石由切り痕	使用痕無	SB308-2
	10	土師・平底小皿	SB308P9	口9.0、底2.2、略3.4	B-A	10YR8/3-浅	3/5	中心-B1	底糸切り痕	使用痕無	SB308-5
	11	土師・輪高台鉢	SB308P8	略6.2、台高0.4	B-A	10YR8/3-浅	底部	中心-B1	底糸切りナデ	使用痕無	SB308-7
	12	鉄・釘	SB308P13	略1.0	－	－	脚下底片	中心？		鉄製、重量1220g	H13-ヨ
SB309	13	土師・平底鉢	SB309P2-P3	口12.8、高4.4、略6.2	B-A	10YR8/3-不良	1/3	中心-B1	底石由切り痕	使用痕無	SB310-1
	14	土師・平底鉢	SB309P19	略5.8	B-D2	7.5YR7/6-浅	1/4	中心-B1	底石由切り痕	使用痕無	SB310-3
	15	土師・台付鉢	SB309P3	略6.0	B-B	10YR7/4-浅	底片	中心-B1	底石由切り痕、外面ヘラ	使用痕無	SB310-4
	16	土師・台付鉢	SB309P5	略6.0	B-D2	10YR8/3-浅	底片	中心-B1	底石由切り痕	使用痕無	SB310-5
	17	土師・平底小皿	SB309P2	口9.0、底3.0、略4.7	B-C	7.5YR8/4-良	3/5	中心-B1	底石由切り痕	使用痕無	SB310-6
	18	土師・平底小皿	SB309P9	口9.4、底2.1、略4.8	B-A	10YR8/3-浅	1/2	中心-B1	底石由切り痕	使用痕無	SB310-9
	19	土師・平底小皿	SB309P15	口9.0、底2.4、略4.4	B-A	10YR8/3-不良	略完	中心-B1	底石由切り痕	使用痕無	SB310-11
	20	土師・平底小皿	SB309P8	口8.6、底2.3、略4.4	B-D2	7.5YR7/6-浅	1/2	中心-B1	底石由切り痕	使用痕無	SB310-7
	21	土師・平底小皿	SB309P13	口8.6、底2.4、略4.4	B-C	10YR8/4-不良	2/3	中心-B1	底石由切り痕	使用痕無	SB310-10
	22	土師・柱状小皿	SB309P19	口8.3、底3.3、略3.9	B-C	10YR8/4-不良	2/5	中心-B1	底糸切り痕、内底凹痕	使用痕無	SB310-13
	23	土師・柱状小皿	SB309P18	略4.4	B-D	10YR8/3-浅	底片	中心-B1	底石由切り痕、外底円痕	使用痕無	SB310-14
	24	土師・輪高台小皿	SB309P2	台8.5、台高0.3	B-D2	7.5YR8/6-浅	1/3	中心-B1	底石由切り痕	使用痕無	SB310-15
	25	土師・柱状鉢	SB309P1＋4-36	口14.1、略4.7、底6.2	B-D	10YR7/3-浅	1/4	中心-B1	底糸切り痕、内底ミガキ	使用痕無	SB310-16
SB312	26	土師・小皿	SB309P29	口8.6、底2.9、底3.6、略3.6	B-D	10YR7/4-浅黄	2/3	中心？	底石由切り痕	使用痕無	SB310-2
	27	土師・平底小皿	SB312P5	口8.6、底3.8、略5.3	B-C	10YR7/4-不良	1/6	中心-B1	底石由切り痕	使用痕無	SB312-4
	28	土師・平底小皿	SB312P8	口9.3、底3.7、略4.0	B-A	10YR8/3-浅	完形	中心-B1	底石由切り痕	使用痕無	SB312-2
	29	土師・柱状小皿	SB312P9	略4.4	B-A	10YR8/3-浅	底片	中心-B1	底石由切り痕、外底円痕	使用痕無	SB312-3

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
SB31A	30	土師・平底甕	SB31SP13	口15.2, 底16, 残66	H-D2	10YR5/2-淡	略完	中1-3	底在赤切り痕	使用痕無	SB31B-1
	31	土師・柱状甕	SB31SP19	残7.2	H-D2	10YR5/3-淡	底片	中1-3	底在赤切り痕	使用痕無	SB31B-2
	32	土師・平底小皿	SB31SP5	口9.6, 底7.2, 高3.2	H-D2	10YR5/4-淡	1/6	中1-3	底在赤切り痕	使用痕無	SB31B-3
	33	土師・柱状小皿	SB31SP32	残4.6	H-C	7.5YR5/3-不良	1/2	中1-3	底在赤切り痕,底部内面剥	使用痕無	SB31B-5
	34	土師・柱状小皿	SB31SP18	残4.4	H-D	10YR7/2-淡	1/2	中1-3	底在赤切り痕	使用痕無	SB31B-4
	35	土師・柱状小皿	SB31SP8	残3.8	H-A	10YR7/4-良好	底片	中1-3	底在赤切り痕	内面煤成	SB31B-7
	36	白磁・皿	SB31SP3 + 中22P +? +中23P +? +中	口9.4	精色7.5YR5/1	7.5YR5/1-青灰	1/4	白中C期	山水円盤状模刻?圏	使用痕無	SB31B-3
SB32B	37	土師・平底小皿	SB32SP7	残4.6	H-A	10YR7/2-不良	底片	中1-3	底糸切り痕		SB32B-2
	38	土師・柱状小皿	SB32SP4	残4.2	H-A	10YR5/3-淡	1/2	中1-3	底糸切り痕	使用痕無	SB32B-1

2．土坑出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
SB204	1	土師・平底甕	SB204-222	口15.1, 底4.8, 底6.7	H-A	10YR6/3-不良	3/4	中5-E1	底糸切り痕	使用痕無	SB204-1
	2	土師・平底甕	SB204-195	口15.6, 底5.9, 底5.8	H-A3	7.5YR5/3-良好	3/4	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕小明	SB204-2
	3	土師・平底甕	SB204-9	残5.3	H-A3	7.5YR2/0-良好	1/3	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無	SB204-3
	4	土師・平底甕	SB204-98~99	口14.4, 底3.7, 底6.6	H-D2	7.5YR2/0-良	略完	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無	SB204-5
	5	土師・平底甕	SB204-28	口12.0, 底4.8, 底5.0	H-D	10YR6/3-不良	完形	中5-E1	底糸切り痕	使用痕無,赤炭入有	SB204-4
	6	土師・柱状甕	SB204-103	底5.8	H-D2	7.5YR5/3-良	底片	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無,底部に黒斑	SB204-7
	7	土師・輪高台椀	SB204-144	台9.1, 台底1.0	H-D2	7.5YR6/4-良	1/10	中5-E1	底在赤切り痕		SB204-9
	8	土師・平底小皿	SB204-6~10	口9.4, 底3.8, 底4.2	精細	7.5YR2/0-良	2/3	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無	SB204-16
	9	土師・平底小皿	SB204-75	口8.9, 底2.8, 底4.2	H-A	7.5YR6/4-良	略完	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無	SB204-25
	10	土師・平底小皿	SB204-68	口9.2, 底2.2, 底4.1	H-A3	7.5YR6/4-良	略完	中5-E1	底在赤切り痕	内外ススあ	SB204-12
	11	土師・平底小皿	SB204-67	口8.3, 底2.2, 底4.1	H-A3	10YR6/4-良好	4/5	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕有	SB204-14
	12	土師・平底小皿	SB204-105~214	口8.7, 底2.1, 底4.7	H-A	10YR6/3-良	2/3	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無	SB204-15
	13	土師・平底小皿	SB204-2	口8.2, 台1.8, 底7.2	H-B	7.5YR7/4-良好	略完	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無	SB204-19
	14	土師・平底小皿	SB204-70	口9.8, 底2.7, 底4.1	H-D2	7.5YR5/3-淡	略完	中5-E1	底在赤切り痕,内底ラセン状ナデ	使用痕無	SB204-24
	15	土師・平底小皿	SB204-138	口8.0, 底2.2, 底4.0	H-D	10YR6/4-不良	1/2	中5-E1	底糸切り痕	使用痕無	SB204-27
	16	土師・平底小皿	SB204-25	口8.0, 底2.3, 底5.6	H-D2	10YR6/4-良	完形	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無	SB204-23
	17	土師・平底小皿	SB204-30	口8.8, 底2.4, 底4.0	H-D	10YR6/3-不良	略完	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無	SB204-11
	18	土師・平底小皿	SB204-157	口9.9, 底2.6, 底4.1	H-D	7.5YR2/0-良	1/3	中5-E1	底糸切り痕	使用痕無	SB204-19
	19	土師・平底小皿	SB204-29~34	口10.2, 底2.2, 底5.2	H-D	10YR6/3-良	2/3	中5-E1	底糸切り痕	使用痕無	SB204-17
	20	土師・平底小皿	SB204-21	口10.2, 底2.5, 底4.8	H-C	5YR7/3-良	1/2	中5-E1	底在赤切り痕		SB204-13
	21	土師・柱状小皿	SB204-175	底4.3	H-A	10YR6/3-良	3/4	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無	SB204-28
	22	土師・輪高台椀	SB204-65~67	口14.9, 底5.4, 台6.5, 台底0.3	H-D2	7.5YR7/4-良好	2/3	中5-E1	内面ミガキ,底ミガキ	使用痕無,内黒痕跡	SB204-32
	23	土師・輪高台椀	SB204-139~138~142~212	口14.9, 底6.4, 台6.3, 台底0.3	H-A	10YR6/4-良	5/6	中5-E1	内面ミガキ,底ナデ消し	使用痕無,内黒痕跡	SB204-30
	24	土師・輪高台椀	SB204-43	口15.8, 底6.3, 台6.4, 台底0.3	H-A	10YR6/4-良	3/4	中5-E1	内面ミガキ,底ナデ消し	使用痕無,内黒痕跡	SB204-31
	25	土師・輪高台椀	SB204-74	口16	H-B	7.5YR7/4-良好	1/3	中5-E1	内面ミガキ	使用痕無,内黒痕跡	SB204-(?)
	26	土師・輪高台椀	SB204-173~175~177~180	口14.5, 底5.3, 台6.0, 台底0.4	H-D	10YR6/2-不良	1/3	中5-E1	内面ミガキ	使用痕無,内黒痕跡	SB204-34
	27	土師・輪高台椀	SB204-62	口15.6, 底5.3, 台6.3, 台底0.3	H-A	7.5YR6/3-不良	2/3	中5-E1	底ナデ消し,内ロクロナデ	使用痕無,内黒痕跡	SB204-33
	28	土師・輪高台椀	SB204-106~83~94~96	口15.6	H-D	7.5YR7/3-良好	1/4	中5-E1	内ミガキ	使用痕無,内黒痕跡,外大色有	SB204-29
	29	土師・輪高台椀	SB204-90	台6.7, 台底0.2	H-D2	10YR6/3-良	1/3	中5-E1	底ナデ消し,内粗ミガキ	使用痕無,内黒痕跡	SB204-8
	30	土師・柱状椀	SB204-17	底6.3	H-C	2.5YR5/3-良	略完	中5-E1	不明	使用痕不明	SB204-37
	31	土師・柱状小皿	SB204-201	口10.6	H-A	10YR6/4-良	1/3	中5-E1	内外ロクロナデ	内黒痕跡	SB204-35
北側	32	土師・平底甕	SB207-3~4~11	口14.6, 底4.1, 底5.2	H-A	7.5YR5/2-良	2/3	中5-E1	底糸切り痕,内底刷毛ミガキ	使用痕無,内外煤痕有	SB207-3
	33	土師・平底甕	SB207-5~11	口14.7, 底4.1, 底6.3	H-B	7.5YR6/4-良	略完	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無	SB207-2
	34	土師・平底小皿	SB207-28	口13.3, 底3.6, 底6.3	H-D2	7.5YR6/3-良	1/3	中5-E1	底糸切り痕	使用痕無	SB207-1
	35	土師・柱状甕	SB207-2	口14.0, 底4.6, 底5.0	H-B	7.5YR7/3-良	2/3	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無	SB207-4
	36	土師・平底小皿	SB207-27	口10.0, 底2.5, 底5.1	H-A	7.5YR7/4-良	4/5	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無,黒斑有	SB207-12
	37	土師・平底小皿	SB207-60	口10.6, 底2.2, 底4.9	H-A3	10YR5/3-良	3/4	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無,外大色有	SB207-10
	38	土師・平底小皿	SB207-14	口10.1, 底2.4, 底4.2	H-B	7.5YR7/4-良好	略完	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無,外底黒斑有	SB207-6
	39	土師・平底小皿	SB207-26	口10.0, 底2.7, 底4.2	H-A	10YR6/3-良	4/5	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無	SB207-9
	40	土師・平底小皿	SB207-22	口10.6, 底3.0, 底4.25	H-B	10YR6/4-良	略完	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無	SB207-8
SB207	41	土師・平底小皿	SB207-41	口9.6, 底2.3, 底4.3	H-B	2.5YR7/4-良好	略完	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無	SB207-7
	42	土師・平底小皿	SB207-44	口10.9, 底1.8, 底4.8	H-C	10YR2/4-不良	略完	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無,口縁黒斑	SB207-11
	43	土師・輪高台椀	SB207-1~9~22~33~60	口15.8, 底5.56, 台6.3, 台底0.4	H-A	7.5YR6/3-良	2/3	中5-E1	内ロクロナデ,底ナデ消し	使用痕無,内黒痕跡	SB207-17
	44	土師・輪高台椀	SB207-61	口15.8	H-A	10YR6/3-良	1/4	中5-E1	内外ロクロナデ	使用痕無,内黒痕跡	SB207-14
	45	土師・輪高台椀	SB207-45	口17.4, 底6.5, 台7.6, 台底0.35	H-B	7.5YR7/4-良	3/4	中5-E1	外体沈線5条-高台1条,内ロクロナデ,内底ナデ消し,内底ナデナデ,	使用痕無,内黒痕跡	SB207-16
	46	土師・輪高台椀	SB207-29~30	口15.2	H-D2	7.5YR6/4-良	1/5	中5-E1	内ミガキ	使用痕無,内黒痕跡	SB207-15
	47	土師・輪高台椀	SB207-52	台6.4, 台底0.6	H-A	10YR7/4-良	略完	中5-E1	底ナデ消し,内ミガキ	使用痕無,内黒痕跡	SB207-5
	48	土師・柱状小皿	SB207-39	口10.6, 底3.5, 底4.3	H-A3	2.5YR7/3-良好	1/2	中5-E1	底糸赤切り痕	内煤痕	SB207-13
	49	須恵・有台椀	SB207-21	台7.1, 台底0.5	精選胎土	2.5Y5/1-青灰	1/3	明和以降	底ナデ消し	内面煤附中	SB207-1
南側	50	土師・平底甕	SB209-22~23~28	口15.3, 底4.5, 底6.6	H-A	10YR6/3-良好	3/4	中5-E1	底糸赤切り痕	使用痕無,底黒斑有	SB209-10
	51	土師・平底甕	SB209-75~81~93	口14.9, 底4.4, 底7.2	H-A	2.5Y7/3-良	4/5	中5-E1	底糸赤切り痕	使用痕無,底黒斑有	SB209-11
	52	土師・平底甕	SB209-35~79	口14.1, 底4.4, 底6.1	H-A	10YR7/4-良	1/3	中5-E1	底糸切り痕	使用痕無,外底黒斑有	SB209-14
	53	土師・平底甕	SB209-62~82	口14.5, 底3.9, 底5.8	H-A	10YR6/3-良	1/5	中5-E1	底糸切り痕	使用痕無	SB209-13
	54	土師・平底甕	SB209-103~105~108~7 補	口13.6, 底3.7, 底5.4	H-D	10YR6/3-良	2/3	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無,内外黒斑有	SB209-12
	55	土師・平底小皿	SB209-60	口9.6, 底2.2, 底4.6	H-A	10YR6/4-良好	4/5	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無,外大色有	SB209-4
	56	土師・平底小皿	SB209-96~7 補	口9.0, 底2.4, 底5.0	H-A	10YR7/2-良	2/3	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無,ゆがみ有	SB209-6
	57	土師・平底小皿	SB209-42~43	口9.2, 底2.2, 底4.3	H-A	10YR7/3-良	5/6	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無,外大色有	SB209-7
	58	土師・平底小皿	SB209-98	口9.4, 底2.1, 底5.0	H-B	5YR7/4-良	7/8	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無	SB209-1
SB209	59	土師・平底小皿	SB209-56	口9.2, 底1.5, 底4.3	H-D2	10YR6/3-良	7/8	中5-E1	底在赤切り痕,内底ラセン状ナデ	内ケガレ跡付着	SB209-2
	60	土師・平底小皿	SB209-87~89	口9.3, 底1.7, 底3.6	H-D2	7.5YR5/4-良	3/4	中5-E1	底在赤切り痕,内底ラセン状ナデ	使用痕無	SB209-3
	61	土師・平底小皿	SB209-11	口9.3, 底1.9, 底4.2	H-D2	7.5YR6/4-良	2/3	中5-E1	底在赤切り痕,内底ラセン状ナデ	使用痕無	SB209-5
	62	土師・柱状小皿	SB209-63	口9.6, 底3.2, 底4.2	H-A	10YR5/2-良	1/2	中5-E1	底在赤切り痕	使用痕無	SB209-8
	63	土師・柱状小皿	SB209-67	底3.9	H-D2	7.5YR6/4-良	1/3	中5-E1	底在赤切り痕		SB209-9
	64	土師・輪高台椀	SB209-92	台6.5, 台底0.5	H-B	7.5YR7/4-良	1/2	中5-E1	底糸切り痕ナデ,内ロクロナデ	使用痕無,内黒痕跡	SB209-15

付表２　領見町遺跡Ⅴ報告区域出土中世遺物観察表

遺構	番号	種類・器種	出土地点	法量	胎土	色・残	残存	時期	調整等	備考	実測番号
	65	土師一平法鉢	SK419-314-201	(13)3a, 8a4.4, (6)6.2	H-A3	7.5YR6/3-浅赤	2/3	中-1	底石敷切り底,内耳センセンケナデ	使用痕無,内面に黒色物	SK419-16
	66	土師一平法鉢	SK419-91-93-94	(7)4.3, 8a4.6, (6)4.9	H-A	7.5YR7/3-浅赤	3/4	中-1	底石敷切り底	使用痕無	SK419-13
	67	土師一平法鉢	SK419-146	(13)3a, 8a4.0, (6)6.2	H-A3	7.5YR5/3-浅赤	略完	中-1	底石敷切り底	内面摩耗痕,内外黒煤有	SK419-12
	68	土師一平法鉢	SK419-205-208-290-298-310	(13)3a, 8a13.0, (6)6.6	H-A3	7.5YR6/3-浅赤	1/2	中-1	底石敷切り底	内面摩耗痕,内外黒煤有	SK419-12
	69	土師一平法鉢	SK419-29-32-43	(13)5a, 8a4.5, (6)5.9	H-A	7.5YR7/4-浅赤	1/4	中-1	底糸切り痕	使用痕無,外火色系	SK419-6
	70	土師一平法鉢	SK419-21-38-430	(13)7a, 8a4.4, (6)6.0	H-A	7.5YR7/4-浅赤	1/2	中-1	底石敷切り痕	使用痕無,外黒煤で全体不予熟い	SK419-15
	71	土師一平法鉢	SK419-239-277	(13)5.1, 8a4.8, (6)5.2	H-A3	7.5YR7/4-浅赤	5/6	中-1	底石敷切り痕,内底ケデツケ	使用痕無	SK419-4
	72	土師一平法鉢	SK419-153	(13)2a, 8a4.7, (6)5.7	H-A	7.5YR6/3-浅赤	略完	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-1
	73	土師一平法鉢	SK419-171-172	(13)2b, 8a4.1, (6)5.8	H-A	7.5YR6/3-浅赤	2/3	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-2
	74	土師一平法鉢	SK419-82	(13)3b, 8a4.4, (6)5.7	H-A	7.5YR6/3-浅赤	略完	中-1	底石敷切り痕	使用痕無,ヤケ火元多い	SK419-3
	75	土師一平法鉢	SK419-171	(13)3b, 8a13.0, (6)6.3	H-A3	7.5YR7/4-浅赤	1/4	中-1	底石敷切り痕	使用痕無,黒煤有	SK419-11
	76	土師一平法鉢	SK419-128-131-149	(13)3b, 8a4.1, (6)4.8	H-A	10YR5/2-浅赤	2/3	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-5
	77	土師一平法鉢	SK419-399	(13)2b, 8a3.7, (6)5.2	H-A	10YR7/3-浅赤	2/3	中-1	底石敷切り痕,内底ケデツケ	使用痕無	SK419-13
	78	土師一平法鉢	SK419-42-232-331	(13)4a, 8a5.0, (6)6.8	H-D	10YR6/2-浅赤	2/3	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-14
	79	土師一平法鉢	SK419-41-342-345	(13)3b, 8a4.0, (6)6.2	H-D2	7.5YR6/3-浅赤	2/3	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-8
	80	土師一平法鉢	SK419-232	(13)5b, 8a4.2, (6)6.8	H-A	10YR5/2-浅赤	1/6	中-1	底糸切り痕	使用痕無	SK419-9
	81	土師一平法鉢	SK419-224-225	(13)2a, 8a4.5, (6)5.3	H-D	7.5YR7/3-浅赤	略完	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-7
	82	土師一輪高台鉢	SK419-282-299	(9)6.4, (3)8.0	H-A	10YR5/3-浅赤	2/3	中-1	底糸切りナデ,内ミガキ	使用痕無,内黒煤或発熱且	SK419-18
	83	土師一輪高台鉢	SK419-246	(9)7.4, (3)8.0(7)	H-A	10YR7/3-浅赤	底片	中-1	底糸切りナデ	使用痕無	SK419-21
	84	土師一輪高台鉢	SK419-322	(9)7.0, (3)8.2	H-A	10YR5/3-浅赤	底片	中-1	底ナデ	使用痕無	SK419-20
	85	土師一平底小皿	SK419-210-213	(7)8.4, 8a2.5, 8a4.1	H-A	10YR5/3-浅赤	4/5	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-66
	86	土師一平底小皿	SK419-732	(7)8.6, 8a2.4	H-D	7.5YR7/4-浅赤	3/4	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-68
	87	土師一平底小皿	SK419-739	(7)8.6, 8a2.3, 8a4.5	H-A	10YR6/3-浅赤	略完	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-60
	88	土師一平底小皿	SK419-739-90	(7)8.5, 8a2.05, 8a4.3	H-B	7.5YR6/4-浅赤	1/2	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-58
	89	土師一平底小皿	SK419-139	(7)8.5, 8a2.2, 8a4.0	H-A	7.5YR6/3-浅赤	完形	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-65
	90	土師一平底小皿	SK419-422	(7)8.4, 8a2.2, 8a4.3	H-A	10YR6/4-浅赤	3/4	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-50
	91	土師一平底小皿	SK419-416	(7)8.1, 8a1.8, 8a3.7	H-A	10YR6/4-浅赤	3/4	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-28
	92	土師一平底小皿	SK419-267	(7)8.4, 8a1.6, 8a4.6	H-A	10YR6/3-浅赤	3/4	中-1	底石敷切り痕,内ケセンナデ	使用痕無	SK419-53
	93	土師一平底小皿	SK419-417	(7)10.2, 8a2.4, 8a4.8	H-A3	7.5YR7/6-浅赤	4/5	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-68
	94	土師一平底小皿	SK419-242	(7)8.4, 8a2.5, 8a3.1	H-A	10YR6/3-浅赤	5/6	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-32
	95	土師一平底小皿	SK419-380-389	(7)10.0, 8a2.1, 8a5.0	H-B	7.5YR7/6-浅赤	1/4	中-1	底糸切り痕	使用痕有明	SK419-66
	96	土師一平底小皿	SK419-77	(7)8.5, 8a2.3, 8a4.0	H-A	10YR6/3-浅赤	完形	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-48
	97	土師一平底小皿	SK419-206	(7)8.4, 8a1.5, 8a4.4	H-A	10YR6/3-浅赤	4/5	中-1	底石敷切り痕		SK419-75
	98	土師一平底小皿	SK419-127	(7)8.6, 8a1.5, 8a4.4	H-A	10YR6/3-浅赤	完形	中-1	底糸切り痕	使用痕無	SK419-67
	99	土師一平底小皿	SK419-220	(7)8.5, 8a1.5, 8a4.4	H-B	2YR6/5-浅赤	4/5	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-62
	100	土師一平底小皿	SK419-767	(7)8.2, 8a1.4, 8a3.3	H-D	7.5YR7/6-浅赤	1/3	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-95
	101	土師一平底小皿	SK419-574	(7)8.2, 8a1.3, 8a4.5	H-D	7.5YR7/6-浅赤	略完	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-23
	102	土師一平底小皿	SK419-742	(7)8.5, 8a1.5, 8a5.2	H-D	7.5YR7/6-浅赤	完形	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-74
	103	土師一平底小皿	SK419-7-11	(7)8.2, 8a2.1, 8a5.2	H-A	10YR7/4-浅赤	2/3	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-84
	104	土師一平底小皿	SK419-732	(7)8.2, 8a1.4, 8a4.0	H-D	7.5YR6/3-浅赤	1/4	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-67
	105	土師一平底小皿	SK419-209	(7)8.4, 8a2.3, 8a4.5	H-B	5YR2/5-浅赤	3/4	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-67
	106	土師一平底小皿	SK419-340	(7)8.1, 8a2.3, 8a4.6	H-B	7.5YR7/6-浅赤	2/3	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-63
	107	土師一平底小皿	SK419-138	(7)8.7, 8a2.1, 8a5.4	H-A	10YR6/4-浅赤	5/6	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-56
SK419	108	土師一平底小皿	SK419-343	(7)8.0, 8a1.6, 8a4.6	H-B	7.5YR7/6-浅赤	4/5	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-28
	109	土師一平底小皿	SK419-121	(7)8.4, 8a2.6, 8a5.2	H-A	10YR6/4-浅赤	4/5	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-24
	110	土師一平底小皿	SK419-187	(7)8.4, 8a2.0, 8a5.2	H-B	7.5YR7/6-浅赤	略完	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-76
	111	土師一平底小皿	SK419-2	(7)8.4, 8a1.9, 8a5.0	H-A	10YR7/3-浅赤	5/6	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-49
	112	土師一平底小皿	SK419-144	(7)8.1, 8a1.9, 8a4.2	H-A	7.5YR6/3-浅赤	完形	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-46
	113	土師一平底小皿	SK419-134	(7)8.5, 8a2.3, 8a4.4	H-A3	7.5YR7/4-浅赤	略完	中-1	底石敷切り痕	使用痕無,外黒煤有	SK419-22
	114	土師一平底小皿	SK419-324	(7)8.6, 8a2.4, 8a4.4	H-A3	7.5YR6/3-浅赤	2/3	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-52
	115	土師一平底小皿	SK419-41	(7)8.6, 8a2.2, 8a4.2	H-A3	7.5YR6/3-浅赤	1/2	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-69
	116	土師一平底小皿	SK419-232	(7)8.4, 8a2.3, 8a4.2	H-A3	10YR6/4-不良	完形	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-60
	117	土師一平底小皿	SK419-48	(7)8.6, 8a2.6, 8a4.8	H-A3	7.5YR7/6-浅赤	1/4	中-1	底糸切り痕	使用痕無	SK419-99
	118	土師一平底小皿	SK419-74-79-302	(7)8.0, 8a2.1, 8a4.4	H-A3	10YR7/4-浅赤	7/8	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-71
	119	土師一平底小皿	SK419-242	(7)8.8, 8a1.8, 8a4.8	H-A3	10YR7/3-浅赤	完形	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-88
	120	土師一平底小皿	SK419-273	(7)8.3, 8a1.5, 8a5.2	H-A3	10YR6/4-浅赤	3/5	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-24
	121	土師一平底小皿	SK419-138-141-155	(7)8.5, 8a2.2, 8a4.4	H-D2	7.5YR7/3-浅赤	3/4	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-85
	122	土師一平底小皿	SK419-420	(7)8.2, 8a2.3, 8a4.1	H-D2	10YR7/3-浅赤	完形	中-1	底糸切り痕	使用痕無	SK419-82
	123	土師一平底小皿	SK419-30	(7)8.6, 8a2.05, 8a5.0	H-D2	7.5YR7/3-浅赤	1/2	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-39
	124	土師一平底小皿	SK419-154	(7)8.3, 8a1.8, 8a5.2	H-D2	10YR7/4-浅赤	2/3	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-51
	125	土師一平底小皿	SK419-356	(7)8.3, 8a2.3, 8a5.2	H-D2	10YR6/4-浅赤	完形	中-1	底石敷切り痕	使用痕無,切り離し痕土師器,小かえり無しい	SK419-81
	126	土師一平底小皿	SK419-370	(7)8.8, 8a1.9, 8a5.4	H-D	10YR7/3-浅赤	完形	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-97
	127	土師一平底小皿	SK419-270-272	(7)8.5, 8a2.2, 8a4.1	H-D2	7.5YR5/3-浅赤	3/4	中-1	底石敷切り痕,内底ラセンナデ	使用痕無	SK419-23
	128	土師一平底小皿	SK419-189	(7)8.5, 8a2.15, 8a4.4	H-D2	10YR6/3-浅赤	略完	中-1	底石敷切り痕,内底ラセンナデ	使用痕無	SK419-55
	129	土師一平底小皿	SK419-123	(7)8.9, 8a2.05, 8a4.4	H-D2	7.5YR5/4-浅赤	略完	中-1	底石敷切り痕,内底ラセンナデ	使用痕無,外火色系	SK419-64
	130	土師一平底小皿	SK419-101-104-105	(7)8.1, 8a2.05, 8a4.9	H-D	10YR6/4-浅赤	略完	中-1	底石敷切り痕	外天色有	SK419-80
	131	土師一平底小皿	SK419-F36	(7)8.7, 8a1.9, 8a5.3	H-D2	10YR6/4-浅赤	完形	中-1	底石敷切り痕	外全体に黒	SK419-80
	132	土師一平底小皿	SK419-F30	(7)8.1, 8a2.1, 8a4.5	H-D	7.5YR7/3-浅赤	略完	中-1	底糸切り痕	使用痕不明,内底黒煤有	SK419-77
	133	土師一平底小皿	SK419-414	(7)8.4, 8a2.2, 8a5.1	H-D	7.5YR7/3-浅赤	1/2	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-84
	134	土師一平底小皿	SK419-204-221-284	(7)8.0, 8a1.8, 8a2.4	H-D	10YR7/4-不良	2/5	中-1	底石敷切り痕	内底摩耗痕,内底黒煤有	SK419-75
	135	土師一平底小皿	SK419-57	(7)8.7, 8a2.1, 8a4.0	H-C	7.5YR6/3-不良	2/3	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-26
	136	土師一平底小皿	SK419-173-186	(7)8.6, 8a2.8, 8a5.8	H-C	10YR7/4-不良	1/4	中-1	底糸切り痕	使用痕無	SK419-83
	137	土師一平底小皿	SK419-394	(7)8.0, 8a1.4, 8a4.7	H-D	7.5YR6/4-浅赤	2/4	中-1	底石敷切り痕	使用痕無	SK419-27
	138	土師一台付鉢	SK419-96	(8)5.0	H-D2	7.5YR7/4-浅赤	底片	中-1	底糸切り痕ナデ	使用痕無	SK419-29
	139	土師一輪高台鉢	SK419-181-132-163-165	(11)4.4, 8a6.4, (9)6.1, (3)8.0(1)	H-A	10YR5/2-浅赤	1/3	中-1	底ナデ調し,内底ミガキ	使用痕無,内黒煤或	SK419-39
	140	土師一輪高台鉢	SK419-40-49-58-81-335	(11)4.8, 8a5.8, (9)6.3, (3)8.0	H-A	10YR5/4-浅赤	1/3	中-1	内ロクロナデ,外ロクロヒナデ,底糸切り痕	使用痕無,内黒煤或	SK419-37
	141	土師一輪高台鉢	SK419-380	(9)6.4, (3)8.0(3)	H-A	10YR5/2-浅赤	底片	中-1	内ミガキ,底ナデ調し	使用痕無,内黒煤或	SK419-44
	142	土師一輪高台鉢	SK419-328	(9)6.2, (3)8.0(2)	H-A	10YR5/2-浅赤	1/3	中-1	内ミガキ,底糸切りナデ	使用痕無,内黒煤或	SK419-19
	143	土師一輪高台鉢	SK419-23	(9)6.8, (3)8.0(5)	H-A	10YR5/4-浅赤	1/6	中-1	底ナデ調し	使用痕無,内黒煤或	SK419-43
	144	土師一輪高台鉢	SK419-729-64	(9)6.3, (3)8.0(3)	H-A	5YR6/3-浅赤	1/6	中-1	底ナデ調し,内側ミガキ	使用痕無,内黒煤或	SK419-42
	145	土師一輪高台鉢	SK419-110-126	(11)5.6, 8a5.5, (9)6.3, (3)8.0(1)	H-D	10YR5/3-浅赤	1/4	中-1	底糸切り痕,内側ミガキ	使用痕無,内黒煤或	SK419-40
	146	土師一輪高台鉢	SK419-64-234-236-354	(11)7	H-D	10YR5/3-浅赤	1/3	中-1	内ミガキ	内黒煤或	SK419-33
	147	土師一輪高台鉢	SK419-223	(11)5.2	H-D2	7.5YR7/6-浅赤	1/6	中-1	内ミガキ	内黒煤或	SK419-34
	148	土師一輪高台鉢	SK419-428	(11)5.2	H-D	10YR5/3-浅赤	1/6	中-1	内ミガキ	内黒煤或	SK419-35
	149	土師一輪高台鉢	SK419-385	(11)5.0	H-D	10YR5/2-浅赤	1/6	中-1	内ミガキ	内黒煤或	SK419-32

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
SR419	130	土師・輪高台皿	SK419-51・52・344・349・432	(11)4.4・高5.0, 口5.6, 台径(6)3	B-D2	HY10/8-3・良好	4/5	中9-1	底石糸切り後,内ロクロナデ	使用痕跡,内黒痕跡	SK419-41
	131	土師・粗比皿	SK419-90・100・308・312	(11)4.1・高4.0, 口5.3, 台径(6)4	B-C	7.5YR5/4・良	3/4	中9-1	底糸切り後,内ミガキ	内黒痕跡	SK419-38
	132	土師・粗比小皿	SK419-150	(7)3.8, 高1.9, 底4.1	B-A	HY10/8-3・良好	略完	中9-1	底糸切り後,内放射状ミガキ	使用痕跡,内黒痕跡,底中央に粘土付き柔たが圧痕	SK419-66
	133	土師・粗比小皿	SK419-204・211	(7)3.9, 高1.1, 底4.0	B-A	HY10/8-3・良	4/5	中9-1	底糸切り後,内ロクロナデ	使用痕跡,内黒痕跡	SK419-47
	134	土師・粗比小皿	SK419-80	(7)3.5	B-A	HY10/8-3・良	1/5	中9-1	内底ミガキ	使用痕跡,内黒痕跡	SK419-45
	135	土師・粗比鉢	SK419-180	底5.9	B-D	HY10/8-3・良	1/5	中9-1	底石糸切り後	使用痕跡,内黒痕跡	SK419-36
	136	土師・小型鍋	SK419-250・252	—	B-A2	HY10/8-3・良	1/5	中9-1	内ヘラナデ,胴ナデ	内面	SK419-102
	137	土師・輪状鍋	SK419-24	脚15×3.4	B-A	2.5YR5/4・不良	完形	中9-1	脚部縦横刷毛目状調整,中心穿孔置換	使用痕跡?,縦横不良で黒色化	SK419-3
	138	瓦質・有台鍋	SK419-107・6.25F VI	(3)4.6, 高5.4, 口6.3, 台径(6)3	瓦質系	2.5Y7/1・粗鋼	2/5	明期?期	底ナデ消し	内底摩耗痕,内底黒斑・外体無・無機能底か	SK419-1
	139	石製品・球	SK419-1	5.9×4.7×2.8	緻密材	—	略完?	—	4方に少し傾けての抉り	鉄反応顕著,石製品の転用?,重量60g	SK419-2
SK420	140	土師・平底鉢	SK420-8	底4.9	B-A3	HY10/8-2・良	1/4	中9-B1	底石糸切り後	使用痕跡	SK420-1
	141	土師・杯状鉢	SK420-13	底4.6	B-A	HY10/8-2・良	底片	中9-B1	底石糸切り後	使用痕跡	SK420-2
	142	土師・輪高台鉢	SK420-9	台7.4, 台高1.0	B-A3	HY10/8-2・良	底片	中9-B1	底ナデ消し		SK420-3
	143	土師・輪高台小皿	SK420-11	(10)8.4, 底2.6, 台6.5, 台高0.9	B-D	HY10/8-2・不良	4/5	中9-B1	底ナデ消し		SK420-5
	144	土師・輪高台小皿	SK420-10	(10)5.4, 底2.3, 台7.6, 台高0.8	B-D2	7.5YR5/4・良好	完形	中9-B1	底ナデ消し	内底摩耗痕	SK420-4
	145	土師・輪高台鉢	SK420-3	(11)4.4, 底4.5, 台6.0, 台高0.2	B-A	7.5YR5/4・良	1/4	中9-B1	内ミガキ,底ナデ消し	使用痕跡	SK420-6
SK421	146	土師・輪高台鉢	SK421-57	台7.2, 台高0.7	B-C	5YR7/6・不良	底片	中9-1			SK421-12
	147	土師・平底小皿	SK421-44	(11)6.0, 底2.1, 底4.0	B-A3	HY10/8-2・良	1/2	中9-1	底石糸切り後	使用痕跡	SK421-5
	148	土師・平底小皿	SK421-48	(13)5.0, 底2.15, 底4.0	B-A3	2.5Y7/6・良好	2/3	中9-1	底石糸切り後	使用痕跡	SK421-4
	149	土師・平底小皿	SK421-38	(13)5.0, 底2.5, 底4.3	B-A	7.5YR5/2・良	3/4	中9-1	底石糸切り後	使用痕跡	SK421-1
	150	土師・平底小皿	SK421-36	(13)6.0, 底1.85, 底5.7	B-B	HY10/8-4・良	4/5	中9-1	底石糸切り後	使用痕跡	SK421-3
	151	土師・平底小皿	SK421-30	(13)4.4, 底2.3, 底5.2	B-A	HY10/8-3・良	2/5	中9-1	底石糸切り後	使用痕跡	SK421-9
	152	土師・平底小皿	SK421-64	(13)4.8, 底2.2, 底5.0	B-A	7.5YR5/4・良	4/5	中9-1	底石糸切り後	使用痕跡,外底ヘラ記号[1]	SK421-8
	153	土師・平底小皿	SK421-47	(13)5.0, 底2.6, 底4.4	B-A	7.5YR5/4・良	1/2	中9-1	底石糸切り後	使用痕跡	SK421-7
	154	土師・平底小皿	SK421-22	(13)2.4, 底2.1, 底4.3	B-D	HY10/8-2・良	3/4	中9-1	底石糸切り後	使用痕跡	SK421-2
	155	土師・平底小皿	SK421-29	(13)5.2, 底2.1, 底5.2	B-D	HY10/8-3・良	1/3	中9-1	底糸切り後	使用痕跡	SK421-10
	156	土師・平底小皿	SK421-54	底4.0	B-B	5YR7/6・良	2/5	中9-1	底石糸切り後,内底円形	使用痕跡	SK421-11
	157	土師・平底小皿	SK421-6	底5.8	B-A	7.5YR5/6・良	3/4	中9-1	底石糸切り後,内底円形	使用痕跡	SK421-6
	158	土師・輪高台鉢	SK421-65	(11)8.0	B-D	5YR7/6・良好	1/5	中9-1	内ミガキ	使用痕跡	SK421-13
	159	土師・輪高台鉢	SK421-12	(11)5.0	B-A	HY10/8-4・良	1/6	中9-1	内面ミガキ	使用痕跡不明	SK421-14

3．井戸・炉状遺構・H区ピット出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
SE102	1	土師・平底鉢	SE102-6	底6.0	B-A	10YR8/4・良	底片	中1-D1	底石糸切り後	使用痕跡	SE102-1
	2	土師・柱状鉢	SE102-9	底6.5	B-B	7.5YR8/6・良	底片	中1-D1	底石糸切り後	使用痕跡,外底黒斑跡有	SE102-2
	3	土師・平底小皿	SE102-9-B	(7)3.2, 底2.3, 底5.4	B-D2	2.5YR5/2・不良	1/3	中1-D1	底糸切り後	使用痕跡	SE102-4
	4	土師・平底小皿	SE102-1-B	(11)2.2, 底1.2, 底5.1	B-A	10YR8/3・良	3/5	中1-D1	底石糸切り後	使用痕跡	SE102-3
	5	土師・輪高台小皿	SE102-7-B	(9)4.4, 台径6.5	B-A	10YR8/3・良	底片	中1-D1	底ナデ消し,内底円ナデ	内黒痕跡	SE102-5
	6	土師・柱状小皿	SE102-1-B	底3.6	B-A	10YR7/2・良好	1/2	中1-D1	底石糸切り後	使用痕跡	SE102-6
	7	土師・柱状鉢	SE400-60	底6.6	B-D	7.5Y7/6・不良	底片	中1-D1	底石糸切り後	使用痕跡	SE400-11
	8	土師・柱状鉢	SE400-2	底6.6	B-A	7.5YR8/1・良	底片	中1-D1	底石糸切り後	使用痕跡	SE400-12
	9	土師・輪高台鉢	SE400-38	台6.9, 台高0.3	B-D	7.5Y7/6・良	2/3	中1-D1	底糸切り後,外底円痕	使用痕跡	SE400-13
	10	土師・平底小皿	SE400-3	(3)7.7, 底1.95, 底3.5	B-A	10YR8/3・良	2/4	中1-E1	底石糸切り後	使用痕跡	SE400-4
	11	土師・平底小皿	SE400-51	(9)3.1, 底1.8, 底4.0	B-B	2.5Y7/6・良好	略完	中1-E1	底石糸切り後	使用痕跡,外全体黒斑有	SE400-1
	12	土師・平底小皿	SE400-55	(3)6.8, 底1.85, 底4.4	B-D	5YR7/6・良	4/5	中1-E1	底石糸切り後	使用痕跡	SE400-2
	13	土師・平底小皿	SE400-85	(11)2.2, 底2.9, 底4.6	B-D	10YR7/3・良	7/8	中1-E1	底石糸切り後	使用痕跡	SE400-3
	14	土師・柱状小皿	SE400-25	底4.7	B-B	7.5Y7/8・良	2/3	中1-E1	底石糸切り後,外底黒斑	使用痕跡	SE400-6
	15	土師・柱状小皿	SE400-1・117	(9)6.4, 底3.95, 底4.4	B-D2	2.5Y7/8・良	1/2	中1-E1	底石糸切り後	使用痕跡,内外火色有	SE400-5
	16	土師・柱状小皿	SE400-27	底3.4	B-D2	7.5YR8/4・良	底片	中1-E1	底石糸切り後	使用痕跡	SE400-7
	17	土師・柱状小皿	SE400-60	底4.3	B-D2	2.5Y8/6・不良	底片	中1-E1	外底円痕	底部上から小穴で貫通	SE400-8
	18	土師・柱状小皿	SE400-68	底4.2	B-D2	7.5YR6/4・良	底片	中1-E1	底石糸切り後	使用痕跡	SE400-9
	19	土師・平底鉢	SE400-69	底5.4	B-D	HY10/8・良	底片	中1-E1	底石糸切り後	使用痕跡,内黒痕跡	SE400-14
	20	土師・柱状鉢	SE400-D F面	底5.9	B-A	HY10/8・良好	1/6	中1-E1	底糸切り後	使用痕跡,内黒痕跡	SE400-16
	21	土師・輪高台鉢	SE400-D・F面	(11)4.4, 底4.7, 台6.3, 台高0.3	B-B	2.5Y8/6・良好	2/5	中1-E1	底ナデ消し,内ロクロナデ	使用痕跡,内黒痕跡	SE400-17
	22	土師・輪高台鉢	SE400-114	(9)6.8, 台径6.4	B-A	5YR7/6・良	底片	中1-E1	底ナデ消し,内底円ナデ	使用痕跡,内黒痕跡	SE400-18
	23	瓦質・有台鉢	SE400-22	(9)6.6, 台径8.9	瓦質焼成	2.5Y7/1・粗鋼	底片	明期?期	底糸切り後	内底摩耗痕	SE400-5
	24	瓦質・有台鉢(小)	SE400-A上・6.25・2.26・9.26・29・6.28	(11)5.6, 底3.0, 台7.4, 台高0.35	瓦質焼成	2.5Y7/1・粗鋼	1/3	明期?期	底糸切り後	内面土手に輪	SE400-4
	25	白磁・椀	SE400-B4・6.29F VI	(7)3.5	龍泉?3Y7/1	2.5YR5/1・粗鋼	1/6	由中C期	由中自磁完備Ⅲ-b類	内側口縁ナシ	SE400-15
	26	白磁・皿	SE400-D上・A上・6.25F VI	(11)2.0	龍泉?10Y7/1	2.5YR5/1・粗鋼	1/10	由中C期	由中自磁完備Ⅴ類		SE400-17
SJ70	27	土師・輪高台皿(小)	SJ70B-9E上・9	(9)5.3, 台径6.4	B-A	HY10/8-2・良	底片	中1-1?7	内ミガキ,底ナデ消し	使用痕跡	SJ70-1
SJ71	28	土師・柱状小皿	SJ71-6	(7)6.3, 底2.0, 底4.3	B-D2	HY7/3?・不良	5/6	中5-B1		使用痕不明	SJ71-2
井戸中央ピット	29	土師・平底小皿	P262	(7)6.0, 底2.4, 底4.8	B-A	HY8/8・良	7/8	中5-B1	底石糸切り後,外底円痕	使用痕跡	P-8
	30	土師・平底小皿	P262	(7)6.4, 底2.1, 底4.0	B-D2	HY8/6・良	略完	中5-B1	底石糸切り後		P-10
	31	土師・柱状小皿	P262	(7)6.6, 底2.6, 底5.0	B-D2	7.5YR8/6・良	3/4	中5-B1	底石糸切り後	使用痕跡	P-13
	32	土師・平底鉢	P250	(11)3.4, 底3.2, 底4.0	B-D2	HY8/6・良	完形	常期?	底石糸切り後	使用痕跡	P-5
	33	土師・大皿	P302	(11)3.4, 底3.7	B-A2 ℃焼	HY8/6・良	1/2	中5-E1	ロクロ成形,糸切一底痕ナデ調,内ハケナデ,口縁部ナデ調ナデ	器壁不均質胎土,外内黒斑有	SJ71-3
	34	土師・平底小皿	P303	(7)6.2, 底1.8, 底5.0	B-A	HY7/4・良	5/6	中5-E1	底石糸切り後	使用痕跡	P-6
	35	土師・平底小皿	P308	(7)6.4, 底2.4, 底6.4	B-C	HY7/4・不良	2/5	中5-E1	底石糸切り後	使用痕跡	P-12
	36	土師・平底小皿	P401	(7)5.4, 底1.9, 底4.4	B-C	5YR6/6・良	2/3	中5-E1	底石糸切り後	使用痕跡,内黒斑有	P-9
	37	土師・平底鉢	P1084	(11)2.3, 底3.2, 底6.0	B-A3	HY8/8・良	3/5	常期	底石糸切り後	使用痕跡	P-4
	38	土師・輪高台鉢	P1042	(11)4.6, 底5.4, 台7.6, 台高0.7	B-A3	HY8/8・良好	1/4	常期?	外体下半一部ケズリ,内面ミガキ	使用痕跡	P-17

４．中世土器溜り遺構出土遺物

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実測番号
	1	土師・平底鍋	9.20/不明	口32.2, 底3.8, 厚3.5	H-A3	7.5YR6/3-良	2/5	室2	底面切り後	使用痕跡	HBF #6.32
	2	土師・平底鍋	9.22~20/不明	口31.7, 底3.9, 厚3.5	H-A3	7.5YR6/4-良好	1/3	室2	底面切り後	使用痕跡、黒煤有	HF #5.31
	3	土師・輪高台椀	9.20/不明	台6.8, 台高0.6	H-A	7.5YR5/1-良	底片	室2	底ナデ調し		HF #5.46
	4	土師・輪高台椀	9.20/不明	台6.8, 台高0.65	H-A3	7.5YR6/4-良好	底片	室2	底ナデ調し		HF #5.42
	5	土師・輪高台椀	9.20/不明	台6.0, 台高0.3	H-A3	10YR6/3-良	底片	室2	底ナデ調し		HF #5.43
	6	土師・輪高台椀	9.20/不明	台6.2, 台高0.7	H-A	10YR6/4-良	底片	室2	底ナデ調し		HF #5.41
	7	土師・輪高台椀	9.20/不明	台7.2, 台高0.5	H-A3	7.5YR6/4-良	底片	室2	底ナデ調し	使用痕跡	HF #5.56
	8	土師・平底小皿	9.20/不明	口10.2, 底4.45, 高3.9	H-A3	10YR6/3-良	略完	室2	底糸切り後	使用痕跡、底中央穿孔	HF #8.120
	9	土師・平底鍋	8.20/不明	口33.2, 底3.95, 厚5.1	H-D2	2.5YR6/3-不良	1/3	中2-3			HF #5.24
	10	土師・輪高台椀	8.20/不明	台7.2, 台高0.8	H-D	7.5YR7/4-良	底片	中2-3	底ナデ調し		HF #5.47
	11	土師・輪高台椀	8.20/不明	台7.0, 台高0.6	H-D	7.5YR7/4-良	底片	中2-3	底ナデ調し		HF #5.49
	12	土師・輪高台椀	8.20/不明	台7.1, 台高1.0	H-D2	10YR5/3-不良	底片	中2-3			HF #5.48
	13	土師・平底小皿	8.20/不明	口9.0, 底4.8, 高3.0	H-A	7.5YR7/2-不良	1/4	中2-3	底糸切り後	内面炭	HF #8.107
	14	土師・平底小皿	9.20/不明	口8.3, 底4.25, 高4.2	H-A	10YR5/1-良	3/4	中2-3	底糸切り後	使用痕跡	HF #8.126
	15	土師・平底小皿	9.20/不明	口8.3, 底4.1, 高4.6	H-D	5YR7/4-良好	3/4	中2-3	底糸切り後	使用痕跡	HF #8.124
	16	土師・平底小皿	8.20/不明	口9.6, 底4.1, 高5.0	H-A	10YR6/2-良	1/3	中2-3	底糸切り後	使用痕跡、内外黒煤有	HF #8.123
	17	土師・平底小皿	9.20/不明	口9.5, 底4.9, 高5.1	H-A	10YR5/2-良	完形	中2-3	底糸切り後	使用痕跡	HF #8.135
	18	土師・平底小皿	8.20/不明	口9.2, 底4.9, 高4.4	H-A	10YR5/2-良	2/3	中2-3	底糸切り後	使用痕跡	HF #8.67
	19	土師・平底小皿	8.20/不明	口10.2, 底5.0, 高5.3	H-B	2.5YR6/6-良	2/3	中2-3	底糸切り後	使用痕跡	HF #8.114
	20	土師・平底小皿	8.20/不明	口9.0, 底5.4, 高4.4	H-B	2.5YR6/6-良	3/4	中2-3	底糸切り後	使用痕跡	HF #8.106
	21	土師・平底小皿	9.20/不明	口9.5, 底5.2, 高5.0	H-D	10YR5/3-不良	略完	中2-3	底糸切り後	使用痕跡	HF #8.138
	22	土師・平底小皿	9.20/不明	口10.2, 底5.3, 高5.0	H-D2	10YR5/4-良	1/2	中2-3	底糸切り後	使用痕跡	HF #8.125
	23	土師・柱状小皿	8.20/不明	底3.9	H-A	2.5YR6/4-良好	2/5	中2-3	底糸切り後		HF #8.165
	24	土師・柱状小皿	9.20/不明	底4.0	H-C	10YR5/4-不良	底片	中2-3	底糸切り後		HF #8.172
	25	土師・輪高台椀	9.20/不明	口15.7, 底5.7, 台6.2, 台高0.3	H-A	10YR6/3-良	1/2	中2-3	底ナデ調し、内ロクロナデ	使用痕跡、内黒痕跡	HF #5.166
	26	土師・輪高台椀	8.20/不明	口15.1	H-A	10YR5/3-良	1/5	中2-3	内ミガキ	使用痕跡、内黒痕跡	HF #5.165
	27	土師・輪高台椀	8.20/不明	台6.0, 台高0.35	H-A	7.5YR7/4-良	底片	中2-3	底ナデ調し	使用痕跡、内黒痕跡	HF #5.163
	28	土師・輪高台椀	9.20/不明	台6.4, 台高0.3	H-A	5YR7/4-良	底片	中2-3	底ナデ調し、内ロクロナデ	使用痕跡、内黒痕跡	HF #5.44
	29	土師・輪高台椀	9.20/不明	口15.0	H-D	10YR5/3-良	1/5	中2-3	内ナロクロナデ	使用痕跡、内黒痕跡	HF #5.186
	30	土師・輪高台椀	8.20/不明	台6.5, 台高0.5	H-C	10YR7/3-良	底片	中2-3	底糸底状かき出し調台	使用痕跡、内黒痕跡	HF #5.186
	31	土師・柱状椀	8.20/不明	底6.0	H-A	10YR7/3-良	1/2	中2-3	底糸切り後	使用痕跡、内黒痕跡	HF #5.200
	32	土師・柱状椀	8.20/不明	底5.0	H-A	10YR6/4-良	底片	中2-3	底糸切り後	使用痕跡、内黒痕跡	HF #5.205
	33	土師・柱状椀	9.20/不明	口11.4, 高推15, 底4.8	H-D	10YR5/2-良	1/2	中2-3	底糸切り後	使用痕跡、内黒痕跡	HF #5.207
	34	土師・平底椀	8.20/不明	口14.6, 底3.9, 高5.0	H-D2	10YR5/6-不良	1/5	中2-3			HF #8.29
	35	土師・柱状椀	8.20/不明	底6.0	H-A	10YR5/3-不良	底片	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡	HF #8.50
	36	土師・平底小皿	6.33	口8.9, 底3.2, 高4.0	H-A	10YR5/2-不良	1/5	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡	HF #8.118
	37	土師・平底小皿	9.20/不明	口8.6, 底3.1, 高4.3	H-A	10YR5/2-不良	2/3	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡	HF #8.120
	38	土師・平底小皿	6.33	口8.6, 底3.4, 高3.8	H-A	7.5YR6/4-良	略完	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡、内外黒煤有	HF #8.116
	39	土師・平底小皿	6.33/不明	口7.8, 底3.5, 高5.0	H-A	10YR5/4-良	2/5	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡	HF #8.108
	40	土師・平底小皿	9.20/不明	口7.8, 底3.0, 高4.8	H-A	10YR7/3-不良	1/5	中2-3	底糸切り後		HF #8.127
	41	土師・平底小皿	9.20/不明	口8.4, 底3.2, 高5.25	H-D	7.5YR7/4-良	3/4	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡	HF #8.128
BE	42	土師・平底小皿	6.20	口9.4, 底4.4, 高4.2	H-D	7.5YR6/3-良	1/2	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡	HF #8.144
中世	43	土師・平底小皿	6.20/不明	口8.8, 底3.3, 高3.8	H-D	7.5YR7/4-良	1/4	中2-3	底糸切り後		HF #8.143
1号	44	土師・平底小皿	9.21/不明	口9.2, 底3.5, 高4.3	H-D2	5YR6/6-良	1/2	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡	HF #8.185
土器	45	土師・平底小皿	6.21/不明	口8.6, 底3.0, 高4.0	H-D2	10YR6/3-良	2/5	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡	HF #8.112
F溜	46	土師・平底小皿	9.20/不明	口8.9, 底3.0, 高5.0	H-D2	10YR6/1-良	1/3	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡	HF #8.140
	47	土師・平底小皿	9.20/不明	口8.4, 底3.2, 高4.3	H-C	7.5YR7/6-良	完形	中2-3			HF #8.139
	48	土師・平底小皿	6.20/不明	口8.6, 底3.0, 高4.0	H-C	7.5YR7/6-良	1/3	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡	HF #8.117
	49	土師・平底小皿	6.33	口8.4, 底3.9, 高5.1	H-C	7.5YR7/4-良	2/3	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡	HF #8.115
	50	土師・平底小皿	9.20/不明	口9.2, 底3.3, 高5.08	H-C	7.5YR7/6-良	1/4	中2-3	底糸切り後	使用痕跡	HF #8.128
	51	土師・平底小皿	6.20/不明	口8.9, 底3.2, 高4.4	H-C	7.5YR7/6-良	1/4	中2-3	底糸切り後	使用痕跡	HF #8.129
	52	土師・平底小皿	6.21/不明	口8.7, 底3.6, 高7.0	H-C	10YR7/4-良	2/5	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡	HF #8.129
	53	土師・柱状小皿	6.21/不明	口8.8, 底3.8, 高6.0	H-C	5YR6/4-良	1/5	中2-3	底糸切り後	使用痕跡	HF #8.141
	54	土師・平底小皿	9.21/不明	口8.4, 底3.7, 高6.0	H-C	7.5YR6/6-不良	1/4	中2-3	底糸切り後	使用痕跡	HF #8.132
	55	土師・柱状小皿	6.21/不明	底4.2	H-D2	10YR6/4-良	略片	中2-3	底糸底切り後、外底円痕	使用痕跡	HF #8.156
	56	土師・平底小皿	9.21/不明	口8.9, 底3.5, 高4.6	H-D	10YR6/4-不良	2/3	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡	HF #8.150
	57	土師・柱状小皿	6.20/不明	口8.0	H-D2	10YR6/4-良	1/4	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡	HF #8.149
	58	土師・柱状小皿	6.20/不明	底4.0	H-A	10YR7/3-良好	底片	中2-3	底糸底切り後	内底円痕	HF #8.151
	59	土師・柱状小皿	6.20/不明	口8.4, 底2.0, 底3.8	H-D2	10YR6/4-不良	2/3	中2-3	底糸切り後	内底円痕	HF #8.158
	60	土師・柱状小皿	2.20/不明	口9.2, 底2.8, 高4.0	H-D2	7.5YR6/4-良	3/4	中2-3	底糸底切り後	内底円痕	HF #8.154
	61	土師・柱状小皿	6.21/不明	底4.0	H-D2	10YR6/3-不良	底片	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡	HF #8.152
	62	土師・柱状小皿	9.20/不明	底4.0	H-D	7.5YR5/4-良好	1/2	中2-3	底糸底切り後	使用痕跡、内黒痕跡	HF #8.230
	63	土師・鍋	7.21/不明	口33.8, 厚2.0, 底21.0	粗A	10YR6/3-良好	1/16	中2-3	底ヘラ？、内外指ナデ	内面	HF #5.2
	64	瓦質・台付鍋	2.22~5.23/21.5	口14.8, 底5.3, 台6.9, 台高2.6	粗微細	10YR6/1-良好	1/10	西暦1期		無釉	HF #5.36
	65	瓦質・台付鍋	9.20/不明	口14.0	粗微細	2.5Y7/1-良好	1/10	明治2期	内面見込み指	内外無釉	HF #5.40
	66	瓦質・台付鍋	6.23/不明	口7.4, 台6.0	粗微細	2.5Y7/1-良好	底片	明治2期	底ナデ調し	使用痕跡、内強釉	HF #5.42
	70	瓦質・小鍋	5.22~23/不明	口7.5, 台4.8, 台高0.4	粗微細	10YR7/1-良好	1/2	?	底ナデ調し、脚下位底端ヨコ撫	使用痕跡	HF #5.41
	71	白磁・碗	9.20/不明	口15.6	精色2.5YR/1	5Y7/1-良好	1/20	由本2期	由本白磁分類B1類、玉縁小口縁		HF #5.72
	72	白磁・碗	9.20~6.20/不明	口15.4	精色2.5GY8/1	N8/0-無釉	口縁片	由本3期	由本白磁分類B1類、玉縁小口縁		HF #5.83
	73	白磁・碗	2.22/不明	口15.8	精色2.5Y8/2	2.5Y7/1-無釉	1/9	由本C期	由本白磁分類B1類、玉縁小口縁	樹脂入	HF #5.88
	74	白磁・碗	6.21/不明	—	精色2.5Y8/1	10YR8/1-良好	口縁片	由本C期	由本白磁分類B1類、玉縁小口縁	樹脂入	HF #5.86
	75	白磁・碗	9.24	—	精色10YR8/1	N8/0-良好	口縁片	由本C期	由本白磁分類B1類、玉縁小口縁	樹脂入	HF #5.86
	76	白磁・碗	6.21~22~9.22/不明	口15.6, 底5.4, 台6.8, 台高0.25	精色10YR8/1	10YR8/1-良好	1/10	由本C期	由本白磁分類B3類、玉縁口縁		HF #5.68
	77	白磁・碗	6.20	口12.6	精色2.5GY7/1	N7/0-無釉	口縁片	由本C期	由本白磁分類B1類、玉縁入口縁		HF #5.16
	78	白磁・碗	6.20/不明	口9.6, 台6.0	精色2.5GY8/1	2.5Y8/1-無釉	底片	?	底ヘラ？調し		HF #5.72
	79	白磁・皿	6.21/不明	底3.0	精色2.5Y7/2	5Y7/1-良好	1/15	由本C期	由本白磁分類D1類、底ヘラ？		HF #5.94

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・味	残存	時期	調整等	備考	実測番号
	80	土師・平瓦類	9.28F ｸﾞﾘ	11E16.R34.d57	B-A	7.5YR5/2-良	1/4	ｹﾞﾘ-B1	縄赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-80
	81	土師・平瓦類	2.28F ｸﾞﾘ	11E14.R43.R54	B-A	10YR6/2-良	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄赤赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-39
	82	土師・平瓦類	9.28F ｸﾞﾘ	11E18.R37.R55	B-A3	7.5YR5/2-良	1/3	ｹﾞﾘ-B1	縄赤赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-27
	83	土師・平瓦類	9.28F ｸﾞﾘ	11E12.R37.R55	B-D	10YR6/3-不良	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄赤赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-26
	84	土師・平瓦類	9.28F ｸﾞﾘ	11E16.R49.R59	B-D	10YR6/2-不良	1/4	ｹﾞﾘ-B1			HF'-Y5-35
	85	土師・平瓦類	9.28F ｸﾞﾘ	11E12.R40.R60	B-D2	10YR6/2-不良	1/3	ｹﾞﾘ-B1	縄赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-25
	86	土師・平瓦類	9.25F ｸﾞﾘ	11E06.R54.R66	B-D2	10YR6/3-良好	2/3	ｹﾞﾘ-B1	縄赤赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-11
	87	土師・平瓦類	9.25F ｸﾞﾘ	11E04.R54.R65	B-D2	7.5YR5/4-良	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄赤赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-40
	88	土師・平瓦類	9.28F ｸﾞﾘ	d65.4	B-D2	7.5YR5/2-良	破片	ｹﾞﾘ-B1	縄赤赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-2
	89	土師・柱状瓦	9.25F ｸﾞﾘ	11E43.R54.R65	B-A	7.5YR5/2-良	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄赤赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-46
	90	土師・柱状瓦	9.28F ｸﾞﾘ	11E48.R52.R65	B-A	7.5YR5/2-良	2/3	ｹﾞﾘ-B1	縄赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-47
	91	土師・柱状瓦	9.25F ｸﾞﾘ	d66.0	B-A	10YR7/2-良	破片	ｹﾞﾘ-B1	縄赤赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-45
	92	土師・輪鬼の桃	5.25F ｸﾞﾘ	d75.0, d76.0	B-D2	7.5YR5/4-不良	破片	ｹﾞﾘ-B1			HF'-Y5-99
	93	土師・輪鬼の桃	9F	d75.0, d76.0	B-D2	7.5YR5/6-良	破片	ｹﾞﾘ-B1			HF'-Y5-95
	94	土師・輪鬼の桃	9.28F ｸﾞﾘ	d80.0, d76.0	B-C	5YR7/4-良	破片	ｹﾞﾘ-B1	縄赤切平面	内傾面	HF'-Y5-107
	95	土師・平瓦小面	9.28F ｸﾞﾘ	11E04.R23.R43	B-A	10YR7/3-良好	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	内外黒変有	HF'-Y5-208
	96	土師・平瓦小面	9.28F ｸﾞﾘ	11E02.R25.R53	B-B	7.5YR5/4-良	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-101
	97	土師・平瓦小面	2.25F ｸﾞﾘ	11E6.R22.R46	B-A	10YR6/2-良	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-95
	98	土師・平瓦小面	9.25F ｸﾞﾘ	11E7.R22.R44	B-A	10YR6/3-良	7/8	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面,内面ケズリ ﾅﾃﾞｱﾘ	使用痕無	HF'-Y5-90
	99	土師・平瓦小面	5.25F ｸﾞﾘ	11E6.R18.R40	B-A	10YR6/3-良	3/5	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-104
	100	土師・平瓦小面	9.25F ｸﾞﾘ	11E8.R25.R44	B-A	10YR6/2-良	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-94
	101	土師・平瓦小面	9.25F ｸﾞﾘ	11E2.R21.R42	B-B	10YR7/4-良好	7/8	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	ゆがみ有	HF'-Y5-61
	102	土師・平瓦小面	2.25F ｸﾞﾘ	11E4.R15.R54	B-B	10YR6/4-良	完形	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	ゆがみ有	HF'-Y5-94
	103	土師・平瓦小面	9.25F ｸﾞﾘ	11E08.R17.R53	B-A	10YR6/3-良	略完	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-75
	104	土師・平瓦小面	2.25F ｸﾞﾘ	11E5.R21.R45	B-A	10YR7/4-良好	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-67
	105	土師・平瓦小面	9.25F ｸﾞﾘ	11E5.R18.R40	B-A	10YR6/4-良	完形	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	ゆがみ有	HF'-Y5-70
	106	土師・平瓦小面	9.25F ｸﾞﾘ	11E3.R26.R42	B-A	10YR6/2-良	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-71
	107	土師・平瓦小面	2.25	11E2.R21.R39	B-D2	10YR6/4-良	3/5	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-91
	108	土師・平瓦小面	9.25F ｸﾞﾘ	11E6.R21.R41	B-B	5YR7/6-良	完形	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面		HF'-Y5-72
	109	土師・平瓦小面	9.25F ｸﾞﾘ	11E8.R26.R42	B-B	7.5YR7/8-良	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	内21箇所黒斑有	HF'-Y5-74
	110	土師・平瓦小面	5.25F ｸﾞﾘ	11E6.R27.R55	B-A3	7.5YR7/6-良好	1/3	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	使用痕無,外凸色有	HF'-Y5-102
	111	土師・平瓦小面	2.25F ｸﾞﾘ	11E6.R28.R45	B-A	10YR6/2-良	2/3	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-93
	112	土師・平瓦小面	9.25F ｸﾞﾘ	11E6.R24.R46	B-D2	7.5YR7/6-良	2/3	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-78
	113	土師・平瓦小面	2.25F ｸﾞﾘ	11E6.R28.R43	B-D2	10YR6/2-良	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-96
	114	土師・平瓦小面	9.25F ｸﾞﾘ	11E6.R15.R43	B-D2	10YR6/2-良	2/3	ｹﾞﾘ-B1	縄赤切平面	使用痕無,ゆがみ有	HF'-Y5-105
	115	土師・平瓦小面	2.25F ｸﾞﾘ	11E6.R24.R50	B-D2	10YR6/3-良	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-90
	116	土師・平瓦小面	9.25F ｸﾞﾘ	11E4.R26.R50	B-D2	10YR6/4-良	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-33
	117	土師・輪鬼の小面	9.28F ｸﾞﾘ	11E6.R56.R65, d76.0, d80.0	B-D2	10YR6/4-良	2/3	ｹﾞﾘ-B1	縄ナデ面二		HF'-Y5-176
	118	土師・輪鬼の小面	2.25F ｸﾞﾘ	11E05.R35.R55, d75.0, d76.0,d80.0	B-D2	5YR7/6-良	3/4	ｹﾞﾘ-B1	縄赤切平面ナデ	使用痕無	HF'-Y5-177
	119	土師・輪鬼の小面	2.28F ｸﾞﾘ	d75.0, d76.0	B-D2	7.5YR7/6-良	破片	ｹﾞﾘ-B1	縄ナデ面二		HF'-Y5-178
	120	土師・輪鬼の小面	9.28F ｸﾞﾘ	d75.0, d76.0,d80.0	B-D2	5YR7/6-良	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄ナデ面二	使用痕無	HF'-Y5-171
3区中央2号土器ドット	121	土師・輪鬼の小面	9.28F ｸﾞﾘ	d75.0, d76.0	B-D2	10YR6/2-良	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄ナデ面二		HF'-Y5-174
	122	土師・柱状小面	2.25F ｸﾞﾘ	d64.2	B-A	10YR6/4-良好	破片	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-146
	123	土師・柱状小面	9.28F ｸﾞﾘ	d64.0	B-D	7.5YR7/4-良	破片	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面,外凸黒変有		HF'-Y5-153
	124	土師・柱状小面	9.28F ｸﾞﾘ	d63.6	B-B	7.5YR7/6-良	破片	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面		HF'-Y5-154
	125	土師・柱状小面	6.28F ｸﾞﾘ	d64.4	B-D	10YR6/3-良	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	使用痕無	HF'-Y5-162
	126	土師・柱状小面	9.25F ｸﾞﾘ	d64.6	B-C	10YR5/6-不良	破片	ｹﾞﾘ-B1	縄赤切平面		HF'-Y5-166
	127	土師・輪鬼の桃	9.28F ｸﾞﾘ	11E15.J.R57.R74, d76.0,d80.0	B-A3	7.5YR6/3-良	2/3	ｹﾞﾘ-B1	縄ナデ面二,内傾1ヶ所	使用痕無,内黒痕成	HF'-Y5-182
	128	土師・輪鬼の桃	9.28F ｸﾞﾘ	11E16.J.R55.R75d, d76.0,d80.0	B-A	10YR6/4-不良	2/3	ｹﾞﾘ-B1	縄ナデ面二,内ロクロナデ	使用痕無,内黒痕成	HF'-Y5-184
	129	土師・輪鬼の桃	6.25F ｸﾞﾘ	11E10.J.R45.R75d, d76.0,d80.0	B-A3	7.5YR6/3-良	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄ナデ面二,内ミガキ	使用痕無,内黒痕成	HF'-Y5-196
	130	土師・輪鬼の桃	6.28F ｸﾞﾘ・9.25F ｸﾞﾘ	d66.0, d76.0,d85	B-A	7.5YR6/4-良	1/3	ｹﾞﾘ-B1	縄ナデ面二,内縁ちこ ﾞ ﾐ	使用痕無,内黒痕成	HF'-Y5-192
	131	土師・輪鬼の桃	9.25F ｸﾞﾘ	d67.7, d76.0,d82	B-A	10YR6/3-良	破片	ｹﾞﾘ-B1	縄ナデ面二,内ミガキ	内黒痕成	HF'-Y5-188
	132	土師・輪鬼の桃	9.25F ｸﾞﾘ	d67.2, d76.0,d83	B-A	7.5YR7/3-良	破片	ｹﾞﾘ-B1	縄ナデ面二,内ミガキ	内黒痕成	HF'-Y5-190
	133	土師・輪鬼の桃	9.28F ｸﾞﾘ	11E15.J.R57.R66, d76.0,d80.0	B-D	10YR6/3-良	3/5	ｹﾞﾘ-B1	縄ナデ面二	使用痕無,内黒痕成	HF'-Y5-183
	134	土師・輪鬼の桃	6.25F ｸﾞﾘ	11E13.J.R52.R66, d76.0,d80.0	B-D2	7.5YR6/4-良	1/3	ｹﾞﾘ-B1	縄ナデ面二,内ミガキ	使用痕無,内黒痕成	HF'-Y5-193
	135	土師・輪鬼の桃	9.25F ｸﾞﾘ	d66.4, d76.0,d84	B-D	10YR6/2-良	破片	ｹﾞﾘ-B1	縄ナデ面二,内ロクロナデ	内黒痕成	HF'-Y5-189
	136	土師・柱状桃	9.28F ｸﾞﾘ	11E12.J.R63.R77	B-D	10YR6/4-良	2/4	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面,内ミガキ人全	使用痕無	HF'-Y5-202
	137	土師・柱状桃	9.25F ｸﾞﾘ	d66.6	B-D	7.5YR7/4-良	破片	ｹﾞﾘ-B1	縄赤切平面,内ミガキ人全	使用痕無	HF'-Y5-201
	138	土師・柱状小面	6.28F ｸﾞﾘ	d64.4	B-A	10YR7/3-良好	1/2	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面	内黒痕成,底中央に空洞	HF'-Y5-212
	139	土師・柱状小面	6.28F ｸﾞﾘ	d62.9	B-D2	7.5YR7/6-良	破片	ｹﾞﾘ-B1	縄石赤切平面,内黒痕成	内黒痕成	HF'-Y5-213
	140	土師・鬼頭	2.25F ｸﾞﾘ	11E6	B-A	10YR6/3-良	1/20	電2	ﾋﾟﾗﾐｯﾄﾞ,鼻下多ｽｽﾞﾘ	体部	HF'-Y5-1
	141	土師・鬼頭	9.28F ｸﾞﾘ	11E7.4	B-A	7.5YR7/4-良	口縁部	電2	ﾋﾟﾗﾐｯﾄﾞ	体部	HF'-Y5-1
	142	土師・鍋	6.31F ｸﾞﾘ	11E16, R22.5, R62.0	鬼瓦系	5YR5/4-良好	1/10	ｹﾞﾘ-B1	ﾎﾛｸﾛ,内外黒ｹﾞｱ	体部	HF'-Y5-1
	143	土師・鍋	2.31F ｸﾞﾘ	d64.4	B-D2	5YR5/4-良	破片	ｹﾞﾘ-B2	縄石赤切平面	使用痕無,内黒痕無	HF'-Y5-2
	144	瓦類・石台類	9.27F ｸﾞﾘ・2.24・5.25・9.26	11E3.J	鬼瓦系	2.5YR5/1-暗褐	1/6	電6(2)暗	縄ナデ面二	使用痕無,内面痕黒斑有	HF'-Y5-58
	145	瓦類・石台類	9.25F ｸﾞﾘ	d72.0, d81.0	鬼瓦系	10YR7/1-暗褐	破片	丸石2暗	縄ナデ	内面黒色中,内外赤茶斑有	HF'-Y5-28
	146	瓦類・石台類	9.22F ｸﾞﾘ・5.25F ｸﾞﾘ	d67.7, d81.0	鬼瓦系	10YR7/1-暗褐	破片	丸石2暗	縄ナデ面二	内面黒色,内外赤ﾁｮｺﾚｰﾄ色を ﾂﾞ ﾐ斑	HF'-Y5-64
	147	瓦類・石台類	9.27F ｸﾞﾘ	d64.4, d81.0	鬼瓦系	2.5YR1/1-暗褐	破片	電2(2)暗	縄ナデ面二	内面黒斑成,斑点?	HF'-Y5-63
	148	瓦類・石台類	6.28F ｸﾞﾘ	d64.0, d81.0	鬼瓦系	2.5YR1/1-暗褐	破片	赤瓦1暗	縄赤切平面	内面黒斑成,斑点?	HF'-Y5-65
	149	白磁・碗	9.22・9.23・26・2.32・5.25・32・5.27・30・9.30F ｸﾞﾘ	11E6.R22.5, R62.0	粕色2G7/3-白	1/8	山本B期	山本白磁分類32類, 玉縁B1類	細貫入	HF'-Y5-74	
	150	白磁・碗	9.26F ｸﾞﾘ・2.28F ｸﾞﾘ	–	粕色7.5GY7/1-白	NB/B-良好	13期代	山本B期	山本白磁分類32類, 玉縁B1類	細貫入	HF'-Y5-74
	151	白磁・碗	6.25F ｸﾞﾘ	–	粕色7.5Y7/1-明緑	13期代	山本B期	山本白磁分類32類, 玉縁B1類	貫入少	HF'-Y5-80	
	152	白磁・碗	5.24・9.25F ｸﾞﾘ	11E5.6	粕色5Y8/1-白	2.5YR8/1-白	13期代	山本C期	山本白磁分類32類, 玉縁B1類	細貫入	HF'-Y5-79
	153	白磁・碗	5.25・26F ｸﾞﾘ	11E6.6	粕色5Y7/2-白	NB/B-良好	1/20	山本C期	山本白磁分類32類, 玉縁B1類		HF'-Y5-79
	154	白磁・碗	9.26F ｸﾞﾘ	–	粕色5Y8/2-白	2.5YR8/1-白	13期代	山本C期	山本白磁分類32類, 玉縁B1類	細貫入	HF'-Y5-30
	155	白磁・碗	9.26・2.26・9.23F ｸﾞﾘ	11E5.9	粕色2.5GY7/1-白	N7/0-暗褐	13期代	山本C期	山本白磁分類32類, 玉縁B1類		HF'-Y5-76
	156	白磁・碗	9.28F ｸﾞﾘ	–	粕色2.5GY8/1-白	2.5YR8/1-白	13期代	山本C期	山本白磁分類32類, 玉縁B1類		HF'-Y5-87

付表２　額見町遺跡Ⅴ報告区域出土中世遺物観察表

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・地	残存	時期	調整等	備考	実測番号
区画中世土坑ドマ	157	白磁・碗	中24・25・中24・25ドマ	口16.2	特色2.5Y7/2	3.5/0・無釉	1/15	由本C期	由本白磁分類B1b類、玉縁入口縁		DF 中02-69
	158	白磁・碗	右25ドマ	－	特色7.5Y8/1	3.5/0・無釉	口縁片	由本C期	由本白磁分類B1b類、玉縁入口縁		DF 中02-75
	159	白磁・碗	右25ドマ	－	特色2.5GY7/1	2.5Y8/1・青磁	口縁片	由本C期	由本白磁分類B1類、玉縁口縁		DF 中02-90
	160	白磁・碗	6-25・2-25・9-25・8-25ドマ	口16.0、高推5.35、台7.0、台推0.35	特色10YR/1	2.5Y8/1・青磁	1/4	由本C期	由本白磁分類B1類、底ヘラ引出し	使用痕跡	DF 中02-67
	161	白磁・碗	2-25ドマ・2-24・4-29・9-22・23・25・4・5番ドマ色上	口15.4、高6.0、台6.9、台推0	特色5GY8/1	3.5/0・無釉	1/5	由本C期	由本白磁分類V1類、ケズリ出し底台	使用痕跡	DF 中02-82
区画中世土坑ドマ	162	土師・平底小皿	9-23ドマ	口8.5、底4.8、高1.2	H-A	10YR4/4・平黄	2/3	中-II-1	底右糸切り痕	使用痕跡、ホゾ穴有	DF 中5-1
	163	土師・平底小皿	9-23ドマ	口10.2、底4.2、底5.0	H-A	10YR4/4・浅黄	7/8	中-II-1	底右糸切り痕	使用痕跡、ホゾ穴有	DF 中5-2
	164	土師・平底小皿	9-23ドマ	口9.1、底4.4、底5.1	H-A	10YR4/4・浅黄	略完	中-II-1	底右糸切り痕	使用痕跡、ホゾ穴有、底面に糸切りテンボ粘土付着	DF 中5-3
	165	土師・平底小皿	9-23ドマ	口8.5、底3.2、底4.2	H-A	10YR5/3・浅	略完	中-II-1	底右糸切り痕	使用痕跡、ホゾ穴有、底面に糸切りテンボ粘土付着	DF 中5-4
	166	土師・平底小皿	9-23ドマ	口9.4、底4.8、底4.5	H-A	10YR5/3・浅	完形	中-II-1	底右糸切り痕	使用痕跡、ホゾ穴有	DF 中5-5
	167	土師・平底小皿	9-23ドマ	口9.6、底4.5、底4.2	H-A	10YR5/3・浅	略完	中-II-1	底右糸切り痕	使用痕跡、ホゾ穴有	DF 中5-6
	168	土師・平底小皿	9-23ドマ	口8.6、底3.8、底4.2	H-A	10YR5/3・浅	2/3	中-II-1	底右糸切り痕	使用痕跡、ホゾ穴有	DF 中5-7
	169	土師・平底小皿	9-23ドマ	口8.9、底4.8、底5.1	H-A	10YR5/4・浅	6/7	中-II-1	底右糸切り痕	使用痕跡、ホゾ穴有	DF 中5-7

《額見町遺跡Ⅴ報告区域出土古代・中世遺物観察表凡例》

１．種別・器種について

種別は土器素材の種別、または石製品、鉄、銅等の金属製品の種別を示す。特に土器素材については須恵器と須恵質土器製品と須恵質土器、土師器と土師質土製品を土師、陶器器類については武蔵陶器や緑釉陶器、白磁、青磁などの種別を記した。器種名については、特に土器について、額見町遺跡Ⅱの分類案に基づいて記しているので参照願いたい。

２．法量について

観察表の法量に示す土器等容器類の口径は口縁、受皿受け部径、底は返り径、鉢径は基のつまみ径、底は底部径、台は高台径、脚は脚部径、器は脚基部径、体は体部径、脚は脚部径、脚は脚部径を示し、高は器高、鉢高はつまみ高、立高は口縁部立ち上がり高、底高は返り高、坪高は坪部高、脚高は脚部高、脚高は脚部高、脚高は口脚部高を示す。器でないものについては、長は長軸長、短は短軸長、残長は残存部長、径は最大径、幅は最大幅、上やアは上端径と下端径、孔は孔径、また、特に部位記さずに○×○×○としたものは基本的に長さ×幅×厚さを示す。単位は全てcmとした。

３．胎土について

土器胎土については、古代須恵器、古代土師器、中世土師器については以下に示すようであるが、灰釉陶器については想定される窯場産地を、白磁については特に比較する内容を示せなかったので、胎土を記入せず、施釉の色調について記した。また、石製品は石材を記入し、鉄製品については無記入とした。

（古代須恵器胎土）

須恵器の胎土表記については、須恵器窯産地で表記し、南加倉窯は南加賀窯跡群北部をいい、はりま、二ツ梨などの主産地域の窯場産。南加南群は南加賀窯跡群南群へまり都谷川流域支群産を示す。優美は優美窯跡群産である。特に粉粒や小石、くずなどの含有物の多少のあるものはそれを付記し、砂の少ない良質のものは良と記す。砂粒含有少なく胎土素地がやや砂粒質のものはサラと記した。なお、他地域搬入と予測される胎土のものがあったが、相原周辺窯産の可能性のあるものは角応産、北加賀の金沢末窯跡群産、高松押本窯跡群産の可能性のあるものは末産、高松産とした。

（古代土師器胎土）

土師器は角高内や鬼都辺博の生産が予測される地元産と須恵器窯場内出産が予測される窯場産、上記と異なる他地域産と予測される搬入とに分類、さらに以下に細分する。

地元A１－粘土質胎土で底面がザサッケもの。細砂粒（黒色・褐色・白色）を多量、黒色顕照鉱物を少量含有する。胎色がくすんだ色を呈するものが多い。

地元A２－地元A１の砂粒（白色・褐色）混在多い煮炊具系統胎土。但し混和材的大粒砂粒はない。

地元B１－地元A１に比べ胎土質胎土だが、細砂粒少なく比較的均質な胎土。赤褐色系の鉄鉱物発色多い。

地元B２－地元A１よりも、やや大きめの白色粒や褐色粒多く含む煮炊具胎土。鉱物も含有。

地元C１－底面きれいな粒っぽい胎土のもの。細砂粒含有少なく、淡い黒色から白っぽい発色のものもある。くず石や黒色鉱物、赤色酸化鉄粒を若干含む。微発泡砂の胎土か？

地元C２－地元C１に白色くず石や鉱物粒子などをやや多めに混在させる煮炊具胎土。

地元D　－石英細粒を極めて多く含む砂粒質の胎土素地で、白色粒も含む。

地元E　－特土質胎土素地に大粒の褐色系粒が極多量混在する。製瓶土器系胎土。

窯場A１－細砂粒多量（地元A２より多）混在の底面がザサッケ粒土質胎土で、黒色光る鉱物を含む。総体的に色調は薄い黒色系で南加賀窯産の可能性高い。

窯場A２－窯場A１に白色系砂粒を多量含有する煮炊具胎土。

窯場A３－窯場A２に褐色や赤色の大粒鉱物が多量含有する煮炊具胎土。

窯場B１－細砂粒含有の少ない均質な粒っぽい粘土で、白色系から赤味強い発色、微発泡産と推察できる。

窯場B２－窯場B１に大粒砂粒（褐色・黄褐色・赤色）を混和材として多量入れる煮炊具胎土。

窯場C　－窯場B１に似るが、赤色酸化鉄粒含有し、赤く発色させる良質土。

搬入A１－海綿骨針含むサラサラの砂粒質胎土。砂粒含有少なく、金沢平野等で確認される北系胎土。

搬入A２－搬入A１に褐色や白色の大粒砂粒を含有する製瓶土器胎土。赤く発色するものが多い。

（古代末～中世土師器胎土）

H-A　－細砂粒極多量含有な底面のザサッケ胎土。薄い黒色発色で南加賀系統胎土。なお、小石多量含有のものは特にH-A2。破損はザサッケが、砂粒のII立たない滑肌色呈するものはH-A3とした。

H-B　－A黒系統で類似するが底面がザサッケ弱く、くすんだ赤褐色呈す胎土。小石多少有はH-B2とした。

H-C　－細砂粒混在のない粒っぽい胎土（やや粒子粗い）。海綿骨針を極に含む北加賀系胎土。模倣色を基本とするが、特に白色系のものはH-C2とする。

H-D　－C類に似た粒っぽい胎土だが骨針は含まず、細砂粒を微かに含有する胎土。白色系統の発色を基本とするが、赤味帯びる発色のものがあり、これはH-D2とした。

H-E　－シルト質胎土素地。光る滑明感ある鉱物多量含有。金沢末窯産的？

４．色・焼について

土器の色・発色について（石・鉄は無記入）、色は土器器表面の中で主体を占める色調を、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色彩監修『新版　標準土色帳』1994年版に基づき、その表示方法に従って示した。焼きは土器の焼成具合を、焼締まりの強い順から、堅緻一良好一良一不良の４段階表示で示した。

５．時期について

観察表に示す時期は、田嶋明人氏の古代土器編年編（田嶋明人1988「古代土器編年編の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）』及び田嶋明人1997「加賀地域での10・11世紀土器編年の展望」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』）に基づく編年標記で示す。古代土器は特に古代と記さず、中世土器の太中C期と表記した。なお、当土器群の編年観は、『額見町遺跡Ⅱ』と『額見町遺跡Ⅲ』本書の総括論文に示しているので参照いただきたい。なお、田嶋編年に対する筆者の解年代観については、その年代根拠を『額見町遺跡Ⅱ』と本書総括論文に示したが、三浦由紀恵遺跡群編年区分を付記し、以下の表にまとめた。参照いただきたい。なお、これ以外の灰釉陶器、白磁については、灰釉陶器は東濃窯灰釉陶器編年案（山内伸浩「結語」『白土原４号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会、1994年及び、尾野善裕「東濃窯灰釉陶器編年小考」『瑞阜史学』

鉢
皿
瓶
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
底部
底部
底部
底部
口縁
口縁
口縁
口縁
胴部
胴部
胴部

第Ⅳ章　総　　括

― 三湖台地集落遺跡群の古代後半期土器様相 ―

1．はじめに

筆者は、2007年刊行の『額見町遺跡Ⅱ』の総括において、額見町遺跡の発掘調査資料及びその周辺の古代集落遺跡資料をもとに、「三湖台地集落遺跡群の古代前半期土器様相」と題する考察（以下「前半期考察」という）を行ったが、紙数の都合や検出遺構の偏りの関係から、8世紀中頃までを論述するにとどまった。そのため、本稿では前半期考察の続編として三湖台4期以降の土器様相ついて考察を加えるが、須恵器生産が終焉した以降の10世紀中頃～12世紀前半については『額見町遺跡Ⅲ』総括論稿（望月 2008a）で述べているため、8世紀中頃～10世紀中頃のみを取り上げ、合わせて、前半期考察では触れられなかった、各期の暦年代観と画期観についてもまとめてみたい。

なお、本稿で述べる編年軸については、大筋では田嶋明人氏が1988年に発表した北陸古代土器編年軸（田嶋 1988）に基づいている。ただ、前半期考察でも述べたように、当集落群資料を基軸に据えているため、田嶋編年とは時期区分に若干の差異があり、混乱を避けるため、時期呼称は三湖台○期とした。田嶋編年古代Ⅰ期から古代Ⅵ期までを、三湖台1期から三湖台6期と表記するもので、各期の概要を以下に示す。

1期‥‥5世紀末以来の在来型とも言える伝統的な器種、器形、技法を保有する在来型土師器生産を堅持する段階であり、須恵器食膳具の定着とともに食膳具が増加していく段階。

2期‥‥在来型土師器に、朝鮮半島や近江、丹波などの移民がもたらしたと予想される移民系土師器が加わるとともに、器種組成においても新旧交代の様相が見えてくる、旧来の在来型土師器生産に変質が見られる段階であり、日常食膳具における土師器から須恵器への置き換え、新たな食膳具組成の導入が見られる段階。

3期‥‥移民系煮炊具の在地化とその影響による在来型煮炊具生産の変質、それに付随して生じた土師器生産の須恵器窯場導入がもたらした北陸型煮炊具が成立する段階であり、食膳具における置き食器への移行と宮都型の食膳具様式（律令的土器様式）の導入が見られる段階。

4期‥‥在来型土師器生産の払拭と北陸型古代土器生産体制の確立が見られる段階であり、宮都型の食膳具様式を在地化させ、北陸型の古代食膳具様式を成立させる段階。

5期‥‥北陸型古代食膳具様式が変質するとともに、素材や色において卓越性を表現できる器の組み合わせによって階層性を表現する王朝国家的食膳具様式への傾斜が始まる段階。

6期‥‥王朝国家的食膳具様式を模索する中で須恵器生産の持つ意義が欠落し、須恵器生産は衰退、停止し、それとともに窯場での土師器生産も終焉、4期に確立した基幹的窯場での土器集約生産体制が崩壊する段階。

以上が編年軸の概要だが、各期の中で必要におうじて小期に細分して提示する。また、前半期考察において述べた三湖台4期前半については、その後の検討の中で大きく修正を加えたため、三湖台4期から再論する。

2．各時期の土器様相

（1）4期の土器様相

4期は額見町遺跡内で主要な建物様式が竪穴建物から掘立柱建物へと移行していく段階であるとともに、それまで拡大を続けてきた集落経営に停滞または衰退の様相を見せ始める段階である。この様相は三湖台地集落遺跡群（以下では「三湖台集落群」と呼称する）内全体で見られる傾向ではあるが、木場潟に面する島遺跡では当期の後半にピークを迎えているようで、衰退期というよりも集落が動く時期と評価するのが妥当と考える。

また、当期は3期の中で須恵器窯場内に導入された土師器生産が定着し、須恵器・土師器の集約生産が完成される段階である。つまり、北陸型古代土器生産体制の確立期であり、一都一窯体制の完成期とも称される（望月 1997）。同時に、3期に導入・定着を見た移民系煮炊具や宮都系土師器食膳具は北陸型煮炊具、ロクロ成形の赤彩土師器食膳具として定型化し、さらに3期に導入された宮都で成立の律令的土器様式（西 1986、18－19頁）を在地化させ、北陸型古代食膳具様式と言えるような、食膳具様式と使用形態を在地の中で成立させる。当期前半では一部在地での土師器生産が遺存する傾向を見せるが、後半には須恵器窯場産に統一され、土師器煮炊具の器形、技法を統一させるとともに、土師器食膳具はヘラ切り椀Fから糸切り椀Aへ移行する。

以上が当期概要だが、前半期考察においては当期を４Ａ期～４Ｄ期の４期区分とし、４Ａ期を矢田野向山１号窯Ⅲ次窯に対比させ田嶋編年Ⅲ期新段階に、４Ｂ期を二ツ梨横川１号窯に対比させⅣ１期に、４Ｃ期を箱宮５号窯に対比させⅣ２古期に、４Ｄ期を二ツ梨峠山10Ｂ号窯に対比させⅣ２新期に該当させたが、今回資料再検討した結果、前半期とした４Ａ・Ｂ期については、須恵器窯資料では矢田野向山１号窯Ⅲ次窯→二ツ梨一貫山４号窯→二ツ梨横川１号窯の時期変遷が確認されるものの、観見町遺跡資料で見る限り、共伴する土師器食膳具、煮炊具においては土器様相の明確な変化を見出しにくく、型式を画すまでには至らないという結論に達し、１時期にまとめることとした。また、４Ｄ期とした古代Ⅳ２新期についても、画期評価の点からⅣ２古期とⅣ２新期との境で期を分けるのが妥当と判断し、５期に下げることとした。つまり、三潟台４期は南加賀窯跡群Ⅲ期新段階～Ⅳ１期に併行させて４Ａ期、南加賀窯跡群Ⅳ２古期に併行させて４Ｂ期を設定し、２時期区分とした。

a．４Ａ期（第105図）

４Ａ期は、３Ｄ期の上級遺跡に先駆的に導入された律令的土器様式が生産の場に浸透し、在地化された食膳具様式として成立することを編年指標とする。標識資料としては、須恵器は SK55 と SK385 を中心に、土師器食膳具は SI09 と SI86 を中心に、土師器煮炊具は SI09 と SK10 を中心に、複数遺構から該当資料を抽出して作り上げた。よって、一括性を問えるものではなく、南加賀窯跡群Ⅲ期新段階～Ⅳ１期と幅をもって設定する。

須恵器は南加賀窯産で占められ、３期まで定量を占めた能美窯産は確認できない。以降、４Ｂ期までその様相は続き、５期に入ると能美窯産が再び見られるようになる。食膳具は３法量分化した坏Ｂと１法量の坏Ａではほぼ構成され、当期に定量生産される盤類の出土は極めて少ない。窯資料では、出現期の矢田野向山１号窯Ⅲ次窯こそ、盤Ａ４％、盤Ｂ１％と少ないが、Ⅳ１期古段階の二ツ梨一貫山４号窯では盤Ａ23％、盤Ｂ５％、Ⅳ１期新段階の二ツ梨横川１号窯では盤Ａ25％、盤Ｂ11％と、盤類の定着が看取される。つまり、当期の盤類の定着は、一般集落への供給を前提としたものではなく、上級遺跡における盤類消費を支えるものとして位置付けされた可能性がある。それを示すように、当期の公的性格を持つ加賀市篠原遺跡では須恵器食膳具中、盤Ａ23％、盤Ｂ５％と（11号土坑の図示点数測合、石川埋文1987）、窯資料の比率に近い。また、３Ｄ期に新器種導入された深身坏Ｂにおいても上級遺跡への供給が主であった可能性がある。観見町遺跡の当期の須恵器食膳具の大半が坏Ａと扁平器形中法量の坏Ｂで占められている状況は、それを物語るであろうし、坏Ｂの法量分化自体が、官都での階層性に基づく食膳具様式の模倣という点で、一般集落における日常食膳具には本来必要とされなかった可能性があろう。つまり、消費の場においては、３Ｄ期の上下二極分化した食膳具様式が依然として継承されていたことを示すが、一方で新たな仏教系器種の生産が開始される段階でもある。水瓶や仏鉢の他、獣足付容器など特殊な容器類の出土が当期から始まっている。当期に出現する初期仏堂 SB302 に関連して登場するもので（望月 2009）、灰皿形の専用灯明具や灯明具に転用された油煙痕付坏Ａ（10・11）の出土がこれ以降目立つようになる。新たな須恵器の使用形態を示すものであり、当集落において「村寺」が成立する重要な画期点でもある。

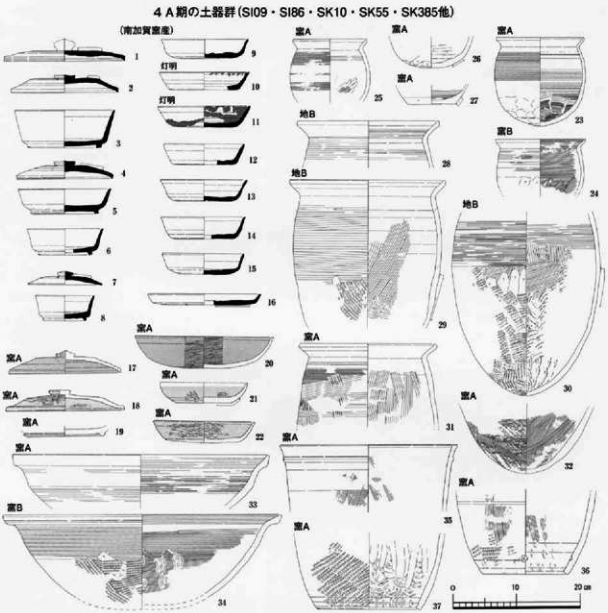
土師器食膳具においては、一部の特殊なものを除いて赤彩土師器に統一される段階である。南加賀窯産と思われる窯場産Ａ類に統一される様相を持ち、器種では３Ｃ期に出現した坏Ｂ、坏Ａなどの須恵器系器種が目立つ。椀では底部ヘラ切りの椀Ｆが依然として主流で、従来の通常法量に20の大型扁平器形が加わるが、新たに底部糸切り椀Ａ（21）が出現する。法量は通常の小型のみで、底部厚手で扁平器形を呈し、底面ケズリ調整を施す。椀Ａは次の４Ｂ期には椀類の主流となって増産される器種であり、４期成立の画期要素の一つに上げられる。

第104図　矢田野向山１号窯Ⅲ次窯出土須恵器

土師器煮炊具は須恵器成形技法によるものに統一されるが、長胴釜の胴部内外面に在来型のハケ目調整併用が多く、短胴小釜では底部を丸底に仕上げる傾向が強いなど、在来型の成形技法、調整技法の残存が見られるが、全体的な器形や口縁部の作りは北陸型煮炊具と言える定型的なものとなっており、加えて27の底部糸切り痕を残し平底のまま仕上げる

短胴小釜の出現は、当期の画期要素の一つに数え得る。土師器煮炊具産地は窯場A類とした南加賀窯産が主体を占める。一部地元B類胎土が長胴釜に見られるが、それも当期までで、次の4B期には窯場産に統一される。

以上、4A期を4期成立の画期に置いたが、それは2期、3期の中で作られてきた土器様式を、地域の中での古代土器生産へ組み込みを図る中で、北陸型と言える土器様式と北陸特有の土器生産体制を形成する点にある。具体的には須恵器食膳具における在地化された坏盤組成と法量分化、赤彩椀Aの出現、定型的北陸型煮炊具の成立などがあげられるが、そこには須恵器窯場での土師器集約生産の本格化が背景としてある。また、当期は三湖台集落群の中で、竪穴建物から掘立柱建物へ建物様式が転換するとともに、拡大を続けてきた集落が移動や停滞へと向かう転換期にあたる。これは当集落群が従前担ってきた政治的意図による移民集落としての性格に終止符が打たれ、新たな形での古代集落経営に基づく再編が試みられたことを示すだろう。それを象徴するものの一つに、当期の仏堂的建物の出現がある。村寺の役割は、それまで民衆に根付いていた在地神祇信仰や共同体意識を解体し、在地権力者が民衆の個別支配を可能とする新たな在地社会秩序を形成する目的があったと評価でき（望月 2009）、まさに当期が村寺を核として、新たな支配体系に基づく社会に組み込まれていったことを示すだろう。



第105図　三湖台4A期の土器群（S＝1／6）

b．４Ｂ期（第 106 図上）

４Ｂ期は４Ａ期に見られた北陸型古代食膳具様式や北陸型煮炊具が普及、定着し、北陸型古代土器生産体制が貫徹されることを編年指標とする。7 世紀前半以来進められてきた古代土器様式整備の到達点と位置付けられる。

標識資料としては、SI105 と SK408 をあげるが、土師器食膳具は SK218、須恵器食膳具は SK284、SK409 を補足資料として使用した。南加賀窯跡群Ⅳ２古期に位置付けられ、近年の標識窯では二ツ梨一貫山 12 号窯を、土師器焼成坑資料としては、二ツ梨一貫山２号・６号・20 号焼成坑をあてる。

須恵器食膳具では主要坏類が４Ａ期よりも若干小型化し、蓋の鈕形態が擬宝珠形に変化する程度だが、組成の中で盤類の定量存在が大きな要素だろう。良好な一括資料がないため量比は定かではないが、一般集落の日常食膳具に盤類が少量ながらも加わってくる段階と評価でき、それは当期の窯跡資料における盤Ａ 25%、盤Ｂ 13%という占有率に現れていると言える（二ツ梨一貫山 12 号窯、小松市 2002）。盤Ｂ占有率がピークに達する段階であり、これまでの日常食膳具における、ほぼ１法量の扁平な坏Ａと坏Ｂで構成されてきた単純組成に変化をもたらす。当期も須恵器は南加賀窯産で占められ、能美窯跡群の須恵器生産が停滞状況にあることを物語る。

土師器食膳具は、４Ａ期に顕在化した坏盤器種が減少し、椀類でほぼ占められる。椀は従前の主体器種だった椀Ｆが激減し、４Ａ期に出現した椀Ａに主体を移す。４Ａ期以来の底径大きな扁平器形（13）と底径が小型化して椀形を呈する器形（12）とが存在し、後者の器形がこれ以降の主流となる。当期は赤彩土師器椀Ａの量産化とともに、全体的な遺跡出土量が増す段階で、産地はほぼ南加賀窯産に統一される。

土師器煮炊具は、窯場産に統一される。地元産は見られず、当期には煮炊具生産も窯場へほぼ集約された可能性が高い。各種器形は完成された北陸型を呈し、短胴小釜も当期には底部平底へほぼ統一された可能性がある。甑も来技法を併用しないものが主流となって、４Ａ期に定型化の様相を呈した北陸型煮炊具から、さらに在来型技法が払拭され、北陸型煮炊具の完成期を迎える。これは同時に北陸型古代土器生産体制の確立を示すものであり、赤彩土師器食膳具増産体制とともに、２期以降、土師器生産の須恵器窯場集約化の方向で進んできた古代的土器生産体制がその貫徹をもって完成期を迎えたものと評価できる。

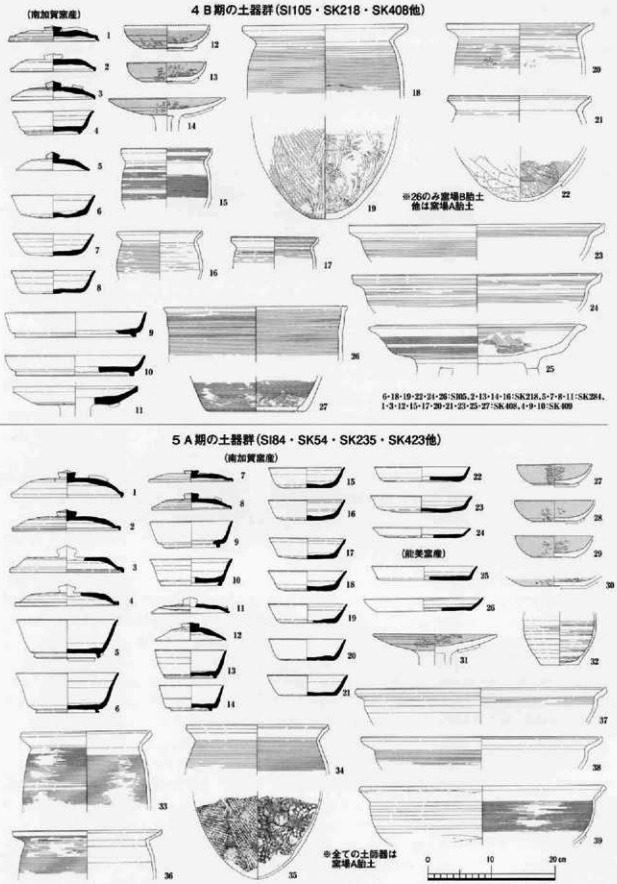
なお、三湖台集落群としては、４Ａ期以来、集落の停滞期が続いている。額見町遺跡の中で当期に位置づけられる建物は少なく、集落としては転換期にあたっている。４Ａ期に出現した「村寺」は継続して営まれるようだが、それによる集落の活性化、再編成の様相は見て取れない。

（2）５期の土器様相

三湖台５期は田嶋編年古代Ⅳ２新期からＶ２期に併行する。田嶋明人氏はＶ期成立をもって、古代土器様式後半期成立の重要な画期に位置付けており、その画期要素として、Ⅳ期が生産面からの画期であるのに対し、Ｖ期は消費面での画期と位置付けた（田嶋 1989、193 頁）。需要側での食器に対する指向性が有蓋食器から無蓋食器へ変化したことが重要とし、具体的には坏志向から椀志向への変化、そしてそこには中国製陶磁器を模倣する瓷器系食器の出現が根底にあると位置付けられた。瓷器系食器は北陸では専ら内黒土師器において導入され、それが土師器生産への傾斜と須恵器生産の縮小を招き、一都一窯体制の崩壊を生んだと理解されている。

このようなＶ期の画期要素は、北加賀、または能登、越中等の北陸東部で先行導入され、南加賀や越前へと波及してくるが、Ｖ期以降の変化の様相は地域によって偏りがあり、足並みが揃わない。南加賀窯跡群の場合、内黒土師器生産自体がＶ期は本格始動しておらず、土師器生産ではまだⅣ期の延長線上にある。加えて須恵器生産重点型の生産体制をⅥ期まで継続させ、北陸型古代土器生産体制の変質、崩壊の兆候は、まだ見られない。つまり、田嶋編年で示した画期要素をそのまま南加賀窯跡群のＶ期にあてはめることは困難で、Ⅵ期にその変化が表面化してくる。ただ、需要側での食器に対する指向性の変化を見た場合、南加賀窯跡群のＶ１期に顕在化する猿投窯跡群の原始灰釉陶器を志向した白色堅緻焼成（胎土選択と降下釉堅緻焼成）の優品須恵器生産は注目される。

上記の変化は、能美窯跡群ではⅣ２新期の和気小しょうぶ谷２号窯（望月 2005a）で既に出現しており、同様の現象が会津の大戸窯跡群においても見られるなど（望月 2008b、191 － 192 頁）、この時期に原始灰釉陶器を志向する須恵器窯が成立してきた可能性がある。このような優品須恵器を志向する意識は、７世紀後半から金属器を志向する生産の中で見えているが、それが猿投窯跡群を起点とする原始灰釉陶器模倣的な方向性で現れることは重視してよく、そこを基点にＶ期の変革様相が辿れることを評価し、Ⅳ２新期をもって新たな消費者指向に



第106図　三湖台４Ｂ期・５Ａ期の土器群（Ｓ＝１／６）

基づく土器様式が形成される画期とした。それは須恵器のみの素材ではなく、他の素材や色において卓越性を表現できる器の組み合わせによって階層性を表現する土器様式、つまり宇野隆夫氏が提唱される王朝国家的土器様式（宇野1991、265頁）が生み出される端緒となる時期と評価する。なお、編年区分としては、田嶋編年Ⅳ2新期を三湖台5Ａ期に、Ⅴ1期を三湖台5Ｂ期、Ⅴ2期を三湖台5Ｃ期に位置付け、以下に述べる。

a．５Ａ期（第106図下）

５Ａ期は、４期に定着、確立された北陸型古代食膳具様式が早々に崩れ、新たな消費者指向に基づく食膳具様式への傾斜を始まることを編年指標とする。それは器の種類と法量により分化した食膳具を複数組み合わせることで、階層性を表現した律令的土器様式から脱却することであり、他の素材（模倣品も含む）や色において卓越性を表現できる器の組み合わせによって階層性を表現する食膳具様式へと変化していく。顕在化するのは５Ｂ期だが、当期はそれが導入される端緒となる白色堅緻焼成の優品須恵器の登場が編年の指標となる。

標識資料としては、須恵器食膳具ではSK54とSK423、土師器食膳具ではSK235、土師器煮炊具ではSI84を中心として抽出、構成してある。南加賀窯跡群Ⅳ2新期に対比でき、基準窯資料では南加賀窯跡群二ツ梨峠山10Ｂ号窯（近年では二ツ梨一貫山10・11号窯、なお本書で基準窯にあげる二ツ梨一貫山窯資料は全て小松市2002による）を、能美窯跡群では和気小しょうぶ谷2号窯（辰口町2005、以下能美窯は同書による）をあげる。

須恵器は大半を南加賀窯産が占めるが、盤Ａに限り能美窯産が確認される。当期の能美窯産須恵器は、良質の胎土で白色堅緻焼成する特徴を持ち、作り、調整ともシャープである。南加賀窯産に比して優品の価値付けがなされていた可能性が高く、これはそのような優品須恵器を求める価値観、須恵器への消費者指向の変化に基づくものだったろう。このような優品須恵器生産への意識は、南加賀窯跡群ではまだ顕在化しないが、能美窯跡群では大型の金属器系鉢、球胴形長頸瓶、東海系双耳坏等の生産や、貯蔵具寸用焼台の使用、白色粘土を選択使用した優品須恵器生産などが、当期に始まっており、北陸地域の中では他の窯場に先駆けて導入される（望月2005a、2008b）。３期から４期までほとんど供給されていなかった能美窯産須恵器が５期に突如として三湖台集落群内に持ち込まれるのは、このような要因に基づくと理解する。能美窯跡群が和気東側丘陵地区へ窯場を移動し、活発な生産を行う背景には、そのような需要者側の意識の変化と需要の高まりに対応したものだろう。

当期の須恵器食膳具の特徴としては、盤類の増加と坏Ｂの大・小法量の増加があげられる。坏Ｂの法量分化については、既に３Ｄ期に先駆的に導入され、４Ａ期には３法量分化に整理されるとともに一般窯にも波及していくが、一般集落の日常食器の中に大、小法量の坏Ｂが主体的に存在するようになるのは当期であり、それとともに中法量の扁平坏Ｂも深身を志向してくる。これに伴い、坏Ａもやや深身となり、体部外傾化していく。盤Ａの体部も外傾傾向を見せ、５Ｂ期に明確となる椀形志向の新型薄手食膳具への方向性が当期から示され始める。

土師器食膳具は、赤彩土師器に統一されており、いずれも南加賀窯産と思われる窯場Ａ類で占められる。組成は４Ｂ期同様、高坏と椀Ａが確認され、破片だが坏盤器種も少数ながら供給されている。椀Ａは４Ｂ期から口径の縮小と椀形化が進行し、底径大きく扁平器形を呈するものは減少する。また、大型法量の椀Ａも定量存在し、法量分化が明確化する。なお、土師器煮炊具も、食膳具同様、窯場Ａ類産で占められる。４Ｂ期から目立った器形や器種構成などの変化はないが、全体的に薄手になり、口縁部端の摘みあげが目立つようになる。

三湖台集落群の様相としては、４期からの変化は読み取れない。額見町遺跡においては依然として集落の停滞期が続いており、竪穴建物も少数だが、当期までは確認される。集落としてはやはり４期に変革期があり、５期はその流れの中で位置付けられるべきだろう。

b．５Ｂ期（第108図上）

５Ｂ期は５Ａ期に変革の兆候を見せた、新たな食膳具への指向性が顕在化し、地方の中に官都で先駆的に導入された新たな食膳具様式を取り入れていくことを編年指標とする。具体的には初期施釉陶器の導入や施釉陶器模倣器種生産、宮都の黒色土器Ａ類の影響を受けたであろう内黒土師器の出現があげられる。南加賀では内黒土師器を当期は導入してないが、須恵器による瓷器系器種模倣や白色堅緻焼成の優品須恵器の顕在化が指標となろう。

標識資料としては、SK116とSK285をあげる。南加賀窯跡群Ⅴ1期に対比でき、編年基準資料では南加賀窯跡群では戸津5号窯を（石川県1979）、能美窯跡群では和気後山谷1号窯をあげる。

須恵器食膳具の各器種に能美窯産が定量を占める段階である。SK116では図化した26点中5点が、SK285では図化した17点中6点が能美窯産で、器種は坏Ｂ、坏Ａ、盤Ａ、盤Ｂと偏りがない。能美窯産の特徴は砂粒を

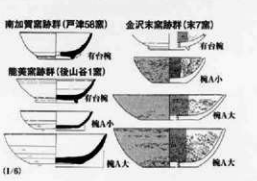
含まない緻密な白色粘土で、可塑性に優れる粘土性質のため小型製品の成形に適し、薄くシャープな作りをすることが特徴と言える。焼き上がりが（灰）白色を呈し、焼結がよく、意識的に自然釉が掛かるような優品須恵器の生産も行われる。粘土の質は異なるが類似した白色堅緻焼成（表面化粧土による？）を目指す須恵器生産が、当期の南加賀窯跡群でも見られ、貯蔵具専用焼台の導入や大型の金属器系鋺、東海系器種の生産開始など、５Ａ期に先行導入された能美窯跡群の須恵器生産変革の波が南加賀窯跡群へ波及する。同時期に、能登や越前の窯場でも類似した様相が看取できており、南加賀地域の窯場を核に北陸各地へ先進的技術として波及したのだろう（望月 2008b）。越後や出羽、会津においても、様相差はあるが、猿投窯跡群を基点とする同様の現象がみられ、東日本の須恵器生産が当期に目指したひとつの方向性であったと理解したい。そのような特性を有する能美窯産須恵器を当期に積極的に集落内に取り入れることは、灰釉陶器に近い質感を持つ優品須恵器を求める消費者指向に基づくものであり、瓷器系志向の一つの在り方であったと理解したい。

須恵器食膳具の器形特徴としては、大きな底径有す扁平器形が衰退し、総体的に体部外傾化が進行していく。坏Ｂは扁平器形を当期まで一部残すが、相対的に数量を減らし、深身で椀形を呈す器形が定型化され、それが基本形となる。法量も大が半数近くを占め、中法量が５Ａ期に比して激減し、大きくは大小２法量の様相を呈すようになる。食膳具の主体は坏Ａと盤Ａで、当期までは盤Ｂも目立つ。体部外傾器形を基本とし、底部を薄く作る傾向がこれ以降進行して、須恵器食膳具終焉への道を歩み始める。また、特殊器種として28の金属器系の大型鋺に伴う天井部突帯を巡らす特徴的な蓋が、当期に顕在化する。鉦には仏器的な装飾を伴うものもあり、８世紀後半の稜鋺に代わる器種として登場する。なお、当期に出現する小型有台椀は重要である。当集落資料では確認できていないが、南加賀窯跡群、能美窯跡群いずれの窯場でも当期から生産が確認される。赤彩土師器椀Ａ模倣の須恵器椀Ａが４Ｂ期から定量存在しているが、それとは異なる系譜を持つもので、底面ケズリ調整後に小さな方形高台を付し、口縁部下に弱い稜を作る特徴を持つ点から、当器種を施釉陶器写しの瓷器系器種と位置付ける。内黒土師器においても、この時期に瓷器写しの有台椀が金沢末窯跡群で生産開始されており、同様の性格を持つものと理解したい。北加賀では土師器で瓷器写しを導入したのに対し、南加賀では須恵器でそれを行う点は地域的な特徴と理解する。なお、これは蛇足だが、当資料で共伴する南加賀窯産須恵器と能美窯産須恵器を比較すると、坏Ｂ身の器形と坏Ａの器形が、南加賀窯産に比して能美窯産が底径大きく、全体的に扁平器形を呈することに気付く。加えて南加賀窯産の坏Ｂ蓋小法量がその出現期から口縁部端を折り曲げない器形を保持するのに対し、能美窯産は22に見るように口縁部折り曲げ器形を呈するなど、窯ごとの個性が目立つ。

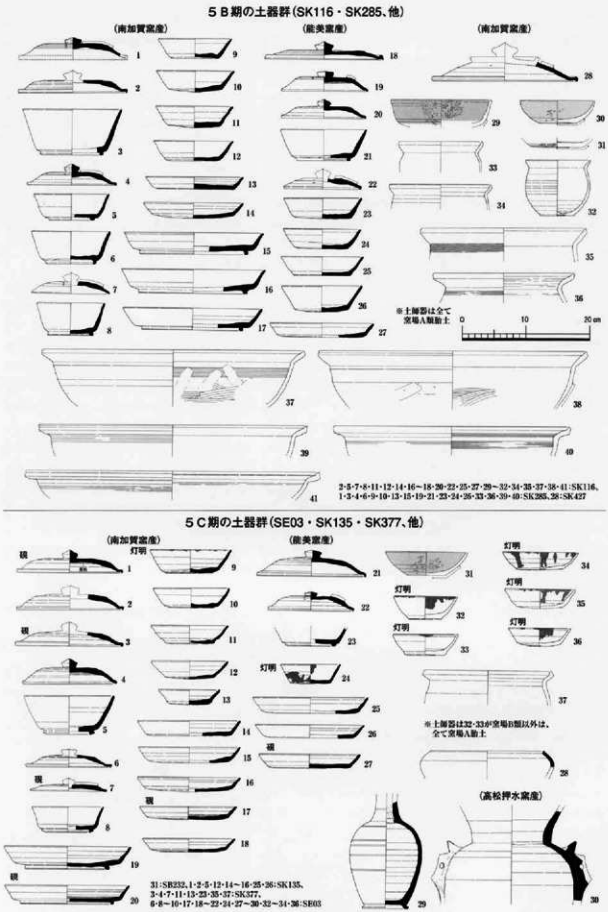
土師器食膳具は南加賀では内黒土師器の導入はまだなく、赤彩土師器のみで構成される。器種は椀Ａ主体だが、依然として坏盤類も少量生産される。椀Ａは扁平タイプが消え、底径小さな椀形志向の器形にほぼ統一、大型法量も数は少ないが存続する。先述したが、金沢末窯跡群では当期に内黒土師器生産が開始されている。外面赤彩を施す精製品的価値のもので、各種法量のものが存在するが、平底椀については、器形、法量、内外ミガキ調整技法ともに赤彩土師器椀Ａと共通する。ほぼ同時期、能登以東に同様の内黒土師器椀Ａが出現しており、長岡京での黒色土器Ａ類出現の影響を受け、赤彩土師器に内黒焼成技術が取り入れられたものだろう。内黒焼成はもともと在地に存在する技法であり、需要者側の求めに応じ、宮都の上級食器を真似て、赤彩土師器の内側を黒く焼いたものと理解したい。これに対し内黒有台椀は赤彩土師器に存在する器種ではなく、当初は赤彩を施さないなど、赤彩土師器系統とは考え難く、小型方形高台の作りなど、前述の須恵器と同様、瓷器写しの器種と理解する。

土師器煮炊具は５Ａ期から、外面カキ目調整の頻度の減少や薄く引き延ばし成形するものが出現してくるなどの変化が見られる程度で、大きな変化は読み取れない。土師器産地は全て窯場Ａ類胎土で、須恵器とともに土師器が能美窯跡群から供給されることはない。この点も能美窯産須恵器が単に生産拡大に伴って、三渕台集落群へ須恵器供給されたわけではないことを示すだろう。

以上、当期の南加賀での土師器様相を見ると、４期から継承されるものが多いが、それは生産の場でも確認される。つまり、南加賀窯跡群二ツ梨一貴山支群の様相を見る限り、土



第107図　５Ｂ期の瓷器系有台椀と赤彩系椀Ａ



第108図　三湖台5B期・5C期の土器群（S＝1／6）

師器焼成坑群経営はⅣ１期からⅤ２期まで継続して営まれるものが多く、Ⅵ期に移動するケースが多い。つまり、内黒土師器生産導入までは同様の生産体制であった言える。生産経営と消費の場での変化は必ずしも一致するものではないが、須恵器生産を軸に保守的な土器生産体制を維持することが南加賀地域の土器様相に強く反映されているものと言えよう。

なお、三湖台集落群の動向としては、当期も大きな変化は見られない。４Ａ期に初期仏堂として成立したSB302は、大型仏堂の四面廂付掘立柱建物SB259として、当期に建て替えられた可能性が高いが、仏教系遺物として最も多く出土する転用灯明具は、次の５Ｃ期に位置付けられるものが多く、当期はあまり目立たない。

ｃ．５Ｃ期（第108図下）

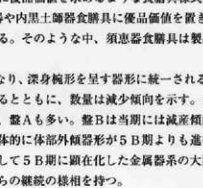
５Ｃ期は白色堅緻焼成の優品須恵器生産を維持する点、深身で椀形を志向する坏Ｂ、薄手化と体部外傾化の方向性を示した坏Ａや盤類がその系統で器形変化していく点で、５Ｂ期に顕在化した諸要素を継承しながらそれを進行させる段階と評する。５Ｂ期とを分ける編年指標としては、坏Ｂ中小法量と盤Ｂの減産、坏整体部の外傾化と薄手化、そして南加賀では確認されないが、金沢末窯跡群では瓷器系有台皿を内黒土師器食膳具で生産開始する点があげられる。大きな転換は次の６期にあり、消費者指向が無蓋食膳具、椀皿類へと強く傾斜していく。

標識資料としては、SE03、SK135、SK377をあげる。南加賀窯跡群Ｖ２期に対比でき、編年基準資料では南加賀窯跡群の戸津29号窯または二ツ梨一貫山３号窯古相資料群が、能美窯跡群では和気白石窯が該当する。

須恵器食膳具では５Ｂ期同様に、能美窯産が定量を占める段階である。図示した須恵器食膳具の割合では、SE03で12点中３点、SK135で11点中２点、SK377で９点中２点の能美窯産を確認できており、依然として２～３割を占めている。ただ、５Ｂ期に比べると、能美窯産は減少傾向にあり、次の６期にはほぼ姿を消すなど、当期までが能美窯産須恵器の優品性を主張した段階と位置付けられる。南加賀窯跡群、能美窯跡群では白色堅緻焼成を目指す須恵器生産は当期をもって終えており、そのような須恵器に優品価値を求めるような食膳具様式は６期へは継承されなかったと言えよう。他の材質の土器食膳具、施釉陶器や内黒土師器食膳具に優品価値を置き、それと須恵器を組み合わせることにより階層性を表現するものへ変化する。そのような中、須恵器食膳具は製品の質を低下させ、器種淘汰と雑器化の道を歩んでいくのである。

須恵器食膳具器種組成としては、坏Ｂの扁平器形がほぼ確認できなくなり、深身椀形を呈す器形に統一される。法量は大が過半数を占め、中法量と小法量が一体化し、大小２法量となるとともに、数量は減少傾向を示す。当期の主要器種は坏Ａと盤Ａである。特に坏Ａは食膳具の半数近くを占め、盤Ａも多い。盤Ｂは当期には減産傾向にあるが、当資料は仏教関連遺構という性格からか、比較的目立つ。全体的に体部外傾器形が５Ｂ期よりも進行し、全体的に薄手となって、坏Ｂ高台も華奢になってくる。特殊器種として５Ｂ期に顕在化した金属器系の大型鏡は当期も継続して生産が行われ、東海系器種生産とともに、５Ｂ期からの継続の様相を持つ。

土師器食膳具は赤彩土師器で占められる。南加賀でも内黒土師器生産が一部坏類に導入されるが（二ツ梨グミノキバラ窯）、特殊なものであり、外面赤彩の内黒土師器椀皿生産は南加賀窯跡群、能美窯跡群ともに基本的に導入されていない。土師器食膳具の量は５Ｂ期同様に少なく、４期から続く赤彩土師器の延長線上にある。ただ、31の椀Ａ器形を見ると、小型の底部から体部開いて立ち上がる器形へと変化しており、当期の金沢末窯跡群生産の外面赤彩内黒土師器椀Ａの器形に類似する。金沢では当期に北陸各地に先駆けて瓷器系有台皿を導入する。５Ｂ期以来の瓷器系有台椀も形を崩しながら存続しており、瓷器系椀皿が増加する。当期に位置付けられる能美窯跡群和気白石窯でも瓷器系有台椀が増加しており、６期に始まる定型化された皿Ｂ、椀Ｂ増加、普及の端緒となる。当遺跡では、以上の赤彩土師器に加えて、赤彩を施さない土師器食膳具（32～26）が確認される。底部ヘラ切りの須恵器系小型坏や坏Ａで、いずれも灯明痕をもち、仏教用具として使用されている。これらは仏教施設の周辺やそれに伴う大型井戸SE03から出土しており、専用の仏教用具として特別に生産されたものであろう。なお、図示した仏鉢や水瓶など



第109図　５Ｃ期の瓷器系椀皿と赤彩系椀Ａ

も同様に、この仏教施設に伴う特殊品である。

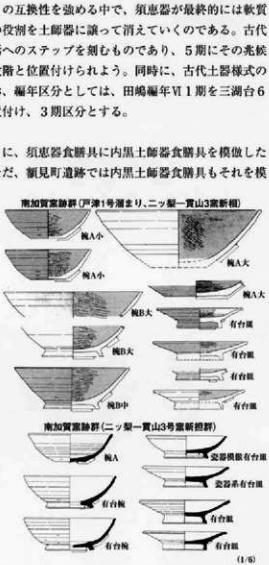
集落様相としては、５Ｂ期頃に建て替えられたと思われる大型仏堂建物のSB259とそれに併設して南面に建築される「社」的建物、そしてそれら建物に付随する大型井戸SE03が存在し、その周辺で、灯明具や墨書土器、転用硯が多く出土する。当期に位置付けられる土器も多く、額見町遺跡が三湖台集落群の中で、中核的な信仰の場として機能した段階と評価される。ある意味で４期集落動向の到達点であった可能性もあるが、このような信仰に関連する遺構や遺物が多い割に、当期に位置付けられる掘立柱建物は多くはない。このことについて明確な答えを出す資料を有していないが、４期になって、新たな在地社会秩序のもとでの集落経営を模索する中、台地経営の集落としてはその性格上、衰退の道をたどらざるを得なかった可能性があるだろう。

（３）６期の土器様相

三湖台６期は田嶋編年Ⅵ１期～Ⅵ３期に対比できる。この６期の中で北陸各地の須恵器生産は停止し、それとともに窯場での土師器生産も終焉、４期に確立した基幹的窯場での土器集約生産体制は崩壊する。つまり、一郡一窯体制、北陸型古代土器生産体制の崩壊であり、５世紀末から続いてきた古代窯業が終焉を迎える重要な画期である。６期の土器様相は５期に金沢末窯跡群に先行導入された内黒土師器生産が南加賀にも導入され、それを模倣するようにしてⅢＢと椀Ａ・Ｂが須恵器器種として生産が開始されることが５期とを分ける編年指標である。坏盤類から椀皿類への転換であり、６期の中で段階的に、有蓋器種の減産や坏盤類の退化・消滅、そして椀皿類への器種淘汰と進み、須恵器食膳具の質の低下と土師器との互換性を強める中で、須恵器が最終的には軟質焼成されることで、須恵器食膳具のもつ意義はなくなり、その役割を土師器に譲って消えていくのである。古代食膳具の基軸であり、その象徴であった須恵器が段階的に終焉へのステップを刻むものであり、５期にその兆候として現れた王朝国家的食膳具様式への傾斜が明確化される段階と位置付けられよう。同時に、古代土器様式の終焉を意味し、一気に中世的土器様式へと傾斜していく。なお、編年区分としては、田嶋編年Ⅵ１期を三湖台６Ａ期に、Ⅵ２期を三湖台６Ｂ期、Ⅵ３期を三湖台６Ｃ期に位置付け、３期区分とする。

ａ．６Ａ期（第111図上）

６Ａ期は、南加賀において内黒土師器生産が開始するとともに、須恵器食膳具に内黒土師器食膳具を模倣したようなⅢＢや椀Ａ・Ｂが導入されることを編年指標とする。ただ、額見町遺跡では内黒土師器食膳具もそれを模倣した須恵器も確認することはできず、伝統的な坏盤類の須恵器食膳具のみで占められる。消費地において土師器食膳具が定量を占める北加賀とは様相が異なっており、北陸の中で食膳具構成に偏差が目立つ段階である。



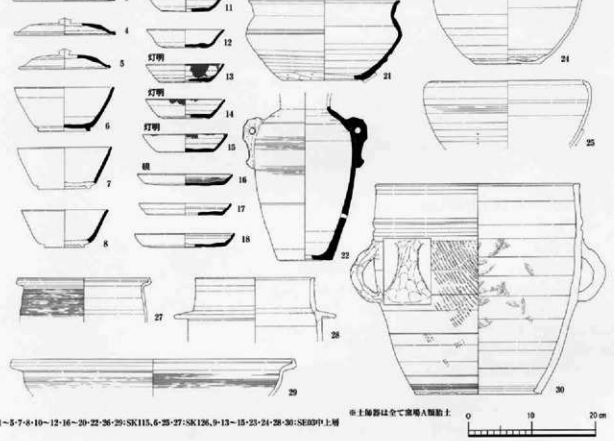
第110図　６Ａ期の内黒土師器と須恵器の椀皿

標識資料はSK115を中心に、SK126とSE03中上層の土師器で補完、構成してある。南加賀窯跡群Ⅵ１期に対比でき、編年基準資料では南加賀窯跡群の戸津31号窯、二ツ梨一貫山３号窯新相資料をあげる。能美窯跡群では和気支群での須恵器生産が終焉しており、当段階には著しく生産規模を縮小し、丘陵部奥へ窯場を移動する。

須恵器は５期に顕在化した能美窯産須恵器がほぼ消滅し、南加賀窯産で占められる。19・20は能美窯産だが、器形から５Ｃ期の位置付けも可能であり、器種が盤類のみであることも注目される。能美窯産須恵器の減少は、能美窯跡群の生産規模縮小に基づくものだが、能美窯跡群の和気地区での終焉自体が須恵器に優品の価値を求めなくなった現れであり、それとともに南加賀窯産須恵器にもそのような白色堅緻焼成の優品意識は欠落していく。当期の須恵器食膳具の特徴としては、坏Ｂ小法量の減少に基づく大法量への淘汰傾向、盤Ｂの消滅が上げられる。また、当資料

では確認できていないが、坏B蓋の無鈕化がなされる段階で（二ツ梨一貫山３号窯新相群で確認）、６B期には無鈕蓋へ統一される。食膳具組成の中心は坏Aと盤Aである。５C期に一部見られた薄手で体部外傾する器形がより進行してそれへ淘汰される。また、窯場資料だが、新器種として瓷器系有台皿が導入されることは当期の重要な画期要素である。前代より続く赤彩系椀Aと瓷器系有台椀も存在するが、瓷器系有台皿の量は多く、口縁部外反タイプは施釉陶器模倣と言える優品である。有台椀も依然として精製品として作られており、坏盤類に比べて椀皿器種は優品意識が高い器種である。

土師器食膳具は、当資料では23の灯明具使用の坏Aが存在するのみで、当期に南加賀窯跡群で生産が開始される内黒土師器食膳具は組成の中に加わってこない。南加賀地域の集落遺跡では依然として、須恵器食膳具でほぼ構成される段階であり、北加賀とは様相が異なる。内黒土師器食膳具の生産開始とともに、赤彩土師器生産は行われなくなっており、赤彩土師器椀Aは同系統の器形の中で内黒化するとともに外面ミガキ調整を省略する。また、瓷器系の有台皿と有台椀が出現するが、有台皿が同時期の須恵器器形に似ているのに対し、有台椀は椀A



第111図　三湖台６A期・６B期の土器群（S＝１／６）

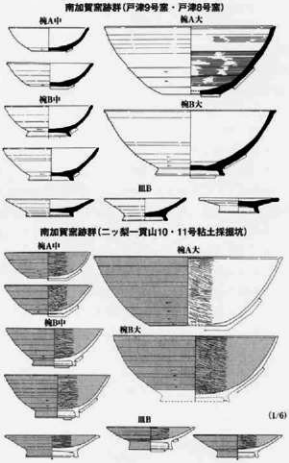
を有台化した器形で、須恵器の瓷器系有台椀とは異なる。椀A同様、法量分化が見られ、椀Bと位置付けできる。これをもって内黒土師器食膳具の基本器種は成立し、6C期の椀皿統一へ歩み始める。

土師器煮炊具としては、5C期からの薄手化と口縁部の顕著な挽き出しによるS字状化が始まる。胴部のカキ目調整は衰退し、胎土は砂礫を混和させるものが見られなくなって、砂気の多い胎土が使われる。当期の特徴的な器種に羽釜と大型の甑、そして平底の仏鉢が上げられる。ほぼ出土がSE03やその周辺土坑に限られており、大型仏堂に関連するものだが、南加賀窯跡群二ツ梨一貫山窯跡でもこの時期から6B期にかけて生産が確認されているので、当期を特徴付ける器種と位置付けられる可能性を持つ。

三湖台集落群の様相としては、5期から明らかに衰退傾向を強める。これ以降7期まで集落は最も落ち込んでおり、それは総体的な土器出土量に現れている。SE03の仏教行為に基づく出土品があるため、信仰拠点としてその活動が維持されていたものと理解されるが、集落動向としては、建物数は減少し、古代集落の終焉へ向かっていたと評されよう。

b．6B期（第111図下）

6B期は坏盤器種が食膳具組成の主体を占めた最後の段階である。6A期に導入された須恵器有台皿は在地化され、瓷器模倣器種としてではなく、在地化された皿Bとして組成の中に定着し、有台椀も6A期の内黒土師器椀Bのような法量分化を行い、瓷器系模倣から在地化された椀B器種として定着してくる。主体を占める坏盤器種は作りや器形を退化させ、坏B蓋の無鈕化と坏B小の無台化、盤Bの消滅などが当期の編年指標となる。



第112図　6B期の須恵器椀皿と内黒土師器椀皿

標識資料はSK177をあげる。当期のまとまった資料は乏しく、次の6C期と合わせて三湖台集落群が最も衰退する時期と言える。南加賀窯跡群Ⅵ2期に対比でき、編年基準資料では南加賀窯跡群戸津9号窯をあげるが、当期は須恵器窯編年から戸津11号窯（古段階）→戸津9号窯（中段階）→戸津8号窯（新段階）→戸津35号窯（新段階）の細分が可能である（望月1992、2004）。南加賀窯跡群は当期に再興が図られ、生産増へと向かい、次のⅥ3期まで活発な生産が行われる。そのような時期に南加賀窯跡群、南加賀製鉄遺跡群の工人集落としての性格付けが可能であった当集落群が衰退するのは矛盾するが、そこには、当再興が加賀国府の設置と加賀国分寺の成立に基づいていることと関連しよう。南加賀窯跡群の経営が再興とともに郡主導の経営から国衙主導の経営に代わった可能性があり、それに伴って三湖台集落群とは切り離された経営へ移行したものと考えたい。

須恵器、土師器ともに南加賀窯産で占められる段階で、食膳具は6A期同様、須恵器主体で構成される。生産地では本来内黒土師器食膳具生産が本格化し、土師器焼成坑を群集経営する様相が見られるため、消費地への供給拡大がなされるはずだが、専ら上級遺跡や寺院関連の遺跡への供給が主で（梯川中流域の国府周辺集落や浄水寺などの山林寺院では須恵器食膳具に拮抗する量の内黒土師器食膳具が出土する）、一般集落への食膳具供給は須恵器が主体であったのだろう。

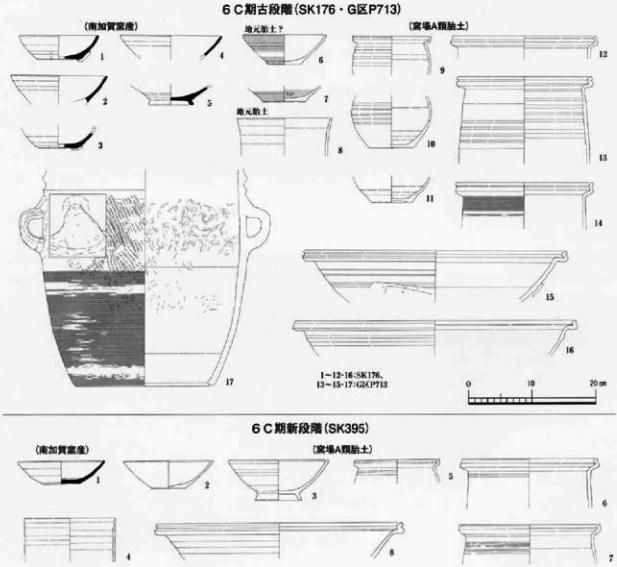
第113図　6B期の須恵器坏盤と平安京Ⅱ中期の土師器椀皿

当期の須恵器食膳具は、椀皿類の定着を一つの特徴とするが、依然として坏盤器種が主体でることに変わりはなく、須恵器窯での組成比率でも坏A５割、坏B２割、盤A 15%といった状況である（望月1992）。ただ、皿Bが１割と定着することは注目され、椀皿器種を求める消費の場が増えたことを意味しよう。しかしながら、三湖台集落群の様相を見ると、須恵器皿Bの出土は極めて少なく、内黒土師器食膳具と同様、これらの器種は限られた消費の場への供給で、一般集落での日常食器においては依然、坏盤類主体の食膳具構成であったと言えよう。また、当期の特徴としては、坏B蓋の無鈕化への統一、坏B身小法量の無台化の他、坏Bの椀形化の進行、坏A、盤Aの極度の薄手化が上げられる。体部外頓した浅い器形をなし、第113図のように、宮都の非ロクロ成形土師器椀皿に近い器形を志向していく。

土師器食膳具は当資料では提示できないが、内黒土師器は全て外面赤彩を施すものに依然統一されている段階で、内面に丁寧なミガキ調整を施す。器種は椀A・B、皿Bで構成され、皿Bは１法量だが、椀類は中法量を基点に小と大に多様な法量分化をする。特に大法量には大型鉢状製品が存在し、金属器的器種も確認される。なお、土師器煮炊具については６A期から薄手化の進行と口縁部挽き延ばしの進行のみで、大きな変化は見られない。

c．６C期（第114図）

６C期は須恵器食膳具の椀皿器種への統一と土師器食膳具の増加を編年指標とする。北陸各地の須恵器生産は既に６B期で衰退、終焉の様相を見せていたが、南加賀窯跡群などの国単位の中核窯でも須恵器生産の終焉を迎える。それとともに、窯場での土師器生産も解体され、平野部の集落近郊へ土師器生産が分散していく。つまり、当期をもって北陸型古代土器生産体制が崩壊するものであり、７世紀以来の須恵器を軸とする古代的土器様式が



第114図　三湖台６C期の土器群（S＝１／６）

終焉する。このような土師器生産分散化の動きは７期に本格化するものだが、額見町遺跡では既に当期にその兆候が現れている。当期の標識資料としてあげたSK176では土師器煮炊具や内黒土師器とともに、８のような匣鉢状土師製品が砕片で多量出土している。いずれも被熱痕や焼け弾けの見られるもので、土師器焼成に伴う窯道具と見られる。当窯道具は内黒土師器食膳具を合わせ口で重ね焼きする際に使用される道具で、南加賀窯跡群特有のものである。つまり、南加賀窯跡群で土師器生産を行っていた土師器工人が当集落で土師器生産を行ったことを示すものであり、額見町遺跡では７A期まで同様の焼成方法で内黒土師器生産が行われる（望月 2008a）。

６C期は南加賀窯跡群Ⅵ３期に対比できるが、南加賀窯跡群では豊富な窯資料から、当期を戸津 37 号窯（古）→戸津 61 号窯（中）→二ツ梨豆岡向山７号窯（新）の３期細分している（望月 2004）。椀皿の器形が底部、高台部径縮小し、体部外傾化のしていくもので、標識資料としてあげたSK173は椀A器形と底部ケズリ調整から古段階に位置付けられるものである。内黒土師器椀Aを伴うが、量的には依然として須恵器が主体であり、外面赤彩を施すことを基本とする。なお、G区P713もほぼ同時期に位置付けられるもので、ここでは煮炊具がまとまって廃棄されていた。薄手で、口縁部の挽き出しとS字状屈曲が明瞭となることを特徴としている。

以上の古段階に対し、新段階の標識資料としてSK395をあげる。内黒焼成しない土師器椀皿が定量伴う段階で、須恵器椀皿と器形、法量とも同様で、互換性を持つ。６期は急速な須恵器品質の低下が進行するが、焼成が甘くなることもその一つであり、そこから赤彩、内黒しない土師器椀皿生産へと進むことは、製品コスト削減の究極の在り方であったと言えよう。器形変化としては、須恵器椀皿の底部小型化と体部外傾化、そしてやや足高の椀Bが存在することも特徴の一つである。土師器煮炊具の口縁部のS字状屈曲は上から潰れたような器形に変化し、長胴釜の胴部はまっすぐ立つ器形となる。内黒土師器食膳具の確認はないが、当期は依然として外面赤彩を施すことを基本とする段階で、７期の外面赤彩を施さない内黒土師器食膳具とは技術的に異なっている。

３．各期の暦年代観と画期の設定と評価

（１）各期の暦年代観について

ここでは、三湖台１期から６期までの暦年代観について述べておきたい。なお、三湖台４期については直接的な文字資料、三湖台６期については官都と対比可能な瓦資料が存在するので、それらを使用し、在地での暦年代観を示すことが可能だが、その他の時期については暦年代根拠を示せる資料がない。このため、官都編年の援用に拠って暦年代観を示す以外に方法はなく、当該期の須恵器特徴を陶邑窯跡群編年（以下「陶邑窯」とする）または官都の土器組成等に当てはめ、そこから官都での暦年代観をスライドさせて年代考察を試みたい。

まず、三湖台１期だが、１A期は田嶋古墳様式の終末期、１B期は田嶋古代編年Ⅰ１期古段階、１C期はⅠ１期新段階に位置付け、１A期から１B期へは坏Hの成形技法が大型底円盤ケズリ技法から丸底成形技法へ転換したこと、また、１B期から１C期へは坏Hの小型化と定型的な鏡の登場を編年指標としている。これを陶邑窯編年とすり合わせすると、１A期は陶邑窯 TK43 型式、１B期は陶邑窯 TK209 型式に対比でき、１C期はそれに後続する陶邑窯狭山池北堤窯下層灰層に対比できる（古代の土器 1998、192 － 195 頁、199 頁、279 － 281 頁）。暦年代根拠資料を持つ官都編年に照らし合わせれば、588 年に造営が開始される飛鳥寺の整地土中土器群が陶邑窯 TK43 型式に位置付けられること、７世紀初頭に没した押坂彦人大兄の墓とされる牧野古墳出土須恵器が陶邑窯 TK209 型式に位置付けられること、645 年焼失の蘇我邸造営地とされる甘樫丘東麓焼土層中土器群が陶邑窯狭山池北堤窯下層灰層に近いこと、そして狭山池北堤窯の狭山池の木樋の年輪年代が 616 年というデータがあることから（佐藤 2007、315 頁及び菱田 2007、19 － 28 頁を参考）、これらを概ねスライドさせ、１A期を６世紀 4/4 期、１B期を７世紀 1/4 期、１C期を７世紀 2/4 期頃に位置付けたい。

第 115 図　那谷金比羅山窯の刻書平瓶

三湖台２期は、２Ａ期を坏Ｈの最小径化と坏Ｇの出現に、２Ｂ期を坏Ｈの衰退と坏Ｇの坏Ａ化に編年指標を置く。田嶋編年のⅠ２期とⅡ１期に対比でき、これを陶邑窯編年とすり合わせると、２Ａ期は陶邑窯 TG68 号窯、２Ｂ期は陶邑窯 TK217 号窯に対比可能である（古代の土器 1998、238 － 239 頁、200 － 201 頁）。暦年代根拠資料を持つ宮都編年に照らし合わせれば、660 年～ 667 年に存在したとされる中大兄皇子の水落遺跡漏刻遺構周辺出土土器が陶邑窯 TK217 号窯に位置付けられる（佐藤 2007、315 頁を参考）。また、地元資料としては、２Ａ期に位置付け可能な南加賀窯跡群鄂谷金比羅山８号窯出土の平瓶に「与野評……」という評名刻書した資料がある（石川稚文 1985）。全国的な立評は孝徳朝期（645 ～ 654）に行われたとされており、水落漏刻遺構の年代観ともあわせ、三湖台２Ａ期を７世紀中頃に、２Ｂ期を７世紀 3/4 期頃に位置付けたい。

第 116 図　天平二年銘墨書須恵器と窯資料

三湖台３期は、３Ａ期を定型的な坏Ｂ・坏Ａの出現と法量分化の導入、３Ｂ期を坏Ｇ的器種の欠落と坏Ａ・Ｂの定着、３Ｃ期を有蓋坏Ａの消滅と坏Ｂの中法量への統一化と主体化、３Ｄ期を坏身器形の扁平化と坏Ａの増加、そして一部上級遺跡に導入される深身の坏Ｂや盤類を加えた多様な法量分化に基づく食膳具組成の導入においている。田嶋編年のⅡ１期末～Ⅱ２期古相とⅡ２期、Ⅱ３期、Ⅲ期古段階に対比できるもので、これを陶邑窯編年とすり合わせると、３Ａ期は陶邑窯 TK46 型式に、３Ｂ期は陶邑窯 TK48 型式に、３Ｃ期は陶邑窯 KM226 号窯に、３Ｄ期は陶邑窯 KM302 号窯に対比可能である（古代の土器 1998、206 頁、213 頁、274 頁、和泉市 1998）。暦年代根拠資料を持つ宮都編年に照らし合わせれば、藤原宮遷都時期（694 年）の直前時期を示すとされる藤原宮 SD1901 Ａ資料が TK48 型式に位置付けられること、平城宮遷都（710 年）の際に埋め立たとされる下ツ道西遺跡 SD1900 Ａ資料が KM226 号窯に近い点、長屋王家邸宅遺跡 SD4750 で出土した紀年銘木簡（716 年）共伴資料または平城京左京一条三坊十五坪 SD485 で出土の紀年銘木簡（728・729 年）共伴資料が KM302 号窯に近い点などから（佐藤 2007、315 頁及び菱田 2007、19 － 28 頁を参考）、その暦年代観をスライドさせて、三湖台３Ａ期を７世紀 4/4 期頃に、３Ｂ期を７世紀末頃に、３Ｃ期を８世紀初頭頃に、３Ｄ期を８世紀初頭を除いた前葉頃から一部 2/4 期に位置付けたい。

三湖台４Ａ期は、南加賀窯跡群Ⅲ期新段階からⅣ１期に位置付けられるが、その段階の文字資料として上げられるのが、金沢市畝田西遺跡群出土の天平二年（750 年）の紀年銘墨書がある南加賀窯産須恵器坏Ａである。器形や法量から、二ツ梨一貫山４号窯のものに近く、Ⅳ１期古段階に位置付け可能と判断する。紀年銘をそのまま年代観と見れば、三湖台４Ａ期は８世紀中頃を前後する時期に位置付けられることとなり、３Ｄ期の年代観とも齟齬がない。三湖台４Ｂ期についてはそれに後続させて８世紀 3/4 期に位置付けておくのが妥当だろう。

三湖台５期は、白色堅緻焼成の須恵器が出現する５Ａ期に始まり、５Ｂ期の内黒土師器導入と施釉陶器模倣と思われる有台椀の出現、そして５Ｃ期には施釉陶器模倣器種の定着と集落への施釉陶器搬入という展開を見せる。白色堅緻焼成が５期変革の端緒となっているが、本格化するのは５Ｂ期であり、施釉陶器模倣器種の出現も当期に見られ、それは猿投窯跡群で導入される原始灰釉陶器生産などの優品須恵器生産に影響を受けての現象と見ている。このような原始灰釉陶器と言える胎土精選と意識的な降下釉焼成を食膳具に本格導入するのは、黒笹７号窯段階とされており（古代の土器 2001、22 － 27 頁）、この窯では白磁写しとされる有台碗が生産されている。これが後の灰釉陶器生産へ繋がったものと見られており、黒笹７号窯は長岡京期（784 ～ 794 年）併行と位置付けがなされている。また、長岡京跡の出土土器を見ると、その新相段階には組成の中に定量の黒色土器Ａ類が加わるようになっており、この様相も三湖台５Ｂ期の赤彩土師器の内黒土師器化に繋がるものと言える。つまり、５Ｂ期を概ね長岡京期の後半から後続する平安京Ⅰ期中に併行させ、８世紀末から９世紀初頭と考えておきたい。これに先行する三湖台５Ａ期については８世紀 4/4 期に位置づけ、猿投窯跡群で瓶類に優品生産意識が顕在化する折戸 10 号窯に併行する時期としたい。次の三湖台５Ｃ期は平安京遷都後、平安京Ⅰ期新に対比されるものと考えている。５Ｃ期の施釉陶器模倣器種の定着は、猿投窯跡群における施釉陶器生産の本格化に対応した動きと見ており、そしてこの頃には初期施釉陶器が出土してくる。平安京Ⅰ期新の暦年代観については、810 年から 840 年とされており（平尾 1990、103 頁を参考）、９世紀前葉段階に位置付けておきたい。

三湖台６期の暦年代観については、南加賀窯跡群で生産される須恵質相輪セットや軒先瓦の瓦当文様系譜年代、

そして国分寺設置と修復記事の年代等から以前に考察したことがある（望月 2005b）。詳しくは当考察を参照いただきたいが、Ⅵ１期については、標識窯とした戸津31号窯から出土する須恵質塔相輪セットを加賀国分寺転用（841）に伴う整備に関連するものと位置付け、９世紀中頃をあてた。Ⅵ２期については、Ⅵ２期古段階に生産されたと予想する平安京系複弁四葉蓮華文軒丸瓦とＣ字対称形均整唐草文軒平瓦の瓦当文様を平安京での瓦当文様変遷に当てはめ、当窯資料の文様退化傾向などから、平安京蘭林坊、豊楽院の軒先瓦セットに対比可能と考え、９世紀後葉頃とした。この９世紀後葉段階をもって国分寺転用に伴う伽藍整備用瓦生産は終り、Ⅵ３期には修復瓦の生産が行われている。Ⅵ３期古段階に生産された複弁四葉蓮華文軒丸瓦はⅥ２期古段階に比べて複弁が離れていく傾向から、仁和寺南院円堂（創建904年）のものに類似しているが、形が崩れており、若干の後出と見て、10世紀前葉から2/4期と見ている。Ⅵ３期新段階にも同じ瓦范のものは生産されているが、新たな文様の軒平瓦が加わり、また同時期に生産されたと推察される高尾廃寺に葺かれる単弁八葉蓮華文軒先瓦（複弁八葉蓮華文軒先瓦の単弁化したもの）から、平安宮等の同系文様変遷の中に当てはめ、10世紀中頃の年代観を与えている。以上の瓦文様系譜より、６Ａ期を９世紀中頃、６Ｂ期を９世紀後葉から10世紀初頭、６Ｃ期を10世紀前葉から中頃までの暦年代観を与えた。

（2）画期設定と評価

三湖台集落群出土土器編年は、本論の冒頭でも述べたように、土器様式の変化のみならず、三湖台集落群の集落経営動向、丘陵部手工業生産動向も視野に入れた、複合的な要素で組み立てており、その中で画期をどこに置くかを考えている。以下では、各画期要素を整理し、画期区分において修正があれば付け加えておきたい。

１期成立の画期について、本編年では三湖台集落群成立という視点から設定している。１Ａ期から１Ｃ期まで主体となる食膳具組成や煮炊具組成に変化はなく、土器様相としてひと括りできるものとして包括した。ただ、南加賀窯跡群の窯場移動や新たな須恵器窯構造導入、丘陵部での砂鉄製錬の開始は次の１Ｂ期からであり、三湖台集落群の本格的な経営も１Ｂ期から始まる。そういう視点から言えば、１Ｂ期が古代型集落経営、古代型手工業生産経営の成立期であり、１Ａ期はその先駆として当台地に集落設置されたものとみるのが正しい。その意味で１Ａ期を三湖台集落群の成立の前段集落と位置付け、１Ａ期を０期に設定したい。１Ｂ期は古代型集落経営、古代型手工業生産経営開始の画期であり、それは田嶋編年のⅠ１期成立に対応する。

２期、３期は、古墳時代的な伝統的土器様式から宮都型の律令的土器様式へと段階的に整備されていった時期であり、その端緒を２期の成立に、本格的な土器組成の導入を３期の成立に置くことで当期の段階的な画期を評価した。具体的には２期は日常食膳具における土師器から須恵器への置き換え、それまでの坏Ｅ主体組成から坏Ｇ主体組成への転換など、伝統的な土器様式から脱却し、３期に成立する新たな土器様式を模索する段階と位置付ける。３期は２期に成立した坏Ｇが坏Ａへ変化し、坏Ｂの出現と法量分化の導入、そして宮都系土師器食膳具を模倣して成立したロクロ成形の赤彩土師器食膳具など、宮都で成立した律令的土器様式とその使用形態を模倣し、宮都型の土器様式を地域に作り出していく段階で、律令的土器様式導入期という位置付けが可能である。

また、土師器煮炊具においても在来型土師器煮炊具から北陸型土師器煮炊具が成立するまでの段階的な画期が設定できる。つまり、２期では在来型技法による煮炊具に朝鮮系を主体とした移民系煮炊具の技法が導入される段階、３期では朝鮮系煮炊具が在地化し、窯場生産への導入とともに北陸型煮炊具の原型ができ上がる段階で、３期の終わりをもって古代前半型の土器様式はほぼ整備されたと言える。このような土器様式の段階的な画期は、三湖台集落群経営、丘陵部手工業生産においても確認される。つまり、２期に三湖台集落群の中で先行成立した集落が終焉する一方で、新たな集落が成立し、集落内での本格的な精錬、鍛冶、同様に丘陵部でも製鉄が本格稼動する。３期には壁支柱竪穴建物という新たな建物様式の導入とともに新たな移民の加入によって集落の拡大が図られ、３Ｃ期から３Ｄ期に古代前半型集落のピーク、そして丘陵部手工業生産も同時にピークを迎えている。これは中央主導のもと施策的に行われてきた三湖台集落群経営と丘陵部手工業生産が、この時期に結実したものであり、土器様式の変化と付随するのは、両者が中央主導で行われた施策的なものであったからであろう。

このような三湖台地集落群経営と丘陵部手工業生産においてピークを迎えた３期末から、４期には額見町遺跡での集落停滞、また新たに拡大する集落も存在するようで、三湖台集落群の移動期、転換期に位置付けられる。それを象徴する存在として古代「村寺」の出現があり、従前の集落経営の在り方から新たな組織編成を試みた時

期であったと位置付ける。丘陵部手工業生産においては、製鉄の状況に大きな変化は見られないものの、須恵器窯場においては土師器生産が本格導入され、須恵器と土師器の窯場集約生産が完成する。土師器量産化に対応するため、土師器焼成坑を群集経営し、それに伴うかのように須恵器窯も同一丘陵斜面に並列築窯の集約生産の様相を色濃くする。土師器生産の窯場への集約は、北陸型煮炊具の完成を促し、同時に赤彩土師器食膳具の普及と、須恵器食膳具における宮都模倣の律令的土器様式を在地化するという形で、地域に定着を図った。これは２・３期土器様式を地域型に変質させることで北陸型とも言える土器様式を確立したものと言え、同時に北陸各地に地域差を顕在化させていく。２・３期の宮都型模倣から地域型へという段階であり、在地化されたと言うより意味で、完成期であるとも捉えられるが、また同時に地域型の成立は中央の求心力低下、中央統制の強緩を意味しており、そこに５・６期に変質していく素地が内包されているとも言える。

５期以降の三湖台集落群は停滞、衰退状態が続き、７期まで大きな変化はないため、土器様式とその生産動向により画期設定しているが、５期成立の画期については白色堅緻焼成という優品須恵器生産に置いている。根底は猿投窯跡群を頂点とする優品須恵器生産を志向する動きにあり、官都における猿投窯産須恵器の積極的な需要、優品須恵器を求める消費者の食膳具に対する意識変化がある。宮都で発現した優品意識は８世紀末～９世紀初頭に施釉陶器や漆器、黒色土器などを加えて、多様な素材による食膳具様式を成立させていくが、５Ｂ期の変化はそれに対応した動きであり、北陸にも内黒土師器生産の導入、施釉陶器模倣が行われ、４期に成立した北陸型古代食膳具様式の変質、そして平安後期に成立する王朝国家の食膳具様式への傾斜が始まる。

このように、５期は４期までに見られた古代前半型の土器様式から王朝国家的土器様式へと傾斜していく古代後半型の土器様式への変革期という位置付けができるが、６期の土器様式はそれをより具現化したものであり、６Ａ期の南加賀窯跡群における内黒土師器生産の導入が端緒となる。同時に須恵器における優品意識の欠落、須恵器生産における量産化と低コスト化という経営戦略を明確にしていく。その結果が６Ｃ期の椀皿への淘汰であり、焼成と生産において土師器化していくことで、須恵器生産の持つ意味は急速に薄れ、基幹的窯場での須恵器生産の減産、停止へと向かい、６期をもって北陸各地の須恵器生産が終焉する。

以上、画期要素を述べたが、１期は摂古朝の画期、２期・３期は孝徳朝、天武朝の画期、４期は聖武朝の画期、５期は桓武朝の画期と、奇しくも政治上の変動期に重なる。土器様式の変化は直接的に中央施政から影響を受けて変わっていくものではないが、政治的変動の波またはそれを生み出す兆候が、地方政治や儀礼様式に影響を与え、地方の土器様式に何らかの形で映し出されたものと見るべきだろう。詳細は稿をあらため、再考したい。

引用文献

石川県教育委員会　1979『戸津５号窯』

石川県立埋蔵文化財センター　1985『昭和59年度県営は場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』

石川県立埋蔵文化財センター　1987『猫原遺跡』

石川県埋蔵文化財センター　2006『金沢市紺田西遺跡群Ⅴ』

和泉市教育委員会　1998『ＫＭ302号窯跡発掘調査報告書』

宇野隆夫　1991『律令社会の考古学的研究―北陸を舞台として―』桂書房

金沢市教育委員会　1989『金沢市末窯跡群』

金沢市教育委員会　2001『金沢市末窯跡群Ⅱ』

古代の土器研究会　1993『古代の土師２　都城の土器集成Ⅱ』

古代の土器研究会　1998『古代の土師５－２　７世紀の土器（近畿西部編）』

古代の土器研究会　2001『古代土器研究４』

小松市教育委員会　1991『戸津古窯跡群Ⅰ』

小松市教育委員会　1992『戸津古窯跡群Ⅱ』

小松市教育委員会　2002『二ツ梨一貫山窯跡』

小森俊寛　2005『京から出土する土器の編年的研究―日本律令的土器様式の成立と展開、７～19世紀―』京都編集工房

佐藤　隆　2007『７・８世紀須恵器編年の再構築と都城出土資料の様相』『大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館2005年度　共同研究成果報告書』

田嶋明人　1988『古代土器編年軸の設定』『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』北陸古代土器研究会

田嶋明人　1989『加賀・能登の古代土器生産』『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会

辰口町教育委員会　2005『和気後山谷窯跡群』

西　弘海　1986『土器様式の成立とその背景』『土器様式の成立とその背景』真陽社

菱田哲郎　2007『古代日本　国家形成の考古学』京都大学学術出版会

平尾政幸　1990『平安前期の土器』『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所

望月精司　1990『矢田野向山１号窯跡の土器様相』『二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡』小松市教育委員会

望月精司　1992『須恵器のまとめ』『戸津古窯跡群Ⅱ』小松市教育委員会

望月精司　1997『北陸における古代土器生産体制の変質と展開』『北陸古代土器研究』第６号　北陸古代土器研究会

望月精司　2004『９～10世紀における南加賀窯跡群の須恵器・土師器・瓦』金沢大学考古学研究室検討会資料

望月精司　2005a『能美窯跡群の８世紀後半～９世紀中頃の須恵器編年と窯場動向』『和気後山谷窯跡群』辰口町教育委員会

望月精司　2005b『南加賀窯跡群の平安期新先足に関する編年的考察』『小松市内遺跡発掘調査報告書１（二ツ梨豆岡向山窯跡・鍬山遺跡）』小松市教育委員会

望月精司　2008a『南加賀地域の平安後期土器群に関する編年的考察』『猫見町遺跡Ⅱ』小松市教育委員会

望月精司　2008b『須恵器窯専用焼台に関する考察―北陸の貯蔵具専用焼台の導入と展開、系譜を中心として―』『白門考古論叢』Ⅱ　中央考古会・中央大学考古学研究会

望月精司　2009『猫見町遺跡の古代『村寺』に関する考察』『猫見町遺跡Ⅳ』小松市教育委員会

挿図出典一覧

第104図：望月1990より転載。第107図：辰口町2005、小松市1991、金沢市2001を合成作図。第109図：辰口町2005、金沢市1989を合成作図。第110図：小松市1991、2002を合成作図。第112図：小松市1992、2002を合成作図。第113図：小松市1992、古代の土器1993を合成作図。第115図：石川埋文1985より転載。第116図：石川埋文2006、小松市2002を合成作図。その他は筆者作図。

第Ⅴ章　自然科学分析報告

― 額見町遺跡の自然科学分析 ―

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．はじめに

額見町遺跡（石川県小松市額見町に所在）は、加賀平野南部、小松・江沼平野（経済企画庁総合開発局，1974）の柴山潟南部に面する段丘上に位置する。本遺跡周辺の地形地質は、紺野（1988）を参考にすると、ほぼ直線的な海岸線沿いに小松砂丘が分布し、加賀平野南東部側に中部更新統の堆積物からなる丘陵地が、加賀市片山津地区・橋立などに海岸段丘が分布し、砂丘と丘陵地に挟まれた潟堆積平野にその名残として柴山潟・木場潟などが存在する。これまでの発掘調査により、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・鍛冶炉跡などが検出されており、7世紀から12世紀まで続く集落遺跡であることが明らかにされている。

今回は、当時の採取されていた貝類の種類を知るために貝類同定、燃料材の種類を調べるために植物珪酸体分析・炭化材同定、須恵器の内容物を検討するために植物珪酸体分析・微細物分析・土壌理化学分析（リン・炭素分析）、土坑内への遺体埋納について検討するために土壌理化学分析（リン・炭素分析）を実施する。なお、貝類同定は早稲田大学の金子浩昌先生にお願いし、結果を署名原稿として掲載する。

2．試料

試料は、資料1～7である（表1）。資料1は、A区SK12で出土した貝類である。全て水洗いされた状態である。SK12は小土坑で、土器出土はなく、時期の特定はできないが、7世紀～10世紀と推定される。周辺で貝類を産出する土坑がなく、単独で存在する。また、本遺跡南側に位置する念仏林南遺跡の21号土坑から採取された貝類（資料1b）を比較試料として同定する。

資料2は、H区SK404から採取された炭化材混じりの灰層である。SK404は、鍛冶に使用する木炭を生成するための遺構と考えられており、遺物は8世紀と12世紀のものが出土し、時期の特定はできない。遺構覆土が1層～6層まで分層され、この内の4層についてB区・C区の2ヶ所から試料が採取された。この内、B区から採取された試料について植物珪酸体分析を実施する。また、樹種同定は、B区・C区から採取された土壌試料中から各5点、合計10点を抽出した。

資料3は、H区SK425で検出された須恵器瓶D（Ⅴ報告第31図）内の土壌である。SK425では、須恵器瓶Dと土師器長胴釜、浅鍋が完形に近い形で出土し、時期的には8世紀後葉と推定されている。須恵器瓶D（Ⅴ報告第80図99）は、頸部から上が欠損するが、胴部が完形であった。

資料4は、お38Gr土器溜まりのほぼ中央で検出された須恵器瓶D（Ⅱ報告第93図）内の土壌である。本来、浅い土坑内に須恵器と土師器が疎らに廃棄されたと考えられている。須恵器瓶D（Ⅱ報告第156図8）は、頸部から上が欠損するが、胴部が完形であり、時期的に9世紀中頃と推定されている。

表1　分析試料の一覧

番号	遺跡名	区	地点	時期	採取層位等	分析項目				
						貝	CW	PO	微細	土理
資料1	額見町遺跡	A区	SK21	7～10世紀	覆土	●				
資料1b	念仏林南遺跡		21号土坑	古代	覆土	●				
資料2	額見町遺跡	H区	SK404	8～12世紀	4層B区		●	●		
					4層C区		●			
資料3	額見町遺跡	H区	SK425	8世紀後半	須恵器瓶(No.1)内土			●	●	●
資料4	額見町遺跡	B区	お35Gr土器集中	8世紀後半～9世紀前半	須恵器瓶(No.60)内土			●	●	●
資料5	額見町遺跡	G区	SK332	12世紀頃	2層					●
資料6	額見町遺跡	G区	SK335	12世紀頃	2層					●
資料7	額見町遺跡	G区	SK340	12世紀頃	2層					●

凡例）貝：貝類同定　W：樹種同定　PO：植物珪酸体分析　微細：微細遺物分析　土理：土壌理化学分析（リン・炭素分析）

資料５は、Ｇ区 SK332 内下層土である。SK332 は、上面に大きな礫石や完形に近い土師器椀皿が置かれ、その直下に焼土や炭化物が混在する（Ⅳ報告第 35 図）。一部、被熱面の確認がなされている。墓坑としての用途が推定されており、時期的に 11 世紀末頃と推定されている。試料は、覆土２層から採取された。

資料６は、Ｇ区 SK335 内下層土である。円形の土坑で、上層に礫石や土師器椀皿が置かれ、焼土が分布するが、被熱面が認められない（Ⅳ報告第 35 図）。墓坑としての用途が推定されており、時期的に 12 世紀前半頃と推定されている。試料は、覆土２層から採取された。

資料７は、Ｇ区 SK340 内下層土である。SK332 と同様な特徴をもつことから、墓坑としての用途が推定されている（Ⅳ報告第 35 図）。時期的にも 12 世紀前半頃と推定されている。試料は、覆土２層から採取された。

３．分析方法

（１）貝類同定

既に水洗いされた状態であったので、肉眼観察により形態的な特徴を捉えて、種類を同定する。

（２）植物珪酸体分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈し、植物体が土壌中に取り込まれた後、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離して単体となる。しかし、植物体あるいは植物体が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残される場合が多い（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993）。そのため、珪化組織片の産状から当時の構築材や燃料材などの種類が明らかになると考えられる。今回、土壌中に含まれる珪化組織片を抽出するため、以下の方法で分析する。

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250KHz，１分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム, 比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、単細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために植物珪酸体群集と珪化組織の分布図を作成する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎にそれぞれの総数を基数とする百分率で求める。

（３）樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

（４）微細物分析

資料３では、試料の総重量 1762.9ｇの内、801.7ｇを秤量する。資料４は、試料の総重量 2090.2ｇの内、800.5ｇを秤量する。なお、重量は、いずれも湿重である。これら秤量した試料について、数％の水酸化ナトリウム水溶液を加えて一昼夜放置して、試料を泥化させる。0.5 ㎜の篩を通して水洗し、残渣を集める。その中から遺物を抽出し、種類がわかるものを同定する。

（５）土壌理化学分析（リン・炭素分析）

土壌理化学分析として今回測定する成分は、特に動物の体組織や骨に多く含まれるリン酸の含量測定を行う。リン酸は骨に多量に含まれ、土壌中に固定されやすい性質を持つ。そのため、遺体が埋葬されると土壌中にリン酸の富化が認められることから、遺体あるいは遺骨の痕跡を推定することができる。また、リン酸の供給源としては植物体もあげられる。植物由来のリン酸成分の影響が強い場合、腐植含量も高くなることが想定されるため、植物体の影響を調べるために腐植含量も測定する。

リン酸は、硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、腐植はチューリン法でそれぞれ行う（土壌養分測定法委員会，1981）。以下に各項目の具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して 2.00 ㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法

（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5 mmØのふるいを全通させる（微粉砕試料）。

リン酸含量は、風乾細土試料2.00 gをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5 mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加え再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5 mg/g）を求める。

腐植含量の測定は、微粉砕試料0.100～0.500 gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4 Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2 N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org－C乾土%）を求める。これに1.724を乗じて腐植含量（%）を算出する。

4．結果

（1）貝類同定

額見町遺跡の貝類遺体

早稲田大学　金子浩昌

額見町遺跡および念仏林南遺跡より検出された貝類の種名を表2に、同定結果を表3に示す。額見町SK12土坑から検出された貝類は、ヤマトシジミを主体とし、これにカワシンジュガイが混入するものであった。

ヤマトシジミは、ごく稀に最大殻長33.0 mmに達するものがあるが、大部分が20.0～25.0 mmの殻であった。ヤマトシジミとしては、小さい殻が主であったと言える。

カワシンジュガイは殻長50.0 mmが最大で、多くは35～40.0 mmであった。カワシンジュガイとしては小さい殻である。

汽水種のヤマトシジミが主体で鹹水種と全く含まないのは、この紫山潟がラグーン化し、鹹水の影響が著しく弱まっていたことによるのであろう。また、カワシンジュガイは、河川による陸水の流れを直接受ける池沼に棲息し、そこで採ることができたと推定される。検出されたカワシンジュガイのサイズが小さいことから、成長する前に採られていると考えられる。

一方、念仏林南遺跡では、淡水貝としてはオオタニシとカワシンジュガイに限られた。このことから、額見町遺跡よりさらに内陸に深まった位置にあり、ここではヤマトシジミの採補できる入江がなく、カワシンジュガイ

表2　検出貝類種名表一覧

軟体動物門　Phylum　Mollusca
　腹足綱　Class　Gastropoda
　　前鰓亜綱　Subclass　Prosobranchia
　　原始腹足目　Order　Archaeogastropoda
　　リュウテンサザエ科　Family　Turbinidae
　　サザエ　*Turbo cornutus*
　　中腹足目　Order　Mesogastropoda
　　タニシ科　Family　Viviparidae
　　オオタニシ　*Cipangopaludina japonica*
　斧足綱　Class　Pelecypoda
　　弁鰓亜綱　Subclass　Eulamellibranchia
　　古異歯目　Order　Palaeoheterodonta
　　カワシンジュガイ科　Family　Margaritiferidae
　　カワシンジュガイ　*Margaritiferidae laevis*
　　異歯目　Order　Heterodonta
　　シジミガイ科　Family　Corbiculidae
　　ヤマトシジミ　*Corbicula japonica*

表3　貝類同定結果

番号	遺跡名	区	地点	種類	部位	数量	サイズ	
							殻長(mm)	殻高(mm)
資料1	額見町	A区	SK12	ヤマトシジミ	右殻	437	16～33	16～31
					左殻	431	17～33	17～33
					殻頂残左右不明	26		
					破片	56.9 g		
				カワシンジュガイ	右殻	41	33～48	20～25
					左殻	40	36～50	21～25
					破片	17.5 g		
資料1b	念仏林南	－	21号土坑	サザエ	破片	2		
				オオタニシ	殻頂残	4		48～55
					破片	1		
				カワシンジュガイ	左殻	13	35～65	21～33
					右殻	15	35～66	20～33

注）数量で個数を計算できない破片は重量を示す。

やオオタニシの棲息する池沼が貝類の採補場所となっていたと考えられる。ここでは額見町遺跡と比較して、やや大きいカワシンジュガイが採られている。オオタニシは普通の大きさである。他の土坑における貝の検出状況遺物の出土状況、時代性等を考慮する必要があるが、これらの貝はより淡水化の進んだ環境で採集されたものと思われる。また、サザエの殻片２点が採集されている。殻は大きくないが、棘がよく発達している様子が認められる。現在の加佐ノ岬辺りなどでみられる外海の岩礁海岸で採られて運ばれてきたと推定される。

（２）植物珪酸体分析

結果を表４、図１に示す。各試料とも植物珪酸体が検出される。保存状態は、概して良好である。以下、試料ごとに植物珪酸体および組織片の産状について述べる。

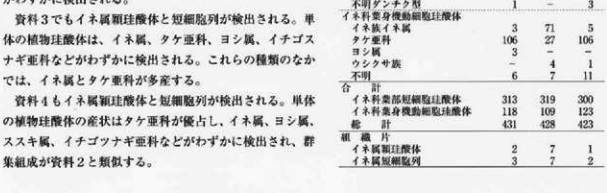
資料２は、栽培植物であるイネ属の籾殻に形成されるイネ属類珪酸体と葉部に形成される短細胞列がわずかに認められる。単体の植物珪酸体の産状は、タケ亜科の産出が目立ち、イネ属、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などがわずかに検出される。

資料３でもイネ属類珪酸体と短細胞列が検出される。単体の植物珪酸体は、イネ属、タケ亜科、ヨシ属、イチゴスナギ亜科などがわずかに検出される。これらの種類のなかでは、イネ属とタケ亜科が多産する。

資料４もイネ属類珪酸体と短細胞列が検出される。単体の植物珪酸体の産状はタケ亜科が優占し、イネ属、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などがわずかに検出され、群集組成が資料２と類似する。

表４　植物珪酸体分析結果

種　類　　試料番号	資料２	資料３	資料４
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ族イネ属	5	67	9
タケ亜科	283	226	251
ヨシ属	5	7	4
ウシクサ族ススキ属	2	2	7
イチゴツナギ亜科	6	5	4
不明キビ型	5	6	15
不明ヒゲシバ型	6	6	7
不明ダンチク型	1	−	3
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ族イネ属	3	71	5
タケ亜科	106	27	106
ヨシ属	3	−	−
ウシクサ族	−	4	1
不明	6	7	11
合　計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	313	319	300
イネ科葉身機動細胞珪酸体	118	109	123
総　計	431	428	423
組　織　片			
イネ属類珪酸体	2	7	1
イネ属短細胞列	3	7	2



（３）樹種同定

炭化材は全て落葉広葉樹のクリに同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は１～４列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15 細胞高。

（４）微細物分析

分析の結果、いずれの試料も残渣は少なく、ほとんどが泥化できなかった土塊である。以下、試料ごとに結果を示す。

資料３は、炭化材片、土器片が検出された。炭化材片は、数ミリの微細なものが、湿重 0.4 g 検出された程度であり、樹種を特定できない。土器片は、大きさ 19×14 ㎜程度、乾燥重量 1.2 g の土師器片である。

資料４は、炭化種実と炭化材片が検出された。炭化種実は、４個検出された。この内、３つは大きさ１㎜程度の卵形、先端部が尖り、薄くて堅くざらつく表面で、深い溝が２本入っており、種類を特定することができない。

（５）土壌理化学分析（リン・炭素分析）

結果を表５に示す。各成分は、腐食含量が4.54 ～ 8.53%、リン酸含量が3.43 ～ 7.78P_2O_5 mg/gであった。

表５　土壌理化学分析結果

試料名	区	地　点	土　性	土　色		腐植含量(%)	P_2O_5(mg/g)
資料３	H区	SK425	LiC	10YR2/2	黒褐	4.54	4.07
資料４	B区	お35Gr土器集中	LiC	10YR2/1	黒	6.80	3.43
資料５	G区	SK332	LiC	10YR1.7/1	黒	7.93	5.01
資料６	G区	SK335	LiC	10YR1.7/1	黒	8.53	7.78
資料７	G区	SK340	HC	10YR2/3	黒褐	5.06	5.18

注１）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修．1967）による。
注２）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編．1984）の野外土性による。
LiC・・・軽埴土（粘土 25 ～ 45%、シルト０～ 45%、砂 10 ～ 55%）
HC・・・重埴土（粘土 45 ～ 100%、シルト０～ 55%、砂０～ 55%）

５．考察

（１）出土貝類からみた捕食状況

本遺跡から出土した貝類は、大半が汽水性のヤマトシジミであった。おそらく、小松砂丘の後背にあたった湯などから採取されたと推定される。また、淡水性のカワシンジュガイが検出されており、池沼などに棲息する貝類も収穫されていたことが分かる。一方、念仏林南遺跡で検出された貝類では、個体数が少ないが、その中でも淡水域に棲息するカワシンジュガイが主体であった。このことは、両遺跡が段丘の縁辺部に位置し、念仏林南遺跡が内陸に立地するという位置関係を反映していると考えられる。なお、当時は、貝類以外にも獣類・魚類、さらに可食植物が重要な食料源であったと考えられ、生活残滓を廃棄した土坑等に含まれる骨類や種実遺体の調査が望まれる。

（２）燃料材の種類

SK404は、鍛冶燃料材を製炭した土坑であり、炭化材は製炭材の一部と考えられている。樹種は、いずれもクリであった。この結果から、クリ材を選択的に製炭していた可能性がある。

日本における製鉄は、多くは砂鉄を原料とするために、製鉄の過程で還元を必要とする。そのために還元効果の高い木炭（岸本．1984）を必要とし、還元効果を維持するためには堅く火持ちの良い材質のクヌギやコナラ等が適材である。一方、鍛冶では、酸化焔で高温を得ることが必要であるが、その場合には柔らかく燃えやすい材質の木炭が適している。クリは、木炭にすると軟質で燃えやすく、立ち消えする性質を有し、鍛冶燃料材としては適材とされる（岸本・杉浦．1980）。近世に書かれた鉄山秘書でも、製鉄燃料材としてクヌギ・コナラ、鍛冶燃料材としてクリやマツをそれぞれ適材として挙げている（窪田．1987）。これらの結果から、鉄山秘書に書かれている木材利用が８世紀～ 12 世紀まで遡ることが推定される。焼成目的に応じて燃料材の種類を使い分ける例は、二ツ梨一貫山窯跡Ｆ地区で検出された８世紀～９世紀の土師器焼成坑と須恵器窯跡でも確認されている（小松市教育委員会 2002『二ツ梨一貫山窯跡』　第５章第３節「二ツ梨一貫山窯跡Ｆ地区で使用された窯の燃料材について」）。これらの結果から、当時から木材の材質を生木と製炭した場合の違いまで認識しており、用途に合わせて適材を選択・利用していたことが推定される。

一方、植物珪酸体で稲籾殻に形成される頴珪酸体やイネ属葉部の珪化組織片がわずかながらも検出され、灰層内にこれらの植物体の灰が混入していたことがうかがえる。これより、補助燃料として稲藁が用いられていたと考えられる。仮に燃焼後の灰を外部へ廃棄したとしても、検出される珪酸体列がイネ属に限定されることから、本土坑で使用されていた草本類は稲藁が主体であったと推定される。

（３）廃棄土坑出土須恵器の内容物

SK425および土器溜まりから出土した須恵器内充填土壌の土壌理化学性は、腐植含量が比較的高く、多少なりとも土壌腐植の影響を受けていることが考えられる。また、リン酸含量は、資料３が4.07P_2O_5 mg/g、資料４が3.43P_2O_5 mg/gであった。ここで、リン酸が土壌中に普通に含まれる量、いわゆる天然賦存量については、い

くつかの報告事例がある（Bowen,1983：Bolt&Bruggenwert,1980：川崎ほか,1991：天野ほか,1991）。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は、約3.0 P_2O_5 mg/g程度である。また、化学肥料の施用など人為的な影響を受けた黒ボク土の既耕地で5.5P_2O_5 mg/gという報告例があり（川崎ほか,1991）、骨片を含む土壌で6.0P_2O_5 mg/gを超える場合が多い（パノリ・サーヴェイ株式会社, 未公表）。なお、各調査例の記載単位が異なるため、P_2O_5 mg/gで統一した。今回、両須恵器内土壌とも天然賦存量を上回るリン酸含量が測定されることから、外的要因に由来するリン酸成分の富化が現れていると推定される。したがって、土器内土壌は、何らかの要因によりリン酸が富化された土壌であると考えられる。ただし、後述する墓坑と推定される土坑覆土と比較するとリン酸含量は低い。

一方、植物珪酸体分析および微細物分析では、穎珪酸体、イネ属葉部の珪化組織片、炭化材片、不明炭化種実が検出された。しかし、いずれの種類も検出個数がわずかであることから、土器内にこれらの種類が保存されていくことは考えにくい。これら検出された植物遺体は稲藁や稲籾、燃料材、生活残渣が遺構内に投棄または、流入し、土壌と混在した後に、土器内へ混入したことが考えられる。

以上、今回の結果から、須恵器甕D内には動物遺体や植物遺体が直接埋納されていたことは考えにくい。比較的高いリン酸は、植物遺体などの生活残渣を含んだ周辺土壌の流れ込みによる可能性がある。したがって、今回は土器内容物について明確にできず、用途の検討まで至らなかった。この点に関しては、土坑覆土における植物化石の産出状況や土壌の理化学性と比較・検討して明らかにしていきたい。

なお、検出された単体の植物珪酸体も、大半が周辺土壌に含まれていたものと考えられる。多産したタケ亜科珪酸体は他の珪酸体と比較し風化に強く、生産量の多いことが指摘されている（近藤,1982：杉山・藤原,1986）。そのため、他の珪酸体より残留しやすく、また台地・丘陵地や段丘上の堆積物で多産することが多い。このことから、元々土壌中に多く含まれていたと考えられる。しかし、イネ属は、栽培種であり、遺構が埋積する際に混入したと考えられる。中でも資料3でイネ属が多産することは、遺構によって埋積状況が異なっていたと推定される。

（4）遺体埋納の検証

墓坑としての用途が推定されているSK332・SK335・SK340では、腐植含量が比較的高い。しかし、リン酸含量は、各土坑とも5.0P_2O_5 mg/g以上であり、先述した天然賦存量を大きく上回る値であった。したがって、これら3基の土坑とも、外的要因によるリン酸の富化が認められ、内部に何らかの動物遺体が埋納されていたと考えられる。すなわち、これらの土坑は、埋葬遺構である可能性が高いと判断される。

ところで、自然状態で土壌の理化学的性質は、平衡状態を保つために均質になる性質がある。しかし、人為的な埋納が行われると、場所により組成にばらつきが生じる（例えば、中根1992など）。これが、遺体埋納の決め手になることがある。また、脂質分析により、ヒトに由来するコレステロールとコプロスタノールの多産と、アラキジン酸（C20）・ベヘン酸（C22）・リグノセリン酸（C24）の検出によって、遺体埋納の痕跡を立証できるとされる（中野,1993：1995）。よって、今後、さらに複数の調査事項を設定し3次元的に調査を行うことでより詳細な情報が得られるものと期待される。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量.

農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.

Bowen,H.J.M.（1983）「環境無機化学－元素の循環と生化学－」. 浅見輝男・芳野光男訳, 297p.

博友社［Bowen,H.J.M.（1979）Environmental Cemistry of Elements］.

Bolt,G.H. & Bruggenwert,M.G.M.（1980）「土壌の科学」. 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳, 309p. 学会出版センター［Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.（1976）SOIL CHEMISTRY］, p.235-236.

土壌養分測定法委員会編（1981）「土壌養分分析法」. 440p. 養賢堂.

柏野義夫（1988）石川県南部地域 「日本の地質5　中部地方Ⅱ」, p.149-152. 共立出版株式会社.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.23-27.

岸本定吉（1984）木炭の博物誌．260p.，総合科学出版．
岸本定吉・杉浦銀治（1980）日曜炭やき師入門．250p.，総合科学出版．
近藤錬三（1982）Plant opal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究．昭和 56 年度科学研究費（一般研究C）研究成果報告書，32p.
近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特徴と応用．第四紀研究，25，p.31-64.
窪田蔵郎（1987）改訂　鉄の考古学．308p.，雄山閣．
中根秀二（1992）1 号方形周溝墓の自然科学的分析．「田園調布南 2　都立田園調布高校内埋蔵文化財発掘調査報告書」，p.133-149，都立学校遺跡調査会．
中野益男（1993）脂肪酸分析法．「第四紀試料研究法 2　研究対象別分析法」，p.388-403，東京大学出版会．
中野益男（1995）脂肪酸分析の現状と課題．考古学ジャーナル，386，p.2-8.
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖．
パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）自然科学分析からみた人々の生活（1）．慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡　第1巻　総論」，p.347-370．慶応義塾．
ペドロジスト懇談会編（1984）「土壌調査ハンドブック」，156p.，博友社．
杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69-84.

《考古学的見地からのコメント》　　望月　精司

今回、当資料の自然科学分析を依頼した意図と分析結果に関する埋蔵文化財調査担当のコメントとして、以下に示す。

1．出土貝類の分析

本台地集落遺跡群においては、三湖に面する台地上に位置する点から、貝の廃棄が見られる遺跡が目立つ。今回、当遺跡の出土貝類と近接する念仏林南遺跡出土の貝類を分析に出したのは、同じ潟縁に位置する台地集落なのに、主体となる貝に違いが見られたからである。これは同じ潟縁でも採取する貝を意図的に変えていたのかとも想定したが、分析の結果では、それが潟縁でも集落の位置する場所に起因するであろうことが判明した。つまり、汽水性の柴山潟に直接面する額見町遺跡に対し、海から河川で入り込んだ念仏林南遺跡という立地条件にあり、近場での貝採取を基本としていた様子が読み取れた。

2．製炭土坑の樹種と灰層分析

額見町遺跡では 7 世紀中頃以降、精錬鍛冶、鍛錬鍛冶が行われているが、それに使用する燃料木炭を得るため土坑での製炭が行われている。分析した土坑 SK404 はそのうちの一つで、鍛冶燃料材としてどのような樹種が使われているのかを目的として分析した。分析の結果で樹種が全てクリ材とされており、クリ材の選択的使用を想定されているが、複数の製炭土坑資料を分析対象とし、データとして信憑性の高いものとしなかった点は反省点である。製鉄、特に鍛冶工程におけるクリ材使用については、このデータも含めて、北陸の須恵器窯や土師器焼成坑、製鉄炉等の出土炭化材をもとに、論じたことがあるので参照されたい（望月精司「北陸地方の古代窯業・製鉄業の森林利用」『古代窯業の森林利用技術－陶人と森の関わり－』東北芸術工科大学、2008 年）。また、灰層内の植物珪酸体分析で、イネ属の植物体が検出されたことは収穫であった。これは、製炭土坑においても土師器焼成と同様に稲藁を木材焼成の補助燃料とした覆い焼きが行われていた可能性があり、興味深い。

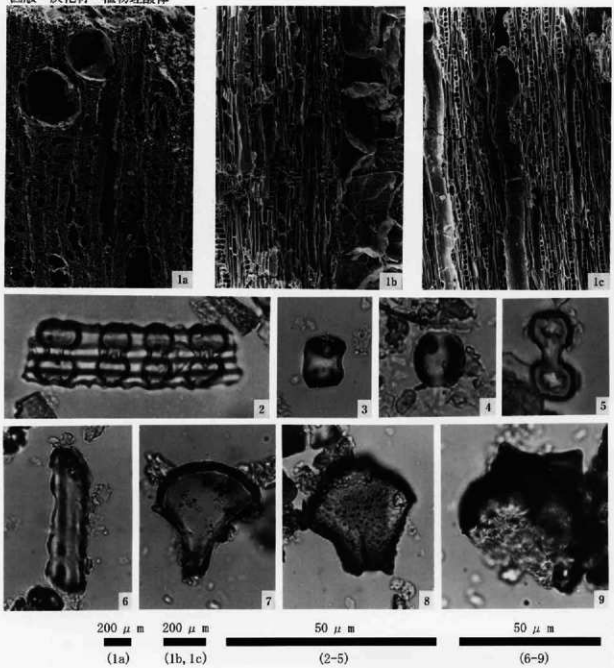
3．胴部定形須恵器瓶類の内容物分析

土坑や土器溜まり遺構より出土した胴部定形の須恵器瓶類について、蔵骨器や特殊容器としての使用の可能性を想定し、土器内土壌の分析を行った。その結果、リン酸含有が通常より若干高い数値ではあったが、蔵骨器と特定できるような数値ではなく、また内容物に影響を受けた土壌の検出もなかった。遺構埋納段階で内容物が遺存するような土器廃棄は、それが意図的な埋納を行うものでない限り、土器内土壌にそのような影響が出ることはないものと判断される。

4．墓坑の可能性を持つ土坑内埋土の土壌分析

土坑形態や土器出土状況、埋土層の状態から墓坑の可能性を持つ土坑が複数検出されているが、そのうち中世段階に位置付けられる土坑 3 基について、動物遺体から放出されるリン酸についてその多寡を目的とした土壌分析を行った。その結果、分析を行った全ての土坑で通常よりも高いリン酸含量が認められ、動物遺体埋葬のための土坑であることを補強する資料となった。ただ、今回の分析が中世のみに偏り、古代墓坑について行えなかったことは残念であり、またリン酸含有のみの分析ではなく、脂質分析を併用することで、人体埋納であることを確実にすることが可能であるとの見解は参考となった。

図版　炭化材・植物珪酸体



1. クリ（資料２　Ｂ区）　a：木口，b：柾目，C：板目
2. イネ属短細胞列（資料３）
3. タケ亜科短細胞珪酸体（資料４）
4. ヨシ属短細胞珪酸体（資料２）
5. ススキ属短細胞珪酸体（資料４）
6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（資料４）
7. イネ属機動細胞珪酸体（資料３）
8. タケ亜科機動細胞珪酸体（資料４）
9. イネ属頴珪酸体（資料２）

写真2　額見町遺跡H地区

写真1　額見町遺跡遠景斜め航空写真（北西方向から）

写真3　SJ70 鍛冶炉 検出状況

写真5　SJ65 鍛冶炉検出状況

写真6　SJ65 鍛冶炉断ち割り

写真4　SJ70 鍛冶炉断ち割り

写真7　SJ72 鍛冶炉検出状況

写真8　SJ72 鍛冶炉断ち割り断面

写真9　SJ75 鍛冶炉検出状況と断ち割り

《鍛冶炉　遺構調査写真》

写真10　SK394 土師器焼成坑 検出状況

写真11　SK394 土師器焼成坑 被熱断ち割り

《土師器焼成坑　遺構調査写真》

写真12　SK404 製炭土坑完掘状況

写真15　SK412 製炭土坑検出状況

写真16　SJ66 製炭土坑検出状況

写真13　SK404 覆土土層

写真14　SK404 焼床断ち割り

写真17　SJ66 製炭土坑断ち割り

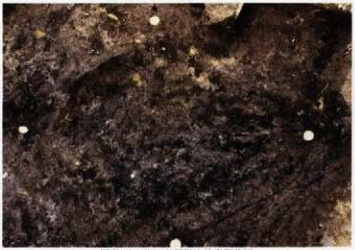


写真18　SK415 製炭土坑完掘状況

写真19　SK415 覆土と炭層検出状況

《製炭土坑　遺構調査写真》

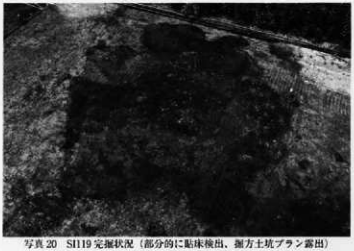


写真 20　SI119 完掘状況（部分的に貼床検出、掘方土坑プラン露出）

写真 21　SI119 カマド被熱・ソデ掘方状況

写真 22　SJ119 掘方

《竪穴建物　遺構調査写真》

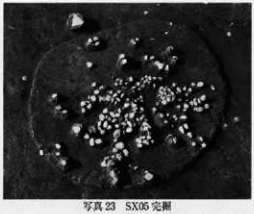


写真 23　SX05 完掘

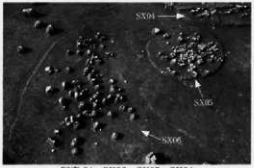


写真 24　SX06・SX05・SX04

《集積遺構　遺構調査写真》

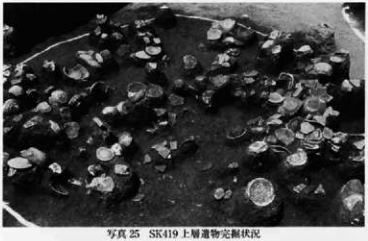


写真 25　SK419 上層遺物完掘状況

写真 26　SK419 遺物アップ

写真 27　SK419 板状跡出土状況

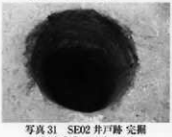


写真 31　SE02 井戸跡 完掘
（標高○○m地点より）

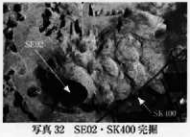


写真 32　SE02・SK400 完掘

写真 28　SK423・424 遺物出土状況

写真 29　SK424 出土遺物アップ

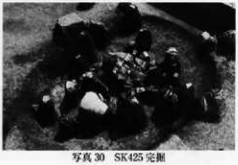


写真 30　SK425 完掘

《SK 土坑　SE 井戸　遺構調査写真》

写真33　SD23（F地区側）完掘

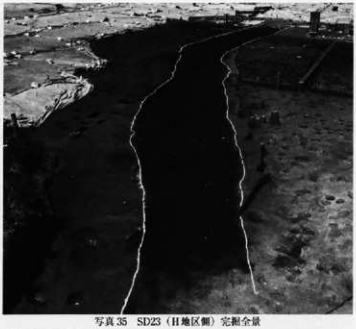


写真35　SD23（H地区側）完掘全景

写真34　SD23（F地区側）完掘アップ

写真36　SD23（H地区側）完掘アップ

写真37　SD23（H地区側）覆土遺物出土状況

《道路状遺構２　遺構調査写真》

写真38　土器溜まり遺構遠景

写真39　土器溜まり遺構近景

写真40　土器溜まり遺構遺物アップ

《土器溜まり遺構　遺構調査写真》

写真1　Ⅵ1期の墨書須恵器「古女？」　写真4　Ⅳ2新期の墨書須恵器「大」？　写真2　Ⅵ期の墨書須恵器「林？」　写真3　Ⅳ2古期の刻書須恵器「生」

写真5　Ⅳ1期の須恵器小型鉢（胴穿孔）

写真6　Ⅳ1期の須恵器小型鉢（底面ヘラ記号「卅」）

写真7　Ⅳ2新期の獣足盤の足部

写真8　Ⅳ1期頃の須恵器脚足付羽釜

写真9　Ⅳ1期の須恵器大型長頸瓶A（完形品の2個体廃棄）

写真10　Ⅳ2新期の須恵器三耳瓶

写真11　Ⅴ期頃の須恵器瓶G

写真13　Ⅵ1期の須恵器中小甕（平底風底部）

写真12　Ⅳ1期の焼歪みある須恵器小甕

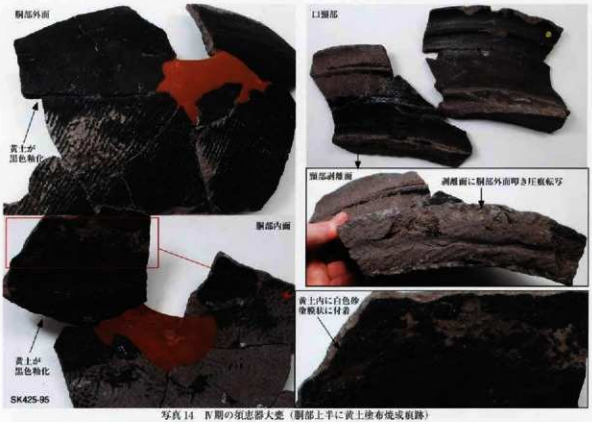


写真14　Ⅳ期の須恵器大甕（胴部上半に黄土塗布焼成痕跡）

写真15　Ⅳ2新期の馬形須恵質製品（四肢と首、尾が欠損）

写真16　Ⅳ期頃の馬形須恵質製品（大型胴中空タイプ）

写真17　古墳時代後期の須恵質埴輪（人物埴輪の円筒部）

写真18　古代の支脚形土師質製品（左の一群は竪穴焼成の黒斑付き）

写真19　古代の鉄製品

写真20　中世1期の内黒土師器有台椀

写真22　平安後期の近江産緑釉皿類器有台碗

写真21　中世1期の非ロクロ土師器大皿

写真23　中世1期の土師質権状錘（土製権衡）

写真24　中世1期の錘状石製品（製品転用品？）

額見町遺跡　V

－串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書５－

発　行　日　　平成22年 3月31日

編集・発行者　　小松市教育委員会
文化課　埋蔵文化財調査室
〒923-0801　石川県小松市園町ホ62番地
（TEL）0761-24-8132

印　　刷　　英文堂印刷

Excavation Reports of Cultural Sites in Nukamimachi Sites Vol. V

H区古代土器溜まり周辺出土のⅣ期代の須恵器貯蔵具

2010. 3. 31

Komatsu City Board Of Education